

山持遺跡 Vol.5 (6区)

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7



2009年3月

島根県教育委員会



山持遺跡 6区 (西から)



1. 道路遺構（北側：南から）



2. 道路遺構（北側：北から）



1. 道路遺構 (南側：南から)



2. 道路遺構下部礎・杭列出土状況 (南側：東から)



1. 道路遺構（北側）土層（南北軸：西から）



2. 道路遺構（北側）土層（南北軸：東から）



1. 道路遺構（北側）土層（南北軸：西から）



2. 道路遺構（北側）土層（南北軸：西から）



1. 道路遺構（北側）土層（東西軸：南から）



2. 6区③調査区西壁土層（東から）



1. 道路遺構（北側）土層（東西軸：南から）



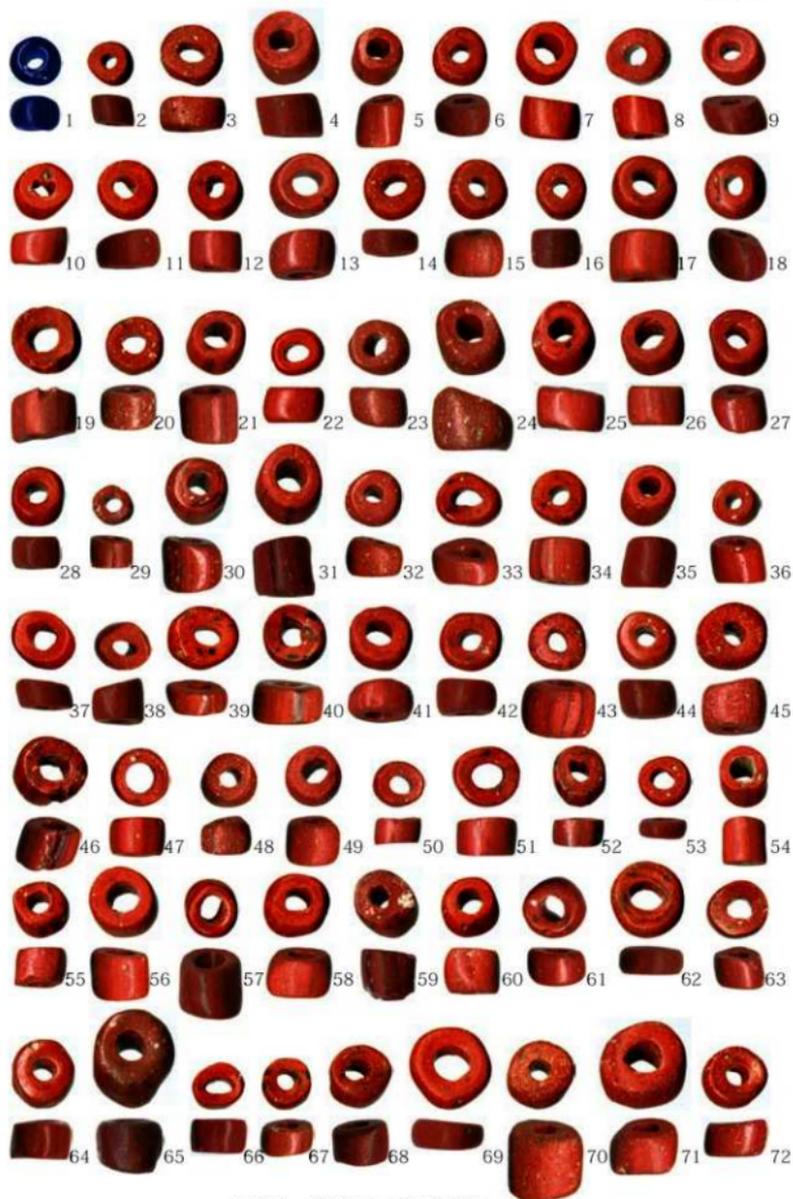
2. 6区①調査区西壁土層（道路遺構部分：東から）



1. 6区③調査区東壁土層（西から）



2. 6区①調査区西壁土層（畦畔付近：東から）



山持遺跡 6区ガラス小玉 (約3倍)

序

本書は、鳥根県教育委員会が鳥根県土木部から委託を受けて、平成18年度から平成19年度に実施した国道431号道路改築事業（東林木バイパス）予定地内に所在する山持遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

山持遺跡は出雲市西林木町・里方町に所在し、北山山系南麓に立地する大規模な集落遺跡です。周辺には県内最古級の前方後円墳である大寺1号墳や戦国時代の尼子氏・毛利氏の合戦の舞台となった鳶ヶ巣城跡など重要な遺跡が位置し、また近年では当予定地内の青木遺跡から弥生時代の四隅突出型墳丘墓や銅鐸片、奈良時代の大量の木簡や墨書土器、神社跡と推定される遺構などが発見され、大きな話題となったところです。

本遺跡については平成14年度から本格的な調査が行われており、既に報告書も数部刊行されているところですが、本書では6区の調査成果を収録しています。

6区では古代の大規模な工事によって構築された道路跡が見つかったほか、その周辺からは大量の遺物が見つかっています。特に墨書土器や木簡と共に出土した人物が描かれた板絵は、全国的にも類例のない貴重な発見であるとともに、吉祥天女が描かれたと考えられる板絵は古代の仏教の浸透を知る上で欠かせない資料として注目されているところです。また、下層からは縄文時代早期から弥生時代後期までの遺物が多数出土し、中には九州や朝鮮半島産と考えられる土器も出土し、古代の出雲に暮らした人々の多様な交流をしのぶことができました。これらの調査成果は鳥根県の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない貴重な成果であるといえます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、出雲市並びに鳥根県土木部をはじめとする関係機関の皆様には厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

鳥根県教育委員会
教育長 藤原義光

例 言

1. 本書は、鳥根県土木部道路建設課からの委託を受けて、鳥根県教育委員会が平成18年度から平成19年度に実施した国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査地は下記のとおりである。

出雲市西林木町257-2外 山持遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 鳥根県教育委員会

平成18年度 現地調査

【事務局】 卜部吉博（鳥根県埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（総務グループ課長）、川原和人（調査第1グループ課長）

【調査員】 原田敏照（同文化財保護主任）、永井宏子（同調査補助員）、糸賀伸文（同）

【調査指導】 大橋泰夫（鳥根大学法文学部教授）、梶谷亮治（奈良国立博物館学芸課長）、高橋進一（総社市教育委員会）、田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）、東野治之（奈良大学文学部教授）、蓮岡法暉（鳥根県文化財保護審議会委員）、三宅久雄（奈良大学文学部教授）渡辺貞幸（鳥根大学法文学部教授）

平成19年度 現地調査

【事務局】 卜部吉博（鳥根県埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（副所長）坂本憲一（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第3グループ課長）

【調査員】 原田敏照（同文化財保護主任）、田中玲子（同調査補助員）、糸賀伸文（同）

【調査指導】 田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）、大橋泰夫（鳥根大学法文学部教授）

平成20年度 報告書作成

【事務局】 卜部吉博（鳥根県埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（副所長）、赤山治（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第3グループ課長）

【調査員】 原田敏照（同文化財保護主任）、田中玲子（同調査補助員）

4. 発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表させていただく。

木本雅康（長崎外国語大学外国学部教授）、佐藤信（東京大学教授）、高田俊男（高田装束研究所）、千葉豊（京都大学文化財総合研究センター）、中村唯史（三瓶自然館指導員）、西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）、平川南（国立歴史民俗博物館館長）、町田章（鳥根県文化財保護審議会会長）、義江彰夫（東京大学教授）渡辺晃宏（奈良国立文化財研究所）、大賀克彦（鳥根県古代文化センター特任研究員）

5. 挿図で使用した方位は、測量法による第Ⅲ座標系X軸方向を指し、平面直角座標系X Y座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。

6. 本書で使用した第2図は国土地理院発行の1/25,000地図、第3図は出雲市都市計画平面図を使用して作成したものである。

7. 本調査に伴って行った自然科学的分析及び保存処理は、次の機関に委託して実施し、その成果の一部は第10章にまとめて掲載した。
炭化物等の放射性炭素年代測定（(株)加速器分析研究所）、花粉分析・種実分析及び堆積物の軟X線観察（文化財調査コンサルタント(株)）、出土木製品及び金属器の保存処理及び樹種鑑定（H19年度：(財)元興寺文化財研究所、H20年度：(株)京都科学）、3号板絵・4号板絵の顔料分析（(財)元興寺文化財研究所）
8. 本書に掲載した写真は、空中撮影写真を除き埋蔵文化財調査センターの職員の協力を得て原田、澤田正明が撮影した。
9. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、各調査員のほか、飯塚由起、井谷朋子、岩橋康子、内田律雄、竹下高志、田中裕貴、中川寧、東山信治、米田克彦、渡邊真二が行った。遺物・遺構の浄書は整理作業員、飯塚、田中玲、米田が実施し、弥生土器・古式土師器・石器を除いてAdobe社のIllustratorを用いてトレースを行った。
10. 本書の編集は埋蔵文化財調査センターの職員の協力を得て原田が行った。
11. 注は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置した。参考文献は各章末にまとめて示したが、第3章～9章は第9章巻末にまとめて掲げた。また挿図番号は第10章は各節ごとに番号を振り、第10章を除く各章は通し番号により表示した。
12. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。
SK：土坑、SX：その他の遺構
13. 遺物実測図の断面は、縄文土器、弥生土器、土師器を白スギ、須恵器を黒塗りで示している。また赤色・網掛けまたは▲印は赤彩土器の赤彩範囲を示す。
14. 本書の仕様は巻末に示した。
15. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにて保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 山持遺跡の位置と環境	2
第3章 調査の経過状況と概要	7
第1節 過去の調査の経過と概要	
第2節 調査の方法	
第3節 調査区の基本層序	
第4節 調査の経過	
第4章 砂礫層の調査	20
第1節 調査の概要	
第2節 縄文土器	
第3節 弥生土器	
第4節 その他の出土遺物	
第5章 弥生・古墳時代の遺構の調査.....	70
第1節 調査の概要	
第2節 弥生・古墳時代の遺構	
第6章 道路遺構の調査.....	91
第1節 調査の概要	
第2節 道路遺構（北側）の詳細（平成18年度調査部分）	
第3節 道路遺構（南側）の詳細（平成19年度調査部分）	
第7章 その他の遺構（古代）の調査.....	165
第1節 遺構の概要	
第2節 遺構の詳細	
第3節 遺構外の遺物（シルト系堆積層）	
第8章 中世～近世の層の調査.....	182
第1節 オモカス層の調査	
第2節 中・近世の層の調査	

第9章 総括	192
第1節 山持遺跡の変遷	
第2節 道路遺構について	
小結	
第10章 自然科学的分析	268
第1節 山持遺跡6区における堆積物の軟X線観察	
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）	
第2節 山持遺跡6区発掘調査に伴う自然科学分析	
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）	
第3節 山持遺跡6区の放射性炭素年代測定の結果（AMS測定）	
株式会社加速器分析研究所	

插图目次

第1図	山持遺跡の位置	2
第2図	山持遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図	山持遺跡調査区配置図	7
第4図	山持遺跡6区調査区地区割り図	10
第5図	山持遺跡6区西壁土層図	12
第6図	山持遺跡6区東壁・北壁土層図	14
第7図	山持遺跡6区南壁土層図	15
第8図	山持遺跡6区砂層上面検出段階図	20
第9図	山持遺跡6区砂層上面検出段階復元図	21
第10図	山持遺跡6区発掘最終段階図	22
第11図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(1)	24
第12図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(2)	25
第13図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(3)	26
第14図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(4)	27
第15図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(5)	28
第16図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(6)	29
第17図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(7)	31
第18図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(8)	32
第19図	山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(9)	33
第20図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(1)	34
第21図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(2)	35
第22図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(3)	36
第23図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(4)	37
第24図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(5)	38
第25図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(6)	39
第26図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(7)	40
第27図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(8)	41
第28図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(9)	42
第29図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(10)	43
第30図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(11)	44
第31図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(12)	45
第32図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(13)	46
第33図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(14)	47
第34図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(15)	48
第35図	山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(16)	49

第 36 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (17)	50
第 37 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (18)	51
第 38 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (19)	52
第 39 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (20)	53
第 40 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (21)	54
第 41 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (22)	55
第 42 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (23)	56
第 43 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (24)	57
第 44 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (25)	58
第 45 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (26)	59
第 46 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (27)	60
第 47 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (28)	61
第 48 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (29)	62
第 49 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (30)	63
第 50 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (31)	64
第 51 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (32)	65
第 52 図	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (33)	66
第 53 図	山持遺跡 6 区砂層出土石器実測図	67
第 54 図	山持遺跡 6 区砂層出土石器・木製品実測図	68
第 55 図	山持遺跡 6 区砂層等出土玉作関連遺物実測図	69
第 56 図	山持遺跡 6 区シルト層上面検出段階図	71
第 57 図	山持遺跡 6 区土坑配置図	72
第 58 図	山持遺跡 6 区土器群 1 実測図	73
第 59 図	山持遺跡 6 区土器群 1 出土土器実測図	74
第 60 図	山持遺跡 6 区土器群 2 実測図	75
第 61 図	山持遺跡 6 区土器群 2 土器出土位置図	76
第 62 図	山持遺跡 6 区土器群 2 出土土器実測図 (1)	77
第 63 図	山持遺跡 6 区土器群 2 出土土器実測図 (2)	78
第 64 図	山持遺跡 6 区土器群 2 出土石器・木製品実測図	79
第 65 図	山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 1)	80
第 66 図	山持遺跡 6 区土坑出土土器・石器実測図	82
第 67 図	山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 2)	83
第 68 図	山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 3)	84
第 69 図	山持遺跡 6 区土坑出土土器実測図 (2)	85
第 70 図	山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 4)	86
第 71 図	山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 5)	88
第 72 図	山持遺跡 6 区土坑・SD04 出土土器・石器実測図	89
第 73 図	山持遺跡 6 区オモカス層除去段階実測図	92

第 74 図	山持遺跡 6 区道路遺構全体図 (1)	94
第 75 図	山持遺跡 6 区道路遺構全体図 (2)	95
第 76 図	山持遺跡 6 区道路遺構実測図 (北側) 袈折り込み	97・98
第 77 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 土層図 (1)	99
第 78 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 土層図 (2)	100
第 79 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 杭列実測図	101
第 80 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 杭列分類平面図 (1)	102
第 81 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 杭列分類平面図 (2)	103
第 82 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 杭列分類立面図	104
第 83 図	山持遺跡 6 区道路遺構 (北側) 関連杭列・石材実測図	105
第 84 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (1)	107
第 85 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (2)	108
第 86 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (3)	109
第 87 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (4)	110
第 88 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (5)	111
第 89 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (6)	112
第 90 図	山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (7)	113
第 91 図	山持遺跡 6 区道路遺構周辺遺物出土状況 (1)	114
第 92 図	山持遺跡 6 区道路遺構周辺遺物出土状況 (2)	116
第 93 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土須恵器実測図	117
第 94 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土土師器実測図	118
第 95 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土土師器・埴輪・土製品実測図	119
第 96 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土金属器実測図	120
第 97 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土石器実測図	121
第 98 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (1)	122
第 99 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (2)	123
第 100 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (3)	124
第 101 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (4)	125
第 102 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (5)	126
第 103 図	山持遺跡 6 区道路遺構・旧河道 (SX01) 出土板絵実測図	127
第 104 図	山持遺跡 6 区道路遺構・旧河道 (SX01) 出土木簡実測図	128
第 105 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土獣骨実測図	130
第 106 図	山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土弥生土器実測図	131
第 107 図	山持遺跡 6 区道路遺構盛土内等出土須恵器実測図 (1)	132
第 108 図	山持遺跡 6 区道路遺構盛土内等出土須恵器実測図 (2)	133
第 109 図	山持遺跡 6 区道路遺構盛土内出土土師器・土釜実測図	134
第 110 図	山持遺跡 6 区道路遺構盛土内出土木製品実測図 (1)	135
第 111 図	山持遺跡 6 区道路遺構盛土内出土木製品実測図 (2)	136

第112図	山持遺跡6区道路遺構盛土内出土木製品実測図(3)	137
第113図	山持遺跡6区道路遺構盛土内出土土器実測図	138
第114図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土須恵器実測図	139
第115図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土土師器実測図	140
第116図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土木製品実測図(1)	141
第117図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土木製品実測図(2)	142
第118図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土木製品実測図(3)	143
第119図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土石器実測図	144
第120図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土土器実測図(1)	145
第121図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土土器実測図(2)	146
第122図	山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土土器実測図(3)	147
第123図	山持遺跡6区道路遺構(南側)実測図	149
第124図	山持遺跡6区道路遺構(南側)土層実測図(1)	150
第125図	山持遺跡6区道路遺構(南側)土層実測図(2)	151
第126図	山持遺跡6区道路遺構(南側)実測図「下部礫群」	152
第127図	山持遺跡6区道路遺構(南側)実測図「盛土除去段階」	153
第128図	山持遺跡6区道路遺構(南側)下部落ち込み検出状況	154
第129図	山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列実測図	155
第130図	山持遺跡6区道路遺構(南側)関連杭列実測図	156
第131図	山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列分類平面図	158
第132図	山持遺跡6区遺物出土状況図「道路遺構築造前後」	159
第133図	山持遺跡6区道路遺構出土金属器・石器・木製品実測図	160
第134図	山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列出土木製品実測図(1)	161
第135図	山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列出土木製品実測図(2)	162
第136図	山持遺跡6区③落ち込み内堆積層出土須恵器実測図	163
第137図	山持遺跡6区③落ち込み内出土木製品実測図	164
第138図	山持遺跡6区連続ビット列配置図	165
第139図	山持遺跡6区連続ビット列実測図	166
第140図	山持遺跡6区旧河道(SX01)内杭列実測図	167
第141図	山持遺跡6区井戸状遺構実測図	168
第142図	山持遺跡6区井戸状遺構出土須恵器・木製品実測図	169
第143図	山持遺跡6区井戸状遺構出土弥生土器実測図	169
第144図	山持遺跡6区土坑実測図(古代)	170
第145図	山持遺跡6区土坑実測図(時期不明)	171
第146図	山持遺跡6区遺物出土状況図「シルト系堆積層上部」	173
第147図	山持遺跡6区シルト層(排土)出土須恵器・土師器実測図	174
第148図	山持遺跡6区シルト層出土金属器・石器実測図	175
第149図	山持遺跡6区シルト層出土木製品実測図	176

第 150 図	山持遺跡 6 区シルト層出土土器実測図 (1)	178
第 151 図	山持遺跡 6 区シルト層出土土器実測図 (2)	179
第 152 図	山持遺跡 6 区シルト層出土土器実測図 (3)	180
第 153 図	山持遺跡 6 区シルト層出土ガラス小玉実測図	181
第 154 図	山持遺跡 6 区オモカス層出土木製品金属器・石器実測図	182
第 155 図	山持遺跡 6 区オモカス層出土木製品実測図	184
第 156 図	山持遺跡 6 区杭列実測図「近世」	185
第 157 図	山持遺跡 6 区中近世層・杭列出土木製品実測図	186
第 158 図	山持遺跡 6 区 SD03 遺物出土状況図	188
第 159 図	山持遺跡 6 区 SD03 出土須恵器・石器・金属器・木製品実測図	189
第 160 図	山持遺跡 6 区 SD03 出土土器実測図	190
第 161 図	山持遺跡 6 区近世河道跡検出状況図	191
第 162 図	山持遺跡 6 区①③検出遺構・遺物概要図	194
第 163 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土縄文土器概要図	196
第 164 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土縄文土器点数グラフ	197
第 165 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土弥生土器概要図 (1)	198
第 166 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土弥生土器概要図 (2)	199
第 167 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土弥生土器概要図 (3)	200
第 168 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土弥生土器概要図 (4)	201
第 169 図	山持遺跡 6 区①③砂層出土弥生土器点数グラフ	202
第 170 図	山持遺跡 6 区①③検出道路遺構出土礫重量グラフ (1)	204
第 171 図	山持遺跡 6 区①③検出道路遺構出土礫重量グラフ (2)	205
第 172 図	山持遺跡 6 区①③検出道路遺構概要図	208

表目次

表 1	一般国道 431 号東林木バイパス建設予定地内遺跡発掘調査報告書一覧	1
表 2	山持遺跡における発掘調査	8
表 3	山持遺跡 6 区検出遺構一覧	214
表 4	山持遺跡 6 区砂層出土縄文土器総括表	216
表 5	山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器総括表	217
表 6	山持遺跡 6 区出土縄文土器観察表	219
表 7	山持遺跡 6 区出土弥生土器・土師器観察表	225
表 8	山持遺跡 6 区出土須恵器・古代土師器観察表	249
表 9	山持遺跡 6 区出土石器観察表	252
表 10	山持遺跡 6 区出土石器計測表	253
表 11	山持遺跡 6 区出土木製品観察表	255
表 12	山持遺跡 6 区出土金属器観察表	263
表 13	山持遺跡 6 区出土板絵観察表	264

表 14	山持遺跡 6 区出土木簡観察表	265
表 15	山持遺跡 6 区出土ガラス小玉観察表	266
表 16	山持遺跡 6 区出土獣骨観察表	267

本文写真目次

写真 1	重機掘削風景 (6 区①)	16
写真 2	ガラス小玉水洗選別風景 (6 区①)	16
写真 3	調査指導風景 (6 区①西壁)	16
写真 4	調査区の水没 (6 区①)	17
写真 5	井戸状遺構の断ち割り作業風景 (6 区①)	17
写真 6	現地説明会風景 (2006.10.08)	17
写真 7	道路遺構の調査風景 (6 区①)	18
写真 8	道路遺構完掘後風景 (6 区①)	18
写真 9	当初の砂礫層調査風景 (6 区③)	18
写真 10	道路遺構下部枕列調査風景 (6 区③)	19
写真 11	砂礫層調査風景 (6 区③西側)	19

写真図版目次

図版 1	1. 山持遺跡 6 区①全景 (東上空から)	2. 山持遺跡 6 区③調査区東壁土層
	2. 山持遺跡 6 区①全景 (南上空から)	図版 9
図版 2	1. 山持遺跡 6 区①全景 (上空から)	1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
	2. 山持遺跡 6 区③道路遺構 (南側)	検出状況 (北から)
	全景 (上空から)	2. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
図版 3	1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)	検出状況 (南から)
	全景 (南から)	図版 10
図版 4	1. 山持遺跡 6 区③道路遺構 (南側)	1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
	全景 (南から)	調査状況 (西から)
図版 5	1. 山持遺跡 6 区③道路遺構 (南側)	2. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
	礫群検出段階 (南から)	調査状況 (東から)
図版 6	1. 山持遺跡 6 区①③⑤全景 (空撮写真合成: 南から)	図版 11
	2. 山持遺跡 6 区道路遺構全景 (空撮写真合成: 南から)	1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
図版 7	1. 山持遺跡 6 区調査前状況及び重機掘削風景 (左: 西から、右: 東から)	調査状況 (東から)
	2. 山持遺跡 6 区①調査区西壁土層	2. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
図版 8	1. 山持遺跡 6 区③調査区西壁土層	調査状況 (西から)
		図版 12
		1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
		調査状況 (南東から)
		2. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)
		調査状況 (左: 検出段階・右: 礫調査段階、南から)
		図版 13
		1. 山持遺跡 6 区①道路遺構 (北側)

- 西側法面礫状況（北西から）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）
- 西側法面礫状況（南西から）
- 図版 14 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）
- 西側法面礫状況（北西から）
2. 山持遺跡6区①旧河道（SX01）遺物出土状況（左上：2号板絵、右上：3号板絵、左下：馬骨、右下：墨書土師器）
- 図版 15 1. 山持遺跡6区①旧河道（SX01）遺物出土状況（左右上：木製皿、左下：鉄器、右下：土師器甕）
2. 山持遺跡6区①旧河道・道路遺構遺物出土状況（左上：須恵器、右上：曲物、左下：4号板絵、右下：1号木簡）
- 図版 16 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）遺物出土状況（左上：須恵器、右上：墨書須恵器、左下：土師器、右下：土師器甕）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）遺物出土状況（左上：須恵器坏、右上：須恵器坏、左下：須恵器坏、右下：須恵器蓋）
- 図版 17 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（左上：東西土層の西側、右上：南北土層の北側、左下：南北土層の北側、右下：南北土層の北側）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（左上：東西土層の西側、右上：東西土層の東側、左下東西土層の西側、右下：東西土層の東側）
- 図版 18 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（南北土層の南端）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（南北土層の中段）
- 図版 19 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（東西土層の西側）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（南北土層の中段）
- 図版 20 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（東西土層の東側）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）土層（東西土層の東側※写真1の土層ベルトの反対側）
- 図版 21 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（左：全景北から、右上：北端を北から、右下：南西部を南から）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（左上：西部を北から、右上：西部を西から、左下：北西部を北から、右下：北東部を東から）
- 図版 22 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（南西部を西から）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（東部を南から）
- 図版 23 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（左：南西部を南から、右：北東部を南から）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）盛土調査状況（左上：槽出土状況、右上：南東部しがらみ、左右下：木片出土状況）
- 図版 24 1. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査状況（南部を西から）
2. 山持遺跡6区①道路遺構（北側）杭列調査最終段階（南から）
- 図版 25 1. 山持遺跡6区①連続ピット列検出状況（南から）
2. 山持遺跡6区①連続ピット列検出状況（左：調査区東壁際ピット列を南から、右上：ピット断面、右下調査区東壁際ピット列西から）
- 図版 26 1. 山持遺跡6区①旧河道（SX01）内杭列検出状況（北から）
2. 山持遺跡6区①土坑（左上：SK02断面、右上：SK05断面、下：SK01断面・完掘状況）
- 図版 27 1. 山持遺跡6区①土坑（左上：SK04

完掘状況、右上:SK05 完掘状況、左下:
SK02 完掘状況、右下:SK06 断面)

2. 山持遺跡6区①土坑(左上:SK07
完掘状況、右上:SK06 完掘状況、左下:
SK08 検出状況、右下SK03 板材出土状
況)

図版 28 1. 山持遺跡6区①井戸状遺構調査状
況(左上:検出状況を西から、右上:
木片等出土状況を南西から、左下:南
北土層の北側、右下:断割り作業)

2. 山持遺跡6区①井戸状遺構調査状
況(上部堆積層除去後、西から)

図版 29 1. 山持遺跡6区①土器群1 検出状況
(東から)

2. 山持遺跡6区①土器群1 検出状況
(北東から)

図版 30 1. 山持遺跡6区①シルト層調査状況
(左:木製品出土状況、右:SK11 検出
状況)

2. 山持遺跡6区調査状況(上:SK11
断面・完掘状況、左下:杭列検出状況、
右下:砂層弥生土器出土状況)

図版 31 1. 山持遺跡6区③調査状況(左:河
道跡検出状況、右:近世の杭列検出状
況)

2. 山持遺跡6区③調査状況(左上:
近世の杭列を南から、右上:オモカス
層鉄鎌出土状況、左下:オモカス層鉄
鎌出土状況、右下:オモカス層卒塔婆
出土状況)

図版 32 1. 山持遺跡6区③SD03 調査状況(左:
獣骨出土状況、右:完掘状況)

2. 山持遺跡6区③SD03 遺物出土状
況(左上:鉄鎌、左下:木製品、右:
土器等)

図版 33 1. 山持遺跡6区③短刀出土状況(左:
シルト層上面、右:道路遺構直上)

2. 山持遺跡6区③遺物出土状況(左上:

シルト層鹿角、右上:シルト層上面木
製品、下:旧河道木製品)

図版 34 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
上部土層(上:南北土層南側、左下:
東西土層東側、右下:南北土層北側)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(南から)

図版 35 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(南部分を南から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(左:南から、右:東から)

図版 36 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(南西から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(石列部分を南西から)

図版 37 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
検出状況(東から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側) 検
出状況(東から)

図版 38 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
下部礫群検出状況(南から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
土層(左上:東西土層の西側、右上:
東西土層の東側、左下:南北土層、右下:
東西土層の西側)

図版 39 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
土層(東西土層の東側)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
下部礫群検出状況(南部分を南から)

図版 40 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
下部礫群検出状況(東から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
下部礫群検出状況(北から)

図版 41 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
下部礫群検出状況(南東から)

2. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)
盛土除去後(南から)

図版 42 1. 山持遺跡6区③道路遺構(南側)

- 下部落ち込み杭列検出状況（北側を北東から）
2. 山持遺跡6区③道路遺構（南側）
下部落ち込み杭列検出状況（南側を北東から）
- 図版 43 1. 山持遺跡6区③道路遺構（南側）
下部落ち込み内遺物出土状況（左上：舟形木製品、右上：木製品出土状況、左下：須恵器出土状況、右下：木製椀出土状況）
2. 山持遺跡6区③道路遺構（南側）
下部落ち込み検出状況（南から）
- 図版 44 1. 山持遺跡6区③道路遺構（南側）
下部落ち込み検出状況（南側を東から）
2. 山持遺跡6区③道路遺構（南側）
下部落ち込み検出状況（東から）
- 図版 45 1. 山持遺跡6区③土坑群検出状況（北西から）
2. 山持遺跡6区③土坑群検出状況（南東から）
- 図版 46 1. 山持遺跡6区③土坑調査状況（左上：SK12、右上：SK15 断面、左下：SD04 低脚坏出土状況、右下：SK14 断面）
2. 山持遺跡6区③土坑調査状況（左上：SK34 断面、右上：シルト層土器出土状況、左下：SK15 断面、右下：SK42 遺物出土状況）
- 図版 47 1. 山持遺跡6区③土坑調査状況（左上：SK15 完掘状況、右上：SK34 完掘状況、左下：SK31 完掘状況、右下：SK22 遺物出土状況）
2. 山持遺跡6区③土坑調査状況（左上：SK23 遺物出土状況、右上：SK27 断面、左下：SK27 完掘状況、右下：SK14 完掘状況）
- 図版 48 1. 山持遺跡6区③土器群2検出状況（西から）
2. 山持遺跡6区③土器群2検出状況（左
- 上：北から、右上：北西から、左下：北から、右下：南東から）
- 図版 49 1. 山持遺跡6区③砂層弥生土器出土状況
2. 山持遺跡6区③完掘状況（西から）
- 図版 50 1. 山持遺跡6区①南部砂層完掘状況（西から）
2. 山持遺跡6区①調査状況（左上：調査開始段階、右上：土壌水洗作業、下：7/18、7/20 豪雨時）
- 図版 51 1. 山持遺跡6区①調査状況（左上：8/5 現地説明会、左下・右：10/8 現地説明会）
2. 山持遺跡6区①調査状況（上・左下：砂層調査状況、右下：調査終了段階）
- 図版 52 1. 山持遺跡6区③調査状況（左上：調査初期段階、右上：7/13 溜枿水没、左下：9/24 現地説明会、右下：道路遺構調査状況）
2. 山持遺跡6区③調査状況（左：砂層調査状況、右上：土器群2調査状況、右下：調査区西壁）
- 図版 53 1. 砂層出土縄文土器（第11図）
2. 砂層出土縄文土器（第11図）
- 図版 54 1. 砂層出土縄文土器（第11図）
2. 砂層出土縄文土器（第12図）
- 図版 55 1. 砂層出土縄文土器（第12図）
2. 砂層出土縄文土器（第13図）
- 図版 56 1. 砂層出土縄文土器（第13図）
2. 砂層出土縄文土器（第13図）
- 図版 57 1. 砂層出土縄文土器（第14図）
2. 砂層出土縄文土器（第14図）
- 図版 58 1. 砂層出土縄文土器（第15図）
2. 砂層出土縄文土器（第15図）
- 図版 59 1. 砂層出土縄文土器（第16図）
2. 砂層出土縄文土器（第16図）
- 図版 60 1. 砂層出土縄文土器（第16図）
2. 砂層出土縄文土器（第17図）

- 図版 100 1. 砂層出土弥生土器 (第 46 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 47 図)
- 図版 101 1. 砂層出土弥生土器 (第 47 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 47 図)
- 図版 102 1. 砂層出土弥生土器 (第 48 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 48 図)
- 図版 103 1. 砂層出土弥生土器 (第 49 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 49 図)
- 図版 104 1. 砂層出土瓦質土器 (第 49 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 49 図)
- 図版 105 1. 砂層出土弥生土器 (第 50 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
- 図版 106 1. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
- 図版 107 1. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
- 図版 108 1. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 51・52 図)
- 図版 109 1. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 51 図)
- 図版 110 1. 砂層出土弥生土器 (第 52 図)
2. 砂層出土弥生土器 (第 52 図)
- 図版 111 1. 砂層出土砥石 (第 53 図)
2. 砂層出土石器 (第 53 図)
- 図版 112 1. 砂層出土石器 (第 53 図)
2. 砂層出土石器 (第 54 図)
- 図版 113 1. 砂層出土石器 (第 54 図)
2. 砂層出土石鏃 (第 54 図)
- 図版 114 1. 砂層出土木製品 (第 54 図)
2. 砂層等出土玉作関連遺物 (第 55 図)
- 図版 115 1. 土器群 1 出土弥生土器 (第 59 図)
- 図版 116 1. 土器群 2 出土弥生土器
(第 62・63 図)
- 図版 117 1. 土器群 2 出土弥生土器 (第 63 図)
- 図版 118 1. 土器群 2 出土弥生土器、土坑・SD04・
出土石器 (第 63・66・72 図)
- 図版 119 1. 土坑出土土器 (第 66 図)
2. 土坑出土土器 (第 66 図)
- 図版 120 1. 土坑出土土器 (第 69 図)
2. 土坑出土土器 (第 69 図)
- 図版 121 1. 土坑・SD04 出土土器 (第 69・72 図)
2. 土坑・SD04 出土土器 (第 72 図)
- 図版 122 1. 道路遺構杭列出土木製品
(第 84・85 図)
- 図版 123 1. 道路遺構杭列出土木製品
(第 85・86 図)
- 図版 124 1. 道路遺構杭列出土木製品
(第 86・87 図)
- 図版 125 1. 道路遺構杭列出土木製品
(第 87・88 図)
- 図版 126 1. 道路遺構杭列出土木製品 (第 89 図)
- 図版 127 1. 道路遺構杭列出土木製品
(第 89・90 図)
- 図版 128 1. 道路遺構杭列出土木製品 (第 90 図)
- 図版 129 1. 旧河道 (SX01) 出土須恵器
(第 93 図)
- 図版 130 1. 旧河道 (SX01) 出土須恵器・
土師器 (第 93・94 図)
- 図版 131 1. 旧河道 (SX01) 出土土師器
(第 94 図)
- 図版 132 1. 旧河道 (SX01) 出土土師器・埴輪・
土製品 (第 94・95 図)
- 図版 133 1. 旧河道 (SX01) 出土鉄器・石器
(第 96・97 図)
2. 旧河道 (SX01) 出土石器 (第 97 図)
- 図版 134 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 98 図)
- 図版 135 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 98 図)
- 図版 136 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 99 図)
- 図版 137 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 99・100 図)
- 図版 138 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 100・101 図)
- 図版 139 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 101・102 図)

- 図版 140 1. 旧河道 (SX01) 出土木製品
(第 102 図)
2. 3号木簡 (第 104 図)
- 図版 141 1. 3号木簡 (第 104 図)
2. 2号木簡 (第 104 図)
- 図版 142 1. 2号木簡 (第 104 図)
- 図版 143 1. 1号木簡 (第 104 図)
- 図版 144 1. 1号木簡 (第 104 図)
- 図版 145 1. 1号木簡 (第 104 図)
- 図版 146 1. 1号木簡 (第 104 図)
- 図版 147 1. 1号板絵 (第 103 図)
2. 2号板絵 (第 103 図)
- 図版 148 1. 2号板絵 (第 103 図)
- 図版 149 1. 2号板絵 (第 103 図)
- 図版 150 1. 2号板絵 (第 103 図)
- 図版 151 1. 3号板絵 (第 103 図)
- 図版 152 1. 3号板絵 (第 103 図)
2. 4号板絵 (第 103 図)
- 図版 153 1. 4号板絵 (第 103 図)
- 図版 154 1. 旧河道 (SX01) 出土獸骨 (馬)
(第 105 図)
2. 旧河道 (SX01) 出土弥生土器
(第 106 図)
3. 旧河道 (SX01) 出土弥生土器
(第 106 図)
- 図版 155 1. 旧河道 (SX01) 出土弥生土器
(第 106 図)
2. 旧河道 (SX01) 出土弥生土器
(第 106 図)
- 図版 156 1. 道路遺構盛土内出土須恵器
(第 107 図)
2. 道路遺構盛土内出土須恵器
(第 107 図)
- 図版 157 1. 道路遺構盛土内出土須恵器
(第 107・108 図)
- 図版 158 1. 道路遺構盛土内出土須恵器
(第 107・108 図)
- 図版 159 1. 道路遺構盛土内出土土師器・
土製品 (第 109 図)
- 図版 160 1. 道路遺構盛土内出土木製品
(第 110 図)
- 図版 161 1. 道路遺構盛土内出土木製品
(第 110・111 図)
- 図版 162 1. 道路遺構盛土内出土木製品
(第 111 図)
- 図版 163 1. 道路遺構盛土内出土木製品
(第 111・112 図)
- 図版 164 1. 道路遺構盛土内出土木製品
(第 112 図)
- 図版 165 1. 道路遺構盛土内出土土器
(第 113 図)
2. 道路遺構盛土内出土土器
(第 113 図)
- 図版 166 1. 道路遺構盛土内出土土器・旧河
道 (SX01) 古堆積層出土須恵器・土
製支脚 (第 113・114・115 図)
- 図版 167 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土須
恵器・土師器 (第 114・115 図)
- 図版 168 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土木
製品 (第 116 図)
- 図版 169 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土木
製品 (第 116・117 図)
- 図版 170 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土木
製品 (第 117・118 図)
- 図版 171 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土木
製品 (第 118 図)
- 図版 172 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土石
器 (第 119 図)
2. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土
器 (第 120 図)
- 図版 173 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土
器 (第 120 図)
2. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土
器 (第 120・121 図)
- 図版 174 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土
器 (第 121 図)

2. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器 (第121図)
- 図版 175 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器 (第121図)
- 図版 176 1. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器 (第122図)
2. 旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器 (第122図)
- 図版 177 1. 道路遺構出土金属器・木製品・石器、南側杭列出土木製品 (第133・134・148・159図)
- 図版 178 1. 道路遺構南側杭列出土木製品 (第134・135図)
- 図版 179 1. 道路遺構南側杭列出土木製品 (第135図)
- 図版 180 1. 南側落ち込み出土遺物 (第136・137図)
2. 南側落ち込み出土木製品 (第137図)
- 図版 181 1. 南側落ち込み出土木製品 (第137図)
- 図版 182 1. 南側落ち込み出土木製品 (第137図)
2. 土坑(SK05)出土須恵器(第144図)
3. 井戸状遺構出土須恵器・木製品・弥生土器 (第142・143図)
- 図版 183 1. シルト層出土須恵器・土師器 (第47図)
- 図版 184 1. シルト層出土石器 (第148図)
2. シルト層出土石器 (第148図)
- 図版 185 1. シルト層出土木製品 (第149図)
- 図版 186 1. シルト層出土木製品 (第149図)
- 図版 187 1. シルト層出土土器 (第150図)
2. シルト層出土土器 (第150図)
- 図版 188 1. シルト層出土土器 (第150図)
- 図版 189 1. シルト層出土土器 (第151図)
2. シルト層出土土器 (第151図)
- 図版 190 1. シルト層出土土器 (第151図)
2. シルト層出土土器 (第151図)
- 図版 191 1. シルト層出土土器(第151・152図)
- 図版 192 1. シルト層出土土器 (第152図)
2. ガラス小玉 (第153図)
- 図版 193 1. SD03・オモカス層出土鉄鎌 (第154・159図)
2. オモカス層出土鉄鎌 (第154図)
3. SD03・オモカス層・土器群2出土石器 (第64・154・159図)
- 図版 194 1. オモカス層出土木製品(第155図)
- 図版 195 1. オモカス層出土木製品(第155図)
2. 中近世層出土木製品 (第157図)
- 図版 196 1. 中近世層出土木製品 (第157図)
- 図版 197 1. 中近世層出土木製品 (第157図)
- 図版 198 1. SD03 出土須恵器・木製品 (第159図)
- 図版 199 1. SD03 出土土器 (第160図)
2. SD03 出土土器 (第160図)
- 図版 200 1. SD03 出土土器 (第160図)
2. 出土金属製品X線透過画像 (第96・133・148・154・159図)



第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道431号は、出雲市を起点として、松江市、鳥取県境港市を経て米子市に至る総延長95.8kmの道路であり、主として宍道湖・中海の北岸に沿って併走することから、地元では通称「湖北線」と呼称されている出雲部の大動脈である。一般国道431号東林木バイパスは、宍道湖・中海北岸の市町村を連結する地域高規格道路「境港・出雲道路」の一部を構成するとともに、現道の線形不良及び交通混雑の解消を目的とし、出雲市矢尾町から出雲市東林木町に至る延長4.2kmの4車線及び副道・歩道両側設置の計画で、平成10年12月に地域高規格道路の整備計画に組み込まれた道路である。副道の全線供用開始は平成20年度の予定であるが、すでに東林木町内において平成16年度より一部供用が開始されている。

鳥根県教育委員会では、平成11年度に出雲土木建築事務所（現：出雲県土整備事務所）から遺跡有無の照会を受け、平成12年3月に事業予定地内の分布調査を実施し、予定地内において青木遺跡、馬渡り遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の5遺跡を発見するとともに、遺跡の取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。その後、鳥根県土木部道路建設課・出雲土木建築事務所との協議を経て、平成12年5月22日付で出雲土木建築事務所長名で文化財保護法第57条の3（現第94条）に基づく、上記4遺跡地内における土木工事の通知が鳥根県教育委員会教育長に対して行われ、鳥根県教育委員会では同年5月29日付で工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。

上記の法的手続きに基づいて、鳥根県教育委員会では平成13年度から青木遺跡・山持遺跡の本発掘調査に着手し、現在青木遺跡Ⅰ～Ⅳ区、山持遺跡Ⅰ～Ⅲ区・Ⅴ区の現地調査が終了しているところであり、既に報告書として刊行されている。特に、青木遺跡は弥生時代の四隅突出型埴土器群や銅鏝片、奈良・平安時代の大量の墨書土器、木簡及び神社状遺構により全国的に注目されることとなった。青木遺跡は既に全成果が報告書として刊行され、山持遺跡についても既にⅠ区～Ⅲ区、Ⅴ区、Ⅳ区・Ⅶ区の一部については報告書が刊行されており、本書で報告するⅥ区をはじめ、逐次調査成果が刊行される予定である。

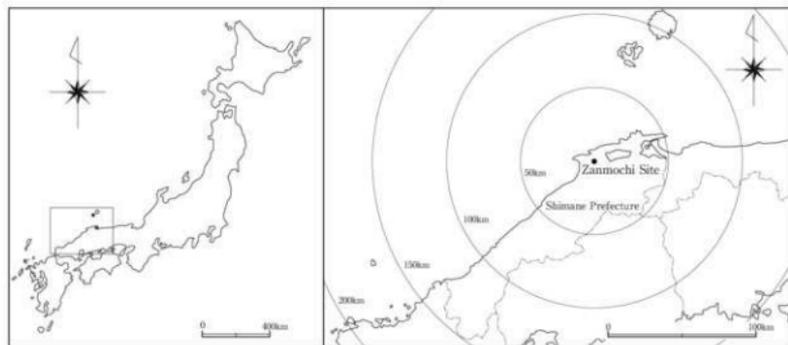
表1 一般国道431号東林木バイパス建設予定地内遺跡調査報告書一覧（平成19年度分まで）

シリーズ	調査年度	報告書名	報告書刊行年	報告の内容
1	平成13・14年度	青木遺跡Ⅰ（中近世編）	2004年3月	青木遺跡のうち上層に位置した古代木～近世の遺構遺物を報告。文脈にみられる林木田に関する遺跡が。
2	平成14年度	山持遺跡（Vol.1）	2005年3月	弥生時代前期～古墳時代前期初期の自然河道より大量の土器・木製品が出土。古墳の特長木・小型特長器が同一発掘品群
3	平成14・15年度	青木遺跡Ⅱ（弥生時代・奈良・平安時代編）	2006年3月	出雲最古を含む四隅突出型埴土器4基、方形石墓群、銅鏝片、1000点を超える墨書土器、木簡、神社状遺構、神像など
4	平成15・16年度	山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区（Vol.2）	2007年3月	平安時代の木田跡、中世の自然河道と堤、奈良時代の吊状遺構、弥生時代の自然河道と大量の弥生土器、輪造式土器など
5	平成16・17年度	山持遺跡Ⅳ区（Vol.3）	2007年3月	古代の高伏遺構、古墳前期の大溝と投棄された大量の古式土器群、ガラス玉や玉作関連遺物
6	平成16・17・18年度	里方本郷遺跡・山持遺跡Ⅳ（Ⅴ区・Ⅶ区）	2008年3月	里方本郷：弥生時代前期～中期の土器、古墳時代前期の溝・土坑 山持：弥生時代後期の土坑・溝、古墳時代中期～後期の溝・土坑・井戸

第2章 山持遺跡の位置と環境

山持遺跡は出雲平野の北端、出雲市西林木町に所在する。出雲平野は斐伊川・神戸川の二大河川により形成された沖積平野であり、南から北へ徐々に標高が低くなり、急峻な断層山脈である北山山系に至っている。すなわち、当遺跡の位置する北山東南麓は出雲平野で最も標高の低い場所の一つであり、斐伊川や北山山系から流れ出る中小河川の影響を不断に受け続けた地域であった。天平五年に編纂された『出雲国風土記』では当遺跡周辺は出雲郡伊努郷に相当する。『風土記』には、国引きを行った意美豆努命の子である赤衾伊努意保須美比古佐委氣能命の社が郷内にあることが郷名の由来として記載されている。赤衾伊努意保須美比古佐委氣能命は「意保須美」＝「大洲見」から沖積地守護の神と想定されており（加藤 1957）、当地が古来より水との戦いを強いられてきた地域であることを雄弁に物語る記述と言えよう。当地域周辺の遺跡の動向は、こうした出雲平野の形成過程と切り離して考えることはできない。以下、各時代の歴史的環境について若干ふれておく。

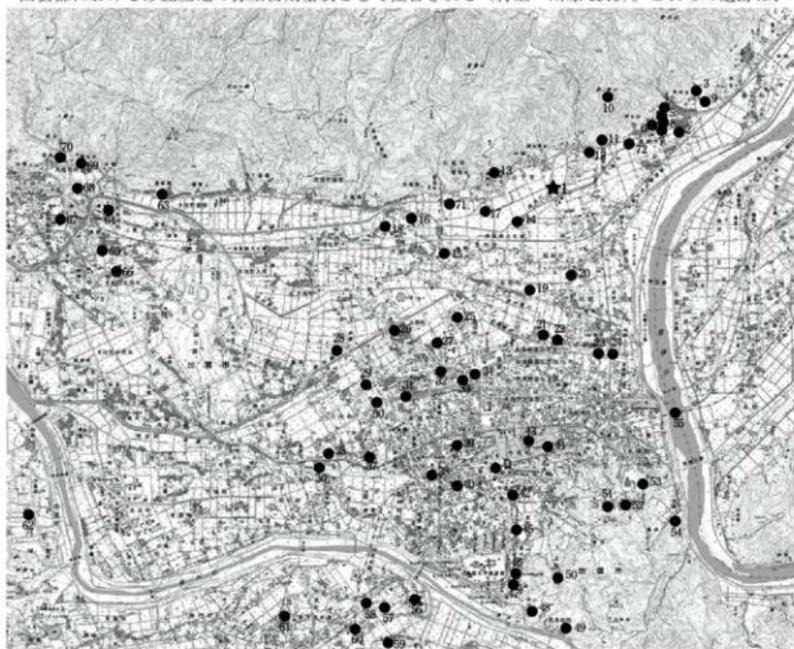
縄文時代 旧石器時代の遺跡は出雲平野では、まだ確認されていない。縄文時代早期なると菱根遺跡や上長浜貝塚などの遺跡が確認されるようになる。特に前者は当遺跡と同様な北山南麓に位置する遺跡であり、所謂「菱根式」と呼ばれる、当地域における早期末の繊維土器の標式遺跡として著名である。なお、繊維土器については本報告の6区からも出土している。縄文前・中期の遺跡は平野北半分ではこれまでのところ明確ではなかったが、本報告の6区から包含層中ではあるが前・中期の土器が出土しており注目される。縄文時代後期では出雲平野中央部に位置する矢野遺跡では縄文後期後葉の福田 K Ⅲ式・元住吉山Ⅱ式が採集されている（池田・足立 1987）。神戸川の上流域に位置する三瓶山は約 3600～3700 年前頃に第Ⅶ期活動期と呼ばれる活発な噴火活動があり、当該期にこの活動に伴う大量の堆積物が出雲平野に流出したと想定されており（角田 2004）、矢野遺跡でも当該活動期の堆積物が確認されている（大西・徳岡・高安ほか 1989）。続く縄文時代晩期には矢野遺跡のほか、善行寺遺跡や蔵小路西遺跡から当該期の遺物が出土しており、蔵小路西遺跡からは突帯文期の火処が確認されている（鳥根県教育委員会 1999）。このように縄文時代晩期までは出雲平野中央部までは確実に陸地化していたものと考えられる。山持遺跡の所在する北山南麓ではまだ



第1図 山持遺跡の位置

確実な当該期の遺跡は確認されていないが、本報告の6区では各時期の縄文土器がある程度出土していることから、遺跡周辺部の北山南麓縁辺部に遺跡が所在する可能性が考えられる。ただ、遺跡周辺の平野部では縄文晩期段階までは安定した陸地化が達成されている可能性は低いと推測される。

弥生時代 出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷I遺跡などがある。遺跡の性格が判明する事例は乏しいが、原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される(村上・川原 1979)。これらの遺跡は、



- 1 山持遺跡 2 青木遺跡 3 大寺古墳群 4 平林寺山古墳群 5 膳棚山古墳群 6 古前西北崖上横穴墓
 7 古前背後横穴墓群 8 傘屋背後横穴墓群 9 大寺三蔵遺跡 10 鶯ヶ巣城跡 11 東組遺跡 12 龍善寺東遺跡
 13 矢尾横穴墓群 14 里方別所遺跡 15 高浜I遺跡 16 里方八石原遺跡 17 里方本郷遺跡 18 高浜II遺跡
 19 高岡遺跡 20 荻籽II遺跡 21 中野西遺跡 22 中野美保遺跡 23 中野清水遺跡 24 大津町北遺跡 25 大塚遺跡
 26 矢野遺跡 27 小山遺跡第3地点 28 井原遺跡 29 白枝荒神遺跡 30 小畑遺跡 31 渡橋沖遺跡 32 小山遺跡第1地点
 33 蔵小路西遺跡 34 姫原西遺跡 35 白枝本郷遺跡 36 余小路遺跡 37 壱丁田遺跡 38 天神遺跡
 39 海上遺跡 40 高西遺跡 41 藤ヶ森遺跡 42 角田遺跡 43 塚山古墳 44 大念寺古墳 45 上塩治築山古墳
 46 上塩治地藏山古墳 47 半分古墳 48 三田谷I遺跡 49 光明寺古墳群 50 上塩治横穴墓群 51 普沢遺跡
 52 長者原廃寺 53 西谷墳墓群 54 長廻遺跡 55 斐伊川鉄橋遺跡 56 古志本郷遺跡 57 田畑遺跡
 58 下古志遺跡 59 妙蓮寺山古墳 60 宝塚古墳 61 知井宮多聞院遺跡 62 上長浜貝塚 63 菱根遺跡 64 原山遺跡
 65 南原遺跡 66 中分貝塚 67 鹿蔵山遺跡 68 五反配遺跡 69 真名井神社銅戈出土地 70 出雲大社境内遺跡
 71 下澤遺跡 72 門前遺跡

第2図 山持遺跡の位置と周辺の遺跡

矢野遺跡を除けばいずれも平野縁辺部に立地する遺跡である。当遺跡周辺では、これまで青木遺跡や門前遺跡でわずかに当該期の土器片が若干確認されているのみであったが、本報告の6区ではある程度前期の土器も出土していることから、何らかの安定した集落が形成されている可能性が考えられる状況になってきている。当地域周辺で明確な遺跡が確認されるようになるのは弥生中期中葉段階であり、中期後葉以降に遺物が増加し、後期段階になって多量の遺物が確認されるようになる。山持遺跡ではⅠ区において中期中葉の土器が若干確認されているほか、Ⅲ区でも中期後葉の土器が出土しており、この段階から不安定ながら集落が営まれつつあった状況を示している。出雲平野全体ではこの時期（弥生時代中期中葉）に爆発的に遺跡数が増加することが指摘されており（藤永2005・米田2006）、北山東南麓の集落の動向もこうした様相と軌を一にしたものと理解される。

出雲平野における弥生時代中期の集落としては、前述の遺跡のほか、天神遺跡、古志本郷遺跡、白枝荒神遺跡、中野美保遺跡、知井宮多門院遺跡などが比較的大規模なものとしてよく知られている。当該期の墳墓遺跡の様相は明確ではないが、中野美保遺跡では中期中葉に属する方形貼土墓が1基確認されており、後期以降当地で盛行する四隅突出墓の系譜を探る上で注目される遺跡である（島根県教育委員会2004a）。また、遺物の面においても当該期では、古志本郷遺跡や下古志遺跡で須玖Ⅱ式壺が確認されており（角田2006a）、荒神谷遺跡の銅矛、猪目洞窟遺跡のゴホウラ製貝輪とともに北部九州との交流を示す遺物として重要である。山持遺跡Ⅲ区出土の勒島式土器や中野清水遺跡の鑄造鉄斧（島根県教育委員会2004b）等にもみられるよう、この段階において既に朝鮮半島系遺物が確認されている点も幅広い交流をうかがわせ注目すべき点である。

弥生時代後期は中期後半から形成された集落の多くが継続して営まれ、かつ遺物量が格段に増加する。遺跡ごとに多少の差はあるものの、この傾向は後期を通じて一貫して認められるようであり、後期末から古墳時代前期前半にそのピークを迎える。時期ごとの土器出土量から遺跡の盛衰を単純に読み取るとは厳に慎まねばならないが、大きな変化もなく順調な発展を遂げているものとして理解してよいだろう。また、他地域との交流も、前代からの北部九州系土器が引き続き認められるとともに、西谷墳墓群や矢野遺跡、山持遺跡などで吉備系特殊土器及びその模倣品が確認されているほか、西部瀬戸内系の土器も一定量出土するなど、広汎かつ多様な地域間交流の様相を窺い知ることができる。墳墓遺跡では西谷丘陵で最大級の四隅突出墓群が営まれるほか（島根大学法文学部考古学研究室1992）、近年の平野部における調査の進展により、青木遺跡や中野美保遺跡などで中小規模の四隅突出型墳墓が営まれている状況が明らかとなり、墓制から見た出雲平野の地域社会構造へのアプローチが可能となりつつある。なかでも中期後葉段階まで遡ることが明らかとなった青木4号墓の発見は、四隅突出墓の起源論に一石を投じるものであり、今後の議論の展開が期待されよう。

古墳時代 こうした順調な発展を示していた出雲平野の地域社会が大きな変化を見せるのは古墳時代前期である。従来から指摘されているとおり（渡辺1986）、当地域においては西谷9号墓に後続する前期前半の有力首長墓が現状では確認できない状況にある。9号墓に隣接する7号墳は近年の確認調査で四隅を削り出す特異な構造が注目されたが（出雲市教育委員会2006）、規模的には9号墓と比較すると遙かに見劣りし、かつ築造時期も出土土器から中期後葉まで降る可能性が高い。その他の前期古墳としては、山地古墳、大寺1号墳、浅柄Ⅱ古墳、権現山古墳などが知られるが、時期不明な権現山古墳を除き、いずれも中期後葉（集成編年3期以降）以降のものである。特に当遺

跡の東2kmに位置する大寺1号墳は出雲平野の前期古墳では唯一の前方後円墳であり、その築造場所も含め、その成立背景が注目されることである(鳥根県古代文化センター2005)。

一方、集落遺跡は、従来は古墳時代前期になると減少すると理解されていたが、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在し、墳墓の動向とは単純にはリンクしないようである。しかし、小谷式後半期には集落数が減少する傾向は認められるようであり、如何なる要因に基づくものか、その背景が注目される。

古墳時代中期も出雲平野の様相は今ひとつ不明確である。古墳としては平野南西部に奥才型木棺を備える小規模な方墳である間谷東1号墳、全長約70mの前方後円墳である北光寺古墳が営まれている。前者は奥才古墳群の動向や全国的な棺内竊敷組合式箱形木棺の動向から中期初頭に位置づけられ(岩本2003)、海浜部立地中小古墳の広域的地域間交渉を物語る者として重要である。後者は出土遺物や石棺残片から中期前～中葉に編年され、同時期としては出雲部最大の古墳であり、その突発的な出現の背景は出雲平野の地域史を再構成する上で大きな課題として残されている。集落も、九景川遺跡など、この時期から営まれる事例が幾つか認められる点も注意される。

古墳時代後期になると、大念寺古墳、上塩治茶山古墳など、全国的にも著名な巨石墳が相次いで築かれ、山代子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている(渡邊1986)。こうした巨石墳の背景には当然平野の開発の進展が想定されようが、今のところ当該期における大規模な集落は出雲平野では確認できず、生産遺跡の断片を知り得るのみである(角田2006b)。こうした大型古墳の築造が停止されるのとはほぼ軌を一にして平野南部の丘陵には上塩治横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれる。当遺跡周辺では、金銅装馬具をはじめとする豊富な副葬品が一括出土した上島古墳(宮代1997)、大型の横穴式石室を備える中村1号墳(平田市教育委員会2004)、横穴式石室を主体部とする後期群集墳である定岡谷古墳群の存在が注目される。

奈良時代 奈良時代の出雲平野は斐伊川を境に西の神門郡と東の出雲郡に二分される。近年の発掘調査の進展により、神門郡家は出雲市古志本郷遺跡(鳥根県教育委員会2003)が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷遺跡(斐川町教育委員会1996)が比定されているが、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷I遺跡、小山遺跡が官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。冒頭に述べたとおり、当遺跡は出雲郡伊努郷に所在するが、多量の墨書土器・木簡の出土した青木遺跡を出雲郡家の出入機能的機能を備える遺跡と評価する見方もある(佐藤2003)。当遺跡においても、本報告の6区ではいくつかの墨書土器のほか、吉祥天や人物像を描いた板絵や木簡が出土し注目されることである。寺院跡では、古くから知られている神門寺境内廃寺、長者原廃寺のほか、青木遺跡の奈良時代I区建物跡群を寺院跡とみる見方もある(内田2006)。

中世 中世の遺跡としては、注目すべきものとして蔵小路西遺跡で検出された居館跡があげられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、出土した陶磁器類から12世紀後半から15世紀にかけてのもと考えられ、朝山氏または塩谷氏の居館である可能性が指摘されている(鳥根県教育委員会1999)。当遺跡周辺では、青磁の優品を出土した荻杵古墓(近藤1969)、多数の掘立柱建物跡、井戸が検出された青木遺跡があげられる。特に後者は皇室の荘園として九条家文書に記載のある林木荘戸の関連が注目される(鳥根県教育委員会2004c)。当該期の遺物は当遺跡の2区・3区の土石流層中より一定量出土していることから、その調査区の北側に

当該期の集落・屋敷が所在していた可能性が高い。また、当遺跡のすぐ北に屹立する丘陵上には戦国時代に市内最大規模の山城である鷹ヶ巣城が築かれ、尼子氏復興戦の際には毛利氏による高瀬城攻略拠点となったことで著名である。

以上、北山東南麓を中心とした当遺跡周辺の歴史的環境を、他の出雲平野地域と比較しつつその概観を試みたが、同じ出雲平野でも、南部域や中央部域とはやや歴史の展開が異なるようである。その要因としては冒頭に述べたような地理的な要因や郡境に接するという地政学的要因が大きく作用していたものと推測され、今後の調査・研究の進展によるその具体的解明が待たれる。

参考文献

- 加藤義成 1957『出雲国風土記参究』今井書店
- 池田満雄・足立克己 1987『出雲市矢野遺跡出土の縄文土器』『鳥根考古学会誌』第4集
- 角田徳幸 2004『三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡』『鳥根考古学会誌』第20・21集
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己ほか 1989『出雲平野西部の形成過程』『古代出雲文化の展開に関する総合的研究』鳥根大学山陰地域総合研究センター
- 鳥根県教育委員会 1999『歳小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 村上 勇・川原和人 1979『出雲・原山遺跡の再検討』『鳥根県立博物館調査報告』第2冊
- 藤永照隆 2005『遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考』『八雲立つ風土記の丘館報』No.182
- 米田美江子 2006『遺跡分布から見た出雲平野の形成史』『鳥根考古学会誌』第23集
- 鳥根県教育委員会 2004a『中野美保遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- 角田徳幸 2006a『中野清水遺跡の調査』『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7』
- 鳥根県教育委員会 2004b『大津町北遺跡・中野清水遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』
- 鳥根大学法文学部考古学研究室 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』
- 渡辺貞幸 1986『古代出雲の栄光と挫折』『王権の争奪』集英社
- 出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群－平成14～16年度発掘調査報告書－』
- 鳥根県古代文化研究センター 2005『大寺1号墳発掘調査報告』
- 岩本 崇 2003『棺内陳設をもつ組合式箱形木棺』『大手前大学史学研究所紀要』第3号 大手前大学史学研究所
- 角田徳幸 2006b『白枝本郷遺跡の調査』『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7』
- 鳥根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡V 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI』
- 佐藤 信 2004『出土文字資料が語るあたらしい古代史像』『出土文字資料が語る古代の出雲平野 平成15年度鳥根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 内田律雄 2006『出雲の神社遺構と神祇制度』『古代の信仰と社会』国士館大学考古学会
- 近藤 正 1969『出雲市萩村発見の骨甕器について』『考古学雑誌』第54巻3号
- 鳥根県教育委員会 2004c『青木遺跡(中近世編) 国道431号道路改築事業(東林木バイパス)建設予定地内発掘調査報告書1』
- 平田市教育委員会 2004『中村1号墳』
- 宮代栄一 1997『鳥根県上島古墳の再検討』『鳥根考古学会誌』第14集
- 斐川町教育委員会 1996『後谷V遺跡』
- 出雲市教育委員会 2006『門前遺跡発掘調査報告書』

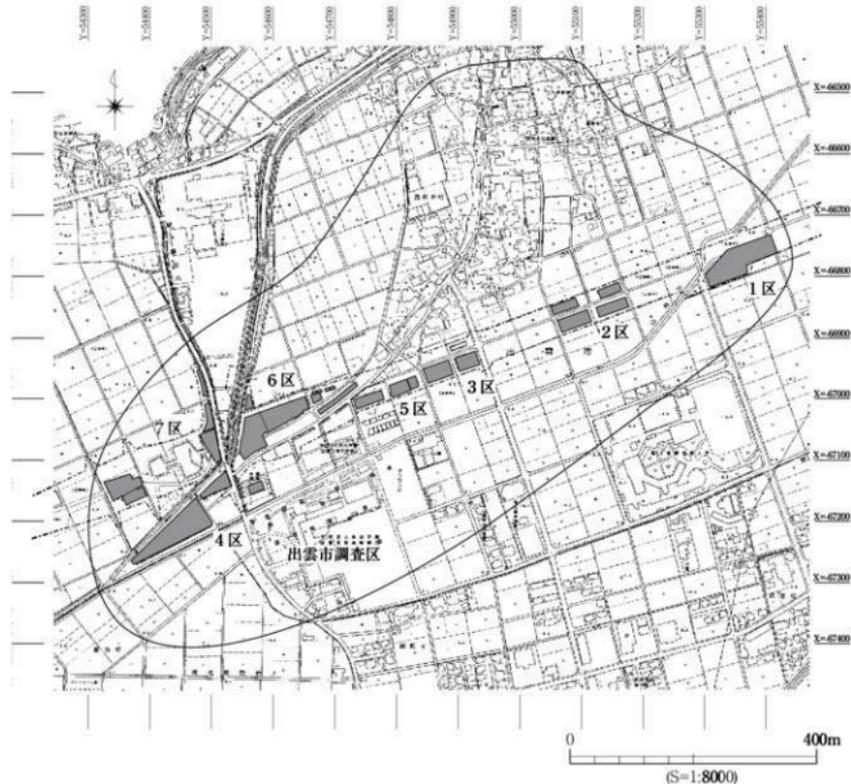
第3章 調査の経過状況と概要

第1節 過去の調査の経過と概要

ここでは山持川沿岸遺跡も山持遺跡も含め過去の調査経過を辿ってみたい。

①遺跡の発見(1962年) 山持遺跡が最初に確認されたのは1962年の山持川河川改修時に新宮元栄氏により土器が採集されたのを端緒とする。採集された土器は1～6区で出土したものとほぼ同じ様相を示し、弥生中期末～古墳前期にほぼ限定される。

②第1次調査(1980年) 1980年には出雲女子高等学校(現出雲北陵高等学校)建設に伴い、出雲市教育委員会によって範囲確認調査が実施され、当遺跡に初めて調査のメスが入ることとなった。グリッドの調査のため遺構等の様相は不明だが、各グリッドから弥生後期前葉から古墳前期にかけての土器がまともに出てくる。層位的には、山持川を挟んで北側に隣接する第2次調査時の様相と良く似ているようである。この段階では、遺跡の中心は北側の伊努谷川扇状地上に立地し、



第3図 山持遺跡調査区配置図

後背湿地である当調査区周辺に意図的に投棄されたものと理解されていた。

③第2次調査(1994年) 第1次調査区の手持川を挟んだすぐ対岸に汚水処理施設が建設されるのに先立ち、出雲市教育委員会により発掘調査が実施された。この調査で特筆すべき点は、その湿潤的環境から居住地ではなく捨て場と認識されていた当遺跡から明確な遺構が検出され、居住域そのものであることが明らかになった点である。竪穴住居にはやや不明な点があるが、掘立柱建物跡は柱穴出土の土器から確実に弥生終末期に位置づけられるものであり、当該箇所が主たる居住域であったことは疑いない。遺構面は海拔2.8m前後であり、3区、4区、6区の遺構検出面とほぼ同じであり、特に道路を挟んで西側に隣接する4区の様相に近い。また、調査面積に対して遺物量が多く、搬入系遺物も確認されることから、規模的にも従来の想定よりかなり大規模な集落であったと想定され、当調査成果は従来の当遺跡の認識に大きな変更を迫る調査となった。

④第3次調査(2002年度) 平成14年度から島根県教育委員会によって東林木バイパス建設に伴う当遺跡の発掘調査が開始された。調査初年である平成14年度は、遺跡東端にあたる看護短大北東部の1区約4,300㎡が調査された。表土下約3m下の湧水の著しい悪条件の中での調査であったが、自然河道中より弥生後期後半を中心として大量の遺物が出土した。特筆すべきは吉備系の小型特殊器台・特殊壺が河道に一括投棄された状態で多量出土したことである。これらのうち吉備からの搬入品は破片1点であり、その他はすべて在地で製作された模倣品である。その形態や文様のみならず、特異な出土状況は特殊土器の使用法をめぐる上で注目すべき発見となった。また、旧河道中から木製品も多量に出土し、その中には装飾付栓や三稜木鏝、髯形木製品に類似したものなど特異な資料が含まれ、出雲地域における弥生時代後期末製品の代表的資料の一つとなっている。

表2 手持遺跡における発掘調査(2008年度まで)

調査原因	調査年度	調査主体	備考
1次:学校建設	1980年度	出雲市教育委員会	1981年3月報告
2次:下水処理場建設	1994年度	出雲市教育委員会	1996年3月報告
3次:道路建設(東林木バイパス)	2002年度	島根県教育委員会	2005年3月報告1区
4次:道路建設(東林木バイパス)	2003年度	島根県教育委員会	2007年3月報告2区
5次:道路建設(東林木バイパス)	2004年度	島根県教育委員会	2007年3月報告3区 2007年3月報告4区 2008年3月報告7区①
6次:道路建設(東林木バイパス)	2005年度	島根県教育委員会	2007年3月報告4区 2008年3月報告5区
7次:道路建設(東林木バイパス)	2006年度	島根県教育委員会	2008年3月報告5区 未報告6区② 2009年3月報告6区①(本書)
8次:道路建設(東林木バイパス)	2007年度	島根県教育委員会	2009年3月報告6区③(本書) 未報告6区⑤
9次:道路建設(東林木バイパス)	2008年度	島根県教育委員会	未報告4区② 未報告6区④ 未報告7区②~⑤

⑤第4次調査(2003年度) 平成15年度の調査は前年度の調査区の西側にあたる2区の5,000㎡を対象に実施された。1区と同様湧水と墳砂に悩まされる調査であったが、中・近世の水田跡や弥生時代後期の自然河道、しがらみ状遺構を検出し、当該期の良好な木製品資料を得ることができた調査であった。

⑥第5次調査(2004年度) 平成16年度調査は2区の西側約200mのⅢ区の3,000㎡と遺跡の南西部分の4区3,400㎡、さらに高浜川を挟んだ北側の7区818㎡を対象に調査が実施された。Ⅲ区の調査では、中世・奈良時代・弥生時代後期の3つの遺構面を調査している。中世の調査では全国的に見ても大型の卒塔婆状木製品が出土し、古代の遺構面では畠状遺構、道路状遺構等を確認している。弥生時代の遺構面では、自然河道からしがらみ状遺構を検出し、多量の弥生土器と共に朝鮮半島系無文土器の勒鳥式土器が出土している。4区の調査では古代の畠の畝間溝群、古墳時代の土器群が確認されている。7区の調査では古墳時代中期～後期の土坑や溝等を検出しており、山持遺跡の西端の様相が明らかとなり、遺跡全体の傾向として東から西へ居住域の移動を想定させる成果となった。

⑦第6次調査(2005年) 平成17年度の調査は前年度に引き続き4区3,400㎡及び5区470㎡について調査を実施した。4区の調査では昨年度に引き続き古代の畠もしくは水田跡を確認し、古墳時代前期～中期の掘立柱建物跡、溝、井戸等を検出している。遺物は大量の土師器やガラス製の勾玉・管玉・小玉が出土している。建物跡の検出によって居住域本体が明らかになった点で大きな成果であった。5区の調査では弥生時代後期～古墳時代前期の自然河道を検出している。

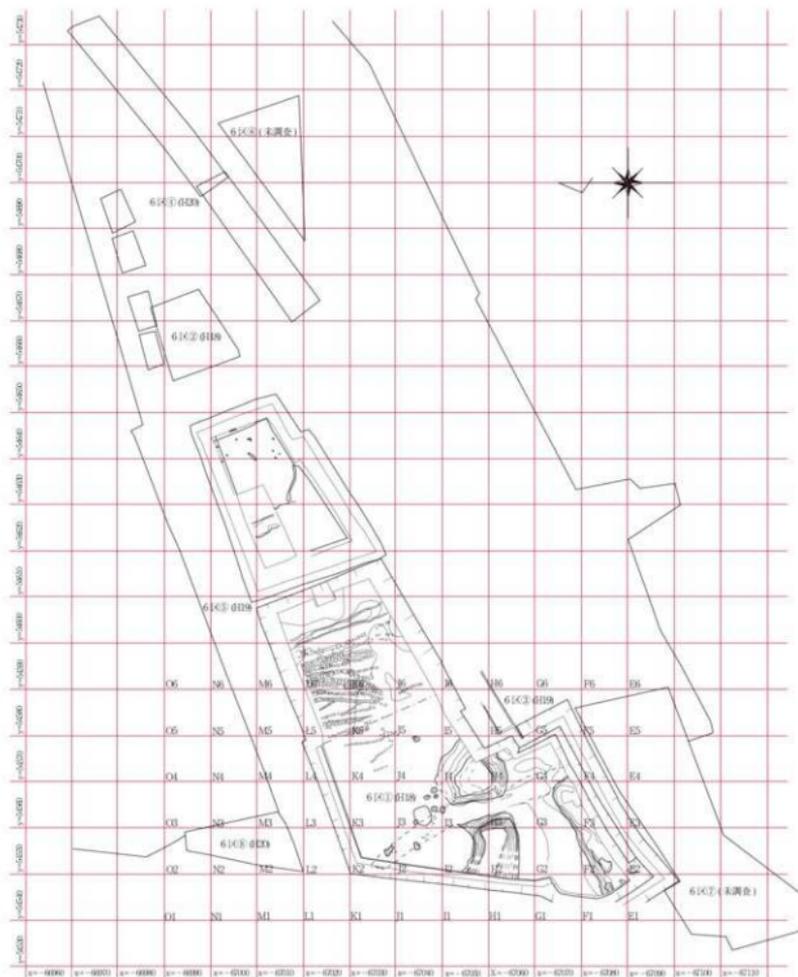
⑧第7次調査(2006年) 平成18年度の調査は、今回報告の6区①及び6区②の調査と前年から引き続き5区の調査を実施した。6区①の調査では古代の道路遺構と旧河道を検出し、大量の木製品のほか木簡や人物を描いた板絵が出土した。また弥生時代後期～古墳時代前期の土坑や土器群を検出したほか、斐伊川の堆積作用による砂礫層中から縄文時代早期～弥生時代後期の土器が出土した。5区の調査では東側の3区で確認された自然河道に続くものが確認されたほか、弥生時代～古墳時代の土坑や土器溜まりが確認された。

⑨第8次調査(2007年) 平成19年度の調査は、6区①の南側を6区③(今回報告調査区)、西側を6区⑤として実施した。6区③では前年度の6区①で確認された道路遺構の南側の続きを検出した。また弥生時代後期～古墳時代前期の土坑を多数検出した。6区⑤では杭列を伴う盛土工法による道路遺構や多数の板状凹凸面による道路遺構が検出された。この成果によって、6区①・③で確認されている道路遺構と併せ、古代の南北方向の道路遺構が多数集中する地点であることが判明した。また6区⑤では弥生時代後期～古墳時代前期の土器溜まりや自然河道が検出された。

⑩第9次調査(2008年) 平成20年度の調査は、平成16・17年度に実施した4区の東側を4区②として、6区④・⑧、7区②～④の調査を実施した。4区②ではシルト層上面で弥生時代後期末の土器溜まりを検出し、6区④では弥生時代後期末の堅穴状遺構や土坑等を検出している。7区②では古代と考えられる幅2～3mの大畔を確認し、7区③ではシルト層上面で古墳時代中期の溝や土師器や竹籠を廃棄した土坑が検出されている。7区④では古墳時代前期の溝や弥生時代後期末の流路と護岸状の杭列が1条確認されている。遺跡の西端の4区と7区の調査成果によって古墳時代前期後半以降の人々の活動域がこの調査区周辺である可能性が高まることとなった。

第2節 調査の方法

調査区の設定 県出雲土木建築事務所（現在、県出雲県土整備事務所）との協議の上、工事の進捗に合わせてもともと工事が急がれる橋脚部分周辺の調査について、ここを6区として調査を進めた。当初1年で調査を実施する予定であったが、道路遺構等の大規模な遺構が検出されたこと等から、



第4図 山持遺跡6区調査区地区割り図

平成18年度～平成20年度にかけて実施することとし、またそれ以降、工事の進捗等に合わせて調査可能となった部分を随時調査を実施することとなった。

平成18年度には、6区①及び6区②とした箇所を、平成19年度には6区③・⑤とした箇所について実施した。なお、平成20年度は6区④・⑥について実施している。

また、6区の調査についてはⅢ座標軸系に基づき座標軸に合わせた10m四方のグリッドを設定しX=-67,140、Y=54,530を原点とし、北へ向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の南西隅をもってグリッド名称とし、これに基づいて遺物の取り上げ等を行った。

重機掘削 調査予定地の現況は水田、宅地跡であり、表土の除去はバケツに平爪を装着したバックホーを用いて実施した。掘削は、近世の水田層と考えられる粘質土層を対象に実施し、現地表面から深さ2m程度まで実施した。なお、平成18年度については、その下の古代末～中世の湿地の層であるオモカス層も重機で掘削した。

人力掘削・遺構の精査 オモカス層及びそれ以下のシルト層・砂層については、主として鍬・スコップを用いて人力により掘り下げたが、遺物が集中する箇所については草削り・移植ゴテにより掘り下げた。遺構の検出はいったん鋤簾により大雑把に精査した後、遺構面を草削りを用いて丁寧に削り、遺構検出に努めたが、遺構覆土の判別が難しい場合や湧水等によって精査が必ずしも容易にはいかなかった。遺構内の調査は大型の土坑等は十字にベルトを設置し、小規模な遺構は半敷し、土層断面図を作成した。

記録の作成 遺構の平面図はアイシン精機株式会社による遺跡調査システム「遺構くん」を使用して測量を行い、出力後補正を行った。土層図は手測りにより縮尺1/20・1/10により作成した。遺物の出土状況・取り上げについては、有意な遺物出土状況については手測りにより縮尺1/10により平面図・立面図の図化を必要に応じて行い、その他報告書掲載が見込まれる遺物については基本的に出土位置を「遺構くん」を用いて記録した上取り上げた。

遺構の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものについては6×7判フィルム(モノクロネガ・カラーポジフィルム)による撮影を行い、メモ・素図作成用、またはビット断面写真などは主として35mmフィルムカメラ(モノクロネガ・カラーポジフィルム)及びデジタルカメラを使用した。また、全体写真については遺構調査の進捗状況に応じて高所作業車やラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

第3節 調査区の基本層序

ここでは、調査区の基本層序について述べることにする。平成18年度・19年度の調査では、調査区の壁面について、必要に応じて写真・図化をおこない記録をとっている。全体の様相については、第5図の西壁土層によっては把握できるものである。調査区全体で確認される層の概略を述べると、上層から近世以降の粘質土層(A層)、中世の湿地に起因する腐食土層(D層)、弥生時代後期～平安時代のシルト及び細砂層(L層)、弥生時代後期の砂礫層(M層)となる。

近世以降の水田層(A層) 近世以降の水田層については、基本的に各壁面とも大きな相違がないものである。特に注目される層は、西壁でA3とした層で、この層は他の層と比べ暗色であり、下部には細砂が堆積しているという特徴を持つ。細砂は標高36m付近に堆積し厚さ数cm程度であり、

この層は洪水砂である可能性が考えられる。このような洪水砂と推測される層は、本調査区から東へ300m程の第Ⅱ・第Ⅲ調査区で、2時期の洪水砂が確認されており、それらのいずれかの時期のものに対応する可能性が考えられる。

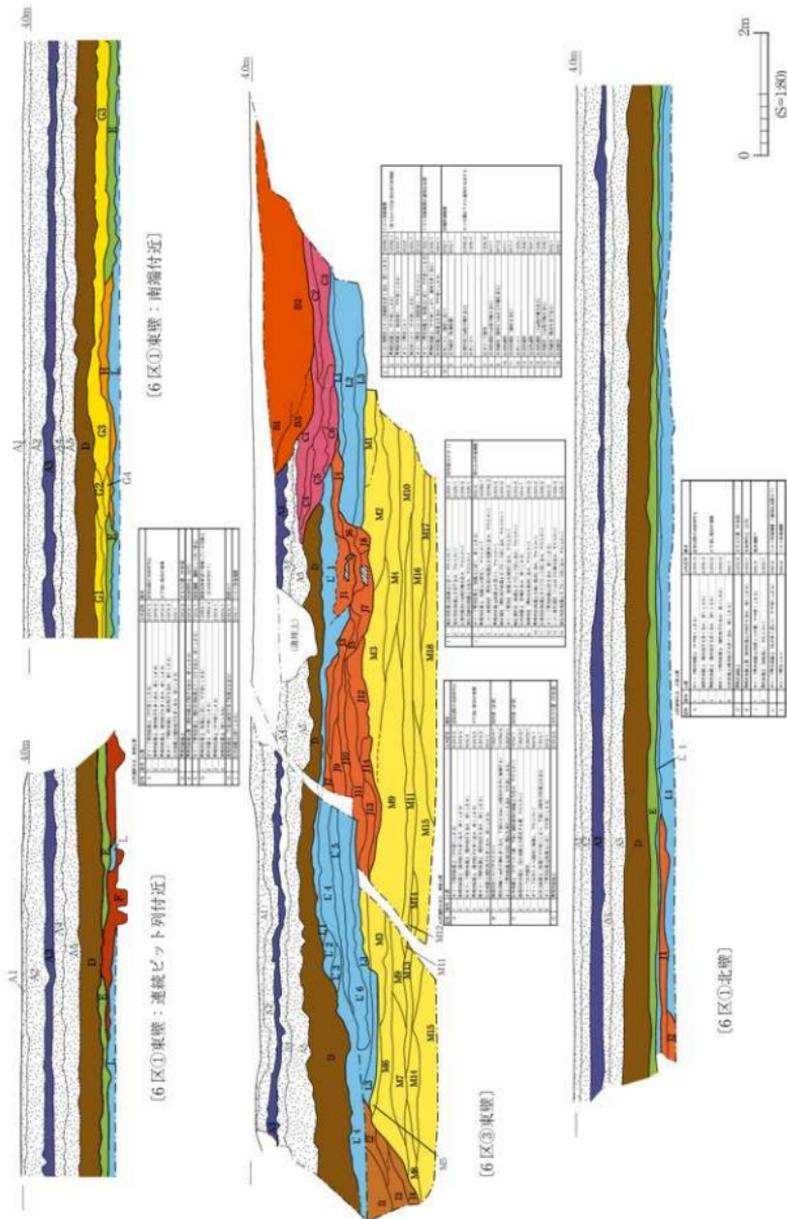
近世の河道堆積層 (B・C層) 調査区の南端では、東西方向に流れていたであろう近世の旧河道に堆積した礫層が確認されている。おそらく現在自然堤防状の高まりとなっている市道に沿ってその流路が想定されるものである。堆積物の状況から河川の周辺部であった可能性が指摘されており、現在の伊努谷から流れ出る河川「伊努谷川」の旧河道であった可能性が考えられる。調査区の南端部分は、この旧河道によって中世のオモカス層及びその下部の古代の遺構が削られている。なお、調査では、標高3.5m付近で平面的に確認するにとどめた。

中世のオモカス層 (D層) この植物質未分解の腐食土層が多く含まれる粘質土は、出雲平野の北部、北山山系南麓で見られるものであり、湿潤な湿地であったことを物語る層である。山持遺跡で確認されるオモカス層は、出土遺物が少ないことから明確な年代は不明であるが、古代末～中世にかけてと考えられている。この層からは、卒塔婆や木柄の残った完形の鉄鎌等が出土している。

水田耕作土及び畦畔 (E・G・H層) オモカス層の下には、粘質土層 (E層) が堆積している。この層には黄褐色から橙褐色の砂質粒子が含まれており、水田層と考えられるものである。6区全域で見られる層であり、オモカス層で覆われる以前、すなわち湿潤な湿地と化す以前には水田として利用されていたことが分かる。また、西壁では確実にこの層とは異なる高まり部分が見られ、水田の畦畔 (G・H層) と判断した。ただし、平面的に確認するまでに至っていない。

シルト系堆積層 (L層) 水田耕作土層 (E層) の下には、青灰色を呈すシルト層及び細砂層が堆積している。Ⅱ・Ⅲ区の調査で灰褐色シルト質細砂 (XI層：基盤層) として報告されているものである。シルト系堆積層と一括したが、その上部は粘質系の土であり、弥生時代後期～古代の遺物を含む包含層である。山持遺跡の6区ではこの上部の粘質系の土から殆どの遺物が出土しており、また遺構もこの部分で確認されるものである。遺物は古代のものが上部から出土する傾向にはあるが、明確に二分されるものではない。基本的に弥生時代後期～古代の遺構面はほとんどレベル的には変わらないということがいえる。これまでの他の調査区の状況を見ると、やはりシルト系堆積層の上部の粘質土から遺物が出土する包含層であり、遺構面が確認されるのもこの部分であることは同一である。異なるとすれば、その包含層が調査区によって層の厚さが違っていたり、明確に時期の異なる層として認識でき分層が可能であったりするところである。今回の調査区では、この層を遺構面とする東西方向の旧河道 (SX01) や土坑を検出している。この層 (L層) の堆積が殆どなくなり陸地化した状態になった弥生時代後期から、やっと居住域等として利用されたものと遺構の様相から考えられる。

砂礫系堆積層 (M層) 今回の6区の調査によって、遺跡内で初めて確認された層である。上層のシルト系堆積層 (L層) が青灰色系の還元色でシルト質であるのに対して、淡黄褐色系の色調の砂礫層であり、明確に層が分かれる。この層は、堆積する砂礫の観察から斐伊川の堆積作用によるものと判断され、少なくとも標高0mまで存在することが調査では確認された。おそらくさらに深い位置まで存在していると想定される層である。この層の上面から30cm程掘削すると1cm程の砂利と呼んだ方が分かり易い礫を多く含む層が存在し、その中に多くの遺物を包含していた。遺物は砂利を含む層以下途切れることなく存在し、縄文時代早期～弥生時代後期までのものが含まれる。



第6図 山持遺跡6区東壁・北壁土層図

第4節 調査の経過

第7次調査（6区①）の経過 平成18年度に実施した6区の調査は、当初西側の一区画を調査後東側の一区画を引き続き実施する予定であったが、西側の一区画で道路遺構や予想を超える遺物量であったことから、次年度以降に調査することとなった。

調査は、まず近世の水田層及び中世のオモカス層を重機により除去する作業を4月24日より実施した。作業開始後、すぐに湧水により土層の判別が困難となった上、雨天が続き調査区に水が溜まったままでの作業となり、その結果、オモカス層以下の層まで掘削が及ぶ箇所が生じてしまった。また、石材や杭の存在も見られ、近世以降の何らかの施設と考えられたが、結局古代の道路遺構であることがその後の調査で判明した。

重機掘削後、5月15日より人力掘削を開始した。始めに調査区の壁沿いに排水用の溝を切ったが、水が引かないことから、10mグリッド沿いにも溝を切り何とか調査を行うことができるようになった。

遺構精査はシルト系堆積層上部をある程度平滑に削り試みたが、思うようにはいかなかった。5月30日には、礫や杭が見られる部分を道路遺構の可能性が高いものとして、グリッド沿いに東西方向に土層観察用のベルトを残して全体の調査を進め、途中でベルト沿いにサブトレンチにより断ち割った。その結果、礫が予想よりも深い位置で確認され、杭と複雑に絡む状況が明らかになった。6月2日には、後に井戸状遺構としたものを堅穴住居跡として検出し、さらにその周辺で土坑を確認後、精査を開始した。

6月5日には、井戸状遺構の覆土中からガラス小玉が出土したことから、周辺の覆土を全て水洗選別することとし、調査区内からの排水を利用して作業を行った。6月8日には調査区の北東で連続ピット列を検出し、23日には1号板絵が出土しているが、板絵は部分的なものであり、果たして何を描いたものなのか、本当に墨書されたものなのか疑問の多い遺物として判断していた。7月6日には検出されている井戸状遺構や道路遺構、出土したガラス小玉等の検討のため調査指導会を実施した。低湿地での堅穴住居跡の存在や道路遺構が北側へどの方向に続くのかといった課題が残されたことから、7月7日には調査区北西隅付近壁面の精査を実施し、西壁で道路遺構に続く盛土及び石材を確認することができ、また土器が集中する土器群1を検出した。

7月10日からは道路遺構の本格的な精査を開始し、12日には道路遺構が沼地状の部分で横断す



写真1 重機掘削風景（6区①）



写真2 ガラス小玉水洗選別風景（6区①）



写真3 調査指導風景（6区①西壁）

るように構築されているものと判断され、その沼地状の部分（後に河道跡と判断）の南北の層を検出し、調査区全体の様相がやっと判断される状況となった。ところが、7月18日の午後から降り続く雨によって、調査区からの排水を行っていた水路が溢れ、その逆流する水によって調査区は完全に水没し、その復旧に追われることとなった。7月27日には旧河道（SX01）の堆積層の調査によって2号板絵が、8月4日には3号板絵が出土し、既に出土していた1号板絵とともに詳細な検討可能な状況となった。

8月5日には、道路遺構の様相がある程度判明したこと、ガラス小玉の評価も固まったことから現地説明会を実施して約40人の参加があった。

8月17日・18日には、板絵の評価を行うために調査指導会を実施し、類例のない貴重な資料であることが判明し、それ以降検討のための指導会を9月4日・20日・25日と実施して様々な角度から検討を行った。

8月24日には堅穴住居跡としていた遺構を井戸であるかどうか確認するために、深く断ち割る作業を実施した。この作業で確実に井戸跡と判断されるものはなかったが、シルト系堆積層の下部に砂礫層が厚く堆積していることが確実となり、また弥生中期の土器が出土した。このことから砂礫層中に弥生土器がある程度包含している可能性を考えるようになった。8月29日には、道路遺構周辺以外の部分ではシルト系堆積層の調査がほぼ終わり砂礫層上面が検出されている状況となった。試みに一区画を掘り下げたところ予想を上



写真4 調査区の水没（6区①）



写真5 井戸状遺構の断ち割り作業風景（6区①）



写真6 現地説明会風景（2006.10.08）

回る量の土器が出土した。このことによって、当初シルト系堆積層の調査まで行うというこれまでの調査方針を転換して、砂礫層の調査を可能な限りの深さまで実施することとなった。これ以降、調査区北側は、砂礫層の掘り下げを、南側は道路遺構の調査を並行して実施することとなった。

道路遺構の調査は群衆の因化等がほぼ終了したことから、断ち割り調査を行う前の9月13日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。その後本格的に、道路遺構の断ち割りを開始したが、杭や横木が複雑に絡み合っており、それを平面・立面図を作成しながら取り上げるといった調査となり、非常に時間を要することとなった。その遺構の断ち割り作業を行う中で、9月27日には吉祥天女が描かれたと考えられる4号板絵が、28日には1号木筒の破片が出土した。特に4号板絵は記者発表の数日前に新たに出土した。10月5日に記者発表後、10月8日は現地説明会を板絵の公開も兼ねて行い約400名の参加があった。10月12日には高所作業車により調査状況の撮影を実施した。10月30日には2号木筒が、11月13日には須恵器高坏・土製支脚が、11月15日に

は3号木簡が出土した。これらの遺物で、古代の木簡は遺跡内では初めての出土となり、土製支脚もこれまでの調査で出土事例がほとんど無く、新たな知見となった。またこれらの遺物は道路盛土中や道路築造以前に旧河道(SX01)に堆積した層からの出土であり、道路築造前の様相を知る上で重要な資料となった。さらに、今後の調査で遺物の出土層位にさらに注意を促すきっかけとなった。調査期間も終盤になる中で、道路遺構の調査は複雑な杭列の図化にかなりの時間が必要となったことから、11月21日以降からは図化作業の調査補助員を増員しながら行った。12月16日には最後の土層観察用ベルトの除去作業中に既に出土していた破片と接合する1号木簡の大型の破片が出土した。

調査区は、12月中に埋め戻す必要があったことから、砂礫層の調査が終了している北側半分を先行して12月19日から埋め戻すこととした。12月20日には道路遺構盛土直下より土師器甕や須恵器坏が出土し、道路遺構の時期を検討する上で重要な遺物となった。最終的には12月22日には、全ての調査が終了した。**第8次調査(6区③)の経過** 平成19年度に調査した6区③は、前年度調査区の6区①の南側に設定した調査区であり、道路遺構の南側続きを検出することを調査の第一目標として実施した。また、昨年度の調査で道路遺構部分下の砂礫層を未調査であったことからこの部分についても調査した。

前年度の調査では、オモカス層下部の層まで掘り下げてしまった失敗によって、道路遺構築造段階の周辺地形の様相や道路遺構北側部分の状況が確認できなかった反省点から、重機による掘削はオモカス層上面までに留めることとした。

5月10日から重機によるオモカス層までの掘削を開始したが、当初予定した深さでオモカス層が検出できず、その代わりに砂礫層が確認され混乱したが、結局近世の河道跡によってオモカス層が削られていたことが後に判明した。重機掘削後、5月21日から人力掘削を昨年度の道路遺構下部に残された砂礫層の調査から実施した。この部分は砂礫をただ掘り下げる単純な調査ではあったが、南側の調査において湧水に悩まされないようにするための水溜り掘削も兼ねていた。そのため、今後の調査を円滑に進めるために、湧水に悩まされながらも限界になるまで可能な限りの調査を実施し、最終的にポンプ設置地点で標高0m付近まで掘り下げ6月11日には終了した。

6月6日からは、南側についても並行して調査を開始し、オモカス層の掘り下げを行い、卒塔婆状木製品や鉄器等が出土した。6月25日には、溜め枘を強化するため、数千の土糞を造り法面等



写真7 道路遺構の調査風景 (6区①)



写真8 道路遺構完掘後風景 (6区①)



写真9 当初の砂礫層調査風景 (6区③)

に敷き詰めたが、これ以降水中ポンプのメンテナンスや溜め枡内の砂洩いを定期的を実施するようになり、また必要に応じて土壌によって調査区壁面の強化を行いながら進めた。この年の調査では前年度以上に土壌作成作業を行い、最終的には5千個以上作成したこととなった。7月13日は排水用の溜め枡が満杯になるアクシデントがあったが、7月31日からは本格的に道路遺構の調査を開始し、8月9日から石材の図化を始めた。8月16日からは調査区の西側のシルト層上部の掘り下げを行い、溝状遺構を検出し、土器が集中する箇所を確認することとなり、最終的には複雑に切り合う土坑群であることが判明した。

道路遺構は上面の調査が一段落したことから、9月4日に調査指導会を開催し、それを受けて9月13日から一部立ち割を行い下部の状況を検討するとともに、9月19日にラジコンヘリによる空中撮影を実施した。この段階で9月24日には現地説明会を開催し雨天にも関わらず80名の参加を得た。10月1日には当センター職員による現地研修会を開催し、調査方法・検出した遺構の解釈等で有益な助言を得た。その後、道路遺構の下部に小礫を敷き詰めていることを確認し、その検出作業及び図化を10月3日から開始した。その一方で調査区の西側はシルト層を掘り下げ砂礫層上面を検出できたことから、10月11日から砂礫層の調査を先行して開始した。道路遺構の礫群のほぼ全容が確認できたことから10月12日に写真撮影し、10月17日及び22日には調査指導会を開催した。11月7日には道路遺構の下部礫群の図化が終了し、先行して調査を行っていた砂礫層の調査が溜め枡と同レベルに近づき困難となったことから、溜め枡をさらに深くする作業も実施した。11月15日には、礫群の取り上げが終了し道路遺構構築直前の状況を写真撮影し、そのさらに下部を調査することとなった。

道路遺構の下部は当初は分からなかったが、大きく落ち込みがあり、その中から礫や杭列を検出した。11月19日からは検出した杭列の図化等を行いながら掘り下げを進め、12月16日には、落ち込み内の礫や杭列の検出状況の写真撮影を実施した。その後12月14日には完掘した。その後砂礫層の調査を行い12月20日に調査区全体の完掘写真を撮影し21日に完全に終了した。

遺物整理・報告書作成作業 遺物の洗浄・注記・実測の一部は現地調査と並行して実施した。平成20年度から埋蔵文化財調査センターにて本格的な報告書作成作業を実施し、遺物の分類・実測、遺構・遺物のトレース、遺物写真撮影、割り付け、原稿執筆を行った。特に遺物の分類で、砂礫層出土の土器については、分類後に破片数のカウント作業を実施し、全体の時期的な傾向を把握することに努めた。なお、遺構・遺物のトレースは基本的 Adobe 社の Illustrator を使用し、遺物・遺構ごとに Illustrator により図版を作成した後、Adobe 社の InDesign を用いて割付作業及び原稿執筆を行った。



写真10 道路遺構下部杭列調査風景 (6区③)



写真11 砂礫層調査風景 (6区③西側)

第4章 砂礫層の調査

砂礫層の調査では縄文時代早期の繊維土器から弥生時代後期の遺物を確認した。これらはこれまでの山持遺跡の調査では確認されなかった時期の遺物を含んでおり、周辺部の様相を検討する上での新たな資料を提供することとなった。また、弥生時代後期までは斐伊川の堆積作用を受ける場所であったことが判明した。

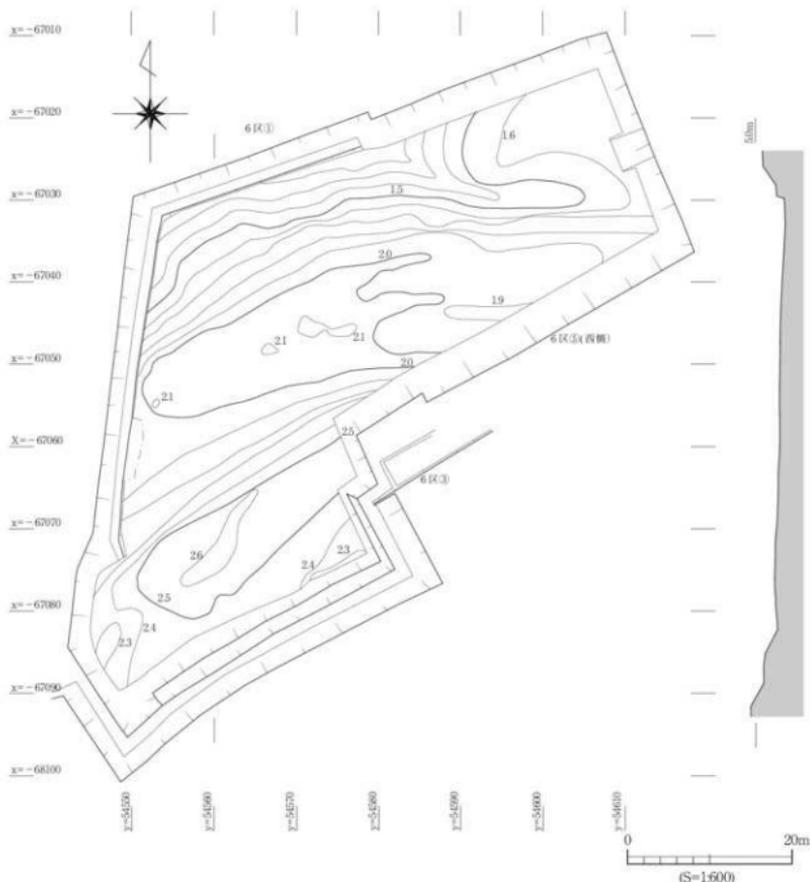
第1節 調査の概要

砂礫層の調査の目的は、その層中に含まれる遺物の可能な限りの採取と砂礫層上面の地形情報を得ることにあつた。現地調査では上部のシルト系堆積層を除去した段階で、層上面のコンター図を

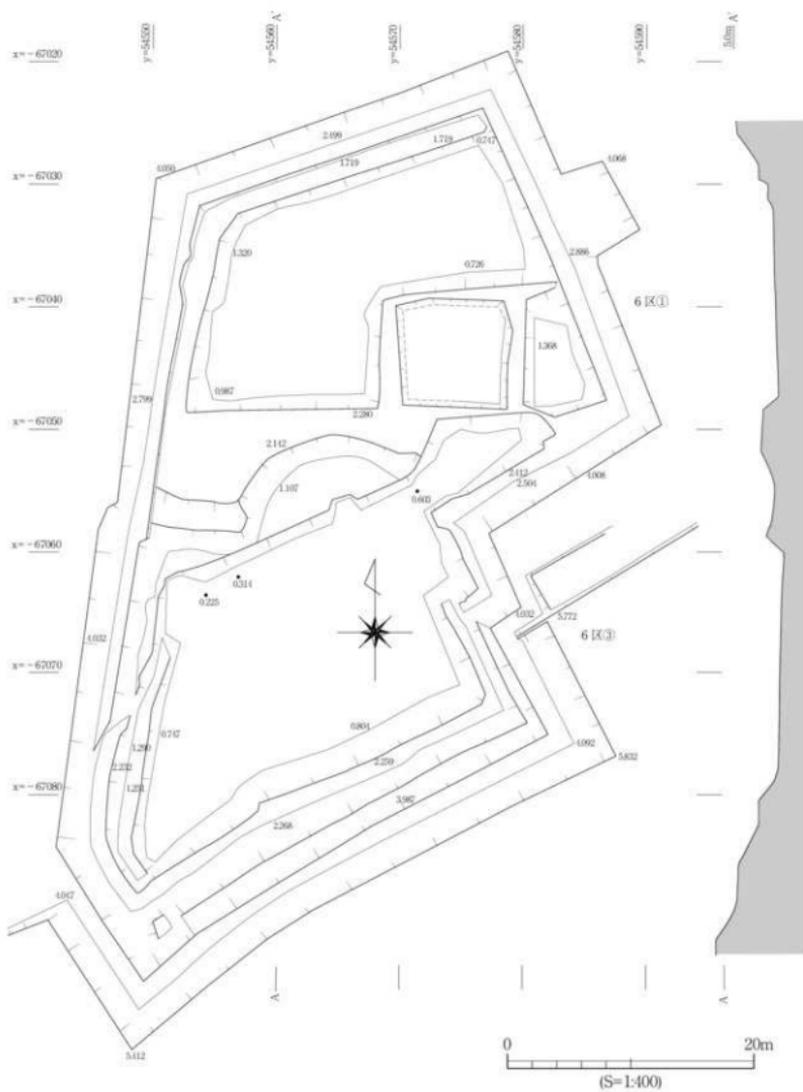


第8図 山持遺跡6区砂層上面検出段階図

作成した。北側の6区①は現地調査時には25cmコンターで作成していたものを10cmコンターに修正したものを合成している。その結果が第8図であるが、上部の遺構の掘削による影響が残っていることから、第9図にて復元した。砂礫層上面の地形は大きくいうと南側が高く北側に向かって低くなっている。北側の標高が1.2mで南側では2.6mと比高差1.4mとなっている。この上面の地形情報がどれだけ有意なのか検討を要するが、斐伊川の堆積作用によって調査区の南側部分が自然堤防状の高まりとなったものと考えられる。これ以降低地となった北側を中心にシルト系堆積層が順次堆積していったものと考えられる。砂礫層の調査を終えた段階の状況は第10図に示したとおりであり、深いところで標高0m付近まで掘削したが、砂礫層は尽きることがなかった。おそらくさらに数mは厚く砂礫層が堆積しているものと推測される。



第9図 山持遺跡6区砂礫層上面検出段階復元図



第10图 山持遺跡6区発掘最終段階図

砂礫層中の遺物は、上層の細砂部分では皆無に等しく、途中の砂利を多く含む層以下から出土している。基本的に細砂部分では遺物が少なく粗砂・礫層部分で遺物を多く含む傾向があった。また、遺物は後の整理によって縄文時代早期～弥生時代後期までの時期のものが確認されているが、出土状況は、下層に古いものが上層に新しいものが層位的に出土するものではなかった。

出土した遺物の整理の目的は、砂礫層の堆積した時期すなわち最も新しい時期の遺物は何かとといったことを主眼に検討した。また、各時代・時期の遺物が存在している上に、朝鮮半島や北部九州系の土器も存在していることから、全破片を分類検討することとし、分類された型式の数量的な検討を行うために点数をカウントした。これは、各時期のものが混在する包含層であることから必要な作業かどうか悩んだのではあるが、山持遺跡では殆ど出土していない縄文時代～弥生時代中期の遺物があることや、流された遺物の本来の周辺部の遺跡の様相を把握するためにも必要と考えたからである。ただこれは、調査担当者の能力の問題もあり非常に時間を要した。

出土した遺物の状況を観察すると、縄文土器は全般的に表面が摩耗しているものでかなり流された影響が見られ、文様等の把握に非常に注意が必要であった。また、弥生土器は縄文土器に比べて良好に残っており、特に後期の土器が最も良好に残っており、砂礫層の堆積時期がこの時代であったことと矛盾しないものであった。

出土した遺物の詳細については、次節以降順次述べることにする。

第2節 縄文土器

分類の方法 縄文土器の分類については、まず弥生土器の破片と分類した。縄文土器は明らかに弥生土器との摩耗度合いが異なり、それを基準におこなった。その中で、表面の文様や調整が判別する破片について、これまでの型式分類に沿った形で細分した⁽¹⁾。

早期の土器等 (第11図) 1は外面に方形に近い楕円状の押型文が施される。2はあまり他のものとは印象が異なる胎土で口縁部内面に刻目が入る。2は当初草創期に遡る可能性も考えていたが、中期に位置付けることも不可能ではないものであり、時期的な位置付けが難しい。

早期の土器 (第11図) 3～5は繊維土器である。いわゆる菱根式に相当する土器である。

前期の土器 (第11図) 6は口縁端部に刻目が施される。やや亜流だが羽島下層Ⅰ式に相当すると考えられる。

7は隆帯が見られ、8～10は押し引の刺突文が施される。7～10は西川津式に相当すると考えられる。

11～14は2段から3段の爪形文が施される。羽島下層Ⅲ式に相当すると考えられる。

15～19は押し引沈線文が施され、20は2段の刺突文が施される。これらは月崎下層式に相当するものである。

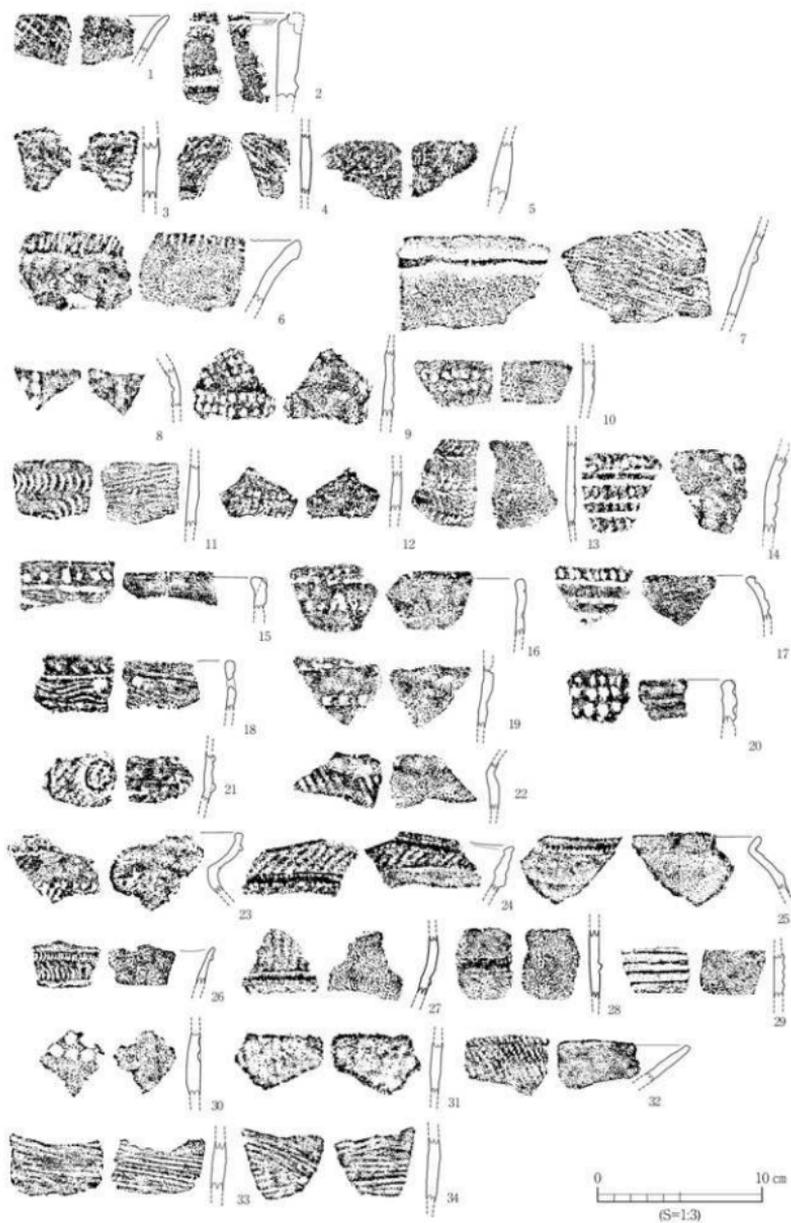
21と22は縄文が施され、21は隆帯にも縄文が付される。里木Ⅰ式に相当すると考えられる。23～28は隆帯を貼り付けその上から押し引を施すものであり、大蔵山式に相当すると考えられる。

29は4条の微隆帯が施されるもので位置付けは難しいが、轟B式に相当する可能性が考えられる。

30～34は、相当する型式は不明であるが、前期に属すると考えられる一群である。

中期の土器 (第12図) 1は爪形文が施されており船元Ⅰ式に相当すると考えられる。2は斜行す

(1) 縄文土器の分類及び編年観は、小林達雄編 1989a・b・cを参考とし、当センター・柳浦俊一の協力を得て分類した。



第11图 山持遺跡6区砂層出土繩文土器実測図(1)

る押し沈線文が施され船元Ⅱ式に相当する土器と考えられる。3と4は縄文地に半截竹管による連弧文を施すもので船元Ⅲ式に相当する土器と考えられる。

5～9は船元式のいずれかに相当する土器と考えられるもので、5～8は縄文地、9は隆帯の下に刺突文が施されている。

10～13は、半截竹管による波状文が施され、11、12以外はその下方に沈線文があるもので里木Ⅱ式に相当すると考えられる。14は刺突文が横・縦位に施され、15は楕円区画文が施され、16は燃糸文が施される。これら14～16も里木Ⅱ式に相当すると考えられる。

17は楕円区画文と沈線文が施され里木Ⅲ式に相当すると考えられる。

18はRLの縄文地の土器片であり中期に属すると考えられる。

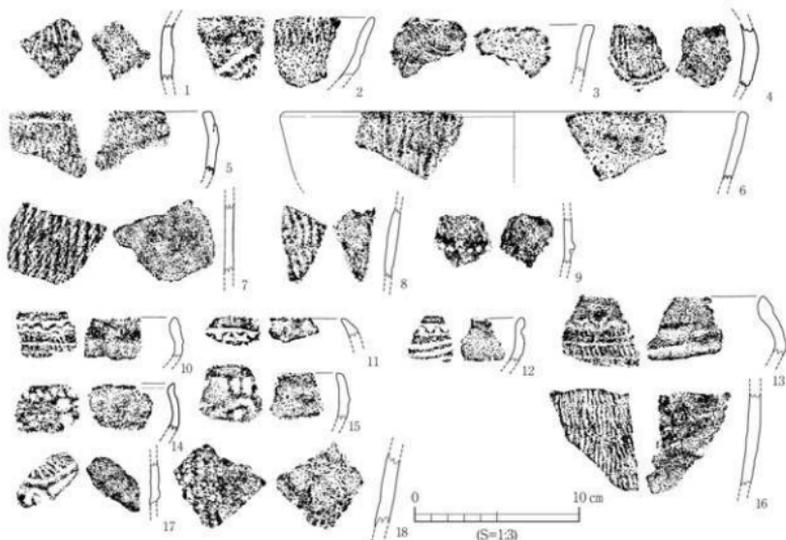
後期の土器（第13図） 1は円形の刺突文が施され、2・3は沈線文が施され、4・5は磨消縄文が施された破片で中津式に相当する。

6は縄文地に沈線文が施されており、五明田式に相当すると考えられる。

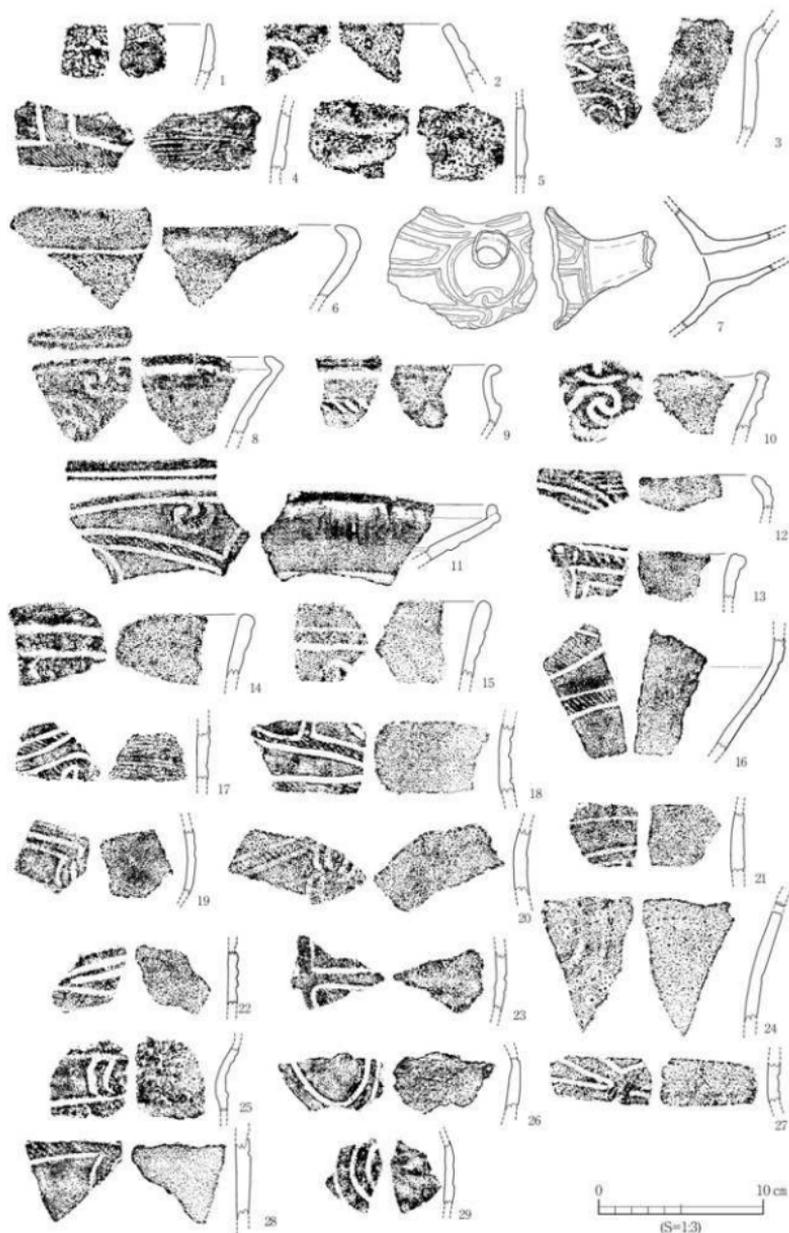
7～29は暮地式に相当すると考えられる土器である。7は注口土器で沈線文が施される。8～15は口縁部の破片であり、沈線文や磨消縄文が施されたものだが、9は屈曲部に刻目を施すものである。13は口縁部上端に円形刺突が見られる。16～21・23・24・27・28は磨消縄文が施される破片、22・25・26・29は沈線文が施される破片である。

後期の土器（第14図） 1は沈線文が入る土器であり、あまり見られない文様である。位置付けが難しいが九州で見られる鐘崎式である可能性を考えておきたい。

2は沈線文が見られる底部、3は磨消縄文が施される破片であり、中津～暮地式あたりに位置付けられると考えられる。4は口縁端部に縄文が施される磨消縄文の土器で中津～五明田式に相当す



第12図 山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(2)



第13图 山持遺跡6区砂層出土繩文土器実測図(3)

る。5は沈線文が施される口縁部で五明田～暮地式に相当する。6～8は沈線文が施され、暮地～布勢式に相当する。

第14図9～21は布勢式に相当すると考えられる土器である。9～14・16は口縁上部部に沈線文が施される深鉢であり、15は把手が付き口縁上部部に連続する刺突が入る。9は突起、10・12は環状の突起が付くものである。17は口縁部に1条の沈線と刺突が施される浅鉢である。18・21は沈線文、19・20は磨消縄文が施される。21の沈線文の末端は刺突となっている。

後期の土器 (第15図) 1～6は崎ヶ鼻Ⅰ式に相当すると考えられる土器である。1は入組文に縄文が入り、2・3は沈線文が施される。4は口縁部上面に沈線と刺突文が入り、5は口縁上部部等に刻目が入る。6は貼付突帯の上に円形の刺突文が入る。

7～18は崎ヶ鼻Ⅱ式に相当すると考えられる土器である。7～9は沈線文が施され、8は内面に



第14図 山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(4)

円形文が、9は口縁部に縄文が施される。10は口縁端部に刻目が入り胴部には摩滅のため不明確だが縄文が施されていると考えられる。11は口縁上面に複合鋸歯文が施される。12は口縁端部付近に縄文が入り、13は口縁内面が肥厚し指頭圧痕が目立つ。14は沈線文が口縁内面に施される。15は沈線文と縄文が施される。16は屈曲部に、17は口縁部に刻目が入る。18は羽状縄文が施される。19は渦巻文が施された破片、20は沈線文が施された破片で布勢〜崎々鼻式あたりに相当する



第15図 山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(5)



第16图 山持遺跡6区砂層出土繩文土器実測図(6)

と考えられる。

21～27は沖文式に相当すると考えられる土器である。21は沈線文が施され、23は縄文が施されている。24は内面に貼り付けて肥厚させたもので指頭圧痕が目立つ。25・26は沈線文と縄文がセツトに施され、27は縄文が施された破片である。

後期の土器 (第16図) 1は4条の沈線文が施され、磨消縄文の可能性があるので、2は結節縄文が施される。これらは権現山式古段階に相当するものと考えられる。

3～9は権現山式新段階に相当すると考えられる土器である。3～5は沈線文と刺突文が施され、6は沈線文と磨消縄文が施される。7は頸部に2条の沈線文が入り、肩部に円形の突起が付される。8は注口で、9は沈線文が入る破片である。

10・11は権現山式あたりに相当すると考えられ、10は押引沈線文が施され、沈線の末端は刺突となる。11は沈線文と列点文が入る。

12は凹線文が施されたもので、布勢式前後に相当するものと考えられる。

13～21は凹線文が施されたもので宮滝式に相当する土器と考えられる。13は口縁上端部に刺突の入る区画があり、14は円形の貼付帯が見られる。16は赤彩が見られる口縁部である。20は凹線文に加えて刺突文が入る。

22・23は口縁部に刻みが入る口縁部で後期～晩期の粗製土器と考えられる。24は壺形土器で元住吉山式あたりに位置付けられると考えられる。25～28は後期～晩期の粗製土器の口縁部、29は後期末～晩期初頭の浅鉢である

晩期の土器 (第17図) 1～12は滋賀里Ⅱ式に相当すると考えられる土器である。1～4は口縁部が屈曲するタイプのもので、3・4には沈線文が入る。5は2条沈線の山形文が施され、6は5条の沈線文が入り、7は口縁部が外に開く。8～10は沈線文が施された破片で、8は2条沈線の間に刺突文が施され、9は5条の沈線文、10は1条の沈線文が見られる。11は沈線文と円形の押圧文が施され、12は弧状文が施される。

13～21は篠原式に相当すると考えられる土器である。13・16は口縁部内面が肥厚し、14は口縁部に突帯が付されている。15は口縁部内面が凹む。17・18は口縁部部に刻みが入り、19～21は口縁部が長く直立気味のもので、20には肩部に沈線文が入る。

22～24は沈線文が入る土器で、谷尻式に相当すると考えられる。22は横方向の沈線文、24は縦方向に沈線文が施される。23は半裁竹管による爪形文と浅い沈線文がはいる。

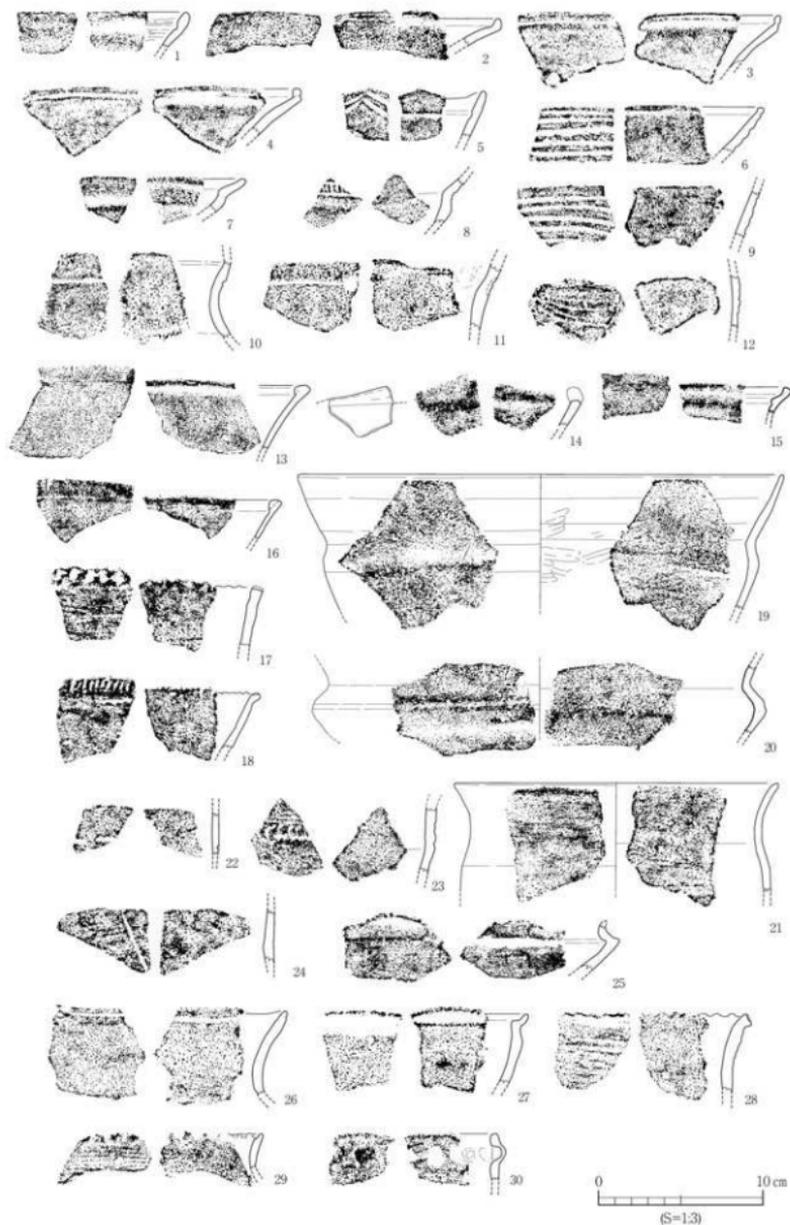
25は口縁部が短く内傾して屈曲するもので篠原式～谷尻式に相当するものと考えられる。

26～28は晩期に属すると考えられ、26内外面に沈線が入り、28は端部に刻みが施される。

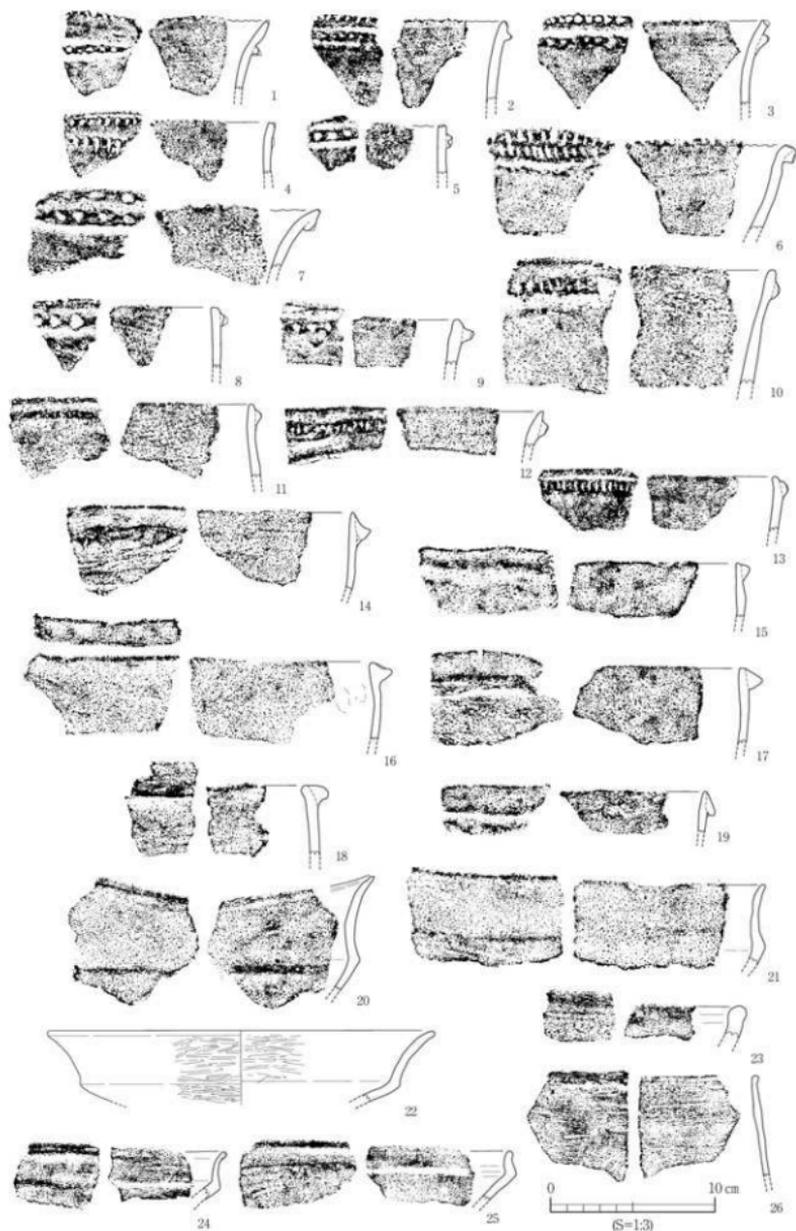
29～30は孔列文が施される土器である。29は口縁部部に押圧によって孔列文が入り、30は口縁部部よりやや下がった位置に孔列文が施される。

晩期の土器 (第18図) 1～7は突帯文が施された深鉢であり、口縁部と突帯の両者に刻みが入れたものである。1～5は口縁部より下がった位置に突帯が付され、6・7は口縁部部に接するように突帯が付されており、6・7がやや新しい様相とみなされる。これら1～7の突帯文土器は、おおよそ前池式に相当するものと考えられる。

8～13も突帯文が施された深鉢であるが、口縁部部には刻みがなく突帯文のみに刻みが見られるものである。全体的に口縁部よりあまり下らない位置に突帯文が付されている。これらはおお



第17图 山持遺跡6区砂層出土繩文土器実測図(7)

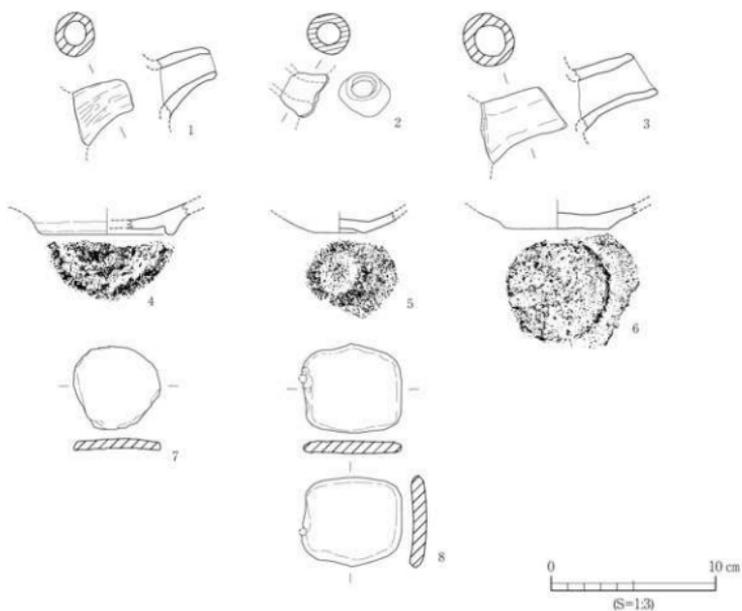


第18图 山持遺跡6区砂層出土繩文土器実測図(8)

よそ沢田式に相当するものと考えられる。

14～19は口縁部、突帯文ともに刻目をもたない土器である。いずれも口縁端部に接するように突帯文が付されており、出土している突帯文の中では最も新しい一群と考えられる。突帯文が退化した最終段階の時期のものと考えられる。

そのほか (第19図) 1～3は注口土器の注口部分であり、明確に位置付けることはできないが、おおよそ後期～晩期に属するものと考えられる。4～6は底部の破片である。7・8は土器を転用した土製円盤である。8は側面に孔が空いていた可能性がある。



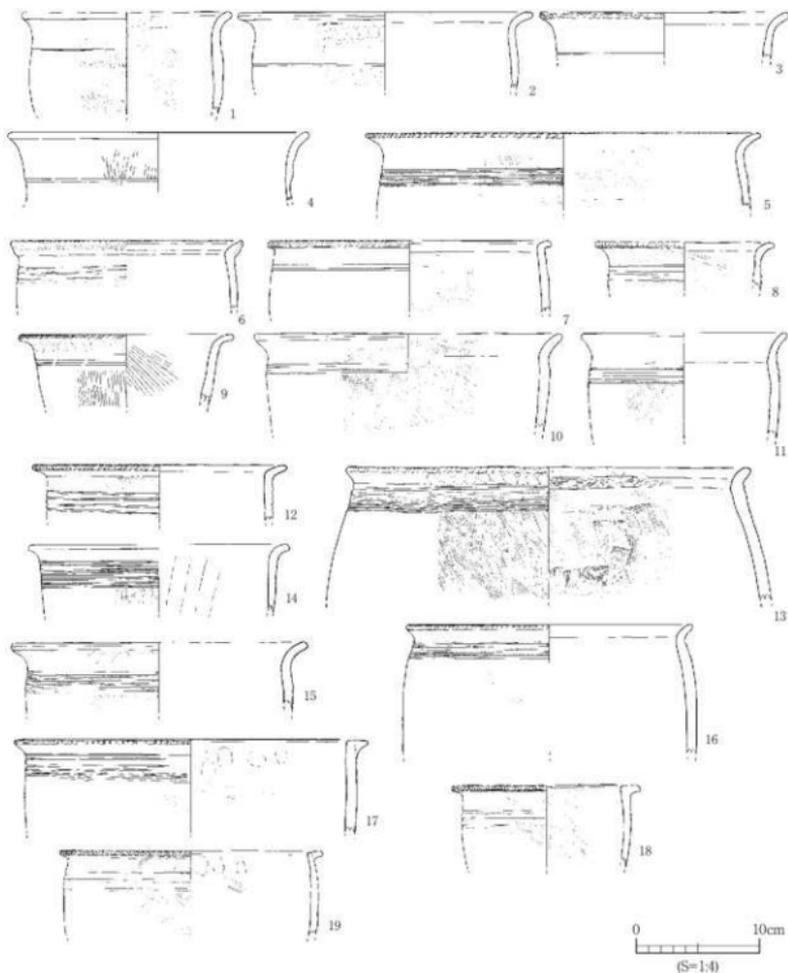
第19図 山持遺跡6区砂層出土縄文土器実測図(9)

第3節 弥生土器⁽¹⁾

I様式の甕 (第20図) 1～18はI様式に属すると考えられる甕であり、胎土に粗砂粒子を多く含んでいる。1～4は頸部付近に1条のヘラ描沈線文が入るが、4はやや段状になる。

5～11は頸部付近に2～3条のヘラ描沈線文が入る。これらの2～3条の沈線文が入る個体の口縁部には刻目が入るものが比較的多く見られる。

(1) 弥生土器の分類及び編年観については松本1992を参考とした。



第20図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(1)

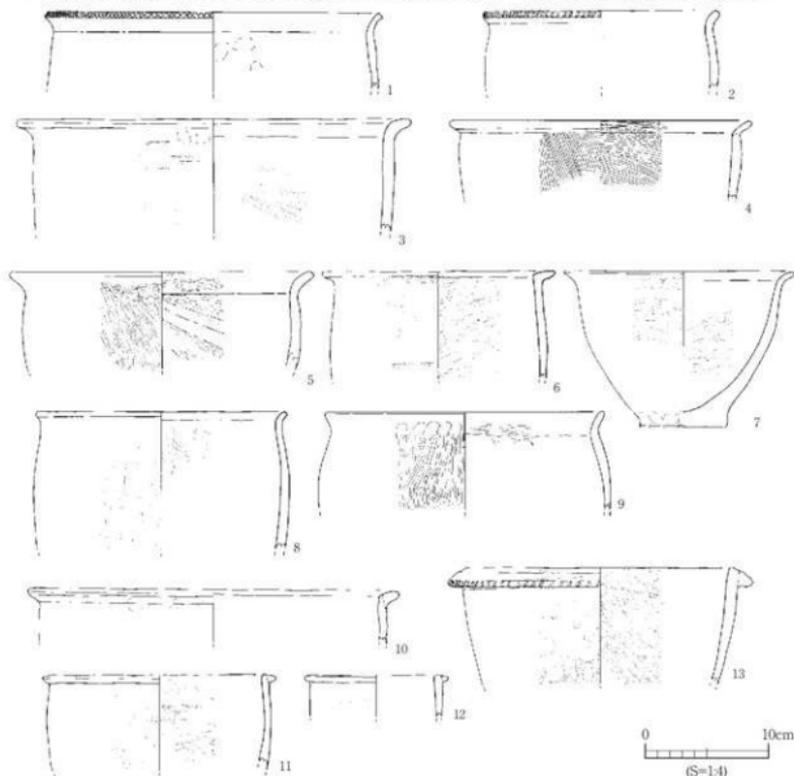
12～16は4条以上の多条のヘラ描沈線文が入る土器である。これらも口縁端部に刻目が入る個体が多く見られる。

17～19は口縁端部を折り曲げて成形したものではなく、貼り付けて逆L字状にしたものである。頸部付近には3条程度のヘラ描沈線文を施している。

I様式の甕 (第21図) 1～13は胎土中に粗砂粒子を多く含み、I様式に属すと考えられる土器である。1～9は頸部付近に沈線文を施さない無文のものである。口縁部の屈曲形態は2のようにあまり屈曲しないものから6のように逆L字状に屈曲するものなど様々である。また、甕と分類しているが7のように鉢として考えた方がよいものも含まれている。

10～13も頸部付近に沈線文を施さない無文のタイプであり、貼り付けた口縁部が逆L字状になるものである。13のように口縁端部に刻目を施すものが希にある。

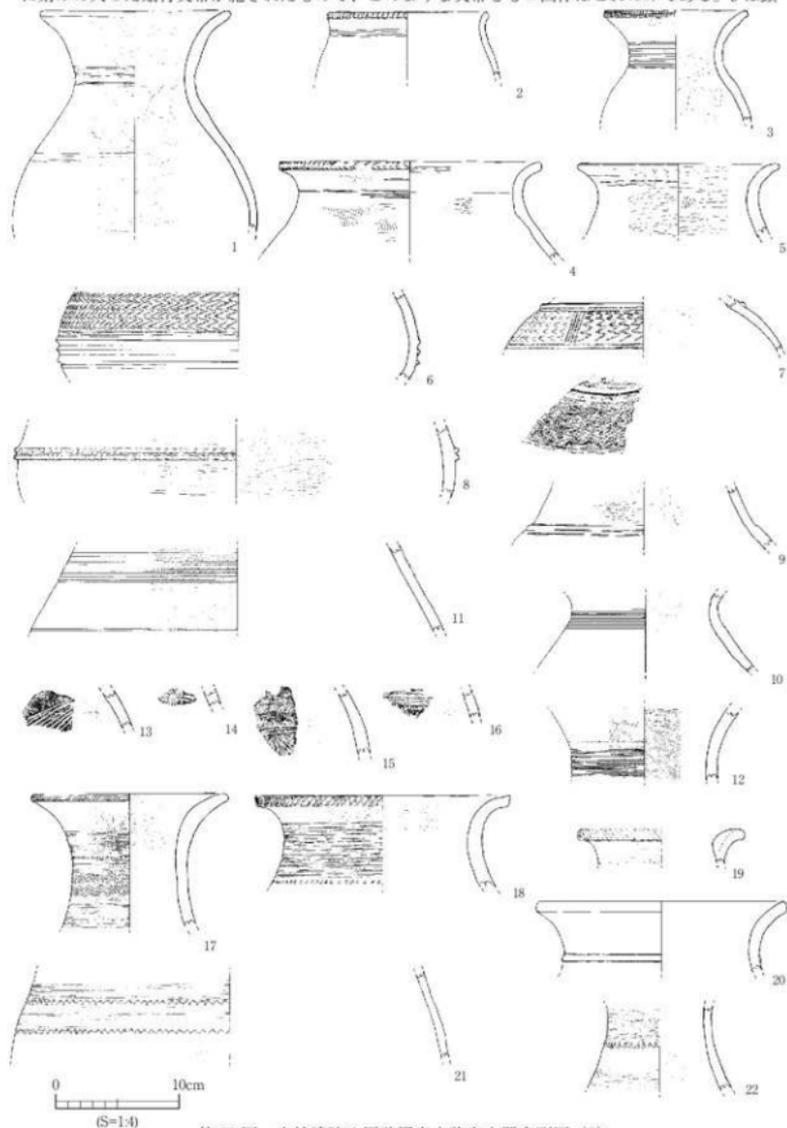
I様式の壺 (第22図 1～12) I様式に属すと考えられる壺で、ある程度全体の形が分かるものは少ない。1は頸部と胴部に2条以上のヘラ描沈線文を施す。2は壺というよりも甕とした方がよいと思われるが頸部に2条の沈線文を施す。3は頸部に6条のヘラ描沈線文を施し1よりも新しい



第21図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(2)

様相をもつ。4は頭部に3条の沈線文を施し口縁部に羽状の刻みが入る。5は無文のものである。

6～12は口縁部のない胴部の破片である。6・7は突帯と羽状文を施したものである。8は羽状に刻みの入った貼付突帯が施されたもので、このような突帯をもつ固体はこれのみである。9は頭



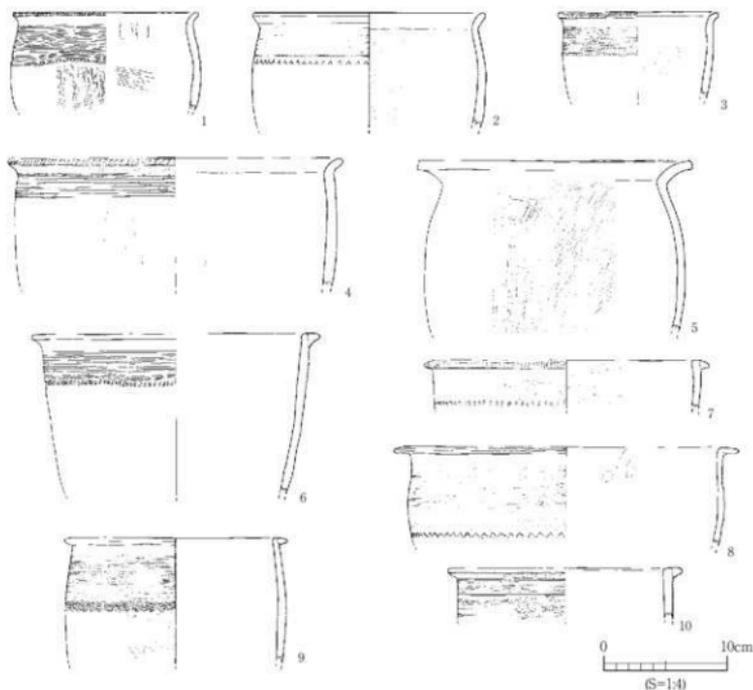
第22図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(3)

部と胴部の境が段状になるものでやや古い様相をもつものである。10から12は頸部に多条のヘラ描沈線文を施すもので新しい様相をもつ壺の破片である。13～16は文様が施された胴部片である。**Ⅱ様式の壺(第22図 17～22)** クシ描の沈線文を施す個体をⅡ様式に属すと考えた。これらの胎土はⅠ様式としたものと同じように粗砂粒子を多く含むが、色調はⅠ様式と異なり明るいオレンジ色をしたものが多い。17・18は多条のクシ描沈線文と円形や三角形といった刺突文をセットに施しており、口縁端部にも文様が入る。19は小片で分からないが17・18と同様の文様構成をとるものと考えられる。20は頸部に沈線文を施すというよりは削りだして突帯条にしているものであり位置付けは難しいが口縁部の形状や胎土からⅡ様式に属すものと考えた。21・22は多条の沈線文と三角形の刺突文が施される破片である。

Ⅱ様式の甕(第23図) 1～10はⅡ様式に属すると考えられる多条のクシ描沈線文を施す甕であるが、5は無文のもので胎土・色調からⅡ様式に属すものとして掲載している。

1～5は口縁部が外側に若干屈曲するタイプのもので、5以外は口縁部が短い。口縁端部に刻目を入れるものが多いが、2のように入らないものも見られる。

6～10は貼り付けた口縁部が逆L字状の形態となるもので頸部には多条の沈線文を施すが、7は刺突文を施すのみである。



第23図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(4)

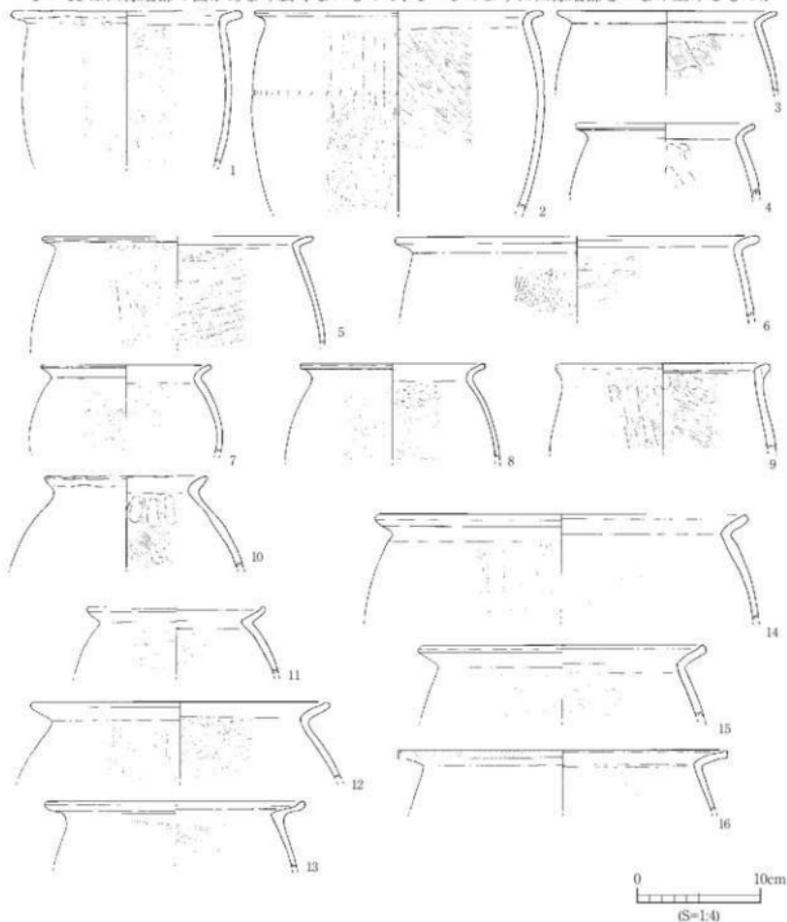
Ⅲ様式の甕 (第24図) 1～16はⅢ様式に属すと考えられる甕である。これまで述べてきたⅠ・Ⅱ様式に属すと考えられる土器と比べて、胎土中に大型の粗砂粒子を混和しているものはない。

1～10は口縁端部をまるくおさめ、口縁長が短く直線的なタイプのものであり、胴部はあまり張らない。

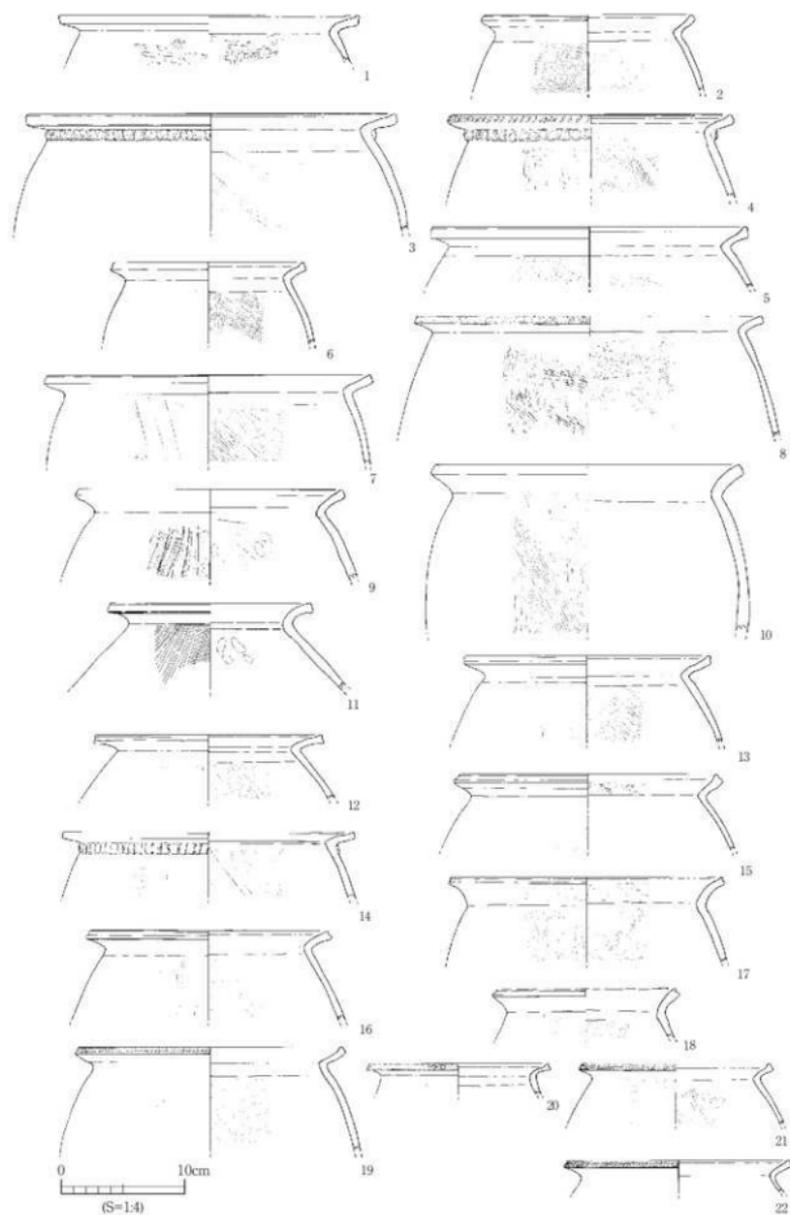
11～16は口縁端部を丸くおさめ、口縁長がやや長くなり端部を若干つまみ上げるタイプのものである。口縁は屈曲が強く頸部内面の稜が明瞭なものが多い。

Ⅲ様式の甕 (第25図) 1～22はⅢ様式に属すと考えられる甕で、口縁端部に面をもつタイプである。

1～11は口縁端部の面があまり広くないもので、1～9のように口縁端部をつまみ上げるものが



第24図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(5)



第 25 图 山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (6)

多い。3・4のように頸部に指頭圧痕文帯をめぐらすものも見られる。

12～18は口縁端部の面はあまり広くないが、凹線状に1条の沈線が入るタイプのものである。

12～16のようにほとんどのものは口縁端部をつまみ上げている。

19～22は口縁端部に凹線状に1条の沈線が入り、さらに刻目が入るものである。ほとんどのものが口縁端部をつまみ上げている。また、20のように円形浮文によって装飾が施されたものもある。

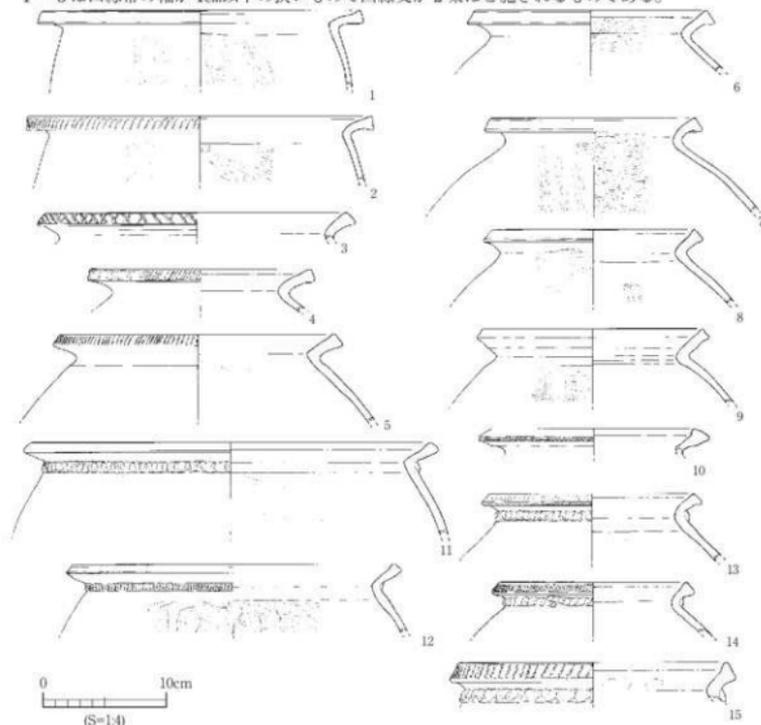
Ⅲ様式の甕 (第26図) 1～15は口縁端部に幅1cm以上の幅広の面をもつ甕である。

1～10は端部に幅広の面をもち、頸部に指頭圧痕文帯等の装飾がないものである。1・2のように胴部が張らないものもあるが、3～9のように胴部が張るタイプのものが多い。広がった口縁端部には2～5のように刻目等の文様が入るものや無文のもの両者がある。なお、10はやや異形のものであるがこのグループに分類した。

11～15は幅広の口縁端部で頸部に指頭圧痕文帯等が廻るものであり、ほとんどのものが口縁部に刻目が入る。

Ⅳ様式の甕 (第27図) 1～18はⅣ様式に属すと考える甕で口縁部は下垂しないで凹線文が2条以上入るものである。

1～3は口縁部の幅が1cm以下の狭いもので凹線文が2条ほど施されるものである。



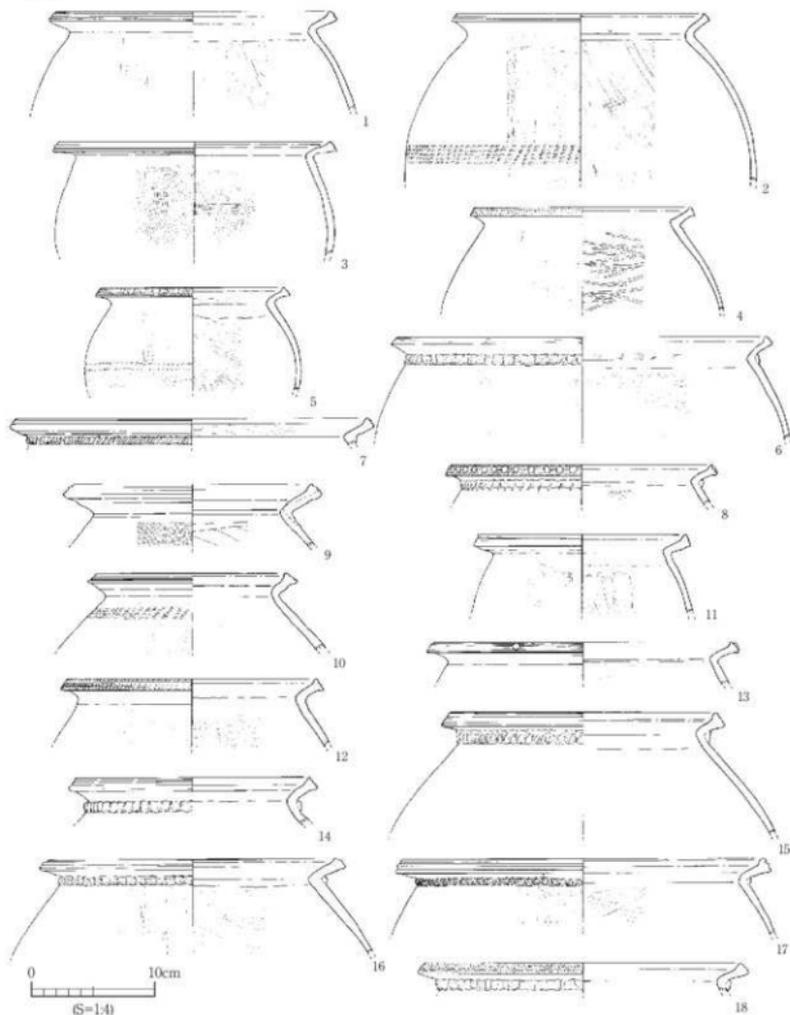
第26図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(7)

4・5は口縁帯の幅が狭く、凹線文が2条ほどで刻目が施されるものである。

6・7は口縁帯が狭く凹線文が2条ほどで、頸部に指頭圧痕文帯等が施されるものである。

8は口縁帯が短く凹線文と刻目が施され、頸部には指頭圧痕文帯が施されるもので、類例はこれのみである。

9～11は口縁帯が1～1.3cmとやや幅広くなったもので、凹線文が2～3条ほど施されるものである。

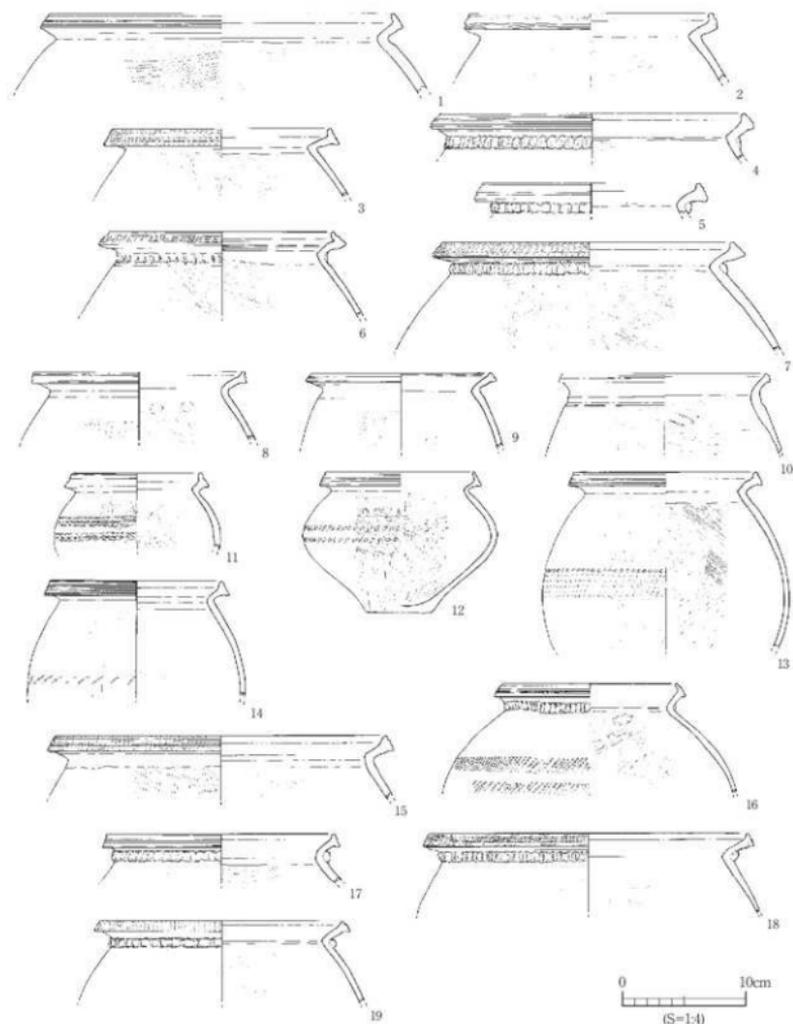


第27図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(8)

12・13は口縁帯がやや幅広くなったもので、凹線文が2～3条施され、刻みや円形浮文等が加えられたものである。

14～17は口縁帯がやや幅広くなり凹線文が2～3条入り、頸部には指頭圧痕文帯等が施されるものである。

18は口縁帯がやや幅広く、凹線文が2～3条と刻目が入り、頸部には指頭圧痕文帯等が施され

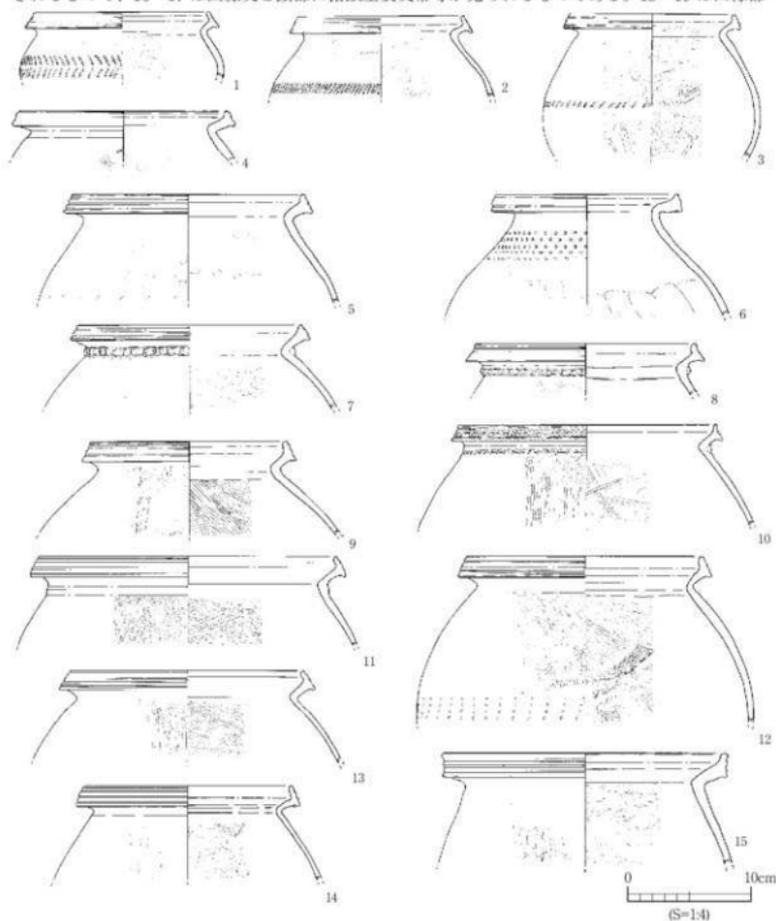


第28図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(9)

るタイプで類例は少数である。

IV 様式の甕 (第 28 図) 1～7 は口縁部は下垂しないもので、口縁帯の幅が 1.5cm と広いものであり、凹線文が 3 条ほど施されたものである。1・2 は口縁部に凹線文のみが施されるものであり、事例は少ない。3 は凹線文と刻目が施されたものである。4・5 は凹線文と頸部に指頭圧痕文帯等が施されるものである。6・7 は口縁部に凹線文と刻目、頸部に指頭圧痕文帯等が施されたものである。

8～19 は口縁部が下垂するもので、凹線文が 2～3 条施されたものである。8～10 は口縁帯の幅 1cm 以下の狭いもので、凹線文のみが施されたものである。11～14 は口縁帯の幅 1～1.3cm とやや狭いもので凹線文のみが施され、胴部最大径付近に刺突文が見られるものが多い。15 は刻目も施されるもので、16・17 は凹線文と頸部に指頭圧痕文帯等が見られるものである。18・19 は口縁部



第 29 図 山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (10)

に凹線文と刻目が入り、頸部に指頭圧痕文帯が施されるものである。

Ⅳ様式の甕 (第29図) 1～6は口縁部が下垂するもので口縁帯幅1.5cmとやや広いものであり凹線文が3条ほど施される。7・8・10は口縁部が下垂しないもので口縁帯幅1.5cmとやや広いものであり、凹線文が3条ほど施される。7・8は頸部に指頭圧痕文帯等がめぐり、10は口縁部に刻みもはいる。

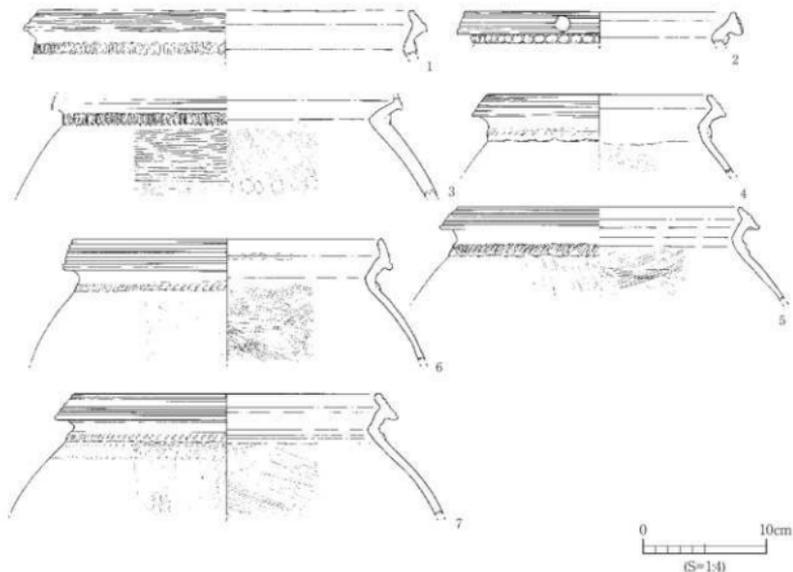
9・11～15は口縁部が下垂し口縁帯幅1.8～2cmと広いもので凹線文が4条施されるものである。

Ⅳ様式の甕 (第30図) 1～5は口縁部が下垂し口縁帯幅1.8～2cmと広いもので凹線文が3～5条施され、頸部に指頭圧痕文帯等が施されるものである。6・7は口縁部が下垂し口縁帯幅2.5cm程と最も広いもので、凹線文も5条と多条なものである。頸部には指頭圧痕文帯等が施される。

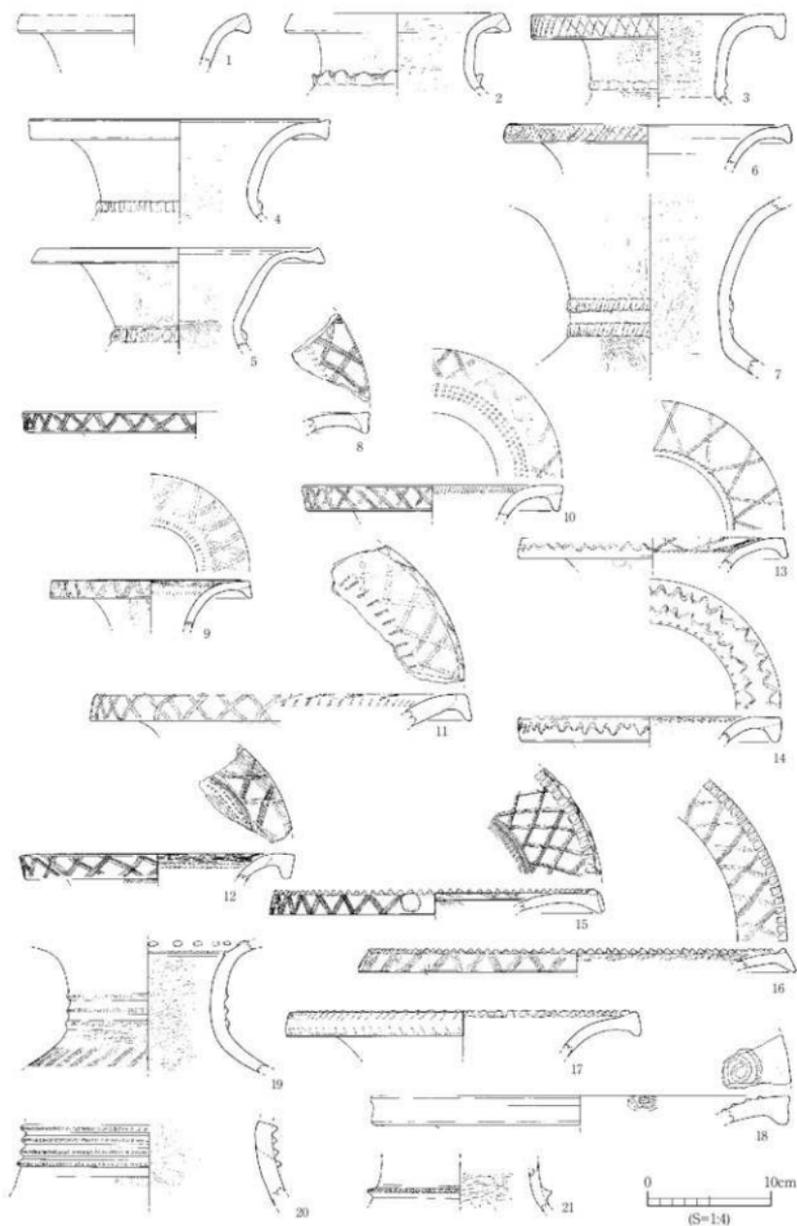
Ⅲ様式の広口壺 (第31図) 1～21は口縁部に凹線文が施されていないことからⅢ様式に属すと考えられた広口壺である。1～7は口縁部内面が無文のもので、頸部に幅広の圧痕文帯が施されるタイプのものである。口縁部は無文のものがほとんどであるが、3・6のように簡単な斜格子文が入るものもある。また、口縁端部が下方に拡張するものが多い。

8～21は口縁部及び口縁部内面に斜格子文や波状文が入るものである。口縁部から頸部にかけて良好に分かる個体がないが、19～21のように刻みが入る突帯文が施されているものと考えられる。口縁端部は下方に拡張するものがほとんどである。18は口縁端部の形状がやや異形のもので内面には渦巻状の刻目が入った突帯を貼り付けるものである。

Ⅳ様式の広口壺 (第32図) 1～18は口縁部に凹線文が施されていることからⅣ様式に属すると考えられる広口壺である。

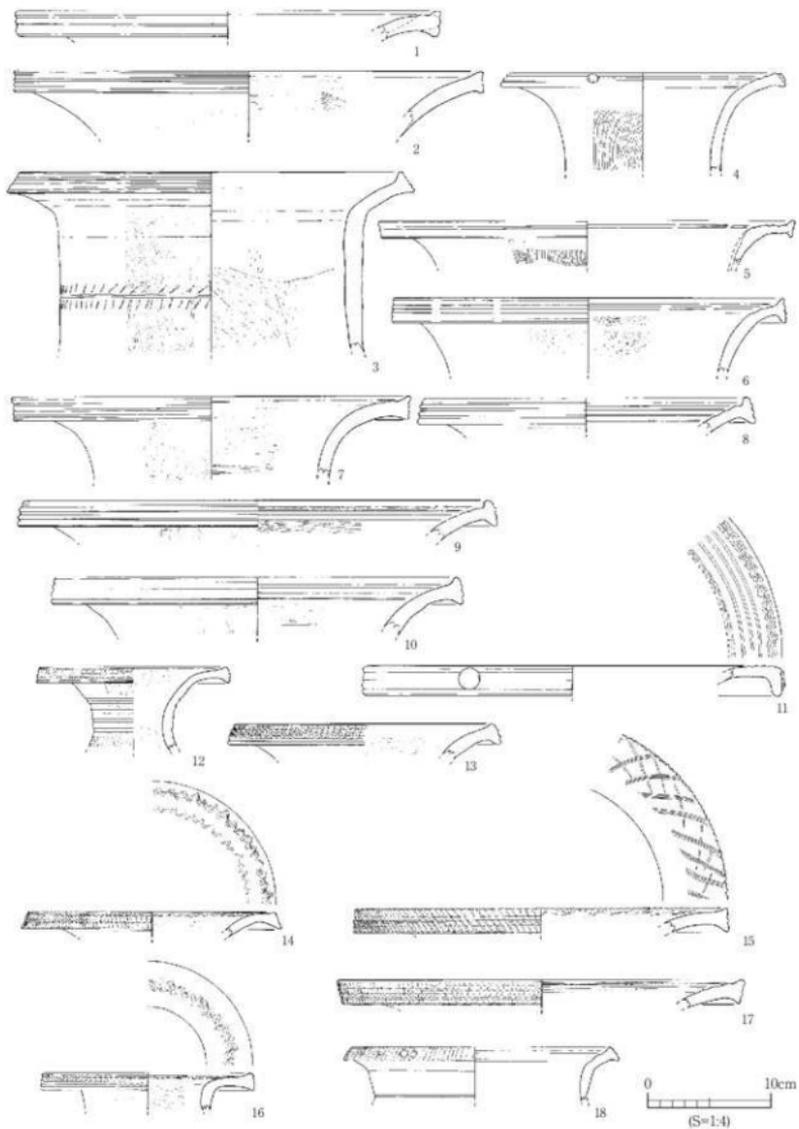


第30図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(11)



第31图 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(12)

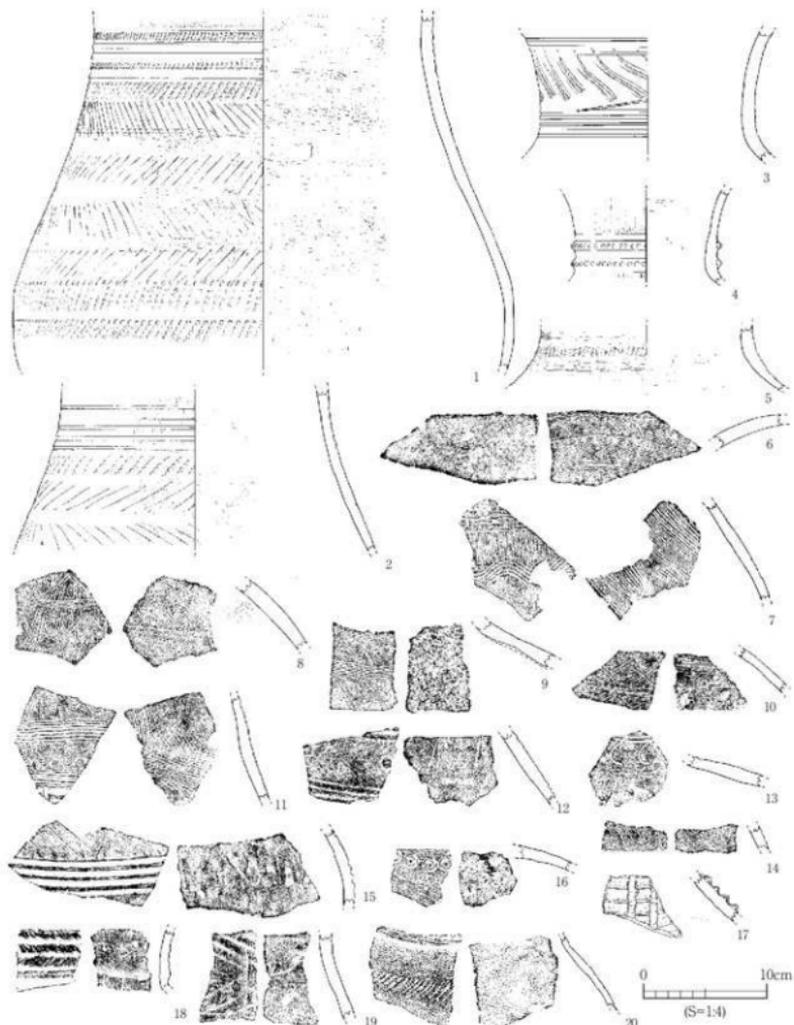
1～3は口縁部に凹線文を施し内面は無文のタイプである。4～10は口縁部とその内面にも凹線文を施すタイプである。11のように希ではあるが内面に波状文が組み合わされるものもある。12



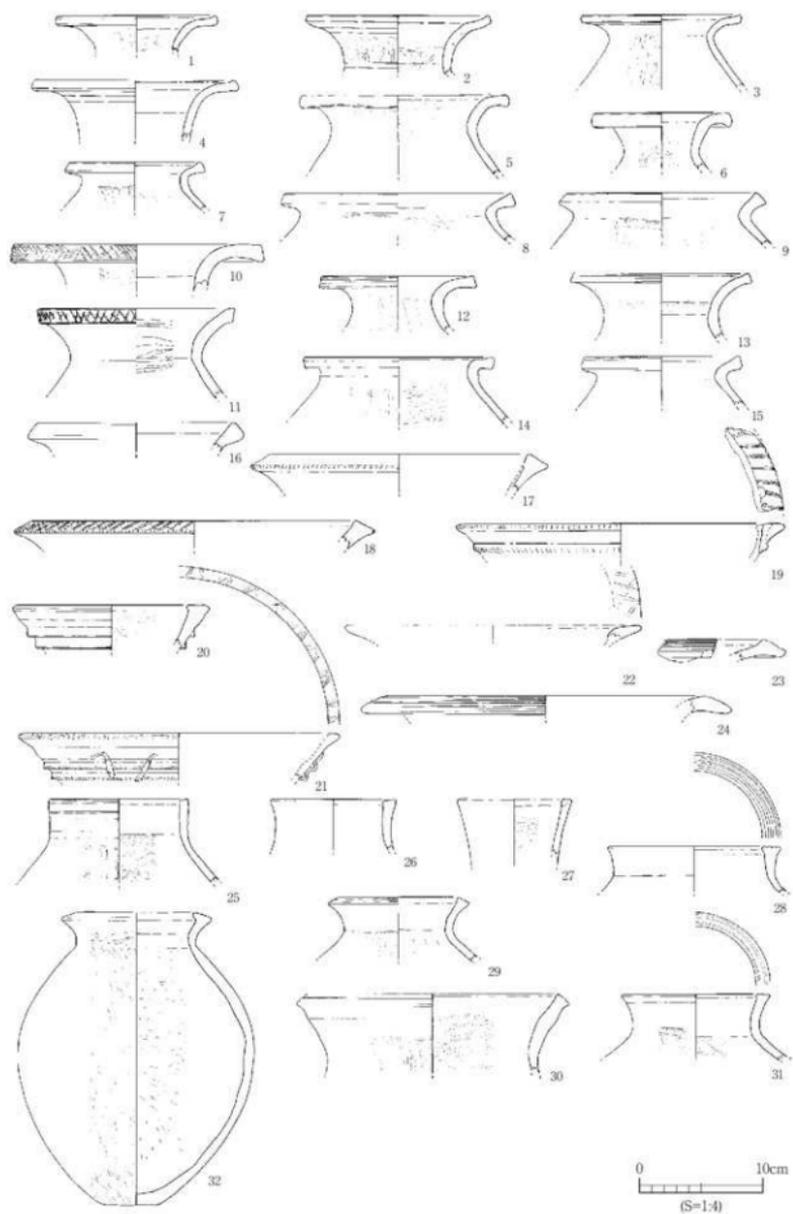
第32図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(13)

と13は口縁部の凹線文に刻みが入るタイプである。14～18は口縁部の凹線文に刻みが入り、内面にも文様が入るタイプである。内面には凹線の他に斜格子文や波状文が入るものである。

壺の文様等(第33図) 1～20は壺の胴部等の文様が施された部分の破片である。大部分が広口壺と考えられる。このうちで、13・16はこれ以外に類例がなかったものであり、13はヘラ描により爪形状の文様を施し、16は四重の同心円のスタンプ文である。また3の頸部に施されたクシ描



第33図 山持遺跡6区砂層出土土器実測図(14)



第34图 山持遺跡6区砂層出土弥生土器实测图(15)

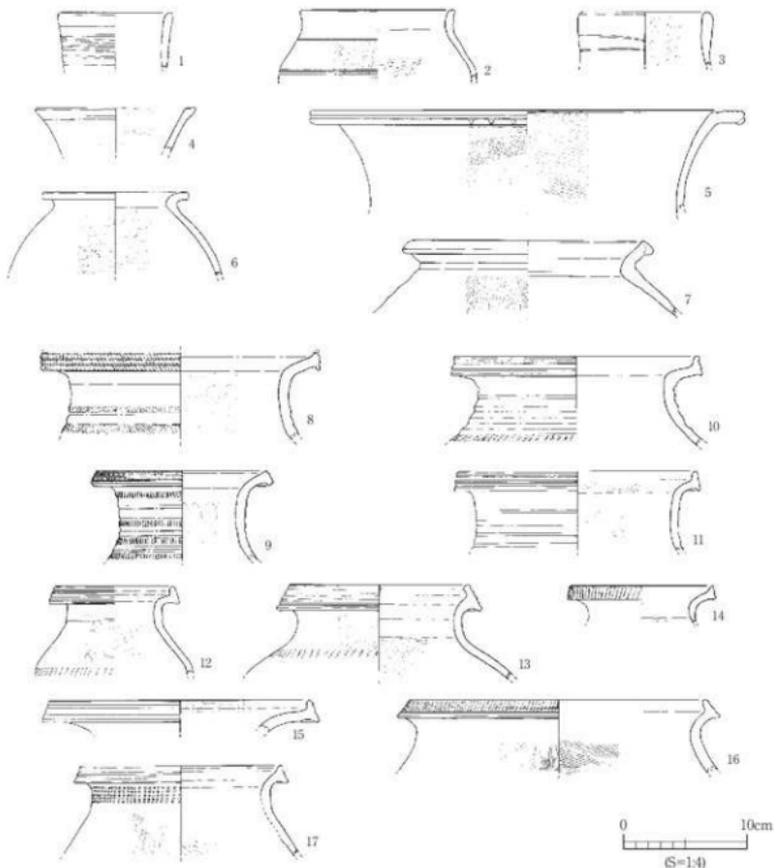
の斜線文や12の羽状文と組み合わせる円形浮文も出土品の中では珍しいものである。

Ⅲ・Ⅳ様式壺類 (第34図) 1～32はこれまで述べてきた広口壺でないもので、一部、V様式に属するものも含まれているかもしれないがⅢ・Ⅳ様式に属すと考えた壺類である。

1～16は口縁端部が肥厚した面をもつ壺である。1～7・10～13は頸部が長いタイプ、8・9、14～16は頸部が短いタイプである。1～4は口縁端部がややつまみ上げるような形状をとるもので口縁部は無文である。10～12は口縁部に文様が施されるものであり、10・12は広口壺とした方がよいのかもしれない。

17～24は長頸壺である。17～22は口縁部上面が無文か斜格子文等で裝飾されるもの、23・24は凹線文が施されるものである。

25～32は直口壺である。25～27は口縁端部が無文のもので、29～31は口縁端部上面の平坦



第35図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図 (16)

面が広がりそこに凹線文を施すものである。32は他に類例がないものであり、内面調整が削りである。胎土的にもやや異質な印象を受けるもので非在地系のもと考えられる。V様式に属す可能性はある。

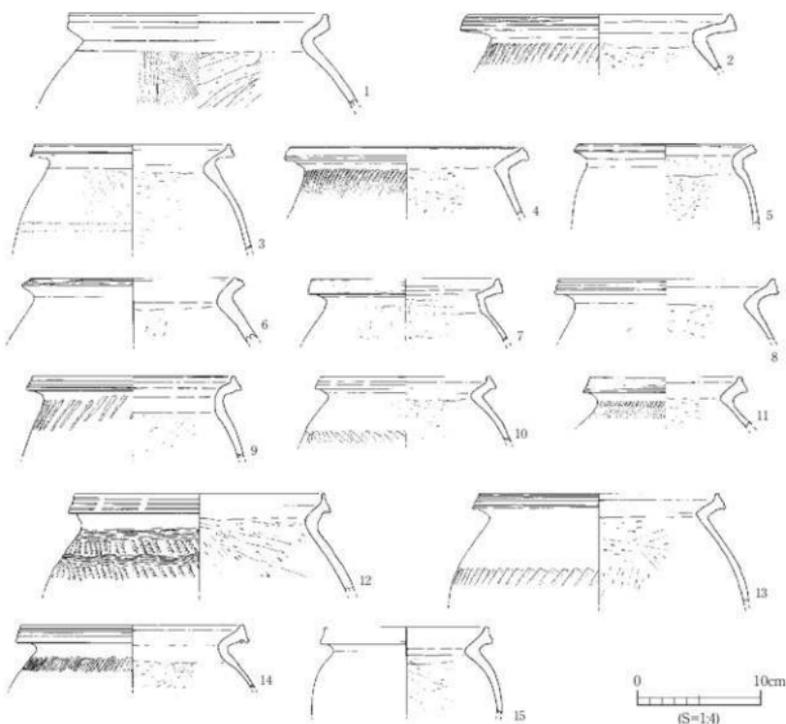
Ⅲ・Ⅳ様式壺類 (第35図) 1～7は第34図に掲載した壺類のカテゴリーに分類できなかったものである。1～3は直行する口縁部をもつ壺類であり、5は口縁部上面に凹線文を入れる異形の広口状の壺である。

8～17は複合口縁となる壺である。8～12は筒状の頸部となり頸部には凹線文が施されるタイプのものである。

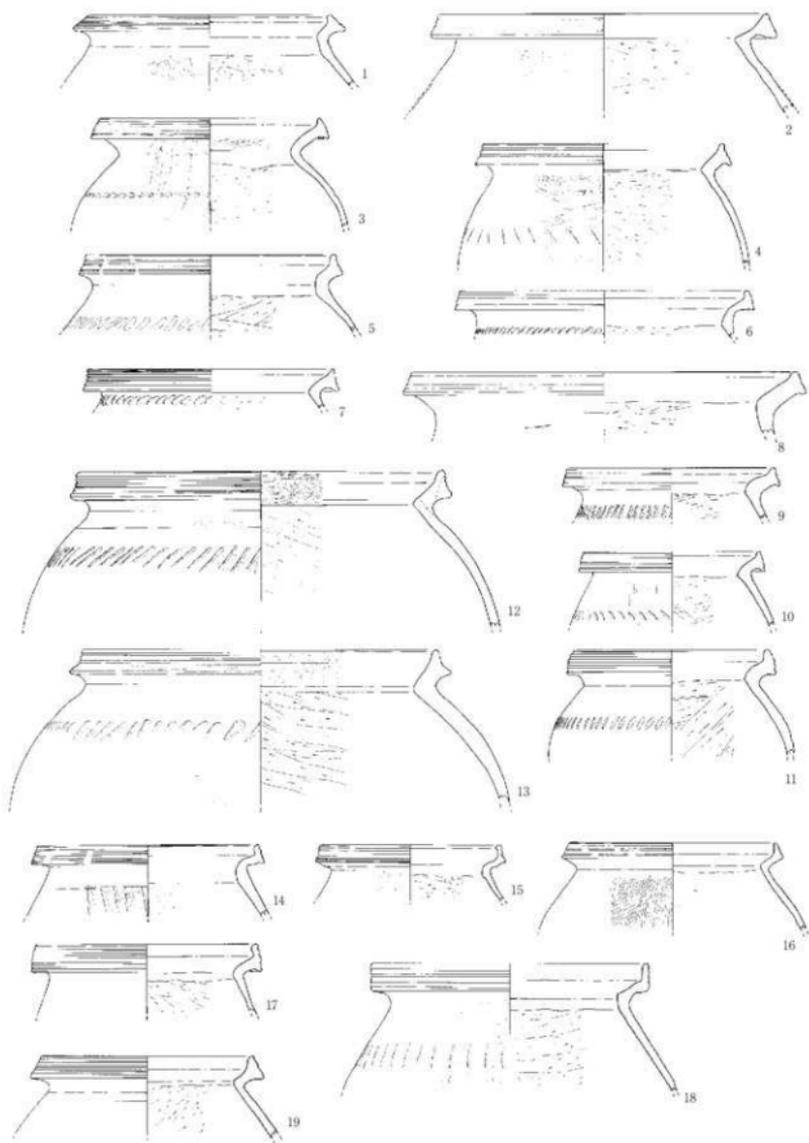
V様式の甕 (第36図～42図) 内面調整のヘラ削りが頸部付近まで及ぶものをV様式に属すと考えた。これらはほぼ例外なく外面に煤が付着し黒色を呈するという特徴を持っている。

V様式の甕 (第36図) 1～15はV様式に属すと考えた甕である。口縁部は内傾し口縁帯は1.5cm以下の幅が狭いもので、口縁の凹線文は3条程度である。口縁部の断面形態は三角形のものが多いとみられる。

V様式の甕 (第37図) 1～19はV様式に属すと考えた甕で口縁部は内傾するものである。



第36図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図 (17)



第 37 图 山持遺跡 6 区砂層出土弥生土器実測図 (18)

1～13は口縁断面が三角形のもので凹線文が3～4条入るものである。口縁帯は1.5cm以上とやや狭いものである。

14～19は口縁帯が15cm前後で凹線文が3～5条入るもので口縁断面はT字形をとり複合口縁化したものである。ほとんどのものが口縁部の厚みが薄いという特徴をもつ。

V様式の甕 (第38図) 1～20は口縁部が直立気味のもので口縁帯の幅が1.5cmと狭いものである。口縁部には3条ほどの凹線文・擬凹線文が入り、複合口縁化したものである。

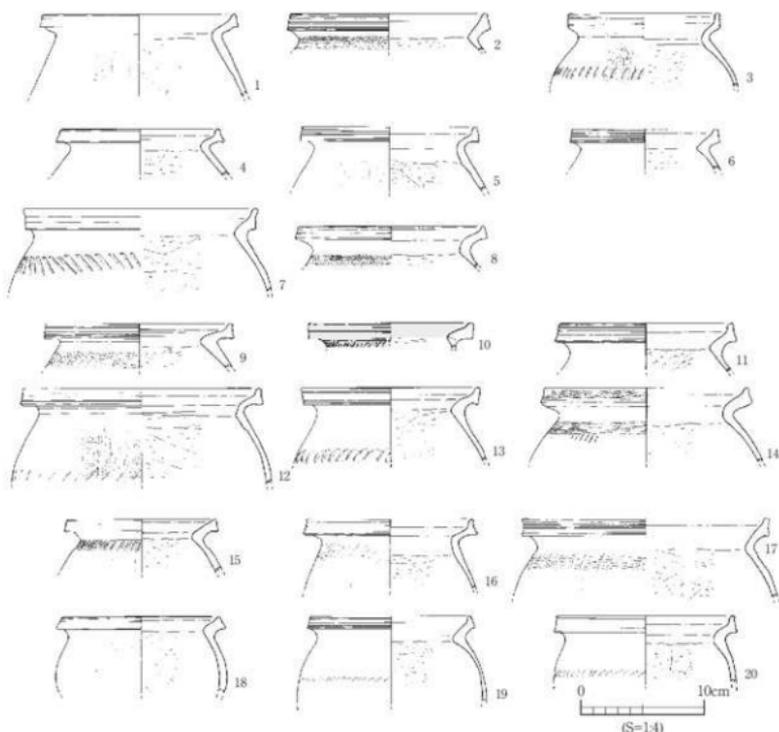
V様式の甕 (第39図) 1～30は口縁部が直立気味のもので複合口縁化したものである。

1～19は口縁帯の幅が1.5～2cmと狭いもので、凹線文が3～4条入るタイプのものである。

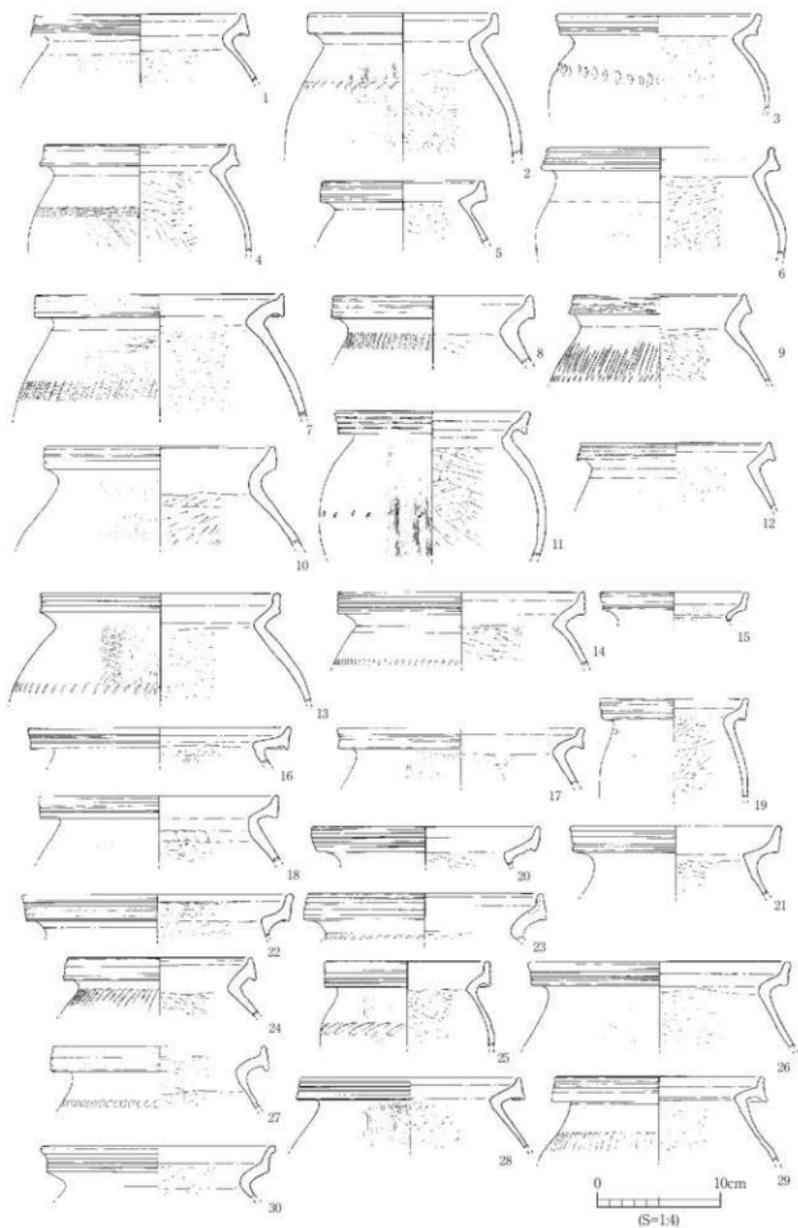
20～30は口縁帯の幅2cm前後のもので、凹線文が3～5条入るタイプのものである。

V様式の甕 (第40図) 1～6は口縁部が直立気味の複合口縁化したものであり、口縁帯の幅2cm程度とあまり広くないものであるが6～7条の擬凹線文を密に施すものである。

7～20は口縁部が直立気味の複合口縁化したものであり、口縁帯の幅2.3cm～2.5cm程度のやや広いものである。口縁部の凹線文は3～5条施すものである。なお、口縁帯の幅3cm以上の幅広のものも含んでいる。



第38図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(19)

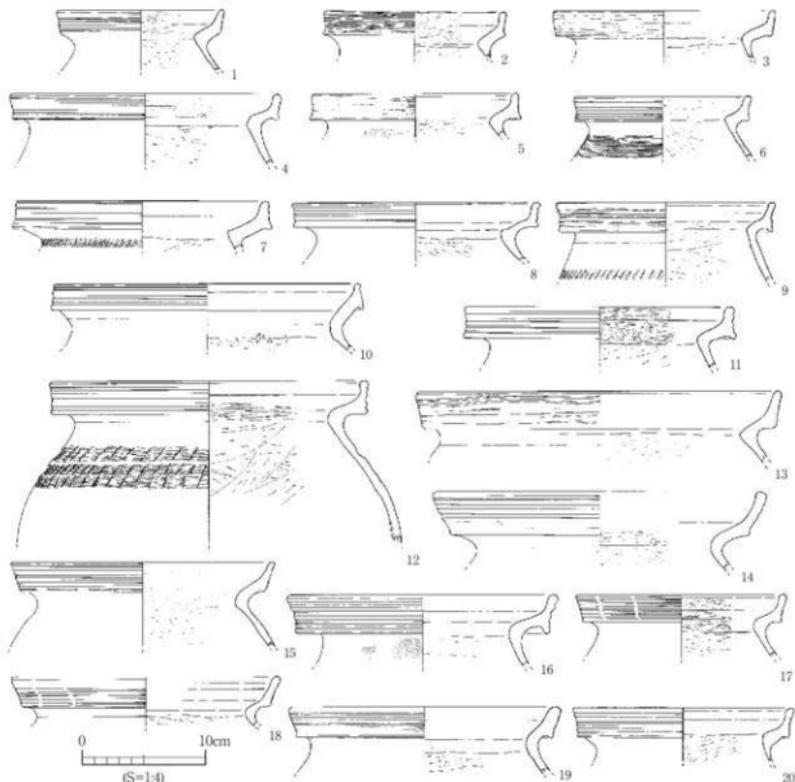


第 39 图 山峙遗址 6 区砂层出土弥生土器实测图 (20)

V様式の甕 (第41図) 1～18は口縁部が直立又は外傾し複合口縁化したものであり、口縁帯の幅は23～25cm程の広いもので、5～9条の多条の擬凹線文を施すものである。擬凹線文は貝殻腹縁によるものと考えられるものがほとんどである。

V様式の甕 (第42図) 1～20はこれまで述べてきたV様式の甕と異なる異形のものに掲載している。1～3・7・8は口縁がほとんど拡張しないものである。4・5は口縁端部が内傾し下方にのみ拡張するもので、無文である。6は口縁端部が上方につまみ上げるように拡張し無文のものである。10・11は口縁部は複合口縁化したもので、頸部以下沈線と刺突文で飾られるものである。特に10はヘラ描文の後から平行沈線文を施し刻みを表現しているものであり、いわゆる「塩町系土器」と呼称されるものであり、IV様式に位置付けた方が適当なものである。16・17は単純口縁のものであり、18・19は複合口縁を粗雑に作った印象を受ける土器である。

V様式の壺 (第43図) 1～31はV様式に属すと考えた壺である。1～8は口縁部が内傾し、頸部はあまり長くない「ハ」の字状に開く形態のものである。口縁帯の幅は1～2cm程で凹線文が3条



第40図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(21)

程度施されるものである。6は口縁部が直立しているものであるが凹線文が多条でないことからこの類型に含めた。

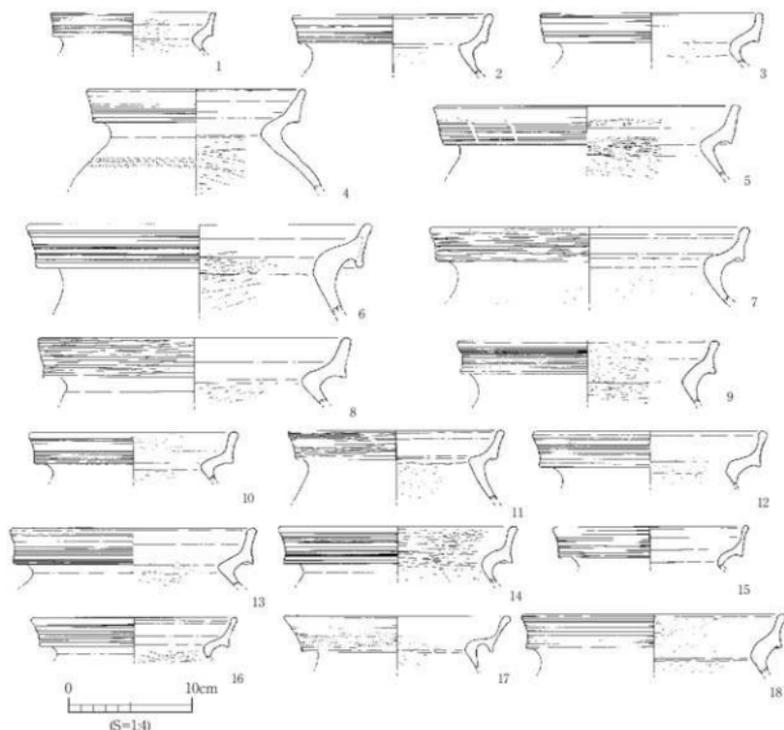
9～16は複合口縁化したもので、口縁部は直立し頸部は円筒状のタイプである。口縁部の幅は12～2cm程で凹線文が3条ほど施される。頸部は無文のものが多く、9・12のように凹線文が施されるものもある。なお12はIV模式に属す可能性も考えられる。

17～21は口縁部が複合口縁化し頸部は円筒状であるがあまり長くないタイプのものである。口縁部の幅1.8～3cmと広く擬凹線文が6～8条と多条のものである。擬凹線文には貝殻腹縁によるものも含まれる。

23～26は装飾壺であり、台付きとなる可能性が考えられる。26以外は全て赤彩されている。

22・27～29はこれまで述べてきた分類から外れる壺である。22は複合口縁で頸部は「ハ」の字状に開くものであるが、全体の成形や凹線文が粗雑である。27は単純口縁であるが複合口縁状のもので口縁部に3条の凹線文が施される。28・29は単純口縁のものであり、直口壺とも呼ばれているものである。28には口縁部に刺突文が施される。

30・31は小型のもので甕又は鉢とした方がよいものである。



第41図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(22)

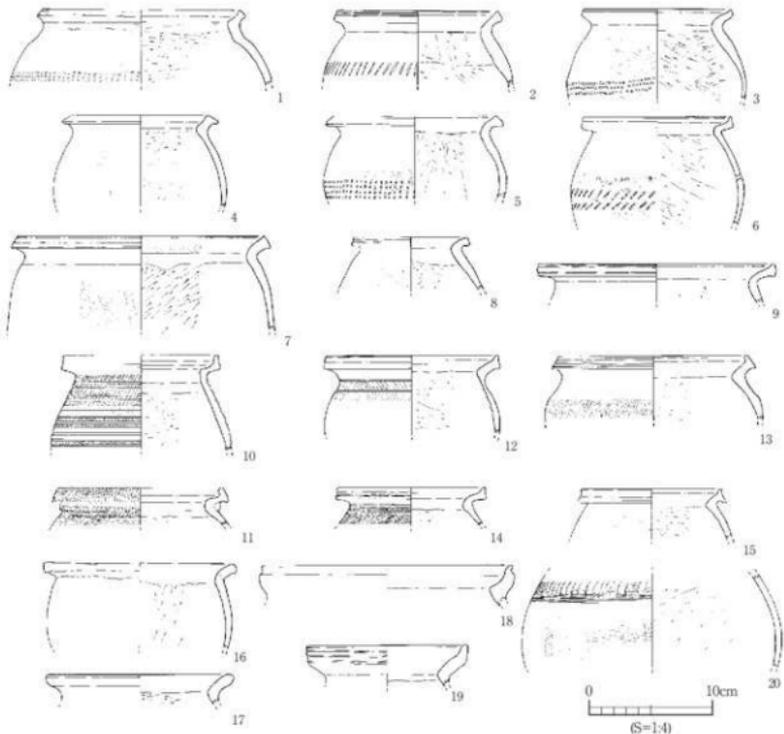
高坏 (第44図) 1～23はⅢ～Ⅳ様式に属すと考えられる高坏の坏部である。

1～4は端部に広い面を作り出し外面の稜に刻目が入るタイプである。3には平坦面に斜格子文が施されるが、基本的に無文である。1～3はⅢ様式に属すと考えられ、4は側面に凹線文が施されることからⅣ様式に属すと考えられる。

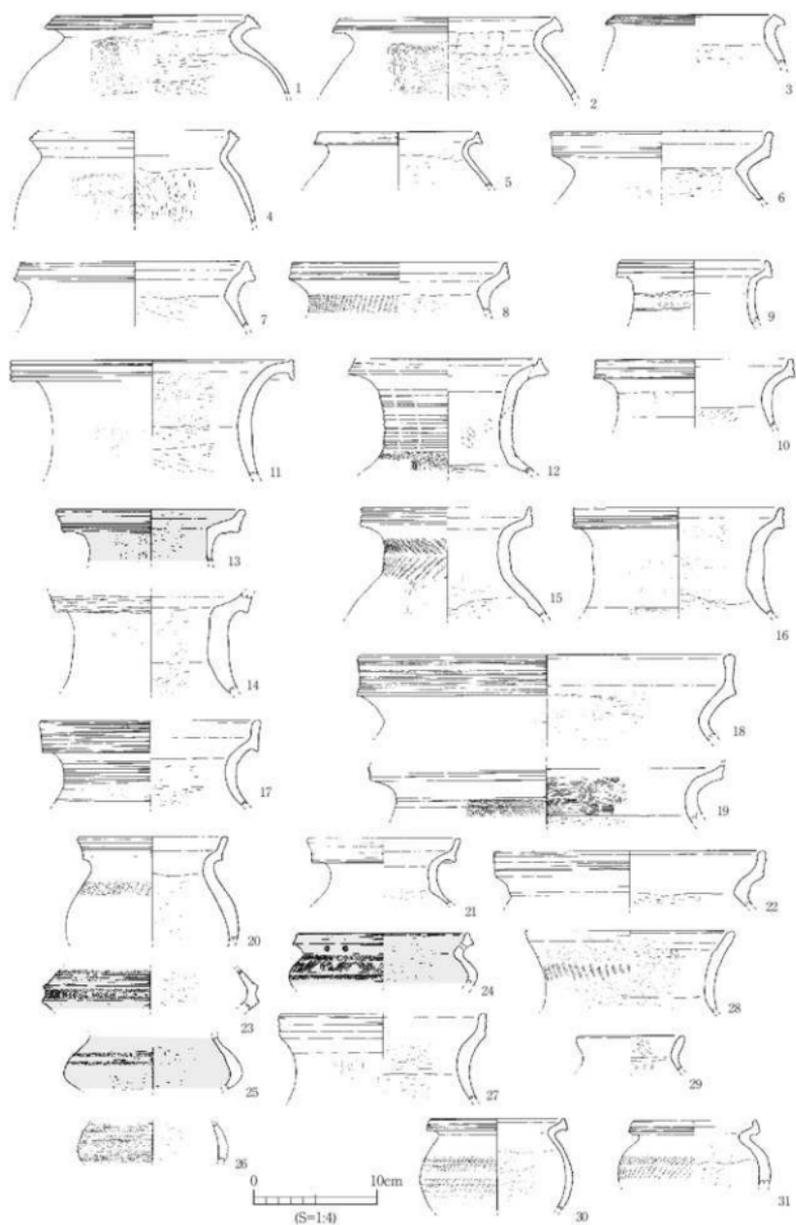
5～7は長い水平口縁をもつタイプの高坏である。基本的に無文であるが、7のように端部に刻目が入るものもある。これらはⅣ様式に属すと考えられる。

8～20は端部上面に面をもち、その端部や側面に凹線文が施されるものであり、体部の形状等によって細分可能なものである。8～12は体部があまり屈曲しないもので端部付近の側面に刻目が入るものである。13・14は体部の屈曲が明瞭で側面には凹線文のみ施すものである。15～18は体部の屈曲がさらに明瞭なもので側面には凹線文が施される。16のように凹線文と刻みが組み合わさるものもある。19・20は端部が先端で若干に屈曲し、体部が深いもので脚付き碗といった呼称が適切な形態のものである。これら8～20はⅣ様式に属すと考えられる。

21～23は上面の広い面に凹線文が入り、側面は強いナデによって稜ができたタイプである。21のように側面にも凹線文が入るものが希に見られる。



第42図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(23)

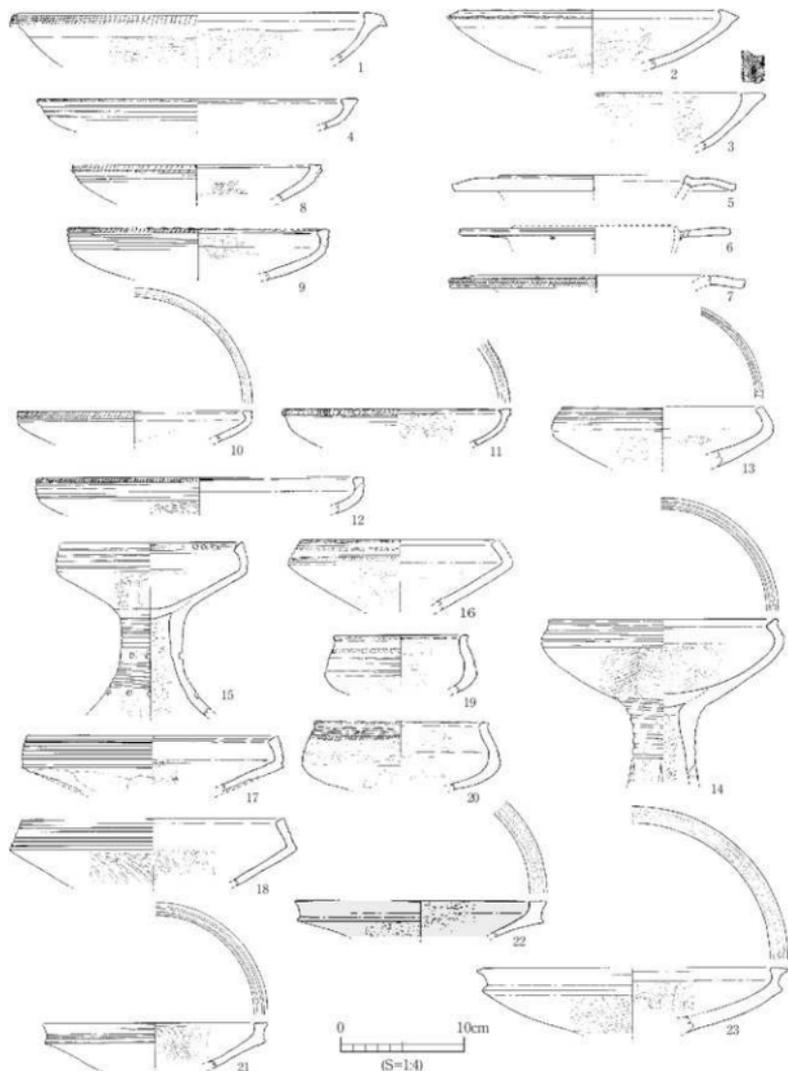


第43图 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(24)

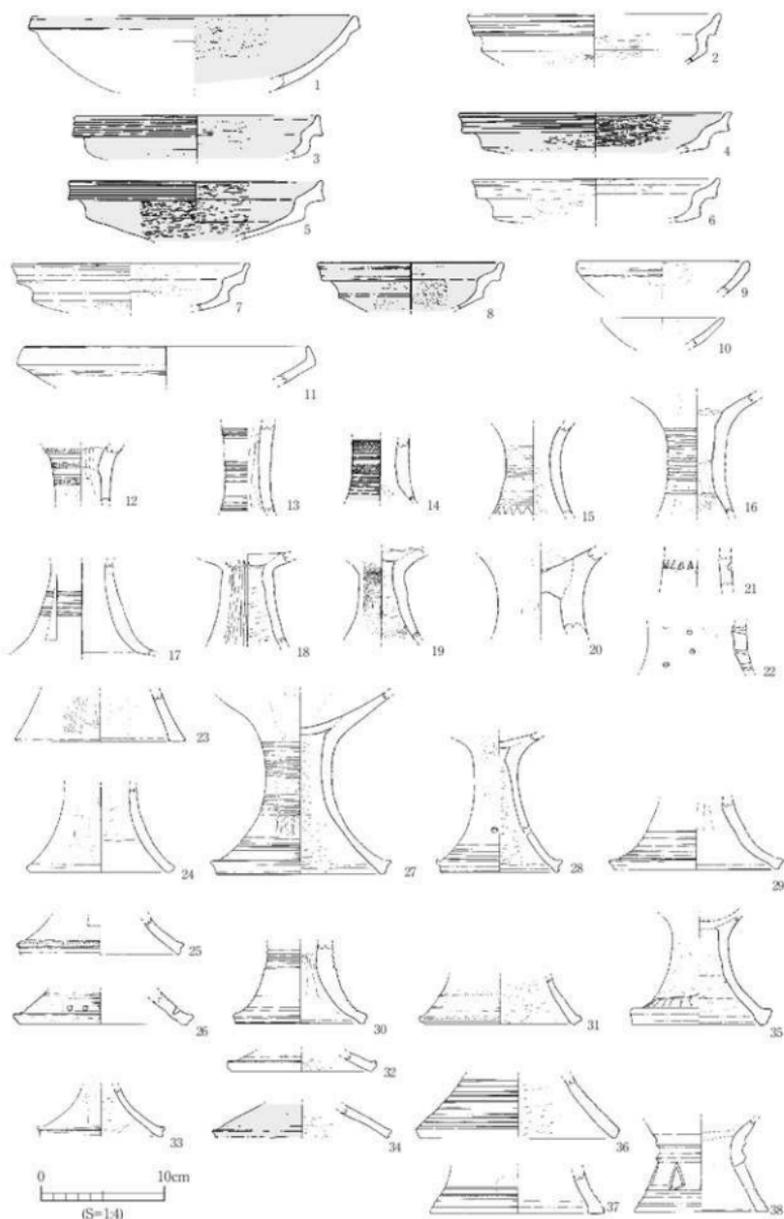
高坏 (第45図) 1～11は高坏の坏部、12～22は筒部、23～38は脚部である。

第45図1～8は複合口縁状の口縁をもつ坏部であり、口縁部には凹線文が施される。

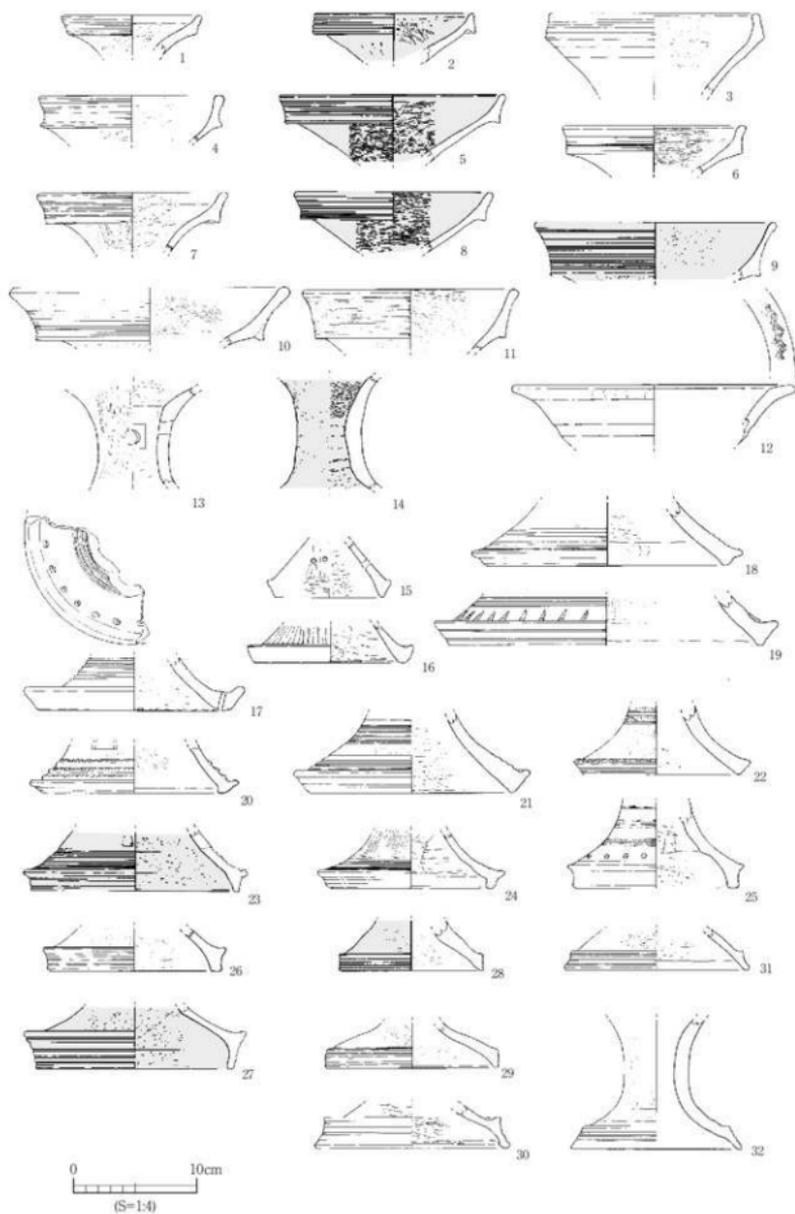
9～11は、これまで分類した高坏の坏部のカテゴリーから外れるものである。9・10は小型のもので、9は端部に面をもち凹線文が施され、10は低脚坏の坏部と考えられるものである。11は異



第44図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(25)



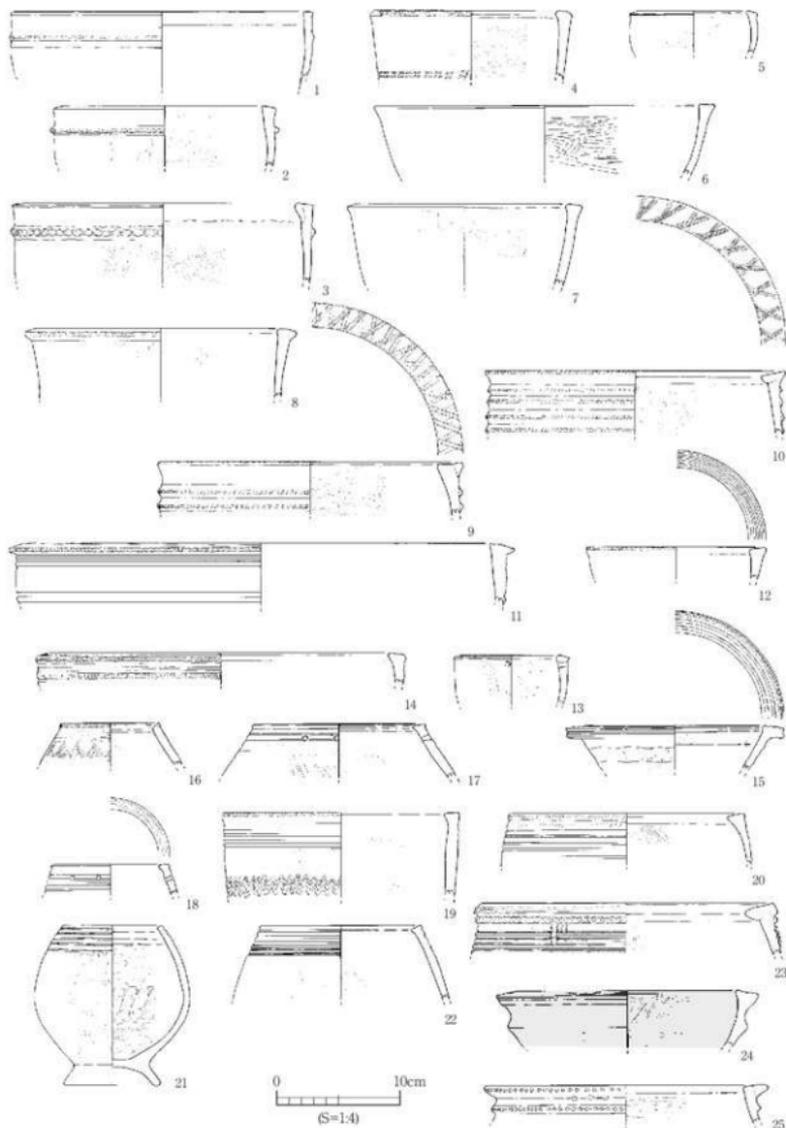
第45图 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(26)



第46图 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(27)

形のもので端部が内側に屈曲するものである。これらのうち1～10はV様式に属すと考えられる。

第45図23・24は脚端部が単純に面をもつのみのものでⅢ様式に属すと考えられる。25～35は



第47図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(28)

脚端部をナデによりアクセントをつけているもので、端部や裾部に凹線文を施す。また内面はヘラ削りするものがほとんどである。36～38は例外的なものであり、36は端部は面をもつのみで凹線文が入り、37・38は高坏の脚というより碗や壺の脚の可能性のあるものである。

器台 (第46図) 1～12は器台の受部、13・14は器台の筒部、15～32は器台の脚部である。

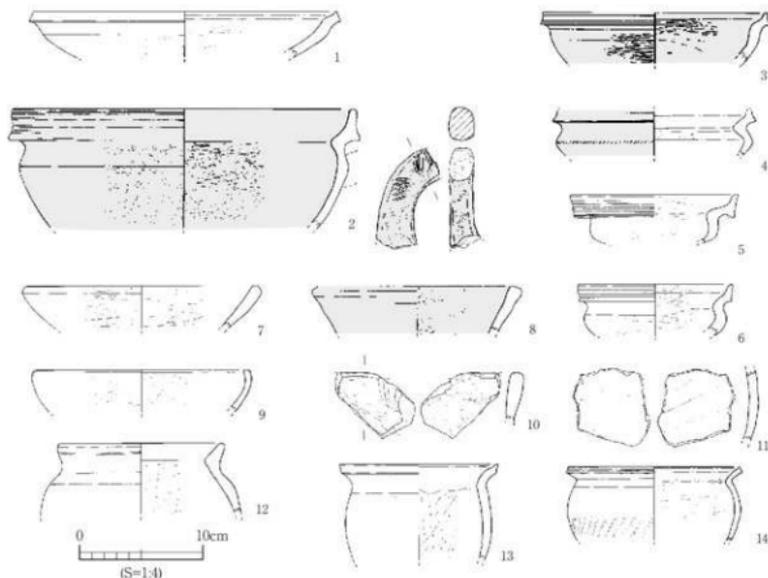
1～8は複合口縁状の受部に凹線文・擬凹線文が5条程度施されるもので、9～11は受部幅が広くなり10条以上の擬凹線文が施されるものである。1～8のタイプは赤彩されるものが多い。なお、12は受部に凹線文等がないもので、上部のシルト層に包含されていたものが混入した可能性がある。

15～25は端部が拡張されたり、ナデによってアクセントがつけられた脚部である。端部は外傾し、端部や裾部に凹線文を施すものがほとんどである。

26～32は内傾する複合口縁状の脚部であり、端部に凹線文を5条程度施す。なお、27はやや異形のものであり非在地系の可能性がある。

鉢類 (無頸壺) (第47図) 1～25は鉢類として分類した土器であるが、無頸壺も含まれている。

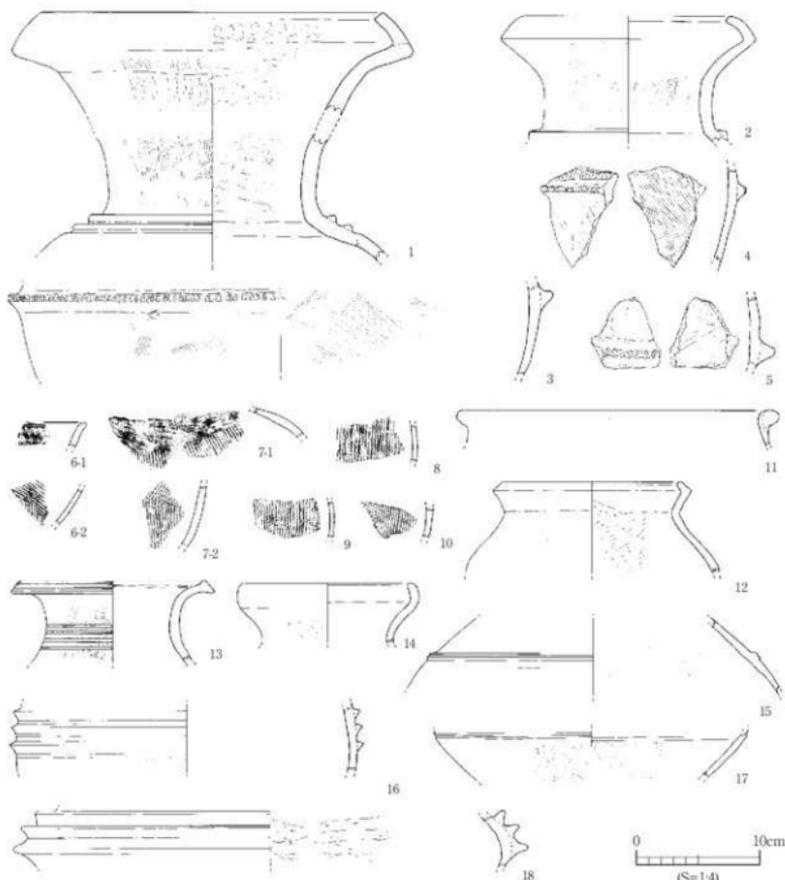
1～3は口縁部が直立するもので端部は平坦である。体部には刻目突帯が付されている。4～8は口縁部が直立気味で端部はやや拡張され平坦となるタイプのものである。口縁端部側に刻目をもつものもある。9・10は口縁端部が拡張され平坦面に斜格子文等が入るものであり、体部には細い刻目突帯が付されている。11～18は口縁端部の平坦面に凹線文が入るもので体部にも凹線文が入るものが多い。口縁が内傾する16～18は無頸壺であり、15は異形の形態をとるものである。19～21は体部に凹線文が施され、口縁端部の平坦面が無文のものである。このタイプのほとんどは21～22のような無頸壺である。23～25は鉢類としたものの中では異形のものである。



第48図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(29)

鉢類 (第48図) 1～6は複合口縁状の口縁部をもつ鉢類である。2～4のように赤彩されるものが多い。なお1は蓋・脚の可能性ある。7～10は口縁部が外傾する単純なものである。11～14はそのほかの鉢類である。11は外面にヘラ削り調整が見られ内面には赤色顔料が点々と付着しており、朱の精製に関連する容器片の可能性ある。

非在地系の土器 (第49図) 1～18は在地の土器とは異なると思われるものである。1～5は北部九州の下大隅式の前段階に相当すると考えられる壺である。これらは赤褐色を呈し胎土に粗砂粒を含み明らかに在地のものとは異なることから搬入品と考えられる。6～10は瓦質土器の破片であり、体部外面には縄文のタタキと水平方向の沈線が入り、内面はナデ調整である。朝鮮半島のものであると考えられる。11は擬朝鮮系無文土器と呼称されるものである。12は口縁部が内側に屈曲する壺で



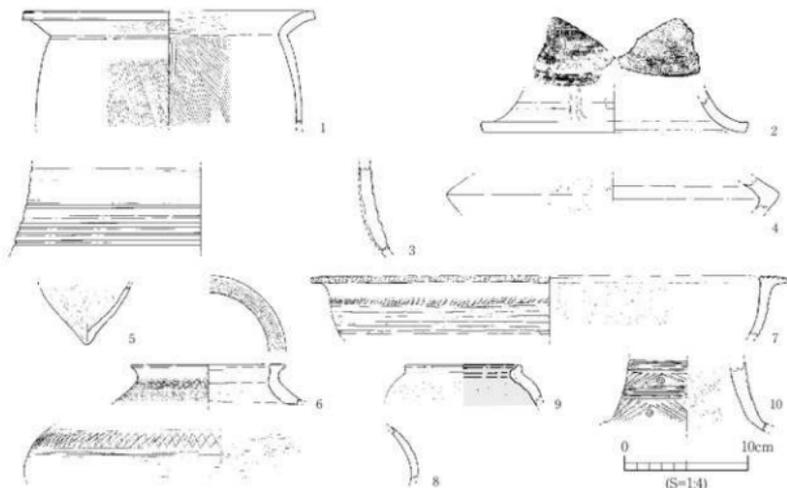
第49図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(30)

あり、胎土・色調から在地のものとは考えられないが詳細は不明である。13は吉備系の壺であり、胎土・色調がやや在地のものとなり搬入品の可能性がある。14は袋状口縁を呈し北部九州の高三瀆式の壺に類似した口縁部である。15～16は壺の胴部であり、胎土・色調や突帯等在地のものとはやや異なるものである。

非在地系土器等(第50図) 1～8は在地で見られない土器や特殊なものを掲載した。1は「く」の字状に口縁部が外折する甕であり、口縁端部には面をもつ。Ⅲ様式甕に類似するがやや趣が異なるものである。2は脚部又は壺の口縁部であり、縦方向にヘラ描による絵面状の沈線が見られる。3は凹線文が施された壺の頸部であり、胎土・色調から非在地系のもので判断した。4は屈曲する壺の胴部と考えられる破片であり、出土品の中では異形のものである。5は先が尖る土器であり、詳細が分からないものである。6は在地のものであるがあまり見られない短頸壺であり口縁部上端と頸部にクシ描の直線文や波状文を施す。9は黒漆が塗られた短頸壺である。このような黒漆を塗った土器は他にもいくつか出土している。10は壺の頸部と考えられる破片であり天地が逆の可能性もある。竹管文と短沈線による山形状のヘラ描文が施されたもので胎土・色調とも在地のものとなり搬入品の可能性がある。8は連続する菱形の部分に斜行する沈線文を密に入れるもので、あまり一般的でない文様構成をとるものである。

蓋(第51図) 1～5は蓋と考えられるものであり、出土品の中で確認できたものは少数である。1は扁平なものでヘラ描の文様が施されている。2・3は蓋の把手付近の破片で3は中空となっている。4は底部の可能性もある。5は把手に凹線文が施された把手である。1はⅢ・Ⅳ様式、2・3は明確に分からないがⅠ・Ⅱ様式、5はⅤ様式に属すと考えられる。

底部・脚(第51図) 8～13は底部が平坦で内面調整がナデ又はミガキのものであり、14～19は内面調整がケズリのものである。20～24は底部が平坦でないものである。25・26は小形のものであり26は蓋等の把手の可能性も考えられる。27～30は側面に凹線文が施されるものである。31



第50図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(31)

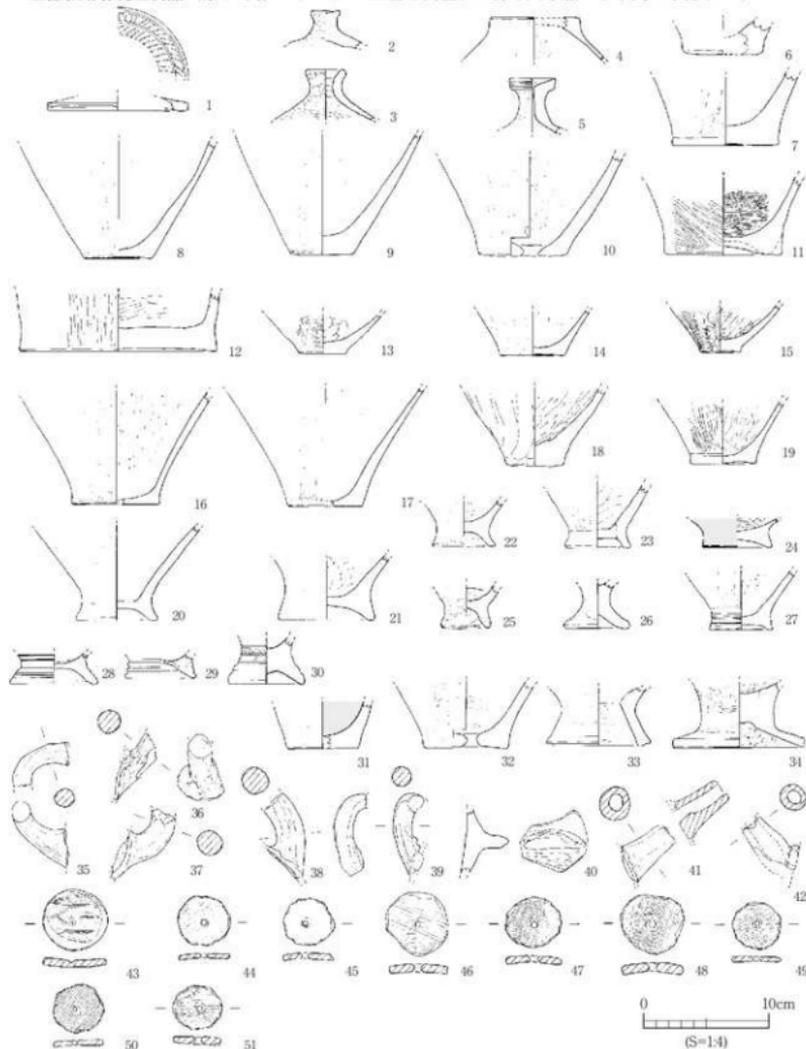
は内面に漆が付着したもの、32は穿孔があるものである。33は脚で本体が剥がれた痕跡が残る。

34は脚部の裾が広がり端部に面をもつもので一般的でない形状である。

把手・注口 (第51図) 35～40は把手である。35～39はV様式の注口土器の把手と考えられ、

40は詳細不明である。41・42はV様式の注口土器の注口である。

土器転用有孔土製品 (第51図) 43～51は土器を円盤状に打ち欠き加工し中央に穿孔したもので



第51図 山持遺跡6区砂層出土土器実測図 (32)

あるが、1のみは貫通しないで縁辺部を丁寧に加工しているもので、他のものとは用途が異なる土製品の可能性が考えられる。

ミニチュア土器 (第52図) 1～7はミニチュア土器と考えられる小形のものである。1は無頭壺を模したもので比較的丁寧に造りである。3～7は手握ね状に造られたあまり丁寧に造りではないものである。

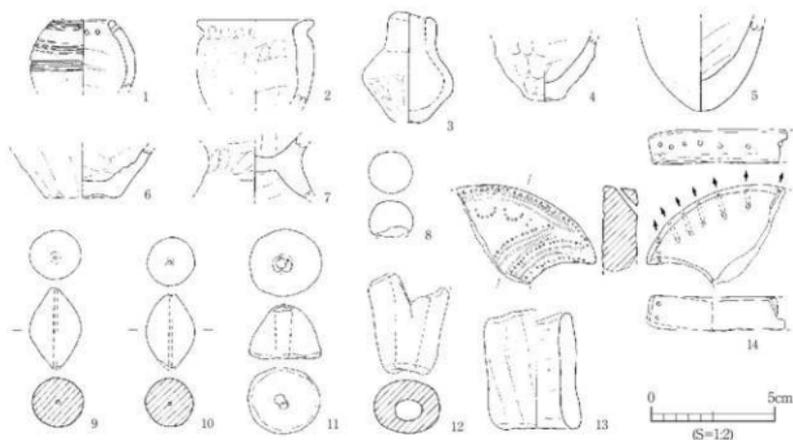
土製品 (第52図) 8は球状に造られた土製品であるが、割られた痕跡と考えられる部分もあり、何らかの土器に付されていたことも考えられるが詳細は不明である。14は貫通孔のある上半部分の一部が残る分銅形土製品であり、棒状工具による刺突文と沈線文によって飾られている。9・10は土錐と考えられ、ラグビーボール状の形状をしたものである。あまり見かけない形状のものである。11は土製品としたが高坏の坏と脚の接合部に充填された粘土が割られたものである可能性も考えられる。12・13は用途不明の土製品である。12は断面が楕円形を呈し上方に向かって広がるものである。13は円筒状の断面を呈すものである。

第4節 その他の出土遺物

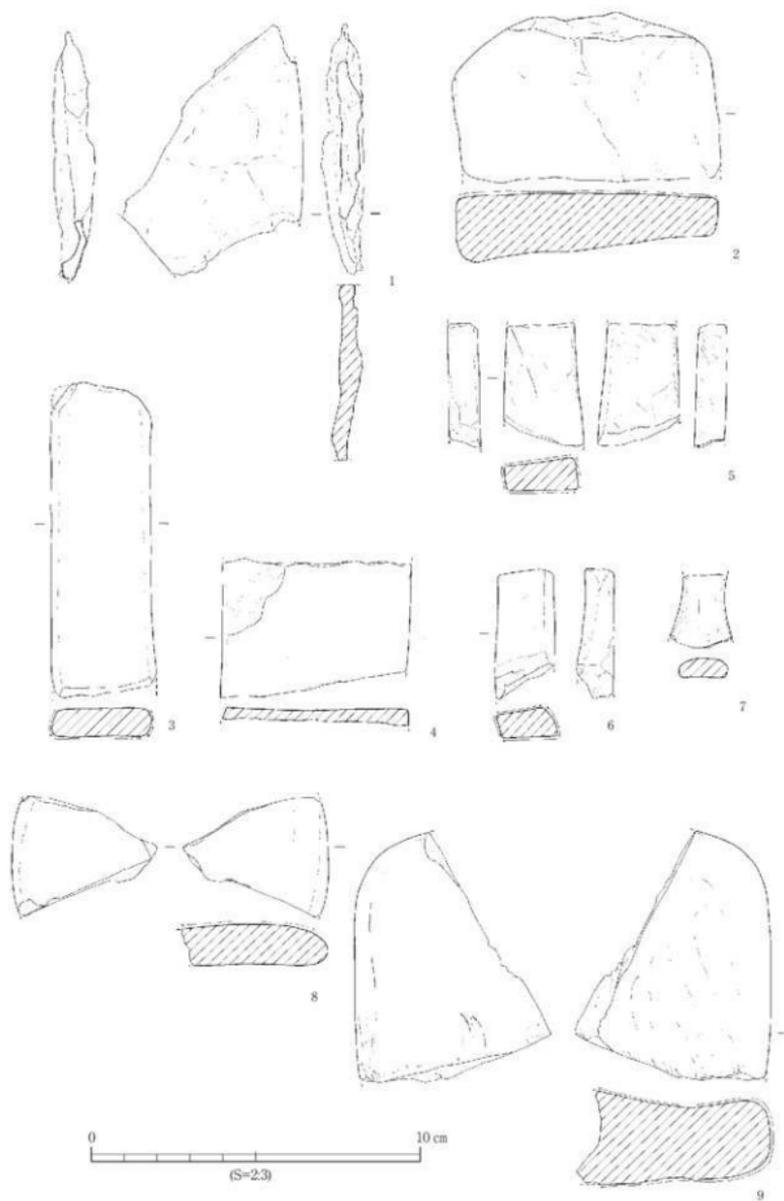
石器 (第53図) 1～7は砥石である。1は軟質の石材で大型の砥石の破片である。2～4はやや硬質の石材であり、2は1面のみ、3は3面、4は3面使用していることが確認される。5～7は小型の砥石でありやや硬質の石材が用いられている。これら3点は全面使用されていることが確認できる。8は白色を呈すやや硬質な石材のもので、石器かどうか判断が難しいものであるが、縁辺部や表表面がきれいに磨かれた可能性がある。9は磨石であり片面は使用によって凹むものである。

石器 (第54図) 1～7は刃部をもつ磨製石器の破片である。石材の材質は、1・4、2、3・5・6、7の4つに分類され、同一個体の破片である可能性も考えられる。

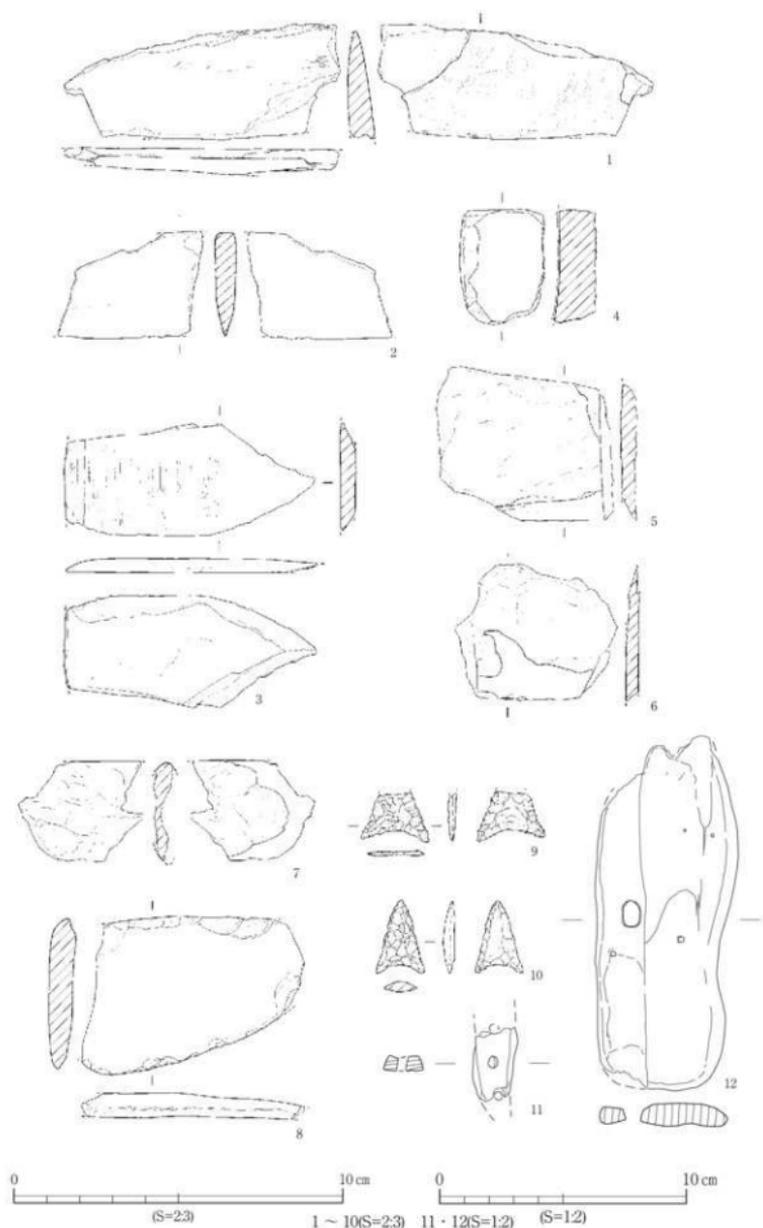
8～10は打製石器である。8は縁辺部を加工した石包丁と考えられ、9・10は凹基式の石鏃である。9は黒曜石製、10は安山岩製のものである。



第52図 山持遺跡6区砂層出土弥生土器実測図(33)



第 53 图 山持遺跡 6 区砂層出土石器実測図

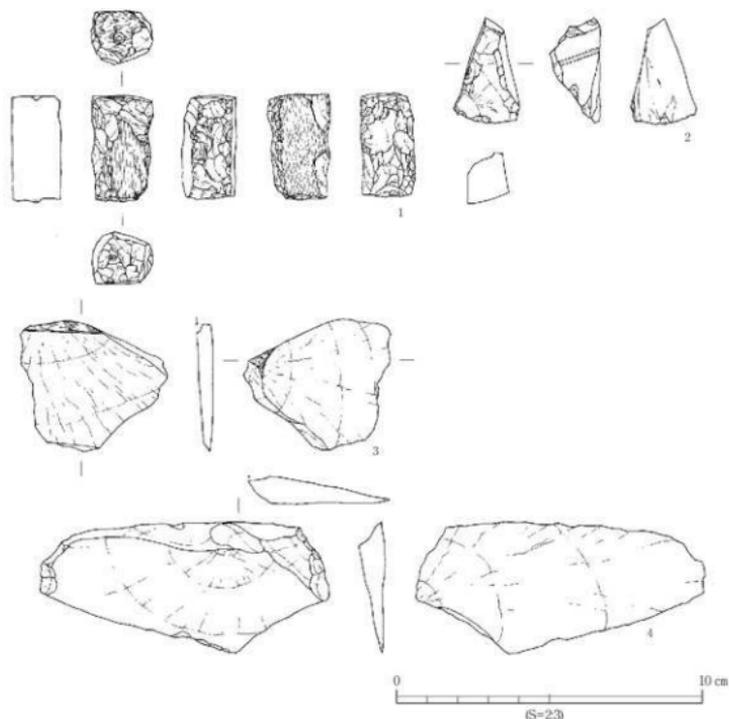


第54图 山持遺跡6区砂層出土石器・木製品実測図

木製品 (第54図) 砂礫層からは自然の流木と考えられるものが希に出土するのみで、何らかの製品と考えられるものは11・12の2点のみである。それぞれ円形の孔があり用途等は不明である。

玉作関連資料 (第55図) 1～4は玉作関連の石製品であるが、砂礫層出土品は1・3であり、2・4は出土層位が別である。1は管玉の未完成品であり、石針による両面穿孔痕が確認される。石材は緑灰色を呈しやや硬質のものであるが、花仙山のものとは異なると考えられる。上面及び側面の2面は研磨されており、他の3面は押圧による二次調整が認められる。上面の穿孔痕は二段に凹み石針による回転痕が見られ、孔径3.7mm、深さ1.5mmを測る。下面は研磨されていないが穿孔痕が見られ、これは石針による初孔のみの先付け穿孔であり径2.4mm、深さ0.5mm以下を測るものである。2は暗緑色の花仙山産の碧玉の素材剥片であり管玉の未完成品と考えられる。3はややくすんだ緑色を呈す軟質の緑色凝灰岩の剥片であり施溝が表裏面各1カ所確認される。4は淡緑色を呈す軟質の緑色凝灰岩の素材剥片である。打割による横長剥片で管玉未完成品と考えられる。

これらの未完成品は時期を特定することは難しいが、1は長くて太い管玉の未完成品であること、石針による両面穿孔であること、花仙山産の碧玉とは異なること等から総合的に判断して弥生時代後期前葉から中葉の可能性が高いことを指摘することに留めたい。



第55図 山持遺跡6区砂礫層等出土玉作関連遺物実測図

第5章 弥生・古墳時代の遺構の調査

砂礫層上部のシルト系堆積層の調査では弥生時代後期～古墳時代前期の溝状遺構、土坑、土器群を検出した。これらの状況から砂礫層の堆積すなわち斐伊川の堆積作用の影響を受けなくなり、標高25m付近までにシルト質細砂が堆積し、ある程度陸地化した段階が弥生時代後期後葉頃と判断され、またその段階になって初めて人々の生活の場として利用されていることが遺構から確認された。検出された土器群は一括性の高い良好な資料であり、土器の編年研究に資することは大きいと考えられる。

第1節 調査の概要

シルト系堆積層上部では、弥生時代後期後葉以降の溝状遺構、土坑、土器群を検出している。平成18年度の調査では重機掘削が深めに及んでいるために認識できなかったが、平成19年度の調査ではシルト質細砂上に暗色系の粘質土が堆積しており弥生時代後期後葉～古代までの遺物を包含する層が確認された。この包含層を除去すると確実に遺構を検出することができた。

弥生時代の遺構は基本的に6区③とした南側の標高が高い調査区で検出しており、多数の切り合った土坑群と溝状遺構が存在していた。北側の6区①とした調査区では土器群1を検出したのみであったが、赤褐色のムティサラと呼称されるガラス小玉が集中して出土している。また旧河道(SX01)はシルト層堆積後にその層を削って形成されており、出土遺物から弥生時代後期後葉まで古く遡る可能性もある。

第2節 弥生・古墳時代の遺構

(1) 遺構の分布と概要 (第56・57図)

シルト層上部の状況は、6区①が不明確なため分らないが、調査区壁面の土層から大まかに述べると南側が高く北側が低いことがいえる。弥生時代後期後葉の生活面を復元すると標高25m付近と考えられる。

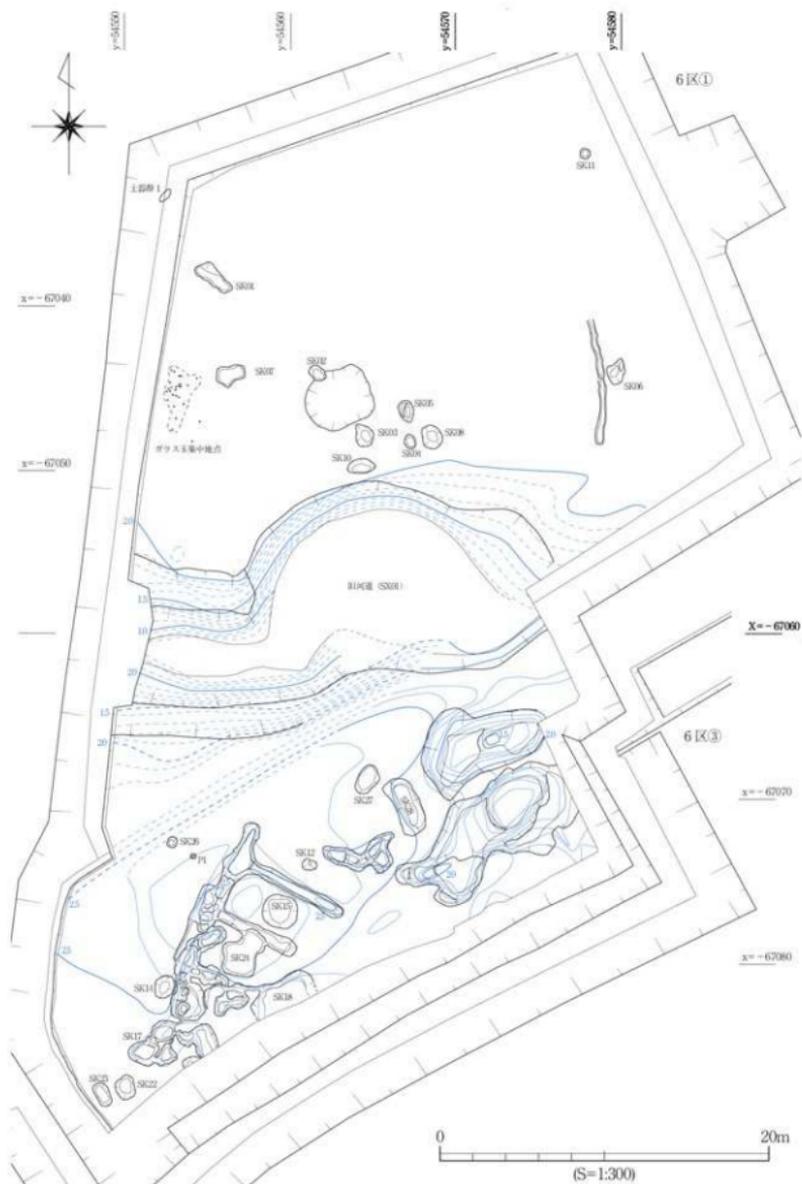
検出された遺構は圧倒的に南側に集中しており、土器群2、土坑41基を検出しているが、建物跡等は検出されなかった。遺跡内においてこの時期の遺構は唯一掘立柱建物跡と竪穴住居跡が今回の報告する調査区の南50mの出雲市教委の1994年の調査(第二次調査)で検出されており、居住域の中心はさらに南側にあった可能性が考えられる。

当該期の土坑と溝状遺構は南側の6区③で全て検出されており、土器群2もそれらとセットになって確認した。基本的に南西～北東方向に並ぶように検出されており、北東部は後に旧河道と思われる落ち込みに壊されている。調査では当初SD04とした溝状遺構のみが確認され、数度の精査でも明瞭な輪郭を確認できなかったことから、任意に土層観察用ベルトを設定しながら掘り下げるという方法をとった。よって、完全には土坑の前後関係を把握することはできなかった。最終的には完掘後にその形状から一つ一つの土坑を確認することとなった。

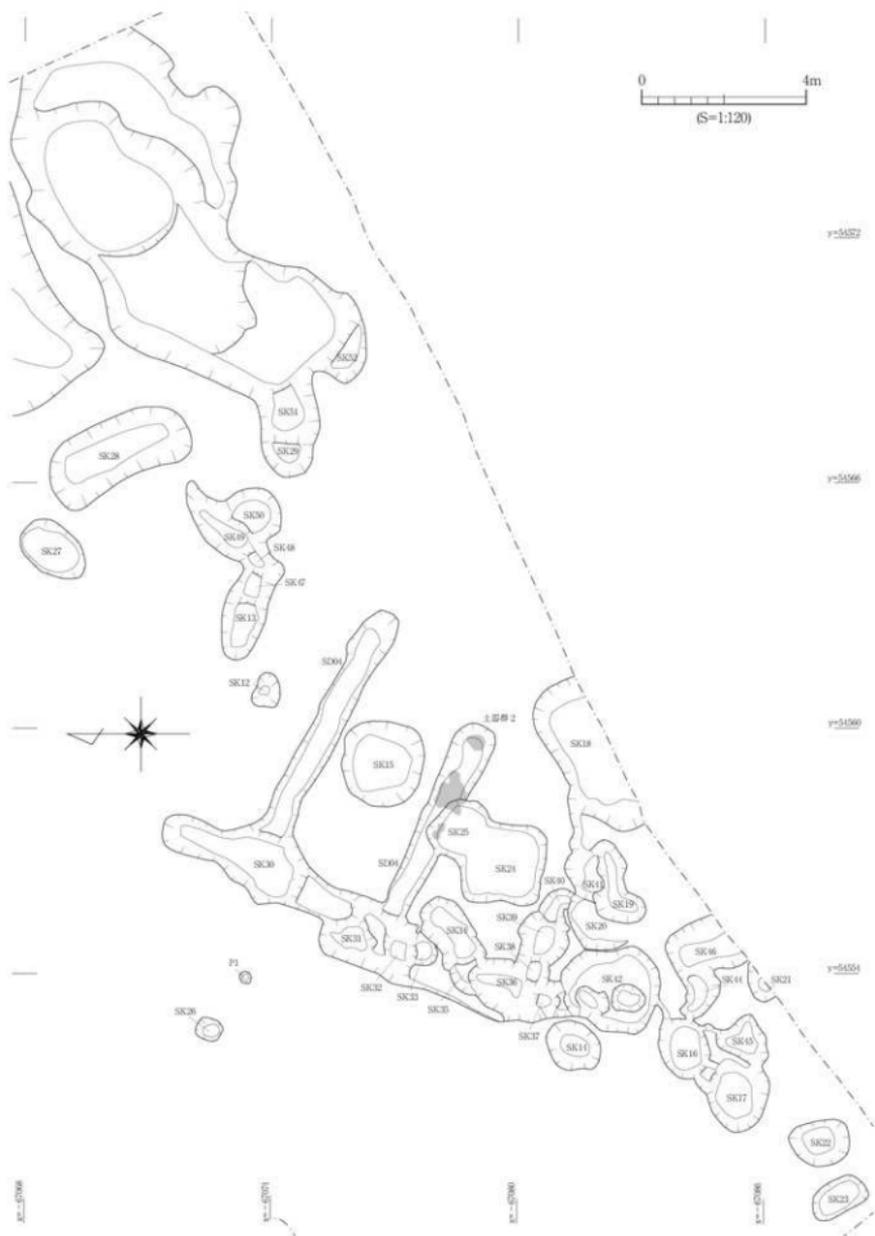
(2) 土器群

土器群1 (第58・59図)

規模と形態 6区①の調査区北西隅の標高25m付近で検出した遺構である。下部に土坑等の遺構



第56図 山持遺跡6区シルト系堆積層上面検出段階図(道路遺構構築前の状況)



第57图 山持遺跡6区土坑配置図

が存在する可能性があり精査したが、明確な遺構は確認できなかった。土器は南北1.0 m、東西0.4 m程の範囲に集中して確認されてもので、ほぼ完形の土器がまとまって出土している。

土器群1出土状況(第58図) 甕が4、高坏が1、脚付碗が1の計5個体が出土している。出土状況を見ると破砕され散布されたりしたものではなく、完形の土器がまとまって廃棄されたような印象を受けるものである。特に法則的に並べられた状況のものとは判断されなかった。

土器群1出土物(第59図) 1～4は甕であるが、1・2は大型のもの、3・4はそれよりも小形のものである。1・2は肩部に平行沈線文と刺突文がセットに施されるもので、底部は痕跡的に残るものである。口縁部はヨコナデによって仕上げられ端部はやや先細りで丸くおさまる。3・4は底部が欠けているが、おそらく痕跡的な底部と考えられ、肩部には平行沈線文と刺突文が施される。口縁部はヨコナデによって仕上げられ端部は丸くおさまる。

5は高坏の坏部と考えられ、碗形の形態のもので端部は若干外に折れる。6は脚付碗又は低脚坏と呼称されるものであり、あまり一般的ではない器種であるが、山持遺跡では1区⁽¹⁾の包含層1(弥生時代後期末～古墳時代前期)で出土している。

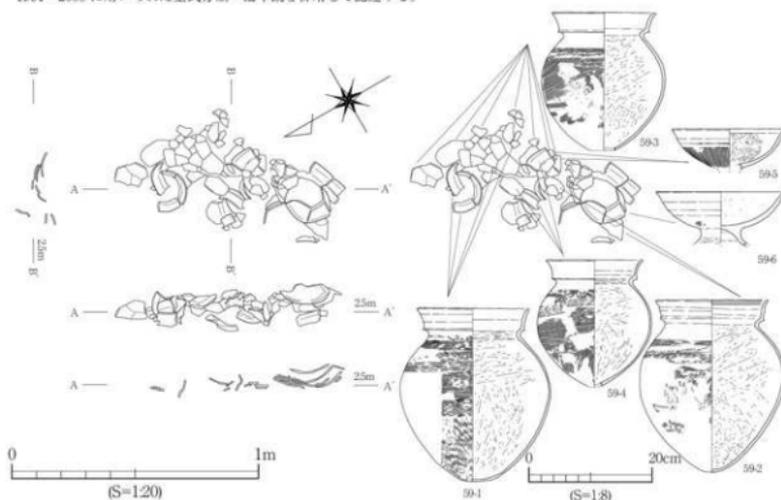
以上の出土した弥生土器は、出雲地方の編年では草田5～6期⁽²⁾に相当するものと考えられる。

遺構の性格と年代 このような土器が集中して出土する土器群や土器溜まりと呼称されるものは、山持遺跡の4区や市教委調査区等で見られるものではあるが、その詳細な性格は不明である。年代は出土している土器から弥生時代後期末と考えられる。

土器群2(第60図)

規模と形態 6区③の土坑が集中する標高2.5m付近で検出した遺構で、溝状遺構内で確認した。

(1) 『山持遺跡』Vol.1 鳥根県教育委員会 2005年
 (2) 弥生土器・古式土師器の記述は、花谷1987、松本1992、赤澤1992、中川1996、鳥根県教育委員会1998・2007a、松山1991・2000に用いられた型式分類・編年観を併用して記述する。



第58図 山持遺跡6区土器群1実測図

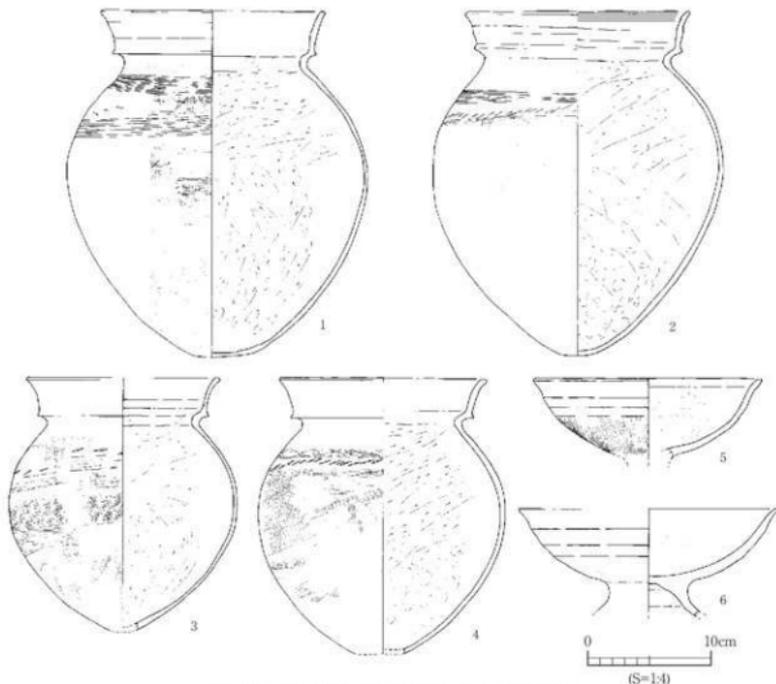
幅1m程の溝の中に東西方向3mの範囲で検出している。

土器群2出土状況(第61図) 土器群は非常に粘質な堆積土中から出土し、その出土場所は大きく3つに集中する地点に分かれる。それは溝の東端部分、それより1m程西で最も多くの土器が集中する部分、さらに0.4m程西の部分である。これらは溝に5cm程度の堆積があった後に廃棄されたものと考えられ、基本的には分散しないでまとも出土しているが、低脚坏(第63図10)のみは広範囲に散らばった状態で出土している。また西側の出土場所では、覆土中に炭や焼土が含まれており、その中からは骨片も出土している。

東端からは甕1個体分が出土し、完形のを横にして置いたような状態で出土している。西側の最も集中する場所では、ほぼ完形の甕7・器台3・低脚坏1個体と高坏の坏部片、砥石が出土しており、やや東側で甕・高坏の破片が出土している。完形のもはその場に置かれたような状態で検出されている。最も西側の集中地点では甕3・低脚坏1がほぼ完形の状態で、やや東側で砥石が出土しており、土器はその場に横にして置かれたような状況である。

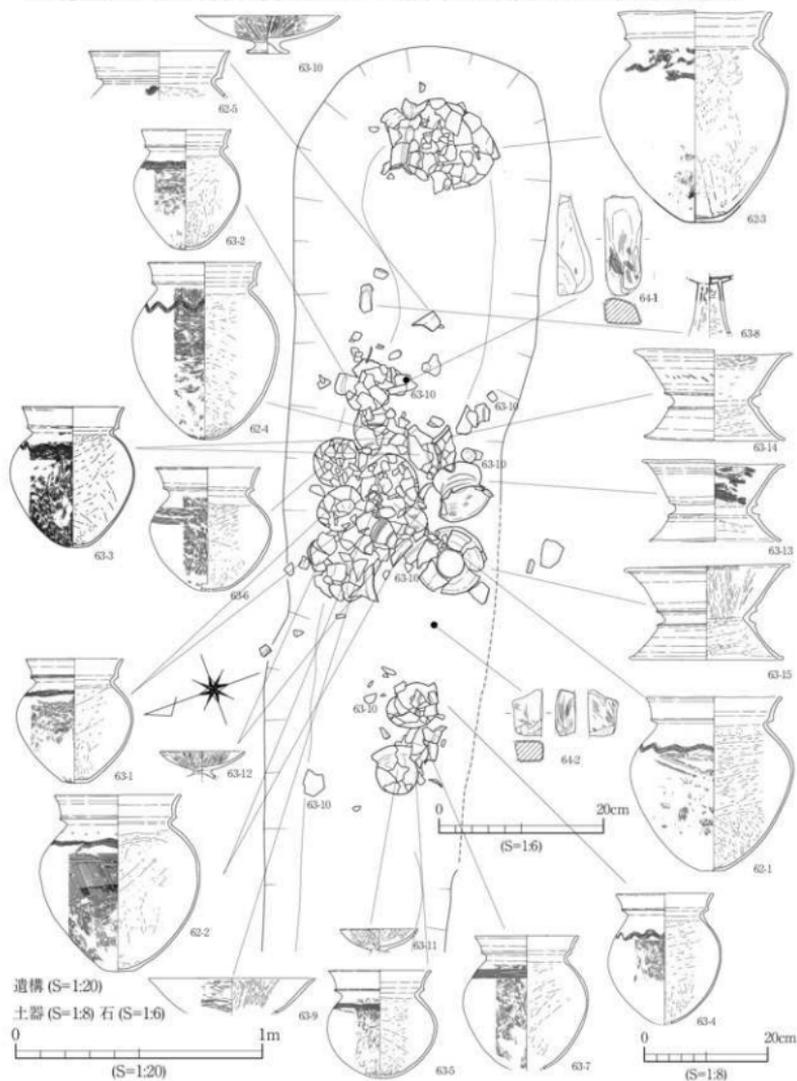
これら大きく3カ所で出土している土器群は、同時期の廃棄行為であるのかどうかの詳細は明らかにできなかったが、出土層位や出土レベル等は大きく変わるものではなく、大きな時間差を考慮する必要はないと考えられる。

土器群2出土遺物(第62図・63図・64図) 第62図1～5はやや大型の甕である。これらの肩部



第59図 山持遺跡6区土器群1出土土器実測図

には波状文が施されるのみであるが、2は棒状工具で刺突されたと考えられる円形の凹みが認められる。ただしこの凹みは全周するものではなく、確実に文様かどうかは断定できないものである。これらの底部はいずれも平坦面をもつが痕跡的なものに近い。口縁部はヨコナデによって仕上げられ、先端部はやや尖り気味で丸く収まるが、1は若干平坦面を作り出したようなものである。

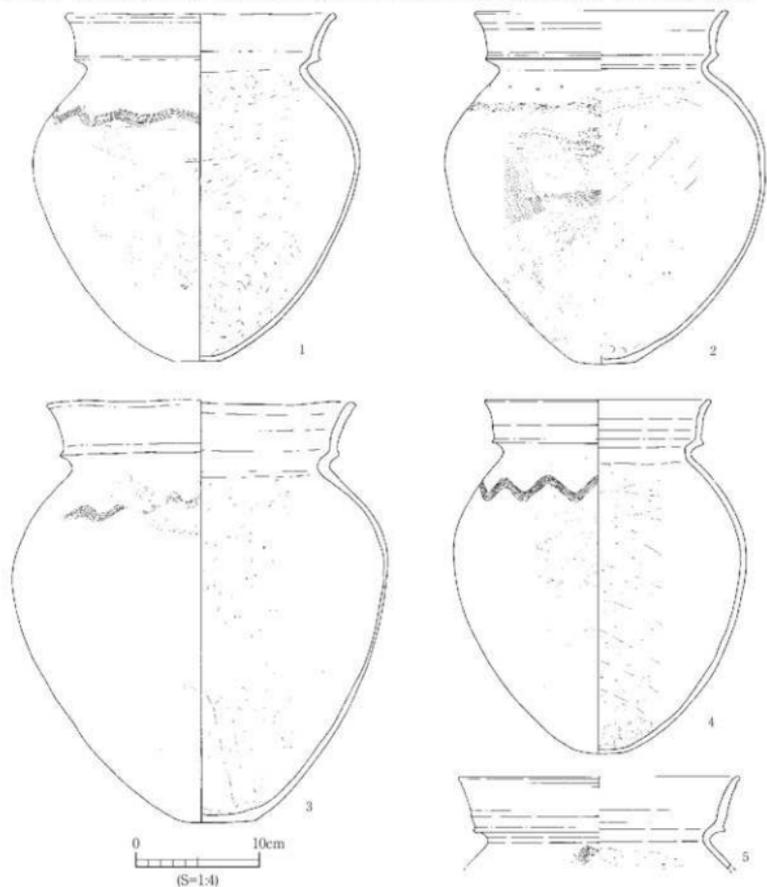


第 61 図 山持遺跡 6 区土器群 2 土器出土位置図

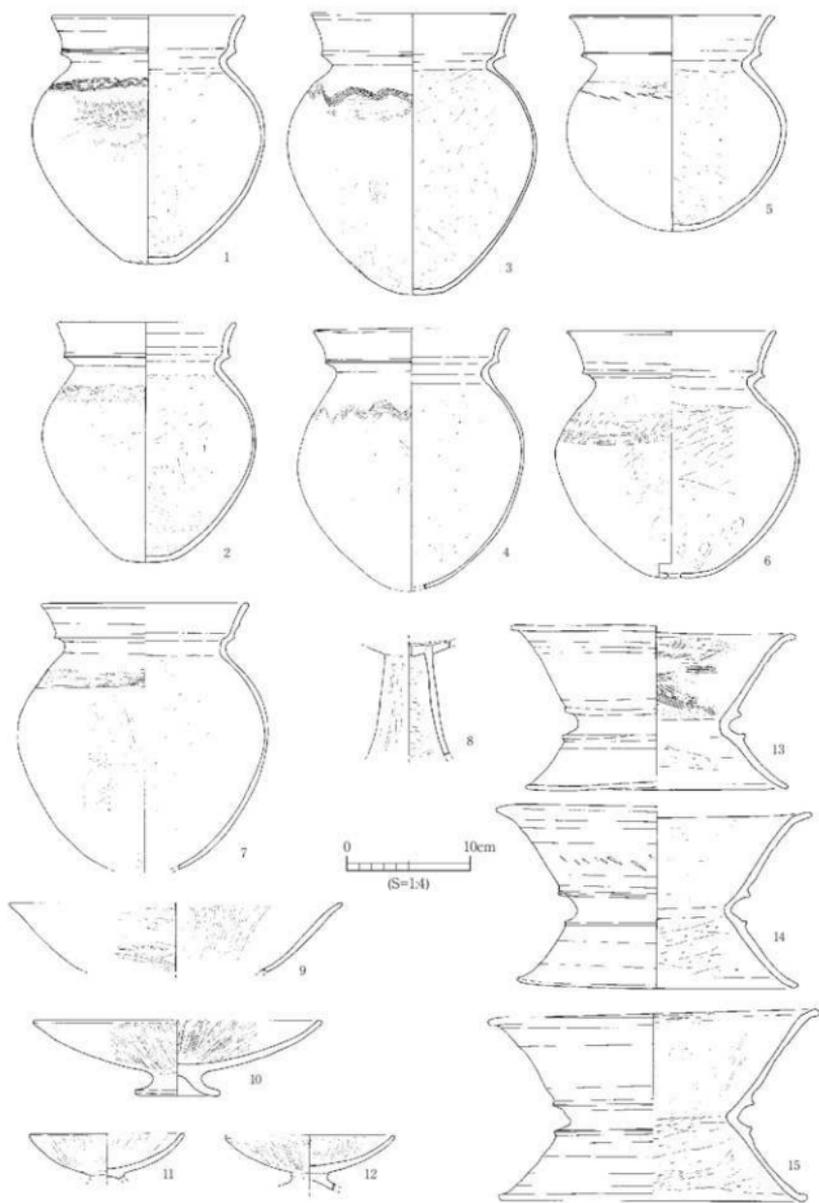
第63図1～7はやや小形の甕である。これらの甕の底部は痕跡的に平坦面が残るものであり、6には穿孔が施されている。1・2は肩部にやや波打った平行沈線文が、3・4には波状文が、5・6には平行沈線文と刺突文が施され、若干サイズの大きい7には平行沈線文が見られる。胴部形態はほとんど倒卵形であるが、5は丸底に近いものである。口縁部形態はヨコナデによって仕上げられ、端部に向かって薄く延びる形状である。端部の処理は丸く収めるものがほとんどであるが、5は平坦面が作り出されており他のものと比べて新しい様相をもつものである。

8・9は高坏の破片である。8は高坏の脚部で坏底部の充填部には刺突痕が認められる。9は坏部である。

10～12は低脚坏である。10はやや大型のもので、11・12はほぼ同サイズである。これらは大小の違いはあるが、坏部がほぼ直線的に広がるもので、ほとんど時期差がないものと考えられる。



第62図 山持遺跡6区土器群2出土土器実測図(1)



第63图 山持遺跡6区土器群2出土土器実測図(2)

13～15は鼓形器台である。サイズは13が若干小さいが14・15はほぼ同じようなサイズである。これらは筒部が狭まり、口縁部はヨコナデで仕上げられたもので、ほぼ同時期のものと考えられる。

以上出土した弥生土器は、出雲地方の編年では草田5期～6期に相当するものと考えられる。

第64図1・2は砥石である。1は土器が最も集中する場所から出土し、土器を取り上げた後のその下部から検出した。軟質の石材で4面とも使用痕が認められる。2は西側の土器群の中間地点から出土した小型のものである。欠けた面を除いて3面とも使用痕が認められる。

3は覆土中から出土した薄い板材である。表面に擦痕があるが用途等の詳細について不明である。

遺構の性格と年代 遺構の性格については、当初墓坑に伴う供献土器の性格も考えたが、そのような遺構に伴うものではなかった。明らかに溝状遺構に廃棄されたものではあるが、その詳細は不明といわざるを得ない。遺構の年代は出土した土器から弥生時代後期末と判断される。なお、覆土中の炭化物のAMS測定結果は $2010 \pm 40\text{yrBP}$ (暦年較正年代: 45BC～30AD(62.4%)、35～50AD(5.8%))であった。

(3) 土坑

SK12 (第65図)

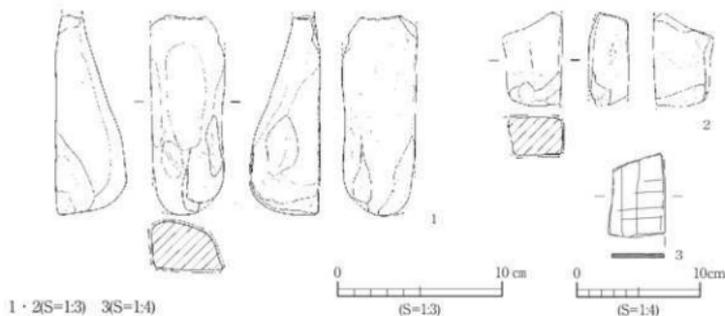
規模と形態 6区③の中央標高2.7m付近に位置する土坑で、他の土坑と切り合うものではなく単独で存在している。プランは不整形な長方形を呈し、長さ0.85m、幅0.7m、深さ0.26mを測る。土坑内には黒色系の粘質土が堆積し、覆土からは数片の土器が出土している。

出土遺物 (第66図) 1は覆土中から出土した甕の口縁部である。複合口縁部は直線的に反し、端部は尖り気味で丸く収める。草田5期に相当する弥生土器と考えられる。

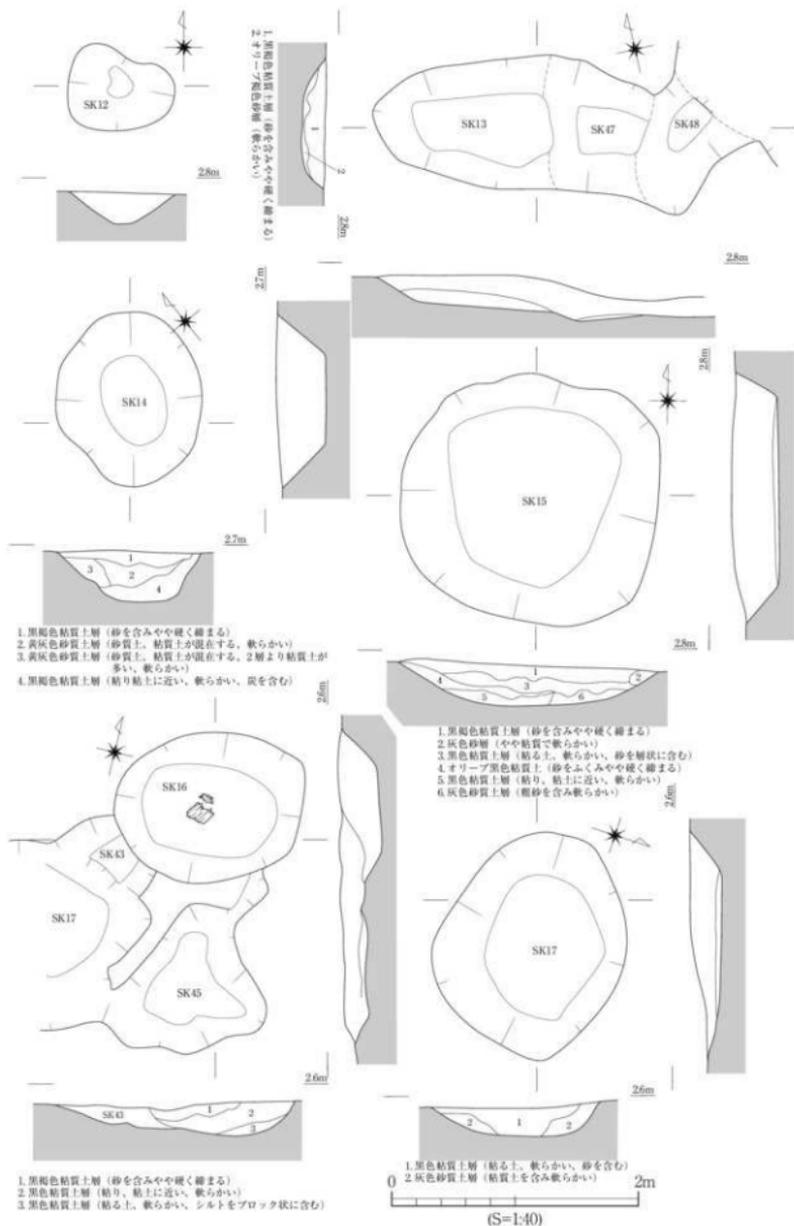
遺構の性格と年代 シルト層上部から掘り込まれている遺構であることや、出土した弥生土器から弥生時代後期末と考えられる。

SK13・SK47・SK48 (第65図)

規模と形態 6区③の中央標高2.7m付近、SK12の西側に位置する土坑で、検出当初は溝状遺構と認識していたが、最終的に5つの土坑(SK13・47～50)が切り合っているものと判断したものである。最も西に位置するSK13は平面形態が不整形な楕円状を呈し長さ1.45m以上、幅1.1m、深さ0.25mを測る。土坑内の覆土は黒色粘質土・オリブ褐色砂であり、土器片が出土している。



第64図 山持遺跡6区土器群2出土石器・木製品実測図



第 65 図 山持遺跡 6 区土坑実測図 (弥生時代 - 1)

SK47はSK13の東側に切り合って存在し、おそらく不整形な楕円形又は長方形を呈したものと推測される。長さは0.75 m以上、幅は1.0 m、深さ0.2 mを測る。覆土は黒褐色粘質土で、土器片と砥石が出土している。

SK48はSK47・49・50と切り合って存在し、平面形は不整形な長方形と思われるが詳細は不明である。長さ0.9 m以上、幅0.75 m、深さ0.3 mを測る。覆土は黒褐色粘質土で、遺物は出土していない。

SK13 出土遺物 (第66図) 1は覆土中から出土した甕の口縁部である。複合口縁部は直線的に外反し、端部は尖り気味で丸く取める。草田5期に相当する弥生土器と考えられる。13は砥石であり、白色の軟質石材で使用痕が認められる。

遺構の性格と年代 SK13はシルト層上部から掘り込まれていることや出土した弥生土器から弥生時代後期末と考えられる。切り合っているSK47・48もほぼ同じような時期と推測される。

SK14 (第65図)

規模と形態 6区③の西側標高2.7 m付近に位置する土坑で、土坑が集中する地点の西に近接して存在する。平面形態は不整形な楕円形を呈し、長さ1.4 m、幅1.15 m、深さ0.4 mを測る。覆土は黒色系の粘質土が堆積していた。遺物は土器片が出土している。

遺構の性格と年代 遺物の出土がないことから詳細を明らかににはできないが、シルト層上部から掘り込まれていることや周辺部の土坑等の状況から弥生時代後期末頃と思われる。

SK15 (第65図)

規模と形態 6区③の中央標高2.7 m付近に位置する土坑で、東西方向に延びる2本の溝の間から単独で検出された。平面形態は不整形な方形を呈し、長さ2.1 m、幅2.05 m、深さ0.36 mを測る。覆土は暗色系の粘質土・砂質土が堆積しており、土器片が数点出土している。

出土遺物 (第66図) 3は覆土中から出土した甕の口縁部である。ヨコナデによって仕上げられた複合口縁は外反し、端部は尖り気味である。草田5期に相当する弥生土器と考えられる。

遺構の性格と年代 出土遺物から弥生時代後期末と考えられる。

SK16・SK43・SK45 (第65図)

規模と形態 6区③の西側標高2.5 m付近に位置する土坑群であり、4つ以上の土坑 (SK16・17・43・45) が切り合っているものと判断した。最も北に位置するSK16は平面形態が不整形な楕円状を呈し長さ1.5 m、幅1.2 m、深さ0.3 mを測る。土坑内の覆土は黒色系の粘質土が堆積しており、床面付近からは板状の木片が出土している。SK43はSK16とSK17と切り合った土坑で、平面形は不整形な楕円の可能性があるが詳細は不明である。規模は長さ0.6 m以上、幅0.75 m、深さ0.2 mを測り、覆土は黒色系の粘質土が堆積し遺物は出土していない。SK45はSK17と若干切り合っているものと考えられる。平面形は不整形な三角形状を呈し、規模は長さ1.2 m、幅1.1 m、深さ0.2 mを測る。覆土は黒色系の粘質土が堆積し遺物は土器片が出土している。

遺構の性格と年代 これらの土坑の時期は、出土遺物が無く詳細を明らかににはできないが、シルト層上部から掘り込まれていることや周辺の土坑等の状況から弥生時代後期末頃と思われる。なおSK16の覆土出土の炭化物のAMS測定結果は1740 ± 30BP(暦年較正年代245 ~ 340AD)であった。

SK17 (第65図)

規模と形態 前述の土坑群の西側、標高2.6 m付近に位置し、SK43・45と切り合っている。平面

形は不正な楕円形を呈し、長さ1.85m、幅1.6m、深さ0.25mを測る。覆土は暗色系の粘質土・砂質土で、遺物は出土していない。

遺構の性格と年代 遺物が出土していないことから詳細を明らかににはできないが、シルト層上部に掘り込まれている点や周辺部の土坑の状況から弥生時代後期末と考えられる。

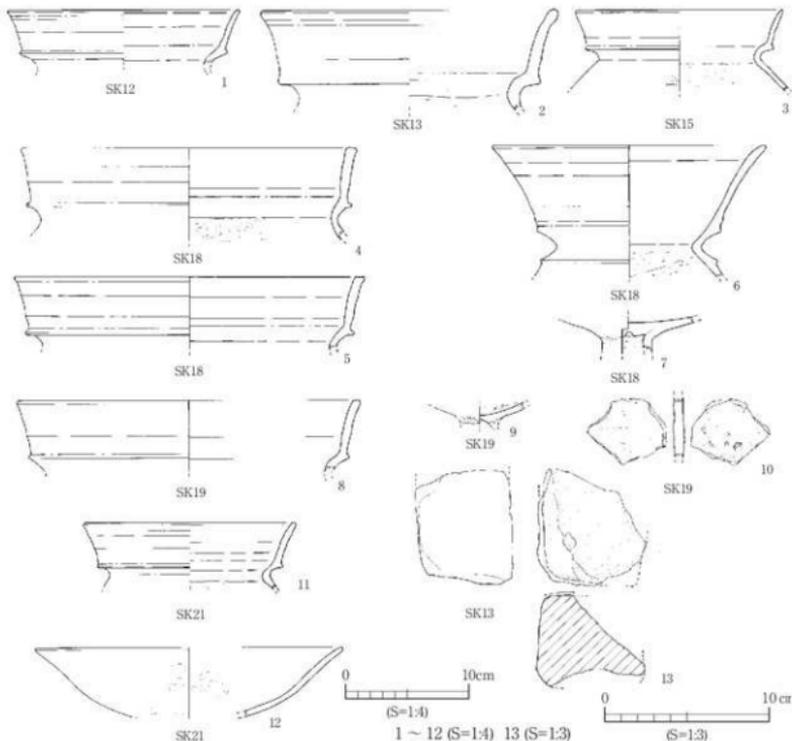
SK18 (第67図)

規模と形態 調査区の南端標高2.6m付近で検出した大型の土坑で、調査区外にも続いていると考えられる。平面形は方形を呈すと推測され、規模は長さ4m、幅1.7m以上、深さ0.4mを測る。覆土は暗色系の粘質土で、土器片が出土している。

出土遺物 (第66図) 4～7は覆土中から出土した土器である。4・5は、大型の甕の口縁部でありヨコナデによって仕上げられた複合口縁部は直立気味であり、端部は面をもっている。6は鼓形器台の上半部であり、受部・脚部ともヨコナデによって仕上げられ、筒部は非常に短い。7は高環の接続部で孔が確認される。

これらの出土土器は甕口縁部の端部や鼓形器台の様相から小谷2式前後と考えられる。

遺構の性格と年代 SK18は大型のもので、周辺で検出した土坑と同列のものとして判断して良い



第66図 山持遺跡6区土坑出土土器・石器実測図

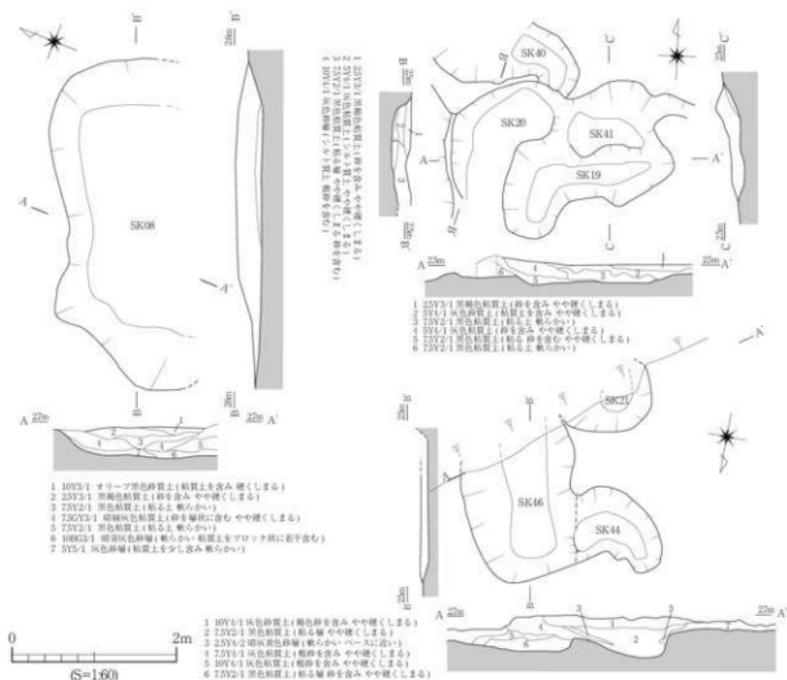
か検討の余地はあるが、全体が分からないことから今回は土坑と判断しておく。時期は出土した古式土師器から古墳時代前期前半頃と考えられる。

SK19・SK20・SK40・SK41 (第67図)

規模と形態 6区③の西側標高2.6m付近の土坑が集中する地点に位置する土坑群であり、4つ以上の土坑(SK19・20・40・41)が切り合っている。最も南に位置するSK19は平面形態が不整形な楕円状を呈し長さ2.1m、幅1.2m、深さ0.15mを測る。土坑内の覆土は暗色系の粘質土が堆積しており、土器片が出土している。SK20はSK19の北西に切り合って検出した土坑で、平面形態は不整形な楕円形状を呈す。規模は長さ1.7m程、幅0.8m以上、深さ0.25mを測り、覆土は暗色系の粘質土・砂質土である。遺物は出土していない。SK40はSK20及びSK30と切り合った土坑で、平面形態は不整形な楕円形と推測される。規模は長さ0.9m以上、幅0.7mを測り、覆土は黒色系の粘質土であり、出土遺物はない。SK41はSK19・20と切り合った土坑で、平面形態は不整形な楕円形状と推測される。規模は長さ1.2m以上、幅0.8m以上、深さ0.3mを測り、覆土は黒色系の色調の粘質土である。遺物は出土していない。

SK19出土遺物 (第66図)

8～10は出土した土器片である。8は複合口縁の甕であり、口縁部に面をもつ。9は低脚杯の接続部の破片であり、脚部が剥がれたもので接続部の状況が分かる資料で

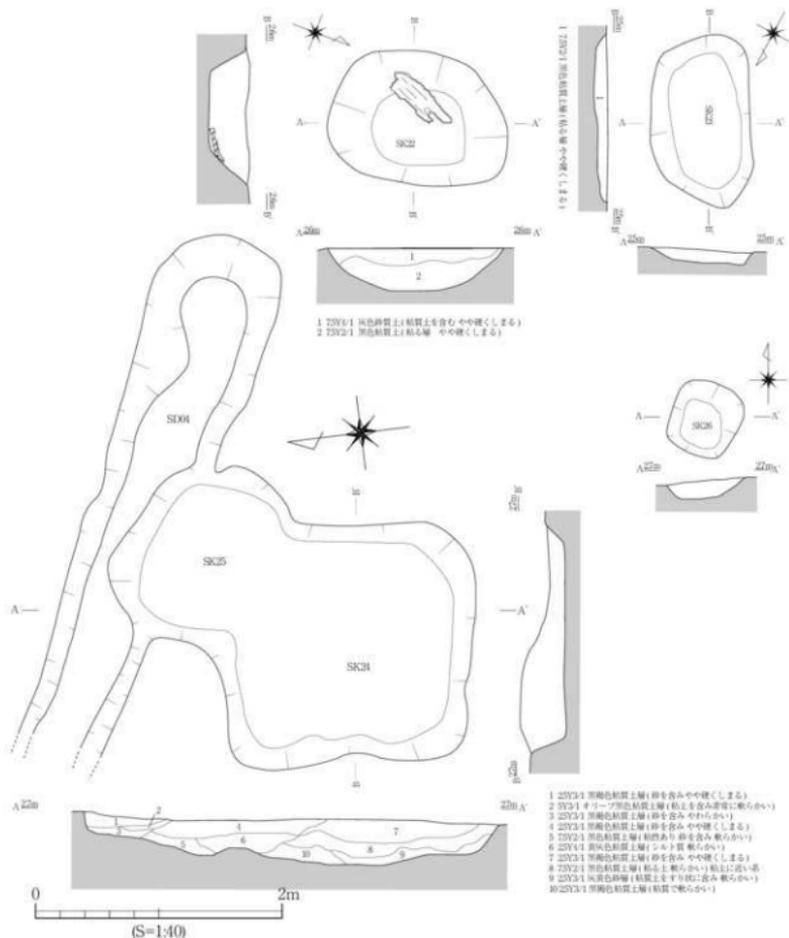


第67図 山持遺跡6区土坑実測図(弥生時代-2)

ある。10は竈などの胴部片と考えられるものであるが、外面が発泡したような状況の異質なものである。これらのうち8のみが時期が判断できる資料であり、小谷2式前後のものと考えられる。
遺構の性格と年代 これらの土坑の時期は、遺物が出土しているSK19は古墳時代前期前半と考えられる。他のものは時期が明確にはできないが、周辺の土坑の状況から弥生時代後期末～古墳時代前期前半と推測される。

SK21・SK44・SK46 (第67図)

規模と形態 6区③の南西側標高2.6m付近の土坑が集中する地点に位置する土坑群である。SK21は調査区南壁付近で検出し、調査区外にまだ続くものである。平面形態は不整な楕円形と推測され、



第68図 山持遺跡6区土坑実測図(弥生時代-3)

長さ0.4 m以上、幅1.1 m程度、深さ0.5 mを測る。覆土は暗色系の粘質土・砂質土が堆積し土器片が出土している。SK44はSK46と切り合った土坑である。平面形は不整形な楕円形状のもので、長さ1.1 m以上、幅0.75 m、深さ0.1 mを測る。覆土は暗色系の粘質土が堆積し遺物は出土していない。SK46はSK21・44と切り合った土坑であり、南側にまだ続くものである。平面規模は不整形な長方形と推測され、長さ1.7 m以上、幅1.45 m、深さ0.4 mを測る。覆土は暗色系の粘質土が堆積し、土層からSK21より古いものであると判断される。遺物は出土していない。

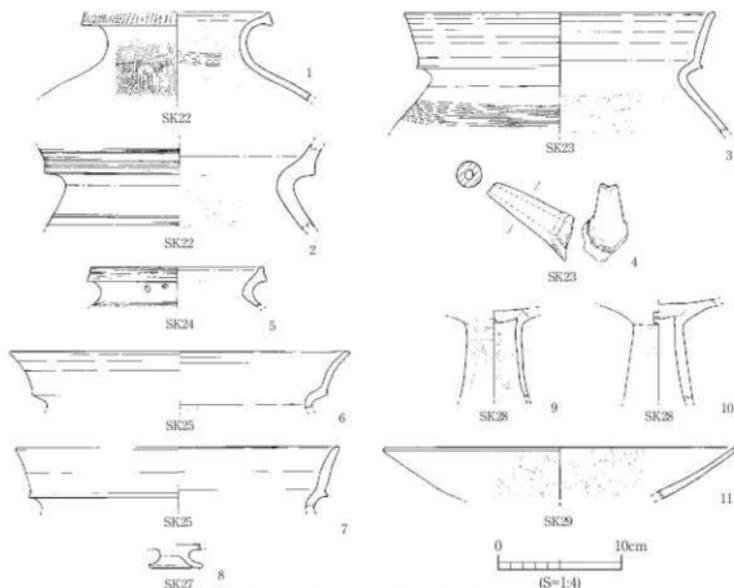
SK21 出土遺物 (第66図) 11・12は出土した土器である。11は複合口縁の甕で、ヨコナデによって仕上げられた口縁部は外反し端部は尖り気味である。12は高坏の坏部である。これらの土器は草田5期に相当すると考えられる。

遺物の性格と年代 これらの土坑の時期は、遺物が出土しているSK21は弥生時代後期末と考えられる。SK46・44もほぼ大きく離れた時期のものではないと考えられる。

SK22 (第68図)

規模と形態 6区③の調査区南西隅の標高2.5 m付近に単独で存在する土坑である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長さ1.5 m、幅1.1 m、深さ0.35 mを測る。覆土は暗色系の粘質土・砂質土が堆積し床面付近からは板材片と土器片が出土している。

出土遺物 (69図) 1・2はSK22の覆土中から出土した土器である。1は甕で拡張された口縁部に凹線文と刻みがいはいのものである。2は複合口縁の甕で多条の平行沈線文を施すタイプと推測される。これら出土土器の時期は、1がIV様式、2が草田3 (V様式) に属すると考えられ、時期差が認められる。また基本的にIV様式のものシルト層上部から出土しないものであり、非常に例外的な



第69図 山持遺跡6区土坑出土土器実測図(2)

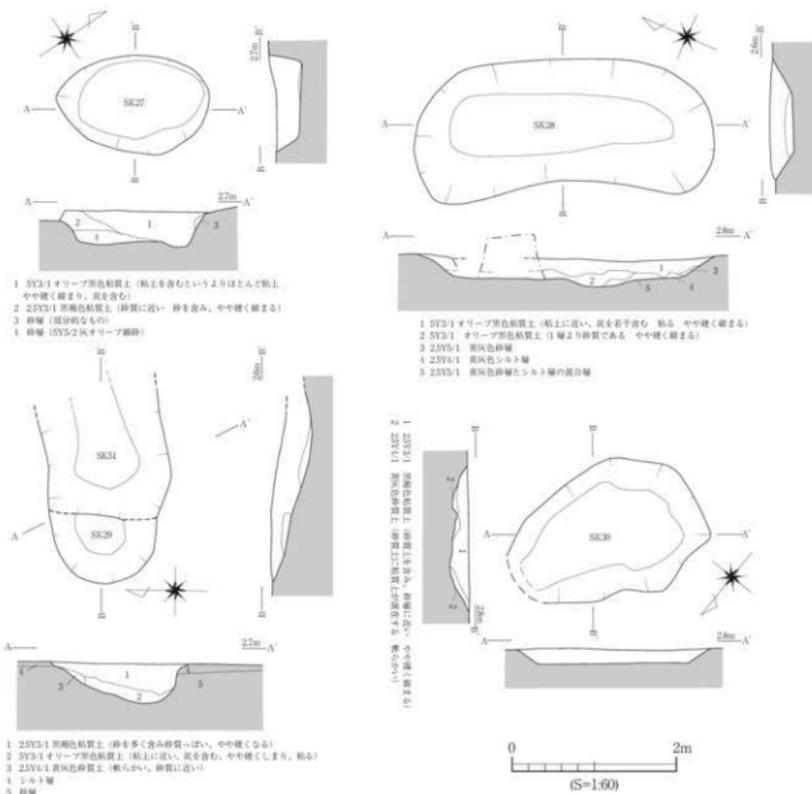
ものである。また、底付近から出土した板材片をC14年代測定を実施しており、測定年代結果は1768 ± 39BP (暦年較正年代: 220 ~ 340AD) である。この測定年代は概ね現段階で想定される土坑群の時期と大きな齟齬は生じない結果と考えられる。

遺構の性格と年代 土坑の時期は、出土した土器から判断すると弥生時代後期後葉と推測される。

SK23 (第68図)

規模と形態 6区③の調査区南西隅の標高2.5m付近に位置する土坑であり、SK22の西側に存在する。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長さ1.45m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。覆土は黒色粘質土が堆積し土器片が出土している。

出土遺物 (69図) 3・4はSK23の覆土中から出土した土器である。3は複合口縁の甕であり、口縁部はヨコナデによって仕上げられ端部は丸く収まる。肩部に平行沈線文が施される。4は注口土器の注口部で先端に向かって細くなる形状である。3・4は草田5期に相当する弥生土器と考えら



第70図 山持遺跡6区土坑実測図(弥生時代-4)

れる。

遺構の性格と年代 土坑の時期は、出土している土器から弥生時代後期末と推測される。

SK24・SK25 (第68図)

規模と形態 6区③の調査区西側標高2.7m、土坑が集中する地点に位置する切り合った土坑である。土層断面図からSK24→SK25→SD04の順に造られていたと判断される。SK24はほぼ正方形に近い形状を呈し長さ・幅2m、深さ0.35mを測る。覆土は暗色系粘質土・砂質土が堆積し土器片が出土している。SK25はSK24の北東隅と切り合って存在し、不整な楕円形状を呈す。長さ1.55m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。覆土は暗色系の粘質土・砂質土が堆積し、土器片が出土している。

SK24・25出土遺物(第69図) 5はSK24から出土した壺の口縁部である。複合口縁部の口縁帯には密に沈線文が施され頸部には焼成後に穿たれた孔が2つある。草田2期前後に相当するものと考えられる。6はSK25から出土した複合口縁の甕である。口縁はヨコナデによって仕上げられる。草田5期に相当すると考えられる。

遺構の性格と年代 出土している弥生土器からSK24は弥生時代後期後葉、SK25は弥生時代後期末頃と考えられる。

SK26 (第68図)

規模と形態 6区③の調査区北西側標高2.7m付近に位置し、土坑が集中している箇所より外れた位置に存在する。平面形は不整な方形形状を呈し、長さ0.55m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代 出土遺物がないことから詳細な時期については不明であるが、周辺部の土坑の状況から弥生時代後期末～古墳時代前期前半と思われる。

SK27 (第70図)

規模と形態 6区③の東側標高2.6m付近で検出した土坑である。平面形は不整な楕円形状を呈し、長さ1.85m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。覆土は暗色系の粘質土が堆積し、土器片が出土している。

出土遺物(第69図) 7は複合口縁の甕で口縁部はヨコナデによって仕上げられ、端部は丸く収める。8は低脚杯の脚部である。これらは草田5期前後に相当すると考えられる。

遺構の性格と時期 出土した土器から弥生時代後期末と推測される。

SK28 (第70図)

規模と形態 6区③の東側標高2.5m付近に位置し、SK27の南側で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ3.6m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。覆土は黒色系の粘質土が堆積し、土器片が出土している。

出土遺物(第69図) 9・10は高杯の脚である充填部分には刺突痕が確認される。草田5期前後に相当すると考えられる。

遺構の性格と時期 出土弥生土器から弥生時代後期後葉頃と推測される。

SK29・SK51 (第70図)

規模と形態 6区③の東側標高2.6m付近で検出した切り合った2つの土坑である。SK29東側をSK51と切り合ったもので、平面形の詳細は不明であるが不整な楕円形状のものと思われる。長さ0.8m以上、幅1.3m、深さ0.2mを測り、覆土は黒褐色粘質土が堆積していた。覆土からは土器片が出土している。SK51は東側を後生の落ち込み状遺構に切られている。平面形態は不整な楕円形状の

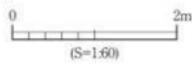
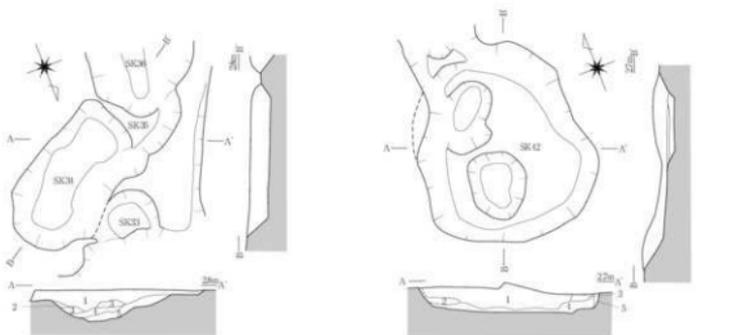
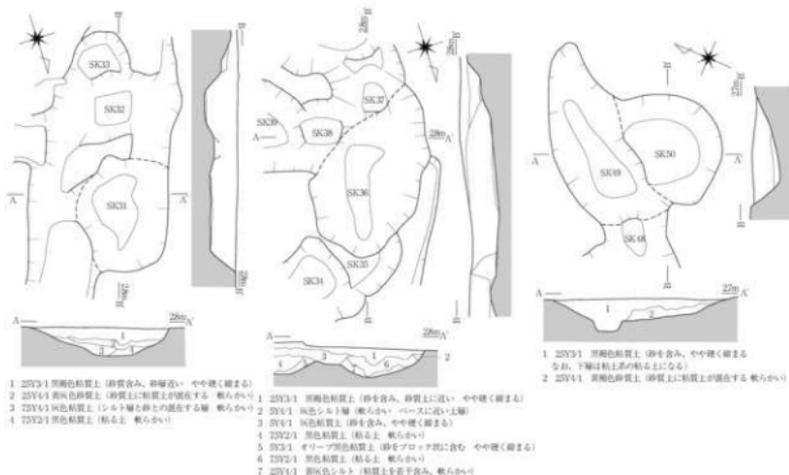
ものと推測され、長さ1.6m以上、幅1.5m、深さ0.4mを測る。覆土は黒色系の粘質土である。

出土遺物(第69図) 11はSK29から出土した低脚杯の坏部であり、坏部が大きく広がるものである。草田5期前後に相当するものと考えられる。

遺構の性格と時期 SK29は出土した弥生土器から弥生時代後期末と考えられ、SK51もその前後と考えられる。

SK30 (第70図)

規模と形態 6区③の中央部標高2.7m付近で検出した土坑であり、SD04と切り合っている。平面



第71図 山持遺跡6区土坑実測図(弥生時代-5)

規模は不整な楕円形状を呈し、長さ2.4m、幅1.6m、深さ0.2mを測る。覆土は黒色系の粘質土が堆積し、遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 遺物が出土していないことから時期は明確にできないが、周辺の土坑群の状況から弥生時代後期～古墳時代前期前半と推測される。

SK31・SK32・SK33 (第71図)

規模と形態 6区③の西側標高2.7m付近の土坑が集中する場所で検出した。完掘するまで切り合った土坑群と認識できなかったものである。SK31は不整な長方形の平面形態を呈し、長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.35mを測る。覆土は黒色系の粘質土で遺物は出土していない。SK32は平面形態は明確にできないが不整形な楕円状と思われ、長さ1.5m、幅0.8m以上、深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色系粘質土で、土器片が出土している。SK33は浅い土坑であり平面形態は明確でない。長さ0.6m以上、幅0.7m、深さ0.2mである。覆土は黒褐色系の粘質土で遺物は出土していない。

出土遺物 (第72図) 1はSK32から出土した複合口縁の甕である。口縁部には擬凹線文が施されるもので草田3期に相当すると考えられる。

遺構の性格と時期 SK32は出土弥生土器から弥生時代後期後葉と推測される。SK31・33については明確にはできないが、SK32の時期と大きく変わらない弥生時代後期後葉～古墳時代前期前半頃と考えられる。

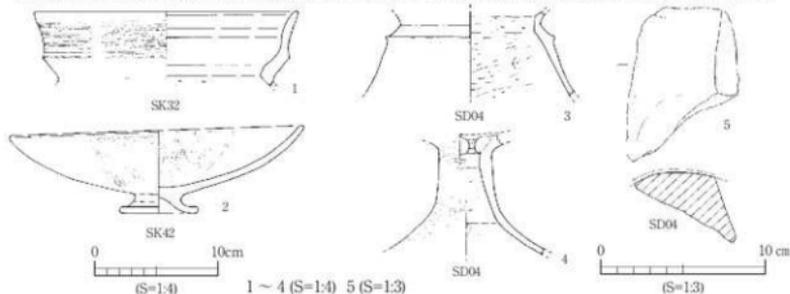
SK34・35 (第71図)

規模と形態 2基の土坑は6区③西側標高2.7m付近の土坑群が切り合った場所で検出した。両土坑の先後関係は断面土層では明確にできなかった。SK34は不整な長方形の平面形態を呈し、長さ1.9m、幅1.0m、深さ0.35mを測る。覆土は黒色系の粘質土である。SK35は深さ0.1m程の浅い土坑であり、SK34・36と切り合っており平面形態は不明であるが幅0.8m以上の土坑と考えられる。覆土は黒褐色粘質土である。両土坑とも遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 出土遺物がないことから明確でないが、周辺の土坑群の状況から弥生時代後期末～古墳時代前期前半頃と考えられる。

SK36・SK37・SK38 (第71図)

規模と形態 6区③西側標高2.8m付近の土坑群が集中する場所で検出した。土層断面図からSK36→SK38の順で掘られているものと判断される。SK36は不整な楕円形状を呈し、長さ2.1m、幅1.3m、深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色系の粘質土である。SK37は深さ0.25mの浅い土坑であり、



第72図 山持遺跡6区土坑・SD04出土土器・石器実測図

平面形状は明確でない。覆土は黒色系の粘質土である。SK38 は切り合いによって平面形態が明確ではないが不整な楕円形状と思われる。長さ0.5 m以上、幅0.9 m、深さ0.25 mを測る。覆土は灰色粘質土である。これら3基の土坑からは遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 出土遺物がないことから時期は明確にできないが、周辺の土坑群の状況から弥生時代後期末～古墳時代前期前半頃と推測される。

SK42 (第71図)

規模と形態 6区③の西側標高2.6 m付近の土坑が集中する場所で検出した。平面形態は不整な方形形状を呈し、長さ2.35 m、幅2 m、深さ0.3 mを測る。底面の2カ所でさらに一段深くなる部分があり、別の土坑が切り合っていた可能性もあるが、1つの土坑と判断している。覆土は黒褐色系の粘質土であり、土器片が出土している。

出土遺物 (第72図) 2はSK42の覆土中から出土した低脚坏である。坏部がやや内湾しながら大きく広がるタイプのもので、草田5期に相当するものと考えられる。

遺構の性格と時期 出土した弥生土器から弥生時代後期末頃と推測される。

SK49・SK50 (第71図)

規模と形態 6区③の中央西側標高2.6 m付近で検出した切り合った土坑であるが、当初1つの土坑と認識していたことから土層断面から前後関係を判断できなかった。SK49はSK48とも切り合っており、不整な楕円形状を呈す。規模は長さ2.3 m、幅0.9 m、深さ0.4 mを測り、覆土は黒褐色系の粘質土である。SK50は不整な楕円形状を呈すものと考えられ、長さ1.0 m以上、幅1.4 m、深さ0.3 mを測る。両土坑とも遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 出土遺物がないことから不明確であるが、周辺部の土坑の状況から弥生時代後期末～古墳時代前期前半頃と思われる。

(4) 溝状遺構

SD04 (第57図)

規模と形態 6区③の西側標高2.6 m付近に位置し、多数の土坑群と切り合っている。当初周溝状に何らかを囲む溝の可能性を考えていたが、確実に判断できるものではなかった。本来は北東-南西方向の1条と、北西-南東方向の2条に分けて考える必要があるかもしれないが、一括して同一の遺構として取り扱った。遺構は幅0.7～1.0 m、深さ0.2 m程のもので直線的に延びているものである。北西-南東方向に延びているものは、北側のものが長さ6.2 m、南側のものが長さ5.2 mを測り、ほぼ平行に走っている。南側のものからは土器群2 (第60図) として既に述べたように完形の土器が多数集中して出土している。北東-南西方向の1条はSK30・31・34・36等と切り合っており、分かりにくいものだが、SK34あたりまでは延びていたものと想像される。

出土遺物 (第72図) 出土遺物は土器群2で述べた草田5・6期に属する弥生土器 (第62・63図) や砥石 (第64図) の他にいくつか出土している。3は鼓形器台の脚部の破片である。全体的に裾の広がり土器群2で見られるものよりはあまり広がらないものである。4は高坏の脚部で接続部の刺突痕が確認される。これらは草田5～6期頃のものと考えられる。

遺構の性格と時期 出土土器から弥生時代後期末と考えられる。その性格については不明としか言いようがない。

第6章 道路遺構の調査

中世頃と考えられるオモカス層（湿地に起因する腐植土層）を除去した段階で、古代の遺構を検出した。この中で、注目される成果は道路遺構の発見であった。杭列を伴い人頭大の礎を大量に用いた盛土工法で構築されたこの道路遺構は、南北方向に延びるものである。調査区では旧河道（SX01）を土橋状に渡るように構築された部分とその前後が検出され、堅固に構築された構築状況は古代の土木技術を知る上で貴重な発見となった。また周辺部から出土する遺物は様々な情報を提供するものであった。特に人物を墨画で描いた板絵は類例のないものであり、中には吉祥天を描いた仏画と考えられるものも含まれている。

第1節 調査の概要

(1) 古代の遺構の分布と概要（第73図）

第73図はオモカス層除去した段階で、道路遺構が築造された前後の状況を示した図である。前章で述べた弥生時代後期～古墳時代前半頃の土坑等と遺構面は変わらないものであり、シルト層上部が遺構面となる。この図では、弥生時代後期末～古墳時代前期前半頃の遺構を意図的に除いたものである。なお、道路遺構が横断する旧河道（SX01）は道路遺構築造直後の状況であり、まだ堆積によって完全に埋没していない状況となる。

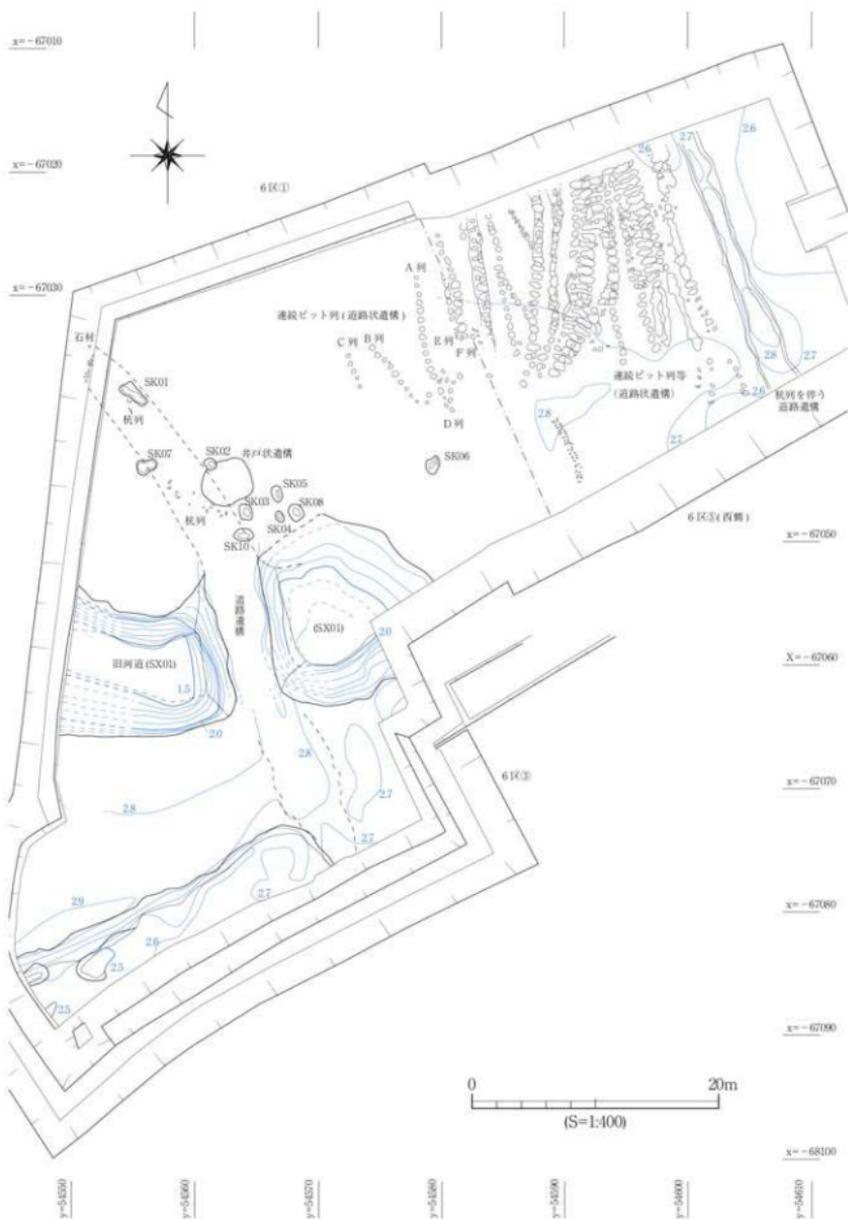
古代のものと考えられる遺構は、6区①・③を縦断する東西方向の道路遺構の他に、6区①で土坑10基（時期不明のものも含む）、井戸跡と思われる落ち込み1基、連続ビットによる道路状遺構群である。なお、今回報告する6区①・③の東側に設定した6区⑤でも道路遺構と考えられるものが多数検出されている。本報告の道路遺構を理解する上で重要であることから同一図面で掲載しているが、詳細については次年度刊行予定の調査報告書を参照してもらいたい。

その他に平面的には確認できていないが、調査区の西壁（第5図）で幅1m程の畦畔が、各壁面では水田層が確認されていることから、古代のある段階からは周囲は水田であった可能性が高い。その後、中世の湿地によるオモカス層が全域を覆っていることから、中世段階には完全に湿地化したものと考えられる。

(2) 道路遺構の概要（第74・75図）

概要 道路遺構は南北方向に延びるものであるが、調査で平面的に確認できたものは長さ26m程である。旧河道（SX01）より北側の部分は、関連する可能性がある杭列や調査区の西壁で確認された礎や盛土から復元している。これら復元した総延長は46mとなる。確実に調査区の南北に続くことは間違いないが、調査区南端付近は近世の河道によって大部分が破壊されていることから残存状況は良くない可能性がある。また、北側については、比較的良好に残存している可能性が考えられる。平成20年度の調査では、想定される延長部分を通る可能性がある7区②（第3図）の調査が実施されたが、道路遺構は検出されていない。この調査区よりさらに北側を通過する可能性を現段階では考えておきたい。

道路遺構の主軸 道路遺構を検討する上で、直線的に構築されたものであるのか、何らかの方位を意識したのか、また何らかの地割りに沿ったものかどうかといった点が課題である。第73図で



第73図 山持遺跡6区オモカス層除去段階実測図

は直線を指向しながらも曲がった印象を受ける復元となっているが、構築段階で使用された石材の設置状況（第74図）や杭列の状況（第75図）から若干検討しておきたい。

多数検出している石材は基本的にランダムに盛土の中に埋め込まれたものがほとんどと考えているが、道路遺構の南側（6区③）で検出した部分では道路の西側の端ラインを示すと思われるような石列（第74図）を検出している。ただしこの石列は明らかに旧河道（SX01）を横断する部分とは軸が異なっているものである。

次に第75図で道路遺構の下部から検出した杭列の軸を検討してみたい。これらを見ると北側の旧河道（SX01）の土橋状の部分の軸と南側の部分の軸とは明らかに異なっていることが分かる。また、南側の部分については真っ直ぐな軸ではなく、南から向かったときに途中から東へ折れるような杭の並びであり、あたかも北側の土橋部分にすり付けるように角度を変えているような印象を受けるものである。

以上の石材や杭列の状況から同一の整然とした真っ直ぐな主軸をもった道路遺構とは現状では考えられないものである。ただ、主軸が異なっていることは、旧河道を渡る部分という特殊な地形部分であることが大きな原因かもしれない。

(2) 道路遺構の調査方法

概要 調査は、平成18年度の調査に道路遺構の北側部分である旧河道（SX01）を横断する部分を、平成19年度にその南側部分を実施している。

平成18年度 平成18年度の6区①調査では、グリッドのIライン（X=67.060軸）に沿ってサブトレンチを設定し、断面を確認した。その結果、表面で確認される石材が下部にまで存在し杭列を伴うことが判明した。ただし、旧河道（SX01）が平面的に確認出来ていなかったこともあり、全体を把握するまでには至っていなかった。道路遺構西側の調査で落ち込みが存在している可能性が高まる中で、道路遺構上面で確認される石材等から主軸を設定し、南北軸1本、東西軸2本の土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、石材が多数検出され、その段階で石材の図化を実施した。図化にあたっては、道路の本来機能している路面は石材が露出していないと考えられたが、この部分についても石材をある程度露出させ同一図面に記録した。また、並行して立面図作成も行ったことから時間を要すこととなった。

石材の記録後ベルトを残して掘り進めたが、ここで多数の杭列・横木等が石材と一緒に確認された。これらの記録方法については課題を残したが、最終的に杭列とそれに絡む横木を中心に平面図と立面図を記録することとして、盛土と共に出土する石材や木の枝の小さいものは必要に応じて写真で記録するのみとした。この作業は掘り進めながら図面を補足していく作業となったことから、非常に時間を要すこととなった。

以上の調査作業は、湧水との闘いでもあり、特に道路の下端の調査でもある旧河道（SX01）の掘り下げは何度か水中ポンプの移動や増設等を行ったが、壁面の崩落や調査地の水没等があり、何度か調査を断念することとなった。最終的に北側を砂礫層の調査で掘り下げたことで湧水が減ったことから、ある程度まで明らかにすることは出来たが、道路遺構の杭列の平面的な把握や盛土の構築と石材との関係等で十分な調査を行うことは出来ず、課題が残った。

平成19年度 平成19年度の6区③の調査では、前年度に湧水に悩まされた点を解消し、表土掘削で必要以上に掘削することがないようにする必要があった。湧水については調査区北側に溝と溜め



第74図 山持遺跡6区道路遺構全体図(1)



第75图 山持遺跡6区道路遺構全体図(2)

析を掘り残して実施したことから、悩まされることはなかった。また、表土掘削はオモカス層を残し、人力で除去することとし、古代の状況を平面的に明確に把握することとした。

道路遺構の調査は、道路遺構の南側にどのように連続するのか、平地での構築方法はどうか、周辺の地形はどうかといった課題に主眼をおいて実施した。

道路遺構の調査用の軸設定は前年度の調査の延長で行い、南北軸1本、東西軸1本の十字に土層観察用ベルトを設定し掘り進めた。オモカス層をほぼ除去した段階で、設定した南北軸よりも東側に遺構がずれて検出されたことから、サブレンチにて断面を確認した後に新たに設定し直すこととなった。

オモカス層を除去した段階で全体の地形測量を10cmコンターで記録し、表面で確認される石材の平面・立面図を記録した。その後に、石列を基準に再設定した軸に沿って盛土の断面を確認し、図化した石材を除去するうちに、さらに下部から小礫が検出された。そこで再設定軸に沿った土層断面を記録後、盛土と当初検出した石材を除去後、多数確認された礫群についても図化等の記録を行った。その後、礫群を除去して検出した溝や不整形な凹みを記録後、道路遺構の施工直前の地形について図化等の記録を行った。

その後弥生時代の土坑等の精査を行ううちに広い落ち込みが存在することが確認され、掘り進めた結果、石材と杭列を検出することとなった。これらの杭列と石材を記録後、ほぼ道路遺構に関わる調査は完了したが、シルト層から砂礫層の調査段階で、道路遺構西側で杭の先端部がいくつか検出され、図化後除去しながら掘り進めた。これらの杭列は道路遺構に関連するかどうか検討は必要だが、一定の列をなすものであったことが判明した。

第2節 道路遺構（北側）の詳細（平成18年度調査部分）

(1) 検出された礫群（第76図）

検出された礫群は人頭大のものが多く、最大のものは約56kgを量る。小礫を除いてこの旧河道(SX01)を横断するために使用された礫の数は約3,500点にのぼる。

調査当初は、礫は全て盛土とともに使用され、土砂の中に埋め込まれたものと考えていた。しかし調査が進行した段階で、西側法面で傾斜面に沿って置かれたと考えられる礫群を確認したことから法面には石材が葺かれていたものと推測される。ただしこのように良好に残存している部分は西側法面だけであり、東側法面では明確に確認することは出来なかった。

この道路遺構の上面の平坦部の幅は3～3.5m、下端部の幅は7mを測り、高さは1m程である。

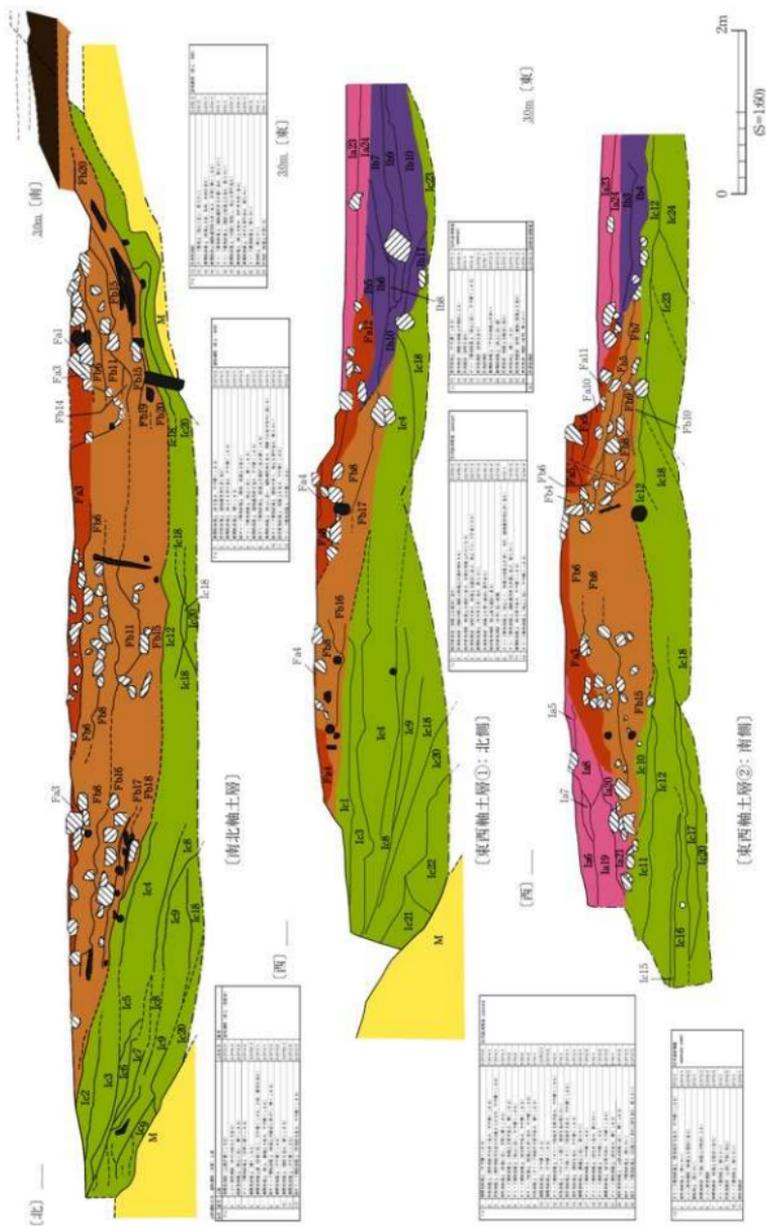
(2) 土層断面（第77・78図）

盛土（F層）と考えた土層は基本的に砂質土と粘質土があり、粘質土の中には粘性の高い粘土に近いものもあった。盛土と判断した決め手は石材が含まれることを第一の基準とし、大型の横木が含まれる層も盛土の可能性が高いと考えて検討した。また、盛土層の間には明らかに盛土とは考えられない層でどちらかと言えば旧河道(SX01)堆積層と考えた方が妥当な層が見られた。検討の結果、遺構法面に置かれた石材上にこの層が載っていること等から旧河道内堆積層と判断した。その結果、盛土は新旧の2つの層（Fa層・Fb層）に大きく分類され、Fa層は改修時の盛土と考えた。南北軸付近の盛土最下層部では大型の転用材が出土し、さらに大量の木片が敷き詰められたような状況で検出された。これらは意図的に敷かれた可能性が考えられる。また、盛土中には大量の小枝



第76図 山持遺跡6区道路遺構実測図(北側)





第77図 山持遺跡6区道路遺構(北側)土層図(1)

を含む部分もあり、いわゆる敷業工法に類似する工法がとられているものと考えられた。

旧河道(SX01)内の堆積は大きく道路構築後の層(Ia・Ib層)と構築以前の層(Ic層)に分けられ、後者は古堆積層と呼称して調査を進めている。土層から旧河道はシルト層が堆積しきった段階でそれを削り込んでいる。旧河道は出土遺物から少なくとも7世紀末頃までは流路として機能していたと考えられる。道路遺構が築造される直前の旧河道(SX01)の状況は、判断材料がなく難しいが、常時水が流れている状況ではなかったものと思われる。

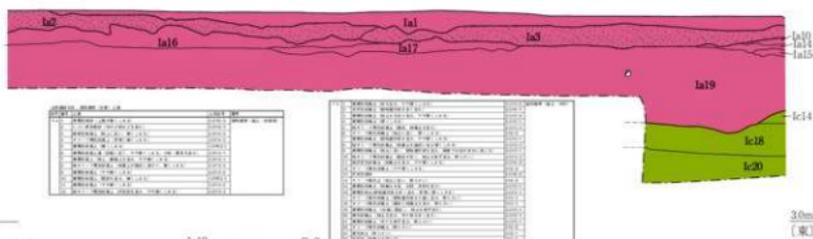
道路構築後の旧河道(SX01)内の堆積は西側と東側でやや様相が異なり、西側は暗色系の粘質土が堆積しており、湿地状の場所であったと推測される。東側については道路築造後の堆積層に粗砂層や粘質土層の両者があることから、基本的に湿地状の場所であるが、時として流路として水が流れ込んでいたものと考えられる。このような状況から東側法面の石材が西側法面と比べて乱れている可能性が考えられる。

(3) 検出された杭列等 (第79図)

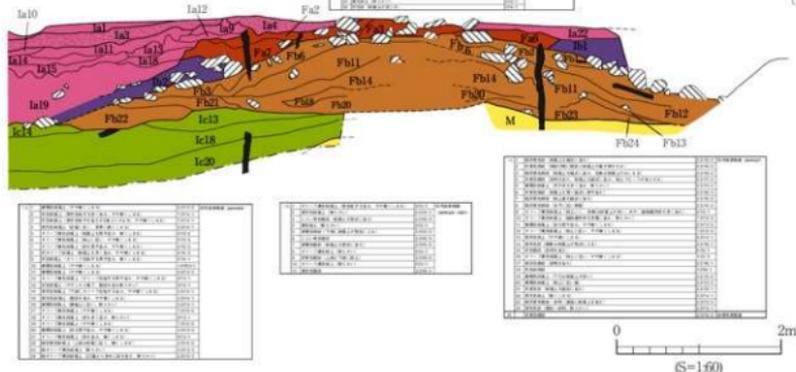
しがらみ状に検出した杭列は道路の南北軸に沿うように南北方向に4列程度検出しているが、整然と並んでいるものではない。杭列とそれに絡む横木は、基本的に道路遺構の中軸より外側の路肩付近に沿うように構築されている。杭列の主軸は、調査用に設定した南北軸よりやや西へ振ったN-19°-W前後と考えられる。これらは4列が同時に打ち込まれた可能性と時期が異なる2列1セットである可能性を考えることができる。

(西)

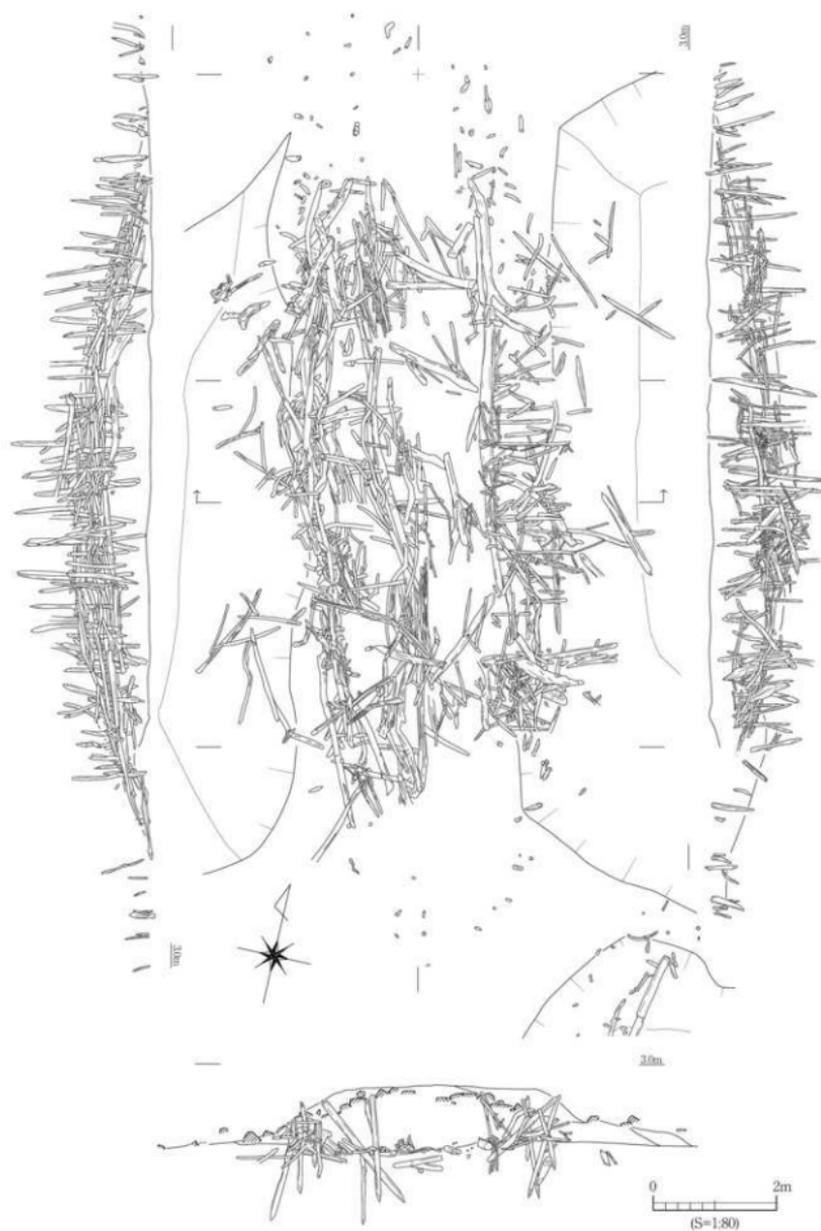
30m



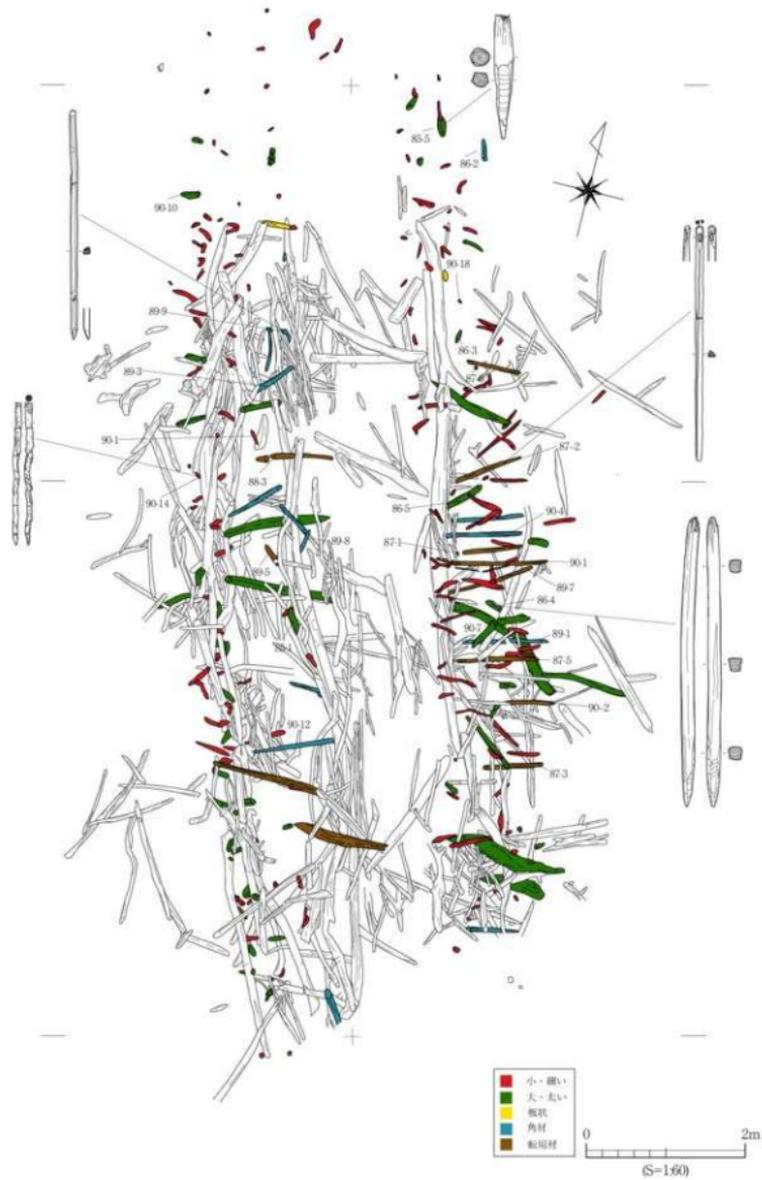
30m
(東)



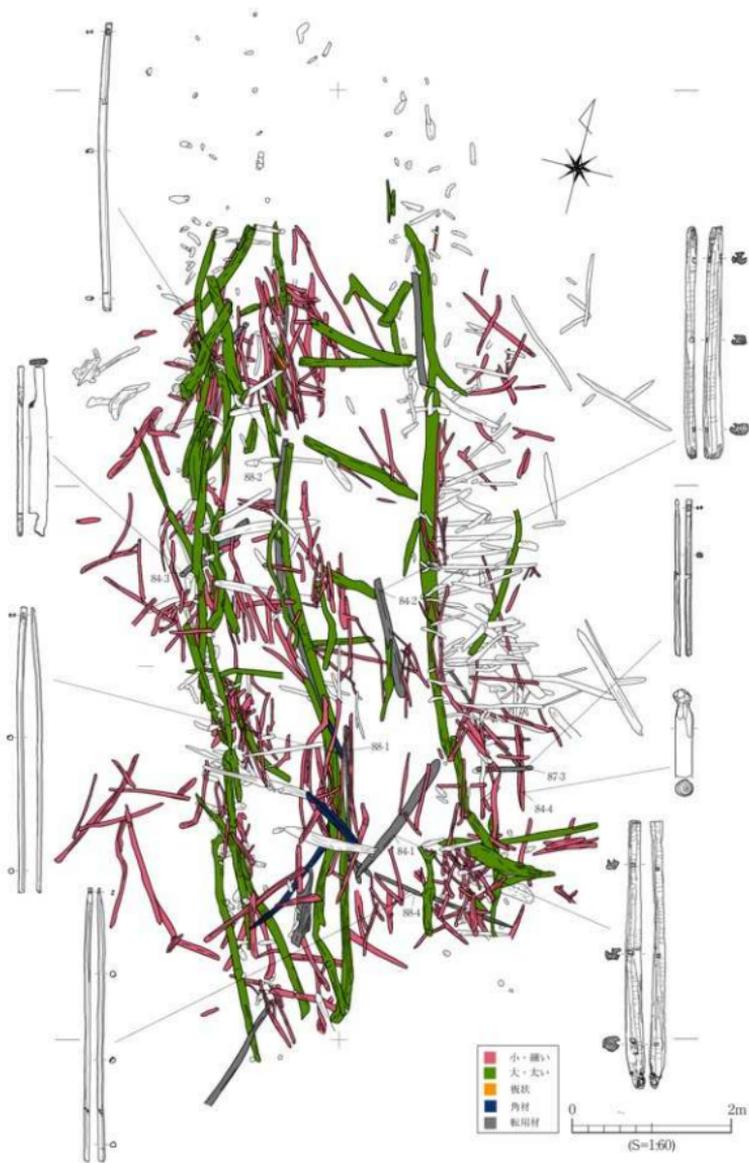
第78図 山持遺跡6区道路遺構(北側)土層図(2)



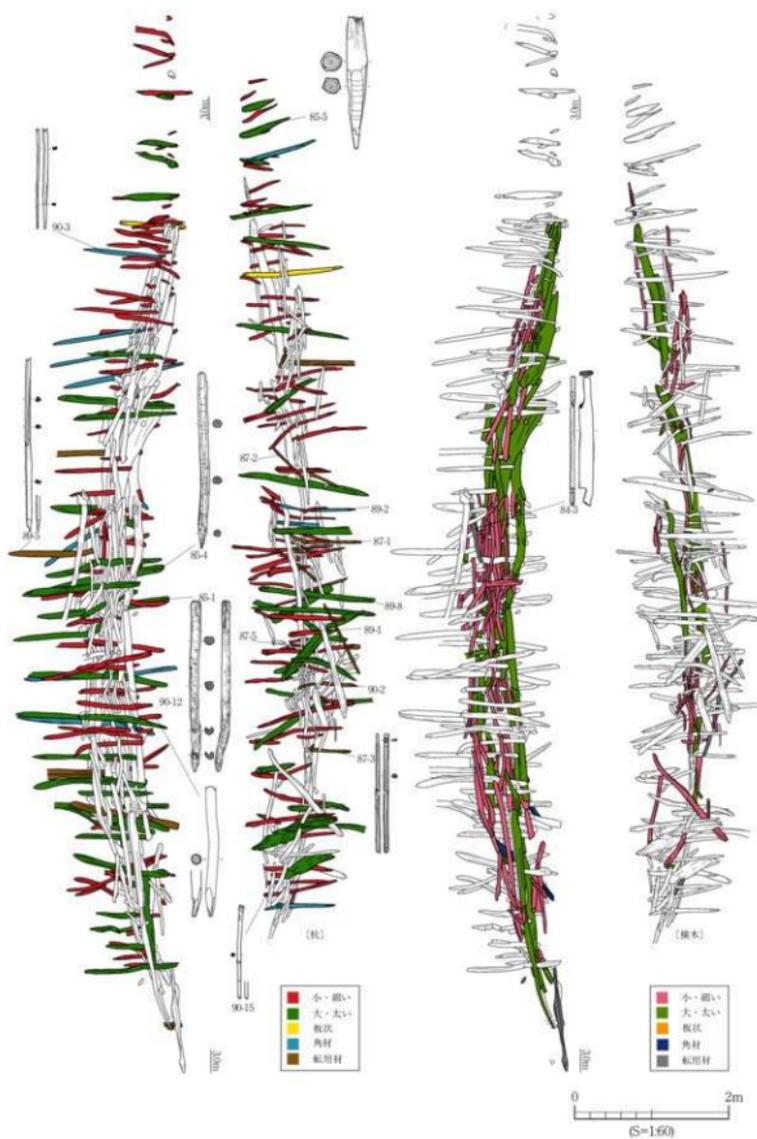
第79图 山持遺跡6区道路遺構(北側)杭列実測図



第80图 山持遺跡6区道路遺構(北側)杭列分類平面図(1)



第81図 山持遺跡6区道路遺構(北側)杭列分類平面図(2)

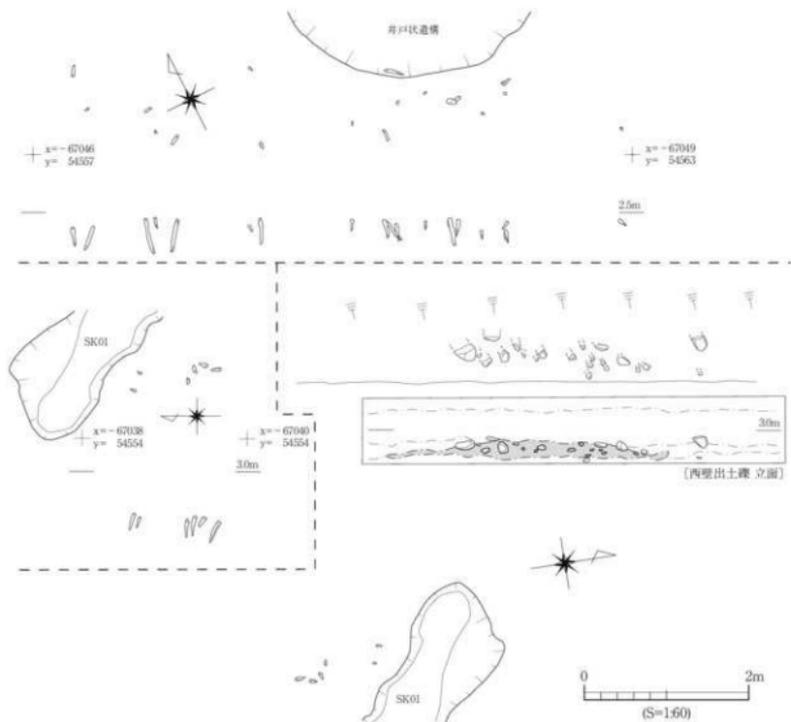


第 82 図 山持遺跡 6 区道路遺構（北側）杭列分類立面図

杭列については、どのような杭が杭列のどの部分に使用されているのかを詳細に検討するために、第80図～第82図にて杭と横木にそれぞれ色分けを行って表現した。なお、杭列がどの面から打ち込まれその先端の深度はどうか、といった点についても検討が必要と考えられるが、打ち込まれた面を現地調査で明確に出来なかった点もあり詳細な検討は不可能であった。

使用された杭の種類の検討(第80・82図) 使用された杭は大きく5種類に分類した。これらは、径が細い杭で枝や小木を簡単に加工したもので表皮が残るもの(赤)、径が太いもので表皮が残るもの(緑)、表皮が残らず角材状に加工したもの(青)、転用材と考えられるものでほとんどが断面長方形の棒状になる杭(茶)、板状に加工されているもの(黄)である。

これらの平面的な配置(第80図)を検討すると、小・細(赤)杭は全体的に最も多く使用されており、大・太(緑)杭は最も西側の杭列で多用されている傾向にある。角型(青)は西側から二番目の杭列で多く見られる状況である。転用材(茶)とした杭のほとんどは、径4～6cm程の棒状でその端部にホゾ孔が見られる杭である。この種の杭は出土状況も特徴的であり殆どのが折れて出土し、折れた上半部は東西方向に横になって出土している。また、ほぞ孔が設けられた側が杭の先端であった。折れて横になった杭の上半部の出土レベルは標高1.7m～2.0mで北側が標高が高い。このレ



第83図 山持遺跡6区道路遺構(北側)関連杭列・石材実測図

ベルは盛土の最下部付近であり、盛土を施す前に打ち込まれた杭が、意図的に盛土構築時に折られている可能性が考えられる。

使用された横木等の検討 (第 81・82 図) 使用された横木等は 5 つに分類した。これらは、径が細くて小枝等を簡単に切断したもの (葉)、径が太く枝等を落とした幹を利用したもので表皮が残るもの (緑色)、建築部材等を転用したもので加工が施されているもの (灰色)、板状に加工されたもの (橙色) である。これらの利用状況を検討すると、大型のものは杭の列に絡むように使用され、小形のものはその周辺にも使用されていることが分かる。中央付近で確認された転用材は立面図には表現できなかったが、盛土の最下部から出土しており、構築当初に置かれたものである。

横木は大きく 4 列見られるが、西側の 2 列の方が東側に比して大量に使用され、東側の 2 列のうち最も東側のものは殆ど目立たないものである。

(4) その他の関連遺構 (第 83 図)

道路遺構の北側については、調査区の北西隅あたりの西壁で石材や盛土と考えられる砂質土が確認され、おおよそのルートが復元される。そのルート上では杭列が検出されており、それらも道路遺構に関連する可能性が高いことから併せて紹介する。

西壁で確認される石材等 壁面で確認されていることから詳細は不明であるが、幅 2.3 m の範囲で石材が見られる。石材は道路遺構で見られるものと変わりはなく、オモカス層の下部の砂質土層に混ざるように検出された。出土層位や土質等から道路遺構の一部と判断した。

調査区北西隅付近の杭列 前述の壁面で確認された石材から南東へ 4 m 離れた地点で、杭を検出している。これらは規則的に並ぶものではないが、ルート上にあることから関連する可能性があるものとした。杭は径の細いものが長さ 0.3 m 程が残存しているのみである。

道路遺構北側で検出された杭列 道路遺構の北側 5 m の井戸状遺構としている落ち込みの西側でも杭を検出している。東西方向に並ぶようにも見えるが規則性は感じられないものである。杭は径の細いものが長さ 0.5 m 程が残存しているのみである。これらも想定ルート上にあることから関連性のあるものと判断した。

(5) 杭列等に使用された木製品 (第 84 図～90 図)

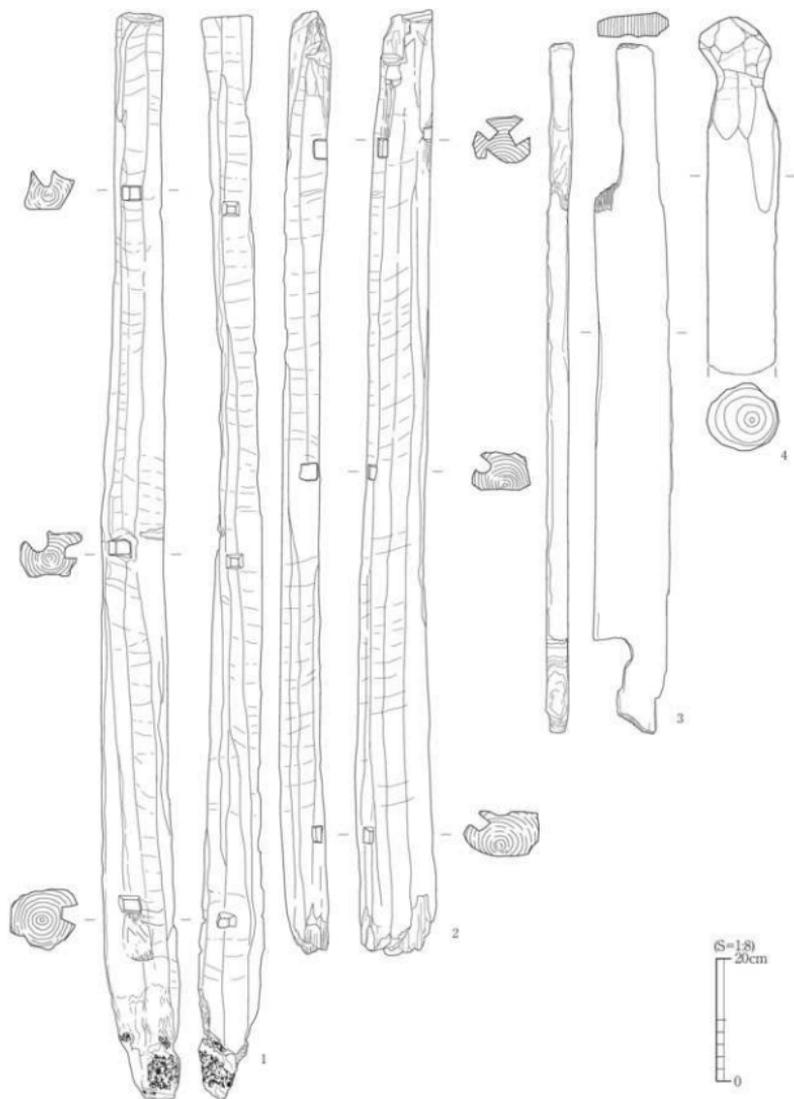
道路遺構の構築のためにしがみ状に検出された杭列等に使用された杭等を第 84 図～第 90 図に掲載した。

大型の転用材等 (第 84 図) 1～4 は杭列に絡む横木に使用されていた木製品である。1・2 は径 11 cm 程の転用材と考えられるものである。面取り状に外面は加工され、ほぞ孔が空けられている。これらは、盛土の最下部から出土しているものである。おそらく建築部材であるものが転用されたと考えられる。3 は板状のもので、両端がえぐり状に加工されている。4 はサンプル用に加工部分のみ取り上げた棒状のもので、刳り込み状に加工されている。

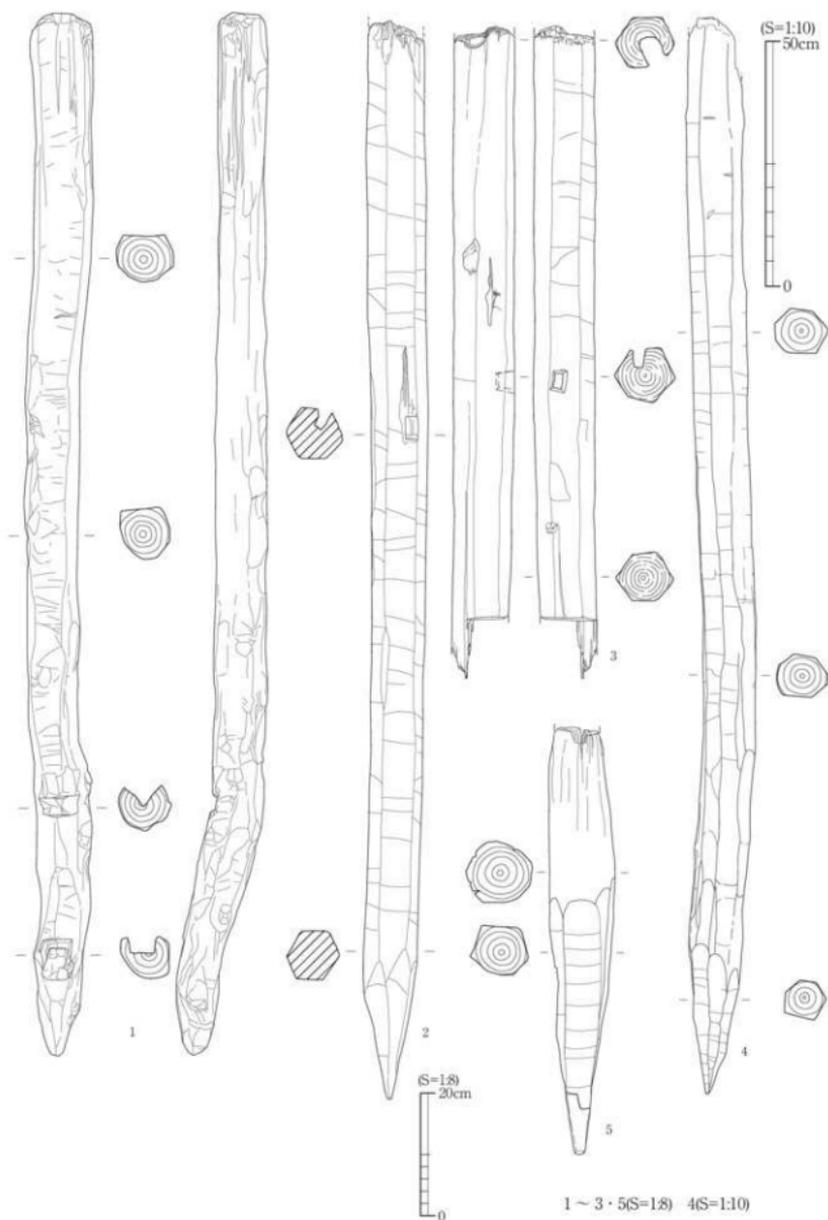
断面多角形の大型杭 (第 85 図) 1～5 は断面を多角形に加工した大型の杭である。1 は先端付近が曲がるもので、2 か所方形のほぞ孔が穿たれている。2～4 は、非常に類似したものであり、4 以外には長方形のほぞ孔が穿たれているものである。5 は先端が残存しているのみであり、詳細は分からないが、2～4 に近いものと推測される。

断面方形等の大型杭 (第 86 図) 1～4 は断面が方形に加工された大型の杭である。1・5 は外面を若干加工したもので円形に近いものであり、2～4 は大型の木材を方形に加工したものである。

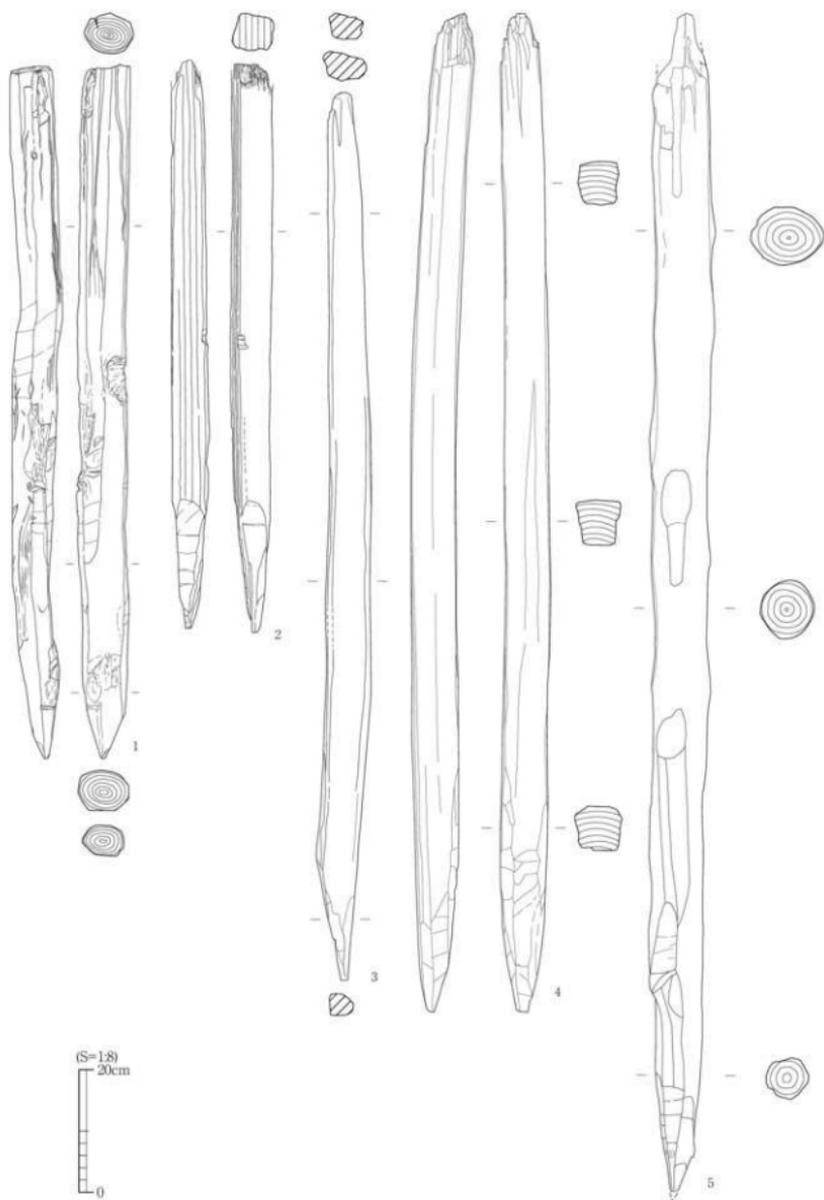
転用材と考えられる杭 (第 87 図・88 図) 第 87 図及び第 88 図は棒状の杭であり片方の端部にほぞ孔を穿っているものである。ほとんどのものが道路遺構の主軸より東側で使用されており、出土時にはほぞ孔部分を下に向けた状況であり、途中で折れていたものである。折れた部分は主軸に直



第 84 図 山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (1)



第 85 图 山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (2)

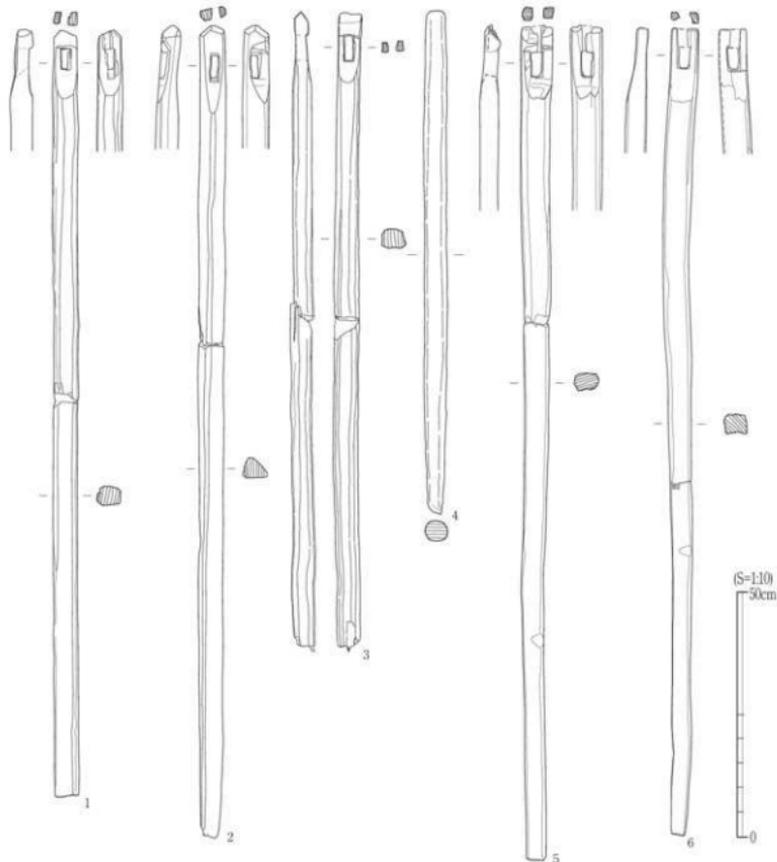


第 86 图 山持遺跡 6 区道路遺構杭列出土木製品実測図 (3)

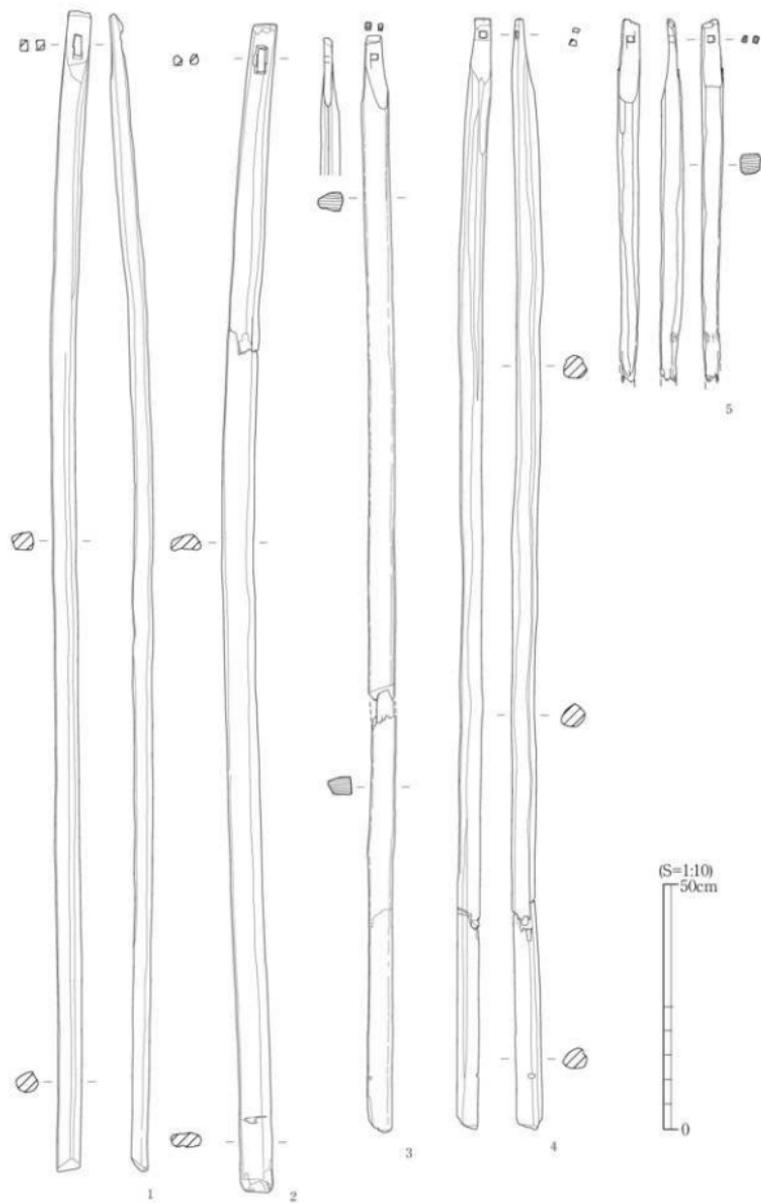
交するように東西方向に横になって出土したものである。これらは長いもので長さ237.9cmを測り、径は4cm～6cm程のものである。第87図1～6、第88図1・2は、ほぞ孔が長方形を呈しており、孔は幅2cm、長さ5cm前後である。第88図3～5は小型の方形のほぞ孔が穿たれており、おおよそ径1.5cm程である。これらは詳細については明らかに出来ないが、建築部材や器具材を転用したものと考えられる。

転用材と考えられる杭 (第89図) 第89図1～9は、前述した第87・88図と形状が同じ棒状の杭である。これらは長いもので198.5cmを測り、径4cm～7cm程のものであり、一方を大きく2面から加工してと先端を尖らしているものである。1～9についても建築部材や器具材を転用して杭として使用している可能性が考えられる。

断面長方形形状の杭 (第90図) 1～6は断面が長方形形状を呈すやや大型の杭である。長さは長いも



第87図 山持遺跡6区道路遺構杭列出土木製品実測図(4)

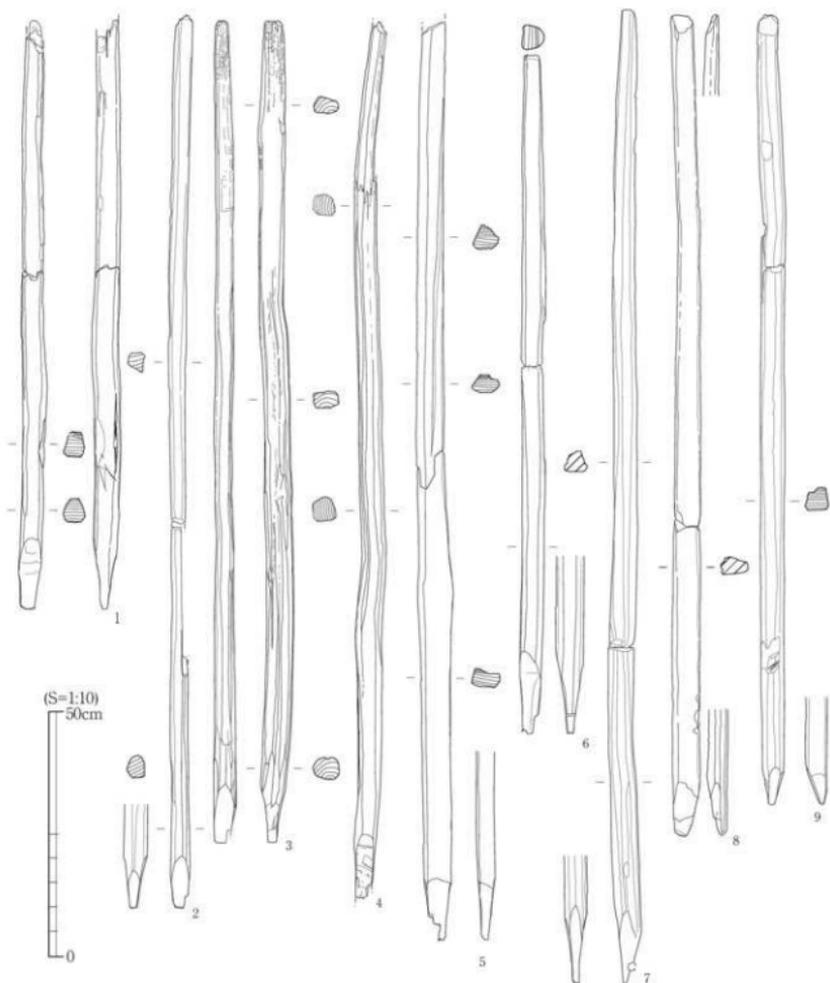


第88图 山持遺跡6区道路遺構杭列出土木製品実測図(5)

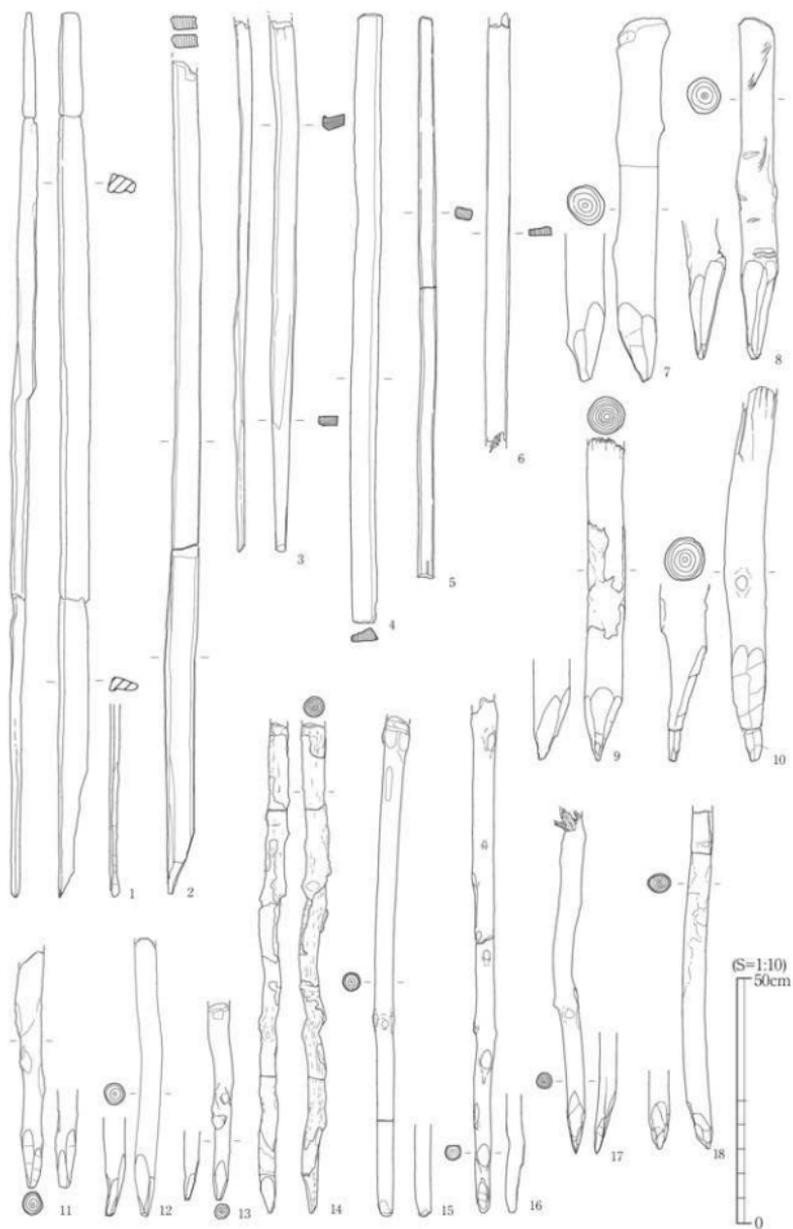
ので179.3cmを測り、幅5cm・厚さ3cm程である。何らかの転用材である可能性がある

断面円形の大型の杭 (第90図) 7～10は断面が径7～10cm程の太めの大型の杭である。これらは表面をほとんど加工しないで表皮が残っており、先端部を尖らせて使用しているものである。

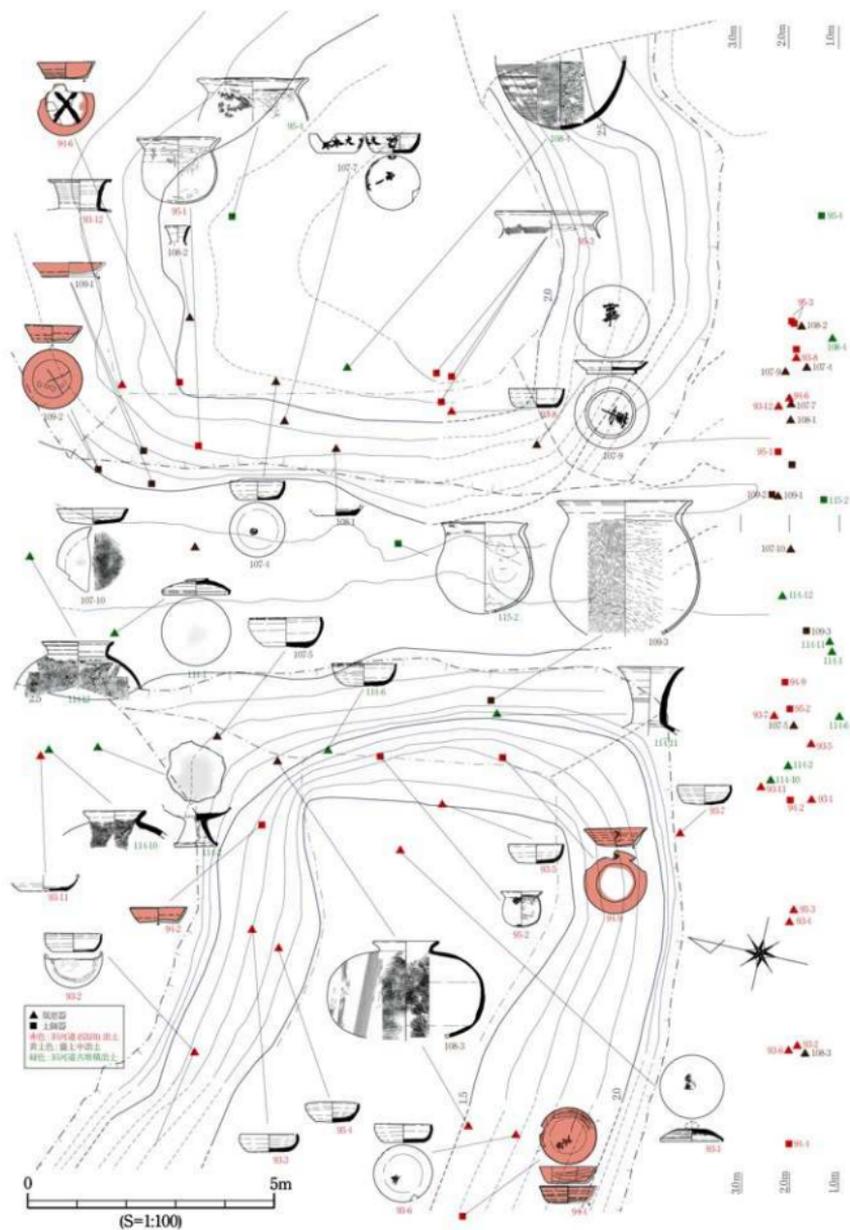
断面円形の小型の杭 (第90図) 11～18は断面が円形で径5cm程の細い小型の杭である。道路遺構には最も一般的に利用された杭であり、長さは長いもので105cm以上である。外面は表皮を残すものが殆どであり、先端部を加工して尖らせることによって使用している。



第90図 山持遺跡6区道路遺構杭列出土木製品実測図(6)



第90图 山持遺跡6区道路遺構杭列出土木製品実測図(7)



第91图 山持遺跡6区道路遺構周辺遺物出土状況(1)

(6) 道路遺構周辺遺物出土状況 (第91・92図)

道路遺構周辺からは多数の遺物が出土している。これらは出土層位等から大きく3つに分類される。それは①道路遺構築後の旧河道(SX01)に廃棄された遺物、②道路遺構の盛土中に含まれる遺物、③道路築造以前の旧河道(SX01)の堆積層に含まれる遺物である。なお、道路遺構については少なくとも1回は改修が行われた可能性があり、構築から改修までの期間の堆積層中の遺物が存在するのだが、調査で確実に押さえられた遺物は少数であった。

須恵器・土師器の出土状況(第91図) 須恵器・土師器は3つに分類した層位から出土している。道路遺構築後に廃棄されたと考えられる遺物は、道路遺構の東西から出土しているが、須恵器は西側から多く出土している傾向にあり、完形に近いものが多い。土師器類についても出土しているものは完形である。このことから、これらの遺物は道路遺構周辺で使用され廃棄された可能性が高いと考えられる。

道路遺構の盛土中に含まれているものは、主軸より東側から出土しているものが多い。これらは、調査中の取り上げ時に出土層位を決める際迷うような難しいものもあったことから、③とした旧河道(SX01)の古堆積層から出土した遺物に含めた方が妥当なものや、道路築造後で改修前の遺物とした方が良いものも含まれている可能性がある。

道路築造前の旧河道(SX01)の堆積層(古堆積層)から出土しているものは、主軸より西側それも北寄りから出土している傾向にある。これらのうちで、転用視と考えられるものも含まれており、道路築造前の周辺の様相の手がかりとなるものである。

木製品の出土状況(第92図) 木製品についても前述した①～③の出土層位に基づき分類整理している。道路築造後の旧河道(SX01)に廃棄されたと考えられる遺物は西側に集中しており、土器類の出土分布と良く似た傾向である。出土した木製品の種類で見ると、用途が分かるものは曲物のみであり、他は棒状もしくは板状の不明品となる。曲物は径16cm～19cm程のものが出土しており、比較的法的的に近似したものである。また、1号～3号板絵もこの層から出土しており、4号板絵と1号木筒は築造後～改修前の期間に廃棄されたと判断される出土状況であった。

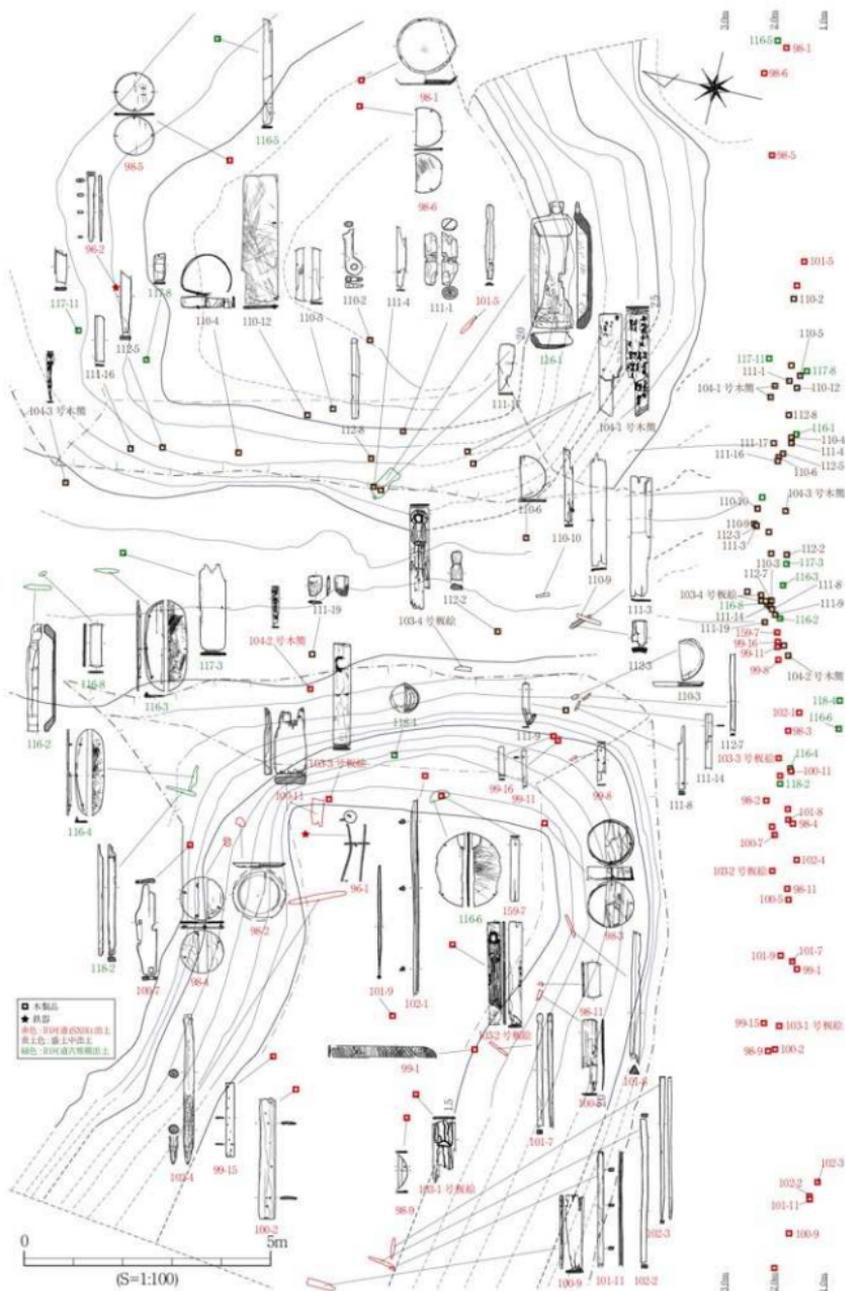
道路遺構の盛土中に含まれるものは、土器類と同じように道路主軸より東側で多く出土している。用途が分かるものは少なく、曲物は法的的に道路築造後の旧河道(SX01)の堆積層から出土するものと変わらない。2号木筒はこの盛土中の下部で出土している。

道路築造前の旧河道(SX01)の古堆積層から出土した木製品は、主軸より西側の北寄りで出土して出土している。これらの種別を見ると、長方形の容器や楕円形の曲物が見られ、明らかにこれ以降の層から出土するものとは様相が異なっている。1号木筒はこの層から出土している。

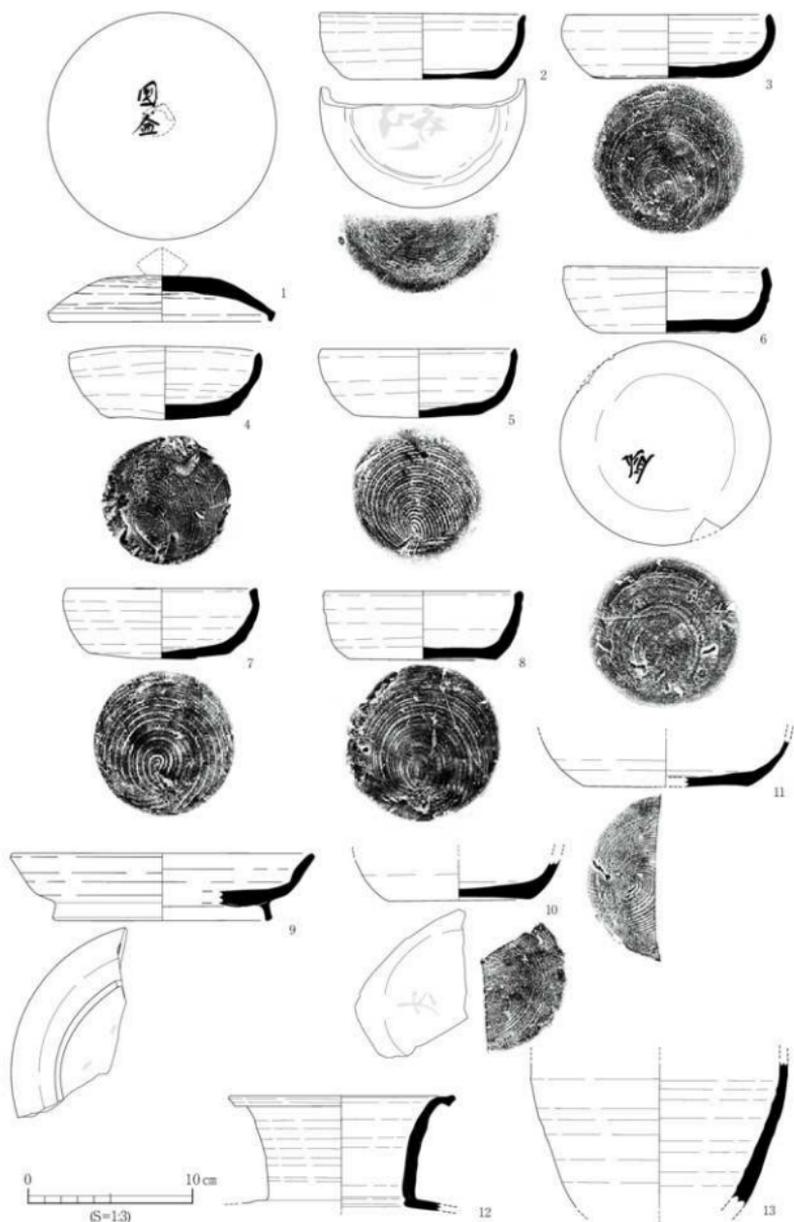
(7) 旧河道(SX01)出土遺物(第93図～105図)

須恵器(第93図) 1は蓋であり天井部のつまみを取り外した後に「國益」と墨書されている。調査では須恵器の蓋はほとんど出土しておらず珍しい。2～8は坏である。2は口縁端部付近で外側に屈曲する坏で、3～8は口縁部は内湾気味に収めるものである。2と6は底部に墨書が見られ、6は「益」と確認されるが2は判読できない。9は高台付皿であり、底部に墨書と思われる墨が残る。10・11は底部である。12・13は壺・瓶類である。これらの須恵器は概ね青木遺跡編年Ⅲ期⁽³⁾(鳥根県 2006a)に相当する資料と考えられる。

(3) 須恵器については、鳥根県 2006a に用いられた編年観に沿って記述する。



第 92 图 山持遺跡 6 区道路遺構周辺遺物出土狀況 (2)



第93图 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土須恵器実測図

土師器 (第94図) 1～10は赤彩土師器の坏等の供膳具である。赤彩の範囲を見ると1・2が底部まで赤彩され、3～10は体部まで赤彩され、底部全体には赤彩されないものである。4の内面には「西家」、6の底部外面には「×」と墨書があり、9の体部側面にも墨痕が認められる。体部の形状は1～6が内湾気味に外反する坏で、7～9が外反し端部が外側に若干外に折れる坏である。10は片口の鉢である。これらは、1・2の坏が青木遺跡編年のⅡ期に、3～6の坏・10の鉢がⅢ期に、7～9がⅢ～Ⅳ期に相当するものと考えられる。

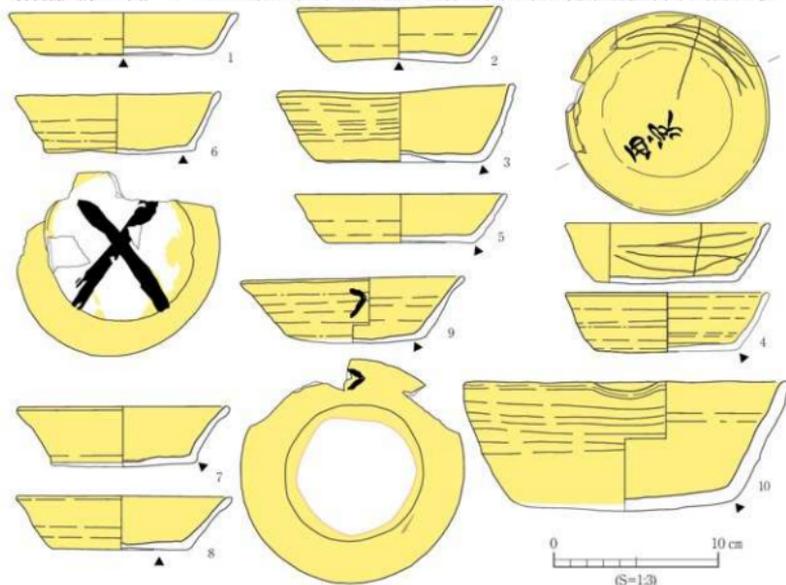
土師器 (第95図) 1～5は土師器の甕である。1・2は器形等が良く似たものであり、くの字型の単純口縁で胴部があまり張らない器形のものである。3・4はやや大型の甕の口縁部で胴部がやや張る器形になると思われる。口縁部はくの字型で端部内面をヨコナデにより若干屈曲させている。5は胴部が張らない器形のもので甕の可能性も考えられる。6～8は甕である。6は甕の底部であり、少なくとも2方向に円孔が穿たれている。7・8は把手である。9は製塩土師の破片と考えられ、外面は横方向の割りが見られ内面は指頭圧痕が目立つ。

円筒埴輪 (第95図) 10は円筒埴輪の破片である。内外面とも斜め方向のハケメが見られ、タガは断面台形のものである。川西編年のⅣ期 (川西 1978) 以降に相当するものと考えられる。

土錐 (第95図) 11・12は土錐である。両者とも楕円形状を呈すもので、11がやや大型のものである。

鉄製品 (第96図) 1は鉄製の紡錘車である。円盤は径5cm程で棒状部分の断面形状は方形を呈す。2は鉄製の鑿又は鑿である。両側面は鍛打による面が良好に残るものであり、頭部にも使用時の鍛打痕が明瞭に確認される。

石製品 (第97図) 1～4は砥石である。1は大型の砥石であり1面の使用頻度が高く、擦痕が多



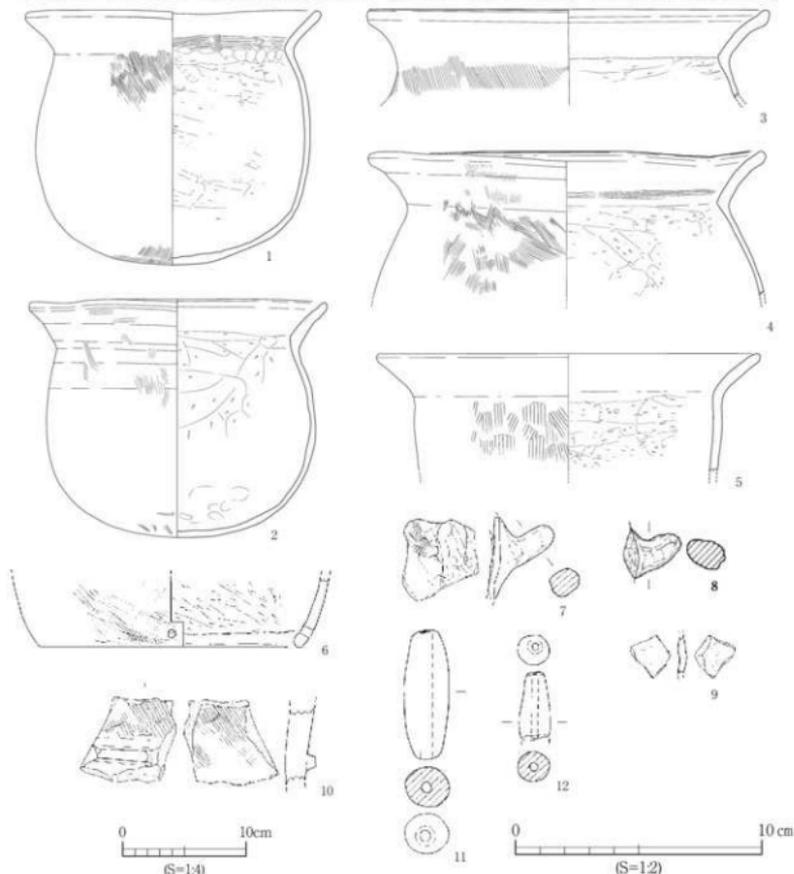
第94図 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 出土土師器実測図

数見られる。2は各面が使用されているものである。1面は使用によって反っている。3・4は扁平な砥石であり、破面以外は使用痕が認められるものである。

磨石（第97図） 5・6は磨石である。5は楕円形状を呈すものであり側面に使用痕が見られる。6はおそらく円形に近い形状のものと推測される。表面に一部敲打痕が見られる。

木製品：皿（第98図） 1・2は轆轤成形された挽物の皿である。1は底部外面に製作時の円孔が残り、底部内面には焼きこてによる「林」と確認される。底部がベタ高台状になり直線的に体部が開くものである。2は1よりやや小型の皿である。全体的に薄造りで直線的に外に開くものである。1はスギ、2はケヤキを加工したものである。

木製品：曲物（第98図） 3～11は円形の曲物である。それぞれ径が16～19cm程度のものでありほぼ同サイズのものであり、結合方法についても共通するものである。これらの結合方法は全て



第95図 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土土器・埴輪・土製品実測図

樺皮で綴じることによって側板と緊縛されるものである。樺皮を通すために、底板（天板）には2対のキリを用いた孔が開けられ、それは計4カ所で確認される。側板の高さは、結合状態で出土している3から5.3cm程と推測される。底板（天板）には3のように刃物痕が見られるものがあるが、殆どのものには目立つ刃物痕は認められないことから、使用頻度が少なかったか使用期間が短かった可能性が考えられる。使用された樹種は、3・4・11がヒノキ、5～10がスギである。

12は曲物等の容器の側板と考えられる、孔が2つ確認される。縦方向に刃物によって直線的な刻みが入っている。

本製品：曲物（第99図） 1～3は円形曲物以外の楕円形や長方形の形状をすすると思われる曲物である。1はヒノキ製の大型容器の側板の可能性がある。上部付近に円孔が5箇所認められ、木釘が残る縦方向と斜め方向の刻みが多数見られる。2は両端部が直線的でないことから容器の底板（天板）と判断した。3はヒノキ材の底板（天板）と考えられ、円形の可能性もあるが径が大きいことから楕円形状の曲物と考えた。2孔で1対の孔が側面付近に2カ所確認され、その他に1箇所孔が穿たれている。対になる孔の間には側板の痕跡が残っている。

本製品：不明品（第99図）

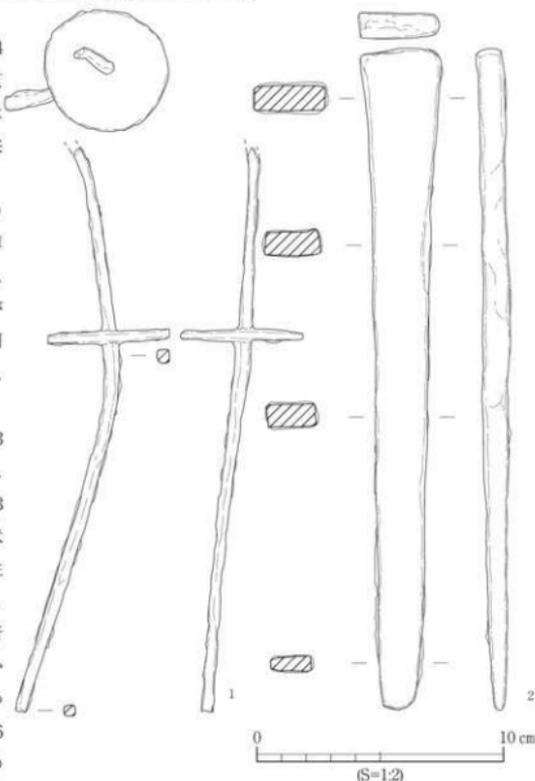
4・5は用途不明品である。4はやや弧状を呈し、数カ所貫通しない孔が見られる。5は全面加工が施され両端部が尖るものである。

本製品：薄板状（第99図）

6～12は非常に厚みの薄い板状の製品である。6～9、11は端部付近に円径の孔が1つ穿たれている。樹種は判明している7・8・11があり、スギ材である。

本製品：板状（第99図）

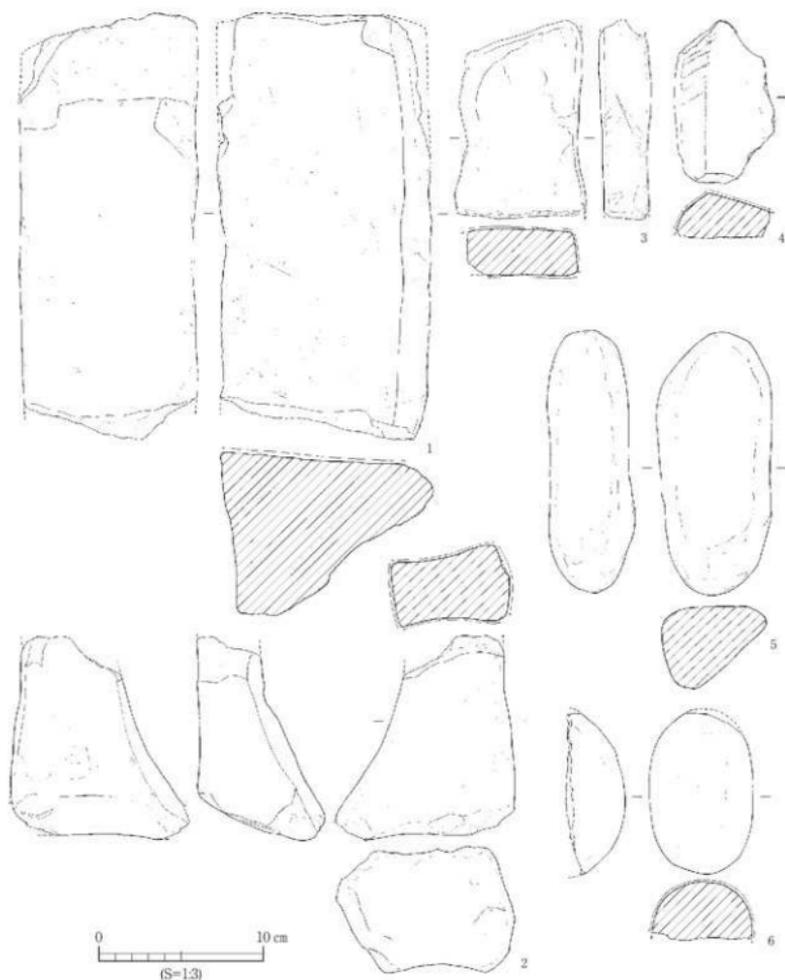
13～19は板状の製品であるが、用途が不明なものである。13は斜め方向の刻みが入る板状のもので容器の側板の可能性はある。14は薄い板状のものである。15は孔が数カ所穿たれているもので、何らかの組み合わせ品の部材と思われるが詳細は分からない。16は板状のもの、17は方形の孔が開けられているものであ



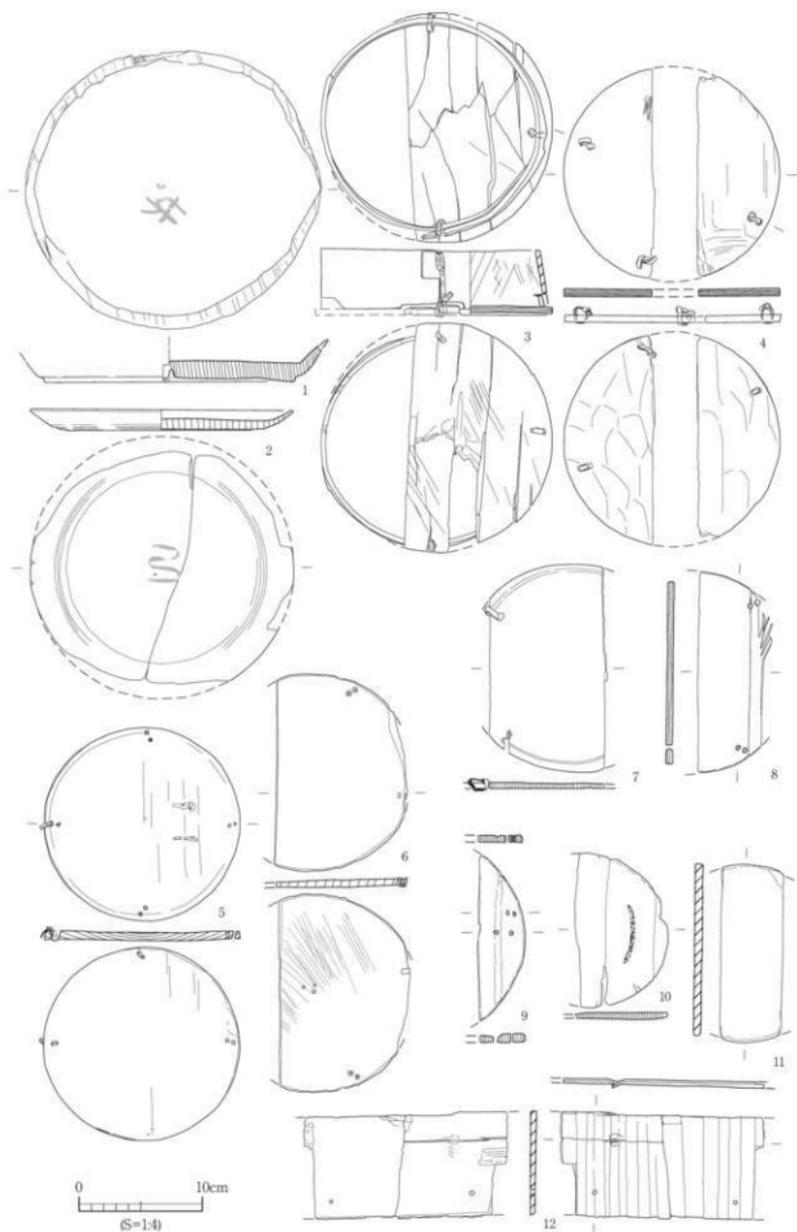
第96図 山持遺跡6区旧河道（SX01）出土金属器実測図

る。18は端部に2カ所何らかの付着物が見られるものである。19は側面が一段削られ細くなる板材である。

木製品：板状製品（第100図） 1～5はやや厚みのある板状の製品である。1はスギ材のもので2つで一对の孔が2カ所認められる。2もスギ材のもので孔が数カ所認められ1カ所は2孔で一对のものである。1・2は何らかの組み合わせ品の部材と考えられるが詳細は分からない。3～5は板材であり、特にそれ以外の加工は施されていないが、6は先端を尖らした板材である。7はヒノキ材



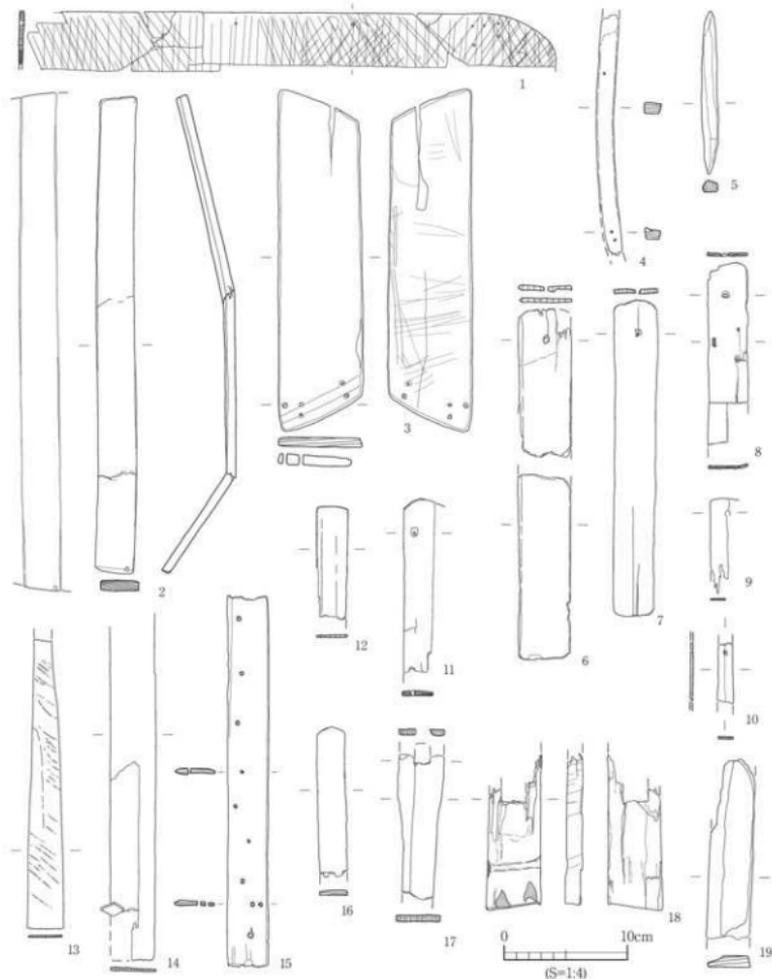
第97図 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土石器実測図



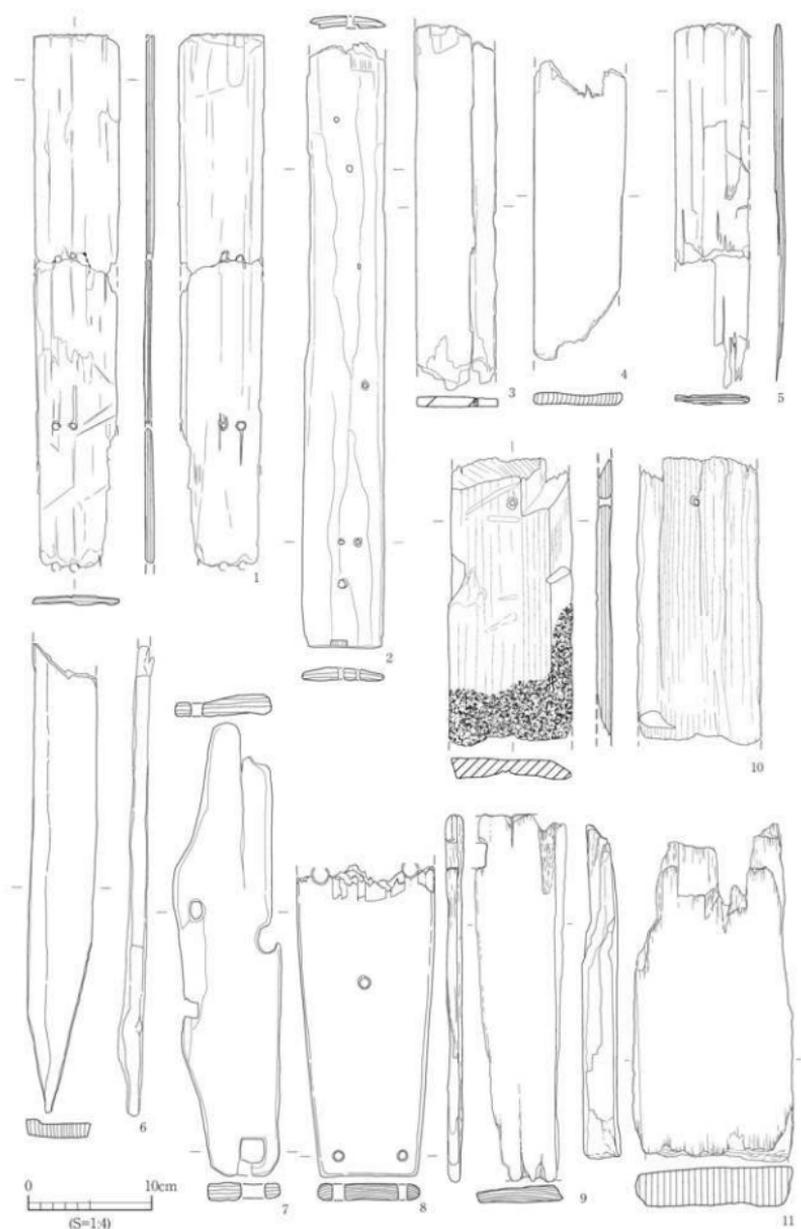
第 98 图 山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (1)

の田下駄である。端部に方形と考えられる孔が穿たれ、中央付近には方形に近い孔が3カ所認められる。おそらく全体の形状は両端部の幅が狭くなる形状になるものと考えられる。8～11は厚い板状のものである。8はスギ材であり端部隅付近に孔が2つ穿たれ、中程に孔が1つ、破面付近にも一対の孔が穿たれている。9は方形の孔が穿たれていると推測される板材である。

木製品：棒状品（第101図） 1～13は棒状を呈すものを掲載している。1は斧を装着する斧膝柄である可能性が考えられる。樹種はサカキである。2・3は枝分かれする部分を加工した製品であるが、詳細は不明である。4は丸太材の端部に削り込みを入れて加工したものである。5～7は端



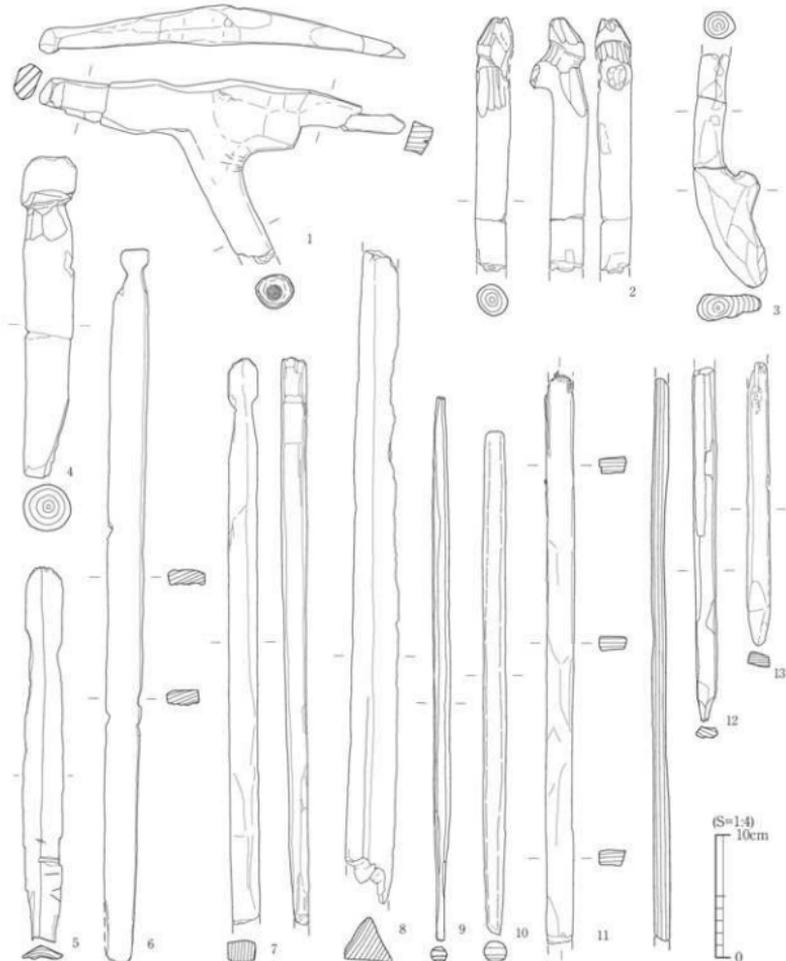
第99図 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土木製品実測図(2)



第100图 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (3)

部付近に割り込みを入れたものであり樹種は6がスギである。8は断面三角形に加工したものである。9は面取り状に多角形に加工している棒状製品である。両端部を細く尖り気味に加工している特徴がある。10は断面を楕円形に、11は長方形に加工したものである。12・13は断面長方形で端部を尖り気味に加工している。

木製品：杭等 (第102図) 1～4は道路遺構に使用されている杭等に類似している長大な木製品である。1は断面が三角形状、2は長方形のもので道路遺構で使用された転用杭に近いものである。3は断面長方形を呈し先端を加工して尖らせたものである。4は丸太材を外表面を面取り状に加工



第101図 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 出土木製品実測図 (4)

し多角形にした杭で、先端を尖らしている。

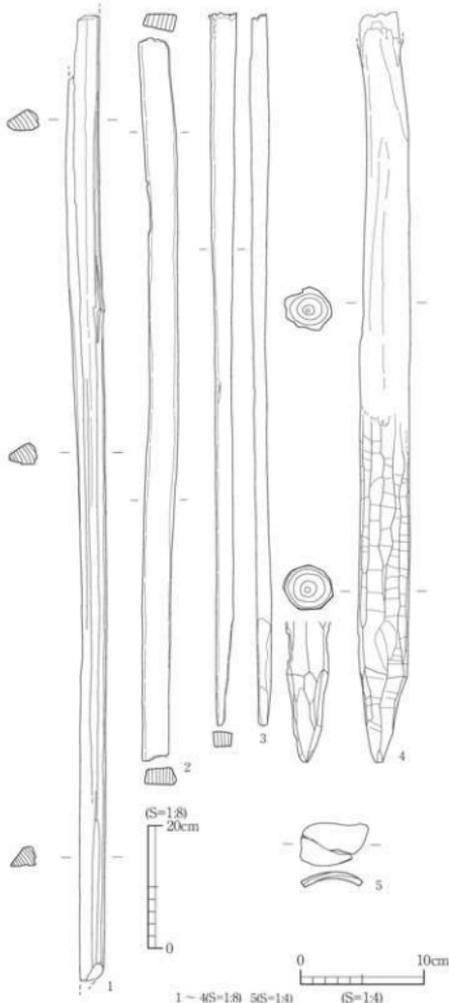
植物遺存体 (第102図) 5は当初何らかの列物容器片と考えていたが、ヒョウタンの破片と考えられる。これのほぼ完形に近いものが旧河道の古堆積層から出土している。(第118図4)

(8) 板絵と木簡 (第103図・104図)

板絵と木簡は、出土層位が全て同じというわけではないが、特殊な遺物であることからここで、まとめて記述することにする。なお、出土層位については、旧河道(SX01)の堆積層出土が1号板絵～3号板絵、道路遺構築造後～改修前の層位が4号板絵と1号木簡、道路遺構盛土中が2号木簡、旧河道(SX01)の古堆積層が3号木簡となる。出土層位順に並べると古い方から3号木簡→2号木簡→4号板絵・1号木簡→1号板絵～3号板絵の順となるが、1号板絵～4号板絵と1号木簡は同一層位として判断することも可能である。

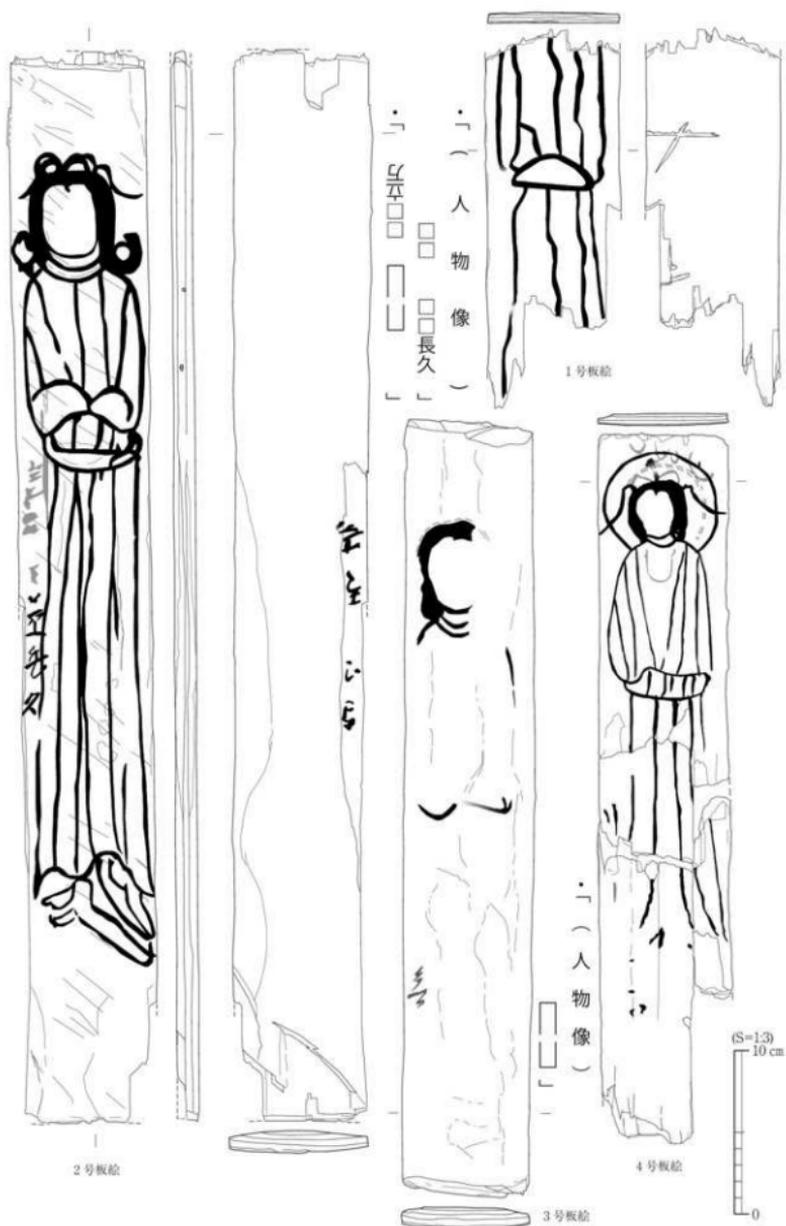
板絵^④ (第131図) 1号板絵は人物の腰のあたりが描かれているものと推測され、上下端は欠損している。基本的な服装は次に述べる2号板絵と同一と考えられ、上半身中央から左手側に描かれた縦方向の2本線は袍の合わせ目を表現していると考えられる。腰付近の三角形の表現は腰帯を表現した可能性が考えられるが断定できない。腰から下の服装は縦方向の線によって輪郭と裳や褌を表現していると思われ、上半身を覆う裾長の袍である可能性と別の裳の可能性である両者が考えられる。

2号板絵はほぼ完形品であり女性の全身像が描かれている。また表裏両面に墨書された文字が確認された。髪は頭頂部で髻を結び左右に分けて両方に垂らし、端は外側にカー



(4) 板絵の内容及び時期等については、東野治之氏をはじめ、各氏の指導を受け、それに負うところが多い。

第102図 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土木製品実測図(5)



第 103 図 山持遺跡 6 区道路遺構・旧河道 (SX01) 出土板絵実測図

引かれた線は腕のラインと考えられるが、右手側のラインは蓮の茎と考えることも可能なラインであり、また右手側にはさらに外側に斜めの線がもう一つ引かれている。手の表現はないことから、裾の長い袍に隠れている状況を描いたものと判断される。また体の中央で手を組んだ表現と思われる。腰の辺りに引かれた2重の横方向の線は腰帯の表現⁶⁾と考えられる。下半身を覆う服は裾長の袍の表現か別の裳の表現の両者の可能性が考えられる。足下には何らかを表現していると思われるが判断できない。人物の右側の腰から下にはいくつかの文字が書かれているが、判読できたのは「長久」のみであり、それより上の文字は判読できない。裏面の中央付近の両側面は一段斜めに削られており、その一方には文字が書かれている。文字は天地逆にして書かれており、判読出来たものは「□□立万」である。

3号板絵はほぼ完形のもので、板材の形状は2号板絵と良く似ている。人物の全身像を描いたものと考えられるが、上半身の一部分が確認されるのみである。髪は髻を結うのではなく左右に振り下ろしているものと考えられ、顎のラインの下に横方向の2重線があることから2号板絵と同じように袍の盤領の表現と考えられる。左肩付近の輪郭が確認できるのと右手側で上着の裾あたりの表現と考えられる横方向の線が確認される。人物の右手側の下には2号板絵と同様に文字と考えられる墨痕が認められるが、判読は出来なかった。

4号板絵は他の板絵とは異なった状況で出土している。まず道路遺構の改修時の盛土に覆われて出土しており、また二つ折りに折られたような状況で検出された。ほぼ完形のものであるが、人物の左側下端が欠損している。頭部の背後に仏画で見られる頭光が描かれていることと女性をモチーフにしたものと考えられることから、吉祥天を描いたものと判断している。髪は頭頂部で髻を結び中心から垂直に延びる線があるが明確に判断できない。髪は左右に振り下ろしてあり、結った紐等を左右になびかせる状況は2号板絵と良く似る。頭部の背後に見られる頭光の頂部周辺には「U」の字状の曲線⁶⁾が数カ所描かれている。また頭光の内側には墨書ではないが一回り小さい円状の白く抜けた部分がある。上半身の服装は他の板絵とは異なり顎の輪郭の下には二重表現した盤領や袍の合わせ目の表現は無く1重の線とそのやや下方にUの字状の線が見られる。この1重の線は上着の下に見える下着の表現かもしれない。上半身全体を覆う服は前の開いた垂領表現のもので、左右それぞれ全体の輪郭の他に2本の縦方向の線が描かれている。腰の辺りの表現は腰帯の表現の可能性もあるが、縦方向の短線が5本引かれていることを考えるとこの部分で折り返している表現である可能性が高い。下半身を覆う服は裳と考えられ、縦方向の線で裳を表現していると考えられる。足下は中央寄りに逆V字状の表現があり足の表現の可能性もある。さらにその下に墨痕が見えるが何の表現か判断できない。

以上の1号板絵～4号板絵は材はスギである。

木簡 (第104図) 1号木簡は大型の木簡で下端部は欠損し上部の一部は焦げている。スギの板目材であり表裏ともに墨書文字が確認される。表面は歴名木簡の類であり、人名と役職名と考えられる「倉長」が確認される。上半部と下半部の2つにグルーピングされ、上半部は「倉長殿」、下半部は「馬道マ殿」に関わる人名のグループと考えられる。裏面は残存状況が悪く判読出来るも

(5) 帯は幅の太い部分があることから、これを正倉院宝物に遺存例のある勅社巾のような帯と見ることが出来る。東野治之氏指導内容より

(6) これらの曲線については、火焔の表現と解釈することができる。類例として三寅例(長野県小海町個人蔵)に銀象嵌で表現された天部像光背に類似のものが見られ、実物の光背にも火焔を表す例は多いという。東野氏指導による。

のは少なく、「常」のみである。1号木簡は労務管理に関わる木簡と考えられる。

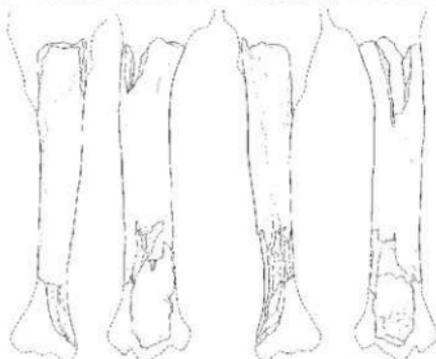
2号木簡は下部が欠損している。ヒノキ亜科の板目材である。「神戸額田部□問」と墨書されている。「神戸」は遺跡が所在する出雲郡内の神戸郷を指すと考えられ、「額田部□問」は人名と考えられる。

3号木簡は、ヒノキ亜科の板目材を加工したものである。上端は方頭状に下端は付け札状に尖るが、下部の文字が書かれた後に二次的に付け札状に加工されているものである。文字の内容は2号木簡と同様のものであり、「伊努郷若倭部□□」と地名と人名が書かれているものである。「伊努郷」は遺跡が所在する地名：出雲郡伊努郷であり、「若倭部□□」は人名と考えられる。

獣骨 (第105図) 1～3は旧河道 (SX01) の堆積層から出土したウマの右後肢の骨である。1は脛骨である。上下端部が欠損しており、全体が分からないが、脛骨後面の栄養孔が正中線近くで開口していることからウマと判断された。

2は踵骨である。欠損部が多く全体を把握することは難しい。他の骨の状況や全体の形状からウマと判断している。

3は中足骨である。上下端部が欠損しているが、ウシの中足骨で見られる背側縦溝が見られないことからウマと判断した。

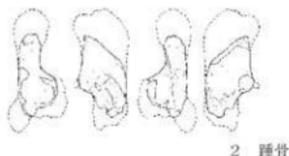


1 脛骨

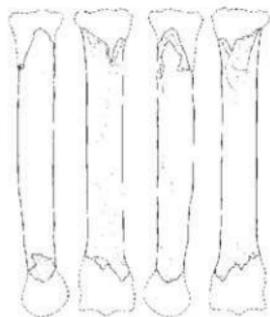
弥生土器 (第106図) 1～15は旧河道 (SX01) の堆積層から出土した弥生土器であるが、これらは旧河道によって削られた砂礫層とシルト層に包含されていたものが二次的に堆積した可能性が高いものである。

1～3は壺である。1は直口壺で頸部内面までケズリが施されているものである。2は複合口縁の裝飾壺の胴部であり胴部最大径部分周辺に平行沈線文と刺突文で裝飾されている。3は小型の複合口縁の壺で頸部には一対の孔が穿たれている。口縁帯には3条の凹線文が施されているこれらの壺は1がV様式以降、2・3がV様式に属すと考えられる。

4～8は甕である。4は単純口縁で口縁部はやや内湾気味に外側に屈曲するものである。5は口縁端部が若干拡張し2



2 踵骨



3 中足骨



第105図 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 出土獣骨実測図

条の凹線文が入る。頸部には指頭圧痕文帯がめぐる。6～8は複合口縁の甕である。6は口縁帯に4条の凹線文が施され、胴部最大径付近には刺突文が見られる。7は2条の凹線文が施される。8は口縁部が外反し、口縁帯帯をヨコナデによって仕上げるものである。4はⅢ様式、5・6はⅣ様式、7はⅣ様式～Ⅴ様式、8は草田5期に属すと考えられる。

9は注口土器の注口と考えられる。注口の接合部付近には羽状文が確認される。Ⅴ様式に相当するものと考えられる。

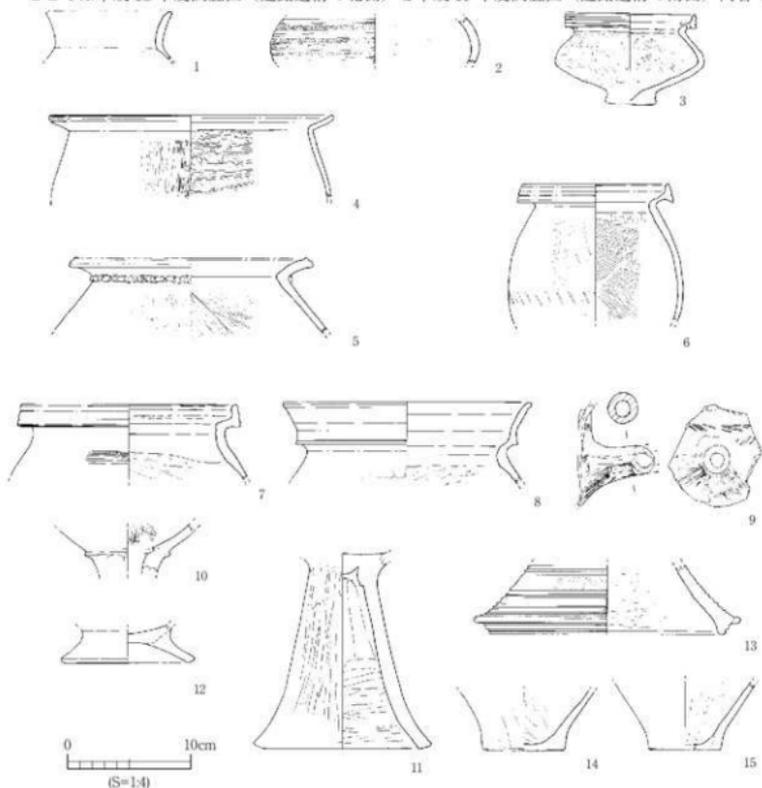
10～11は高坏である。10は高坏の接合部付近に貼付突帯が廻るもので、坏底部の充填部分は剥がれている。11は脚部である。これらはⅤ様式に相当するものと考えられる。

13は器台の脚部である。端部及び裾には凹線文が施される。Ⅳ様式に相当するものと考えられる

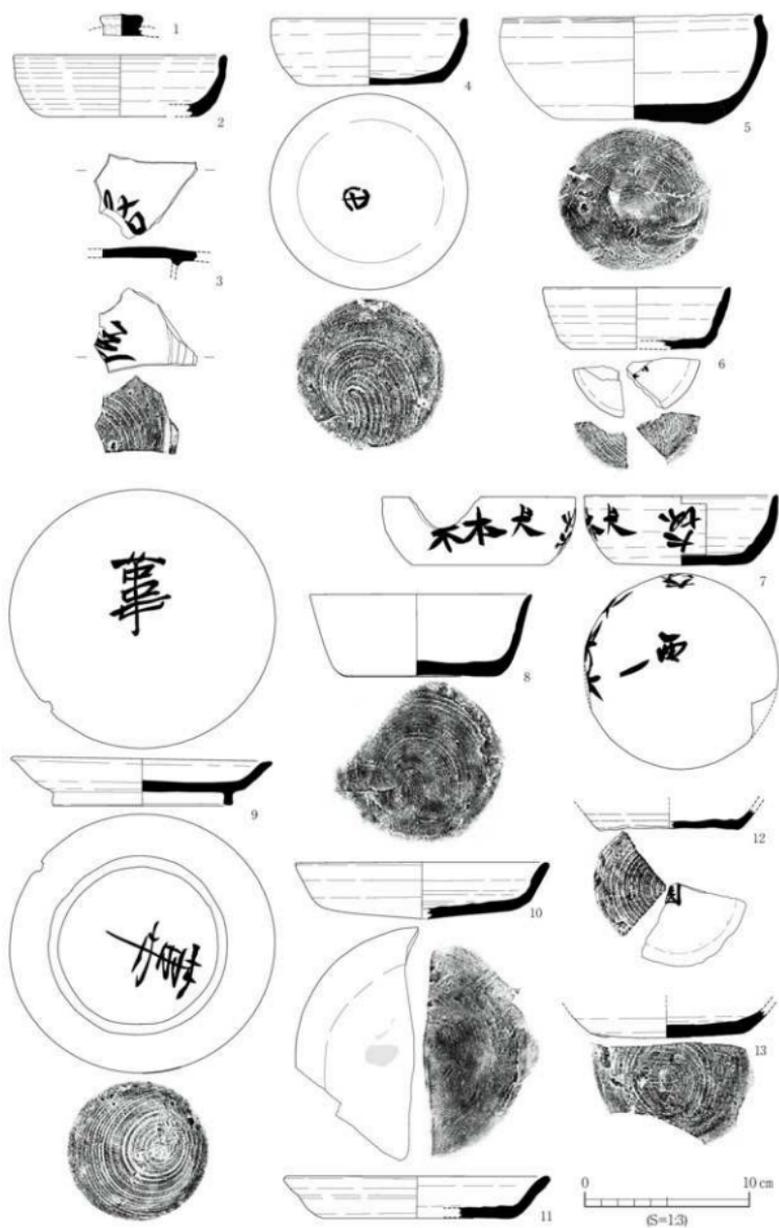
14と15は底部である。14は内面ナデ、15は内面ケズリが施される。14はⅢ様式～Ⅳ様式、15はⅣ様式以降のものと考えられる。

(9) 盛土中からの出土遺物 (第107図～113図)

ここでは平成18年度調査区(道路遺構の北側)と平成19年度調査区(道路遺構の南側)両者の



第106図 山持遺跡6区旧河道(SX01)出土弥生土器実測図

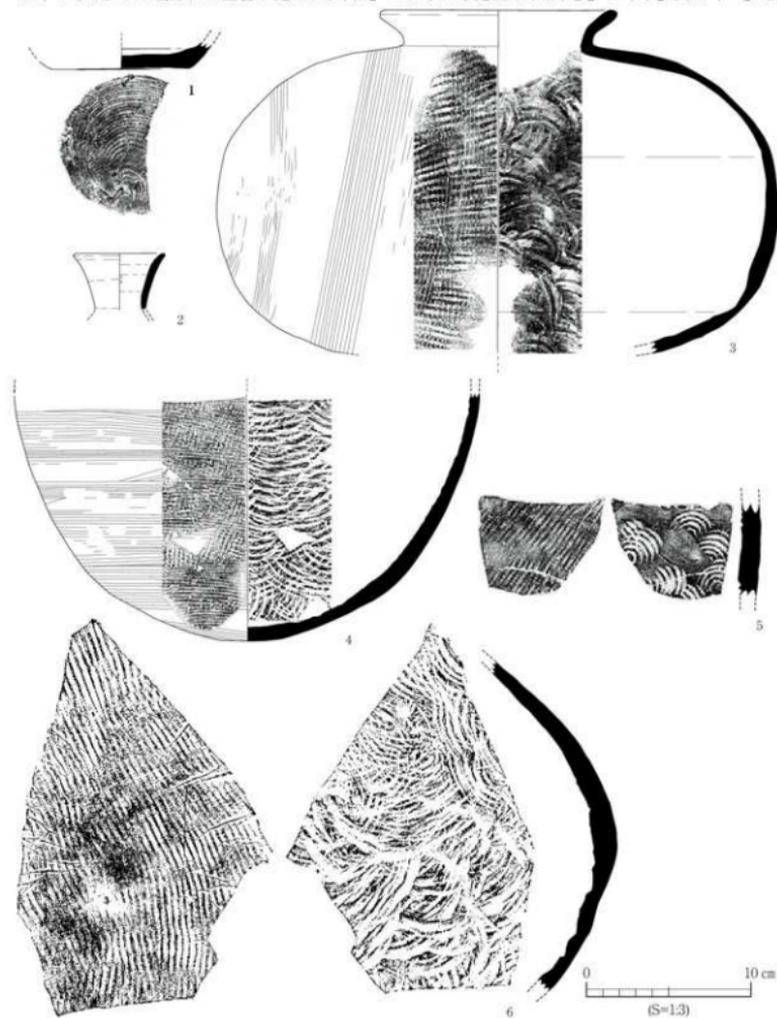


第107图 山持遺跡6区道路遺構盛土内等出土須恵器実測図(1)

盛土中からの出土遺物を一括して掲載した。

須恵器 (第 107 図) 1～11 は盛土内から出土した須恵器の坏等の供膳具である。これらの出土層位は盛土内と一括しているが、細かく見れば様々な出土状況であり、盛土上面のものや盛土最下部のもの等が含まれている。

1 は盛土最上面から出土した蓋の宝珠状つまみである。2・4・7 は、口縁部が内湾気味に立ち上がる坏である。4 の底部には墨書が見られ、「田」のようにも見えるが、「〇」と「十」又は「×」を



第 108 図 山持遺跡 6 区道路遺構盛土内等出土須恵器実測図 (2)

組み合わせた記号と考えられる。7の底部と体部側面には墨書が計3カ所認められる。底部には「西」、体部には天地逆の縦書きで「大坏」、横書きで「木木犬」と墨書されている。

3は高台付坏の破片であり、底部内外面に墨書が見られ内面は「□□」、外面は「屋」と記されている。5は口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢であり、口縁端部が若干外側に屈曲するものである。6と8は口縁部が直線的に立ち上がる坏であり、6の底部には判読出来ないが墨書がある。8は口縁部が長く外反するもので、あまり見られないタイプのものである。盛土最下部から出土している。

9～11は皿である。9は高台付皿であり底部内外面に「華」と墨書がある。出土層位は盛土中であるが、道路遺構改修前の堆積層に含まれていた可能性がある。10・11は無高台皿であり口縁部は外反気味に立ち上がるものである。10は盛土最下部から出土している。12・13は坏底部である。12は底部外面に墨書があり判読出来ないが「圓」の可能性が考えられる。

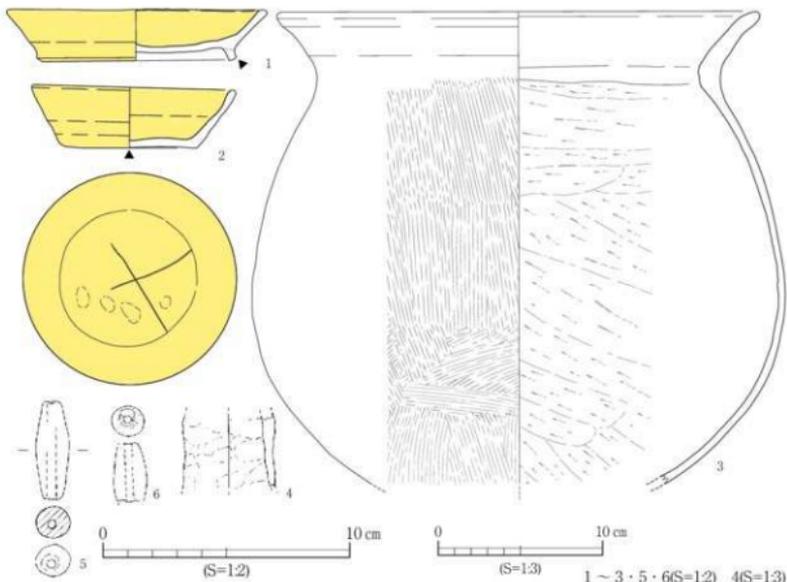
これら1～13の須恵器は青木遺跡のⅢ期に相当するものと考えられる。

須恵器 (第108図) 1は坏底部である。2は小型の壺類の口縁部である。3は横瓶、4～6は甕の胴部片である。5の甕は焼成が甘く内面のタタキが他のものと異なっている。

土師器 (第109図) 1は高台付皿であり、高台が底部の外周部に付くものである。青木遺跡編年のⅢ期に相当すると考えられる。2は口縁部が直線的に立ち上がる坏であり、底部には「×」のヘラ記号が見られる。青木編年のⅡ期に相当すると考えられる。3はくの字口縁の甕である。胴部は若干張るタイプのものである。

製塩土器 (第109図) 4は製塩土器であり内外面の指頭圧痕が目立つものである。

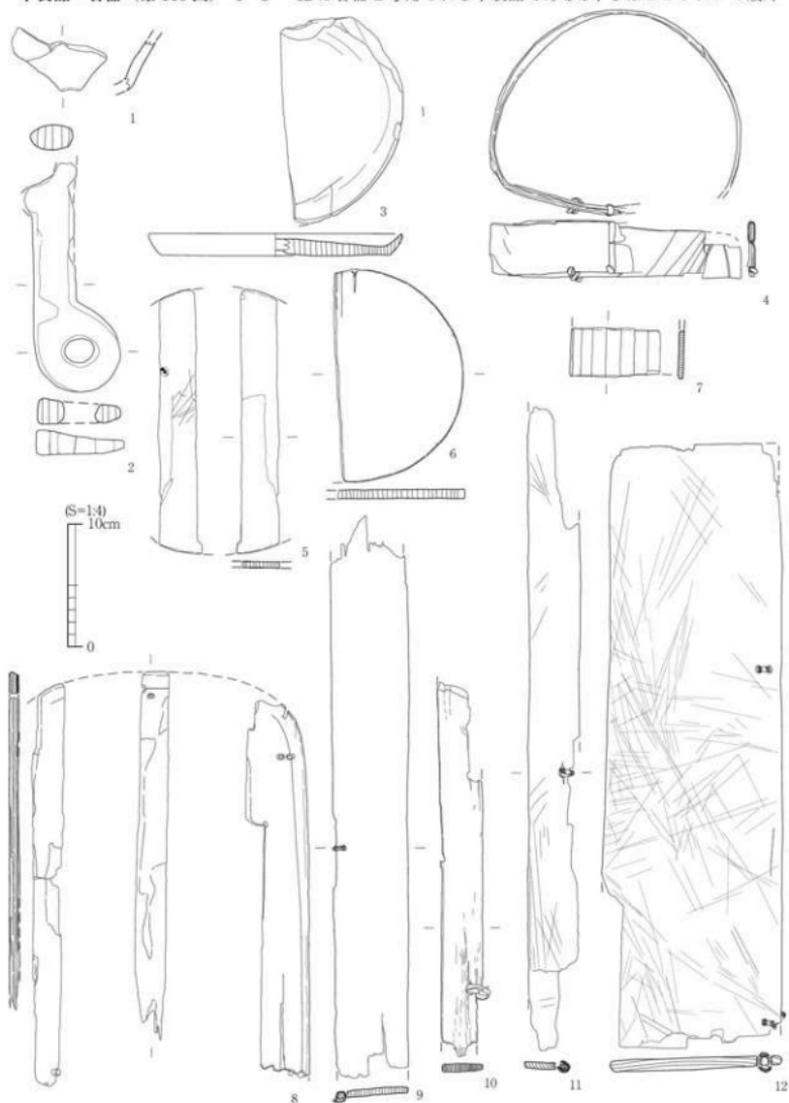
土錐 (第109図) 5・6は楕円状を呈す土錐である。ほぼ同サイズのものである。



第109図 山持遺跡6区道路遺構盛土内出土土師器・土錐実測図

木製品：不明品（第110図） 2は端部を環状に加工した木製品であるが、用途は分からない。樹種はアカガシ亜属である。

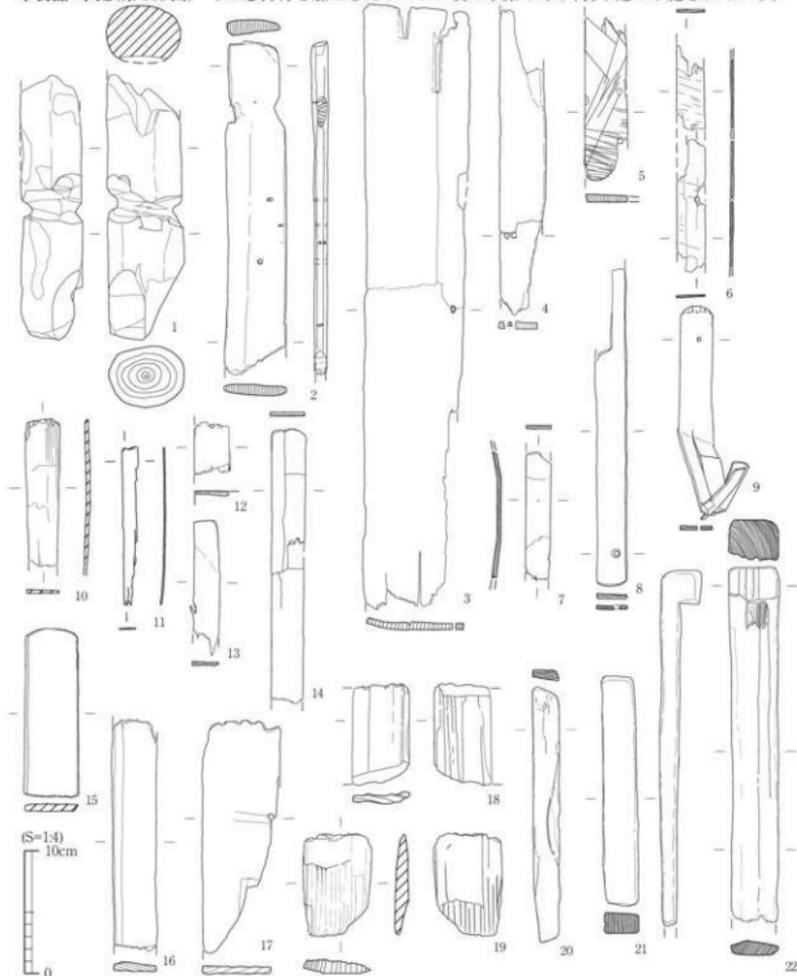
木製品：容器（第110図） 1・3～12は容器と考えられる木製品であるが、1はヒョウタンの破片



第110図 山持遺跡6区道路遺構盛土内出土木製品実測図(1)

である可能性が高い。3はケヤキ製の挽き物の皿である。4～6は円形曲物である。4はヒノキ製の曲物の側板で、内面には斜め方向の刻みが見られ結合用の樺皮が残る。5・6は円形曲物の底板（天板）であり6の外周側面には結合用の孔が2カ所認められる。樹種は5がスギ、6がヒノキである。7は縦方向の刻みが見られる側板の破片である。8～12は楕円形や長方形の曲物と考えられるものであり、樹種が判明している10・12ともヒノキ材である。いずれのものも結合用の樺皮が残存しているか、それを通すための一対の孔が確認される。

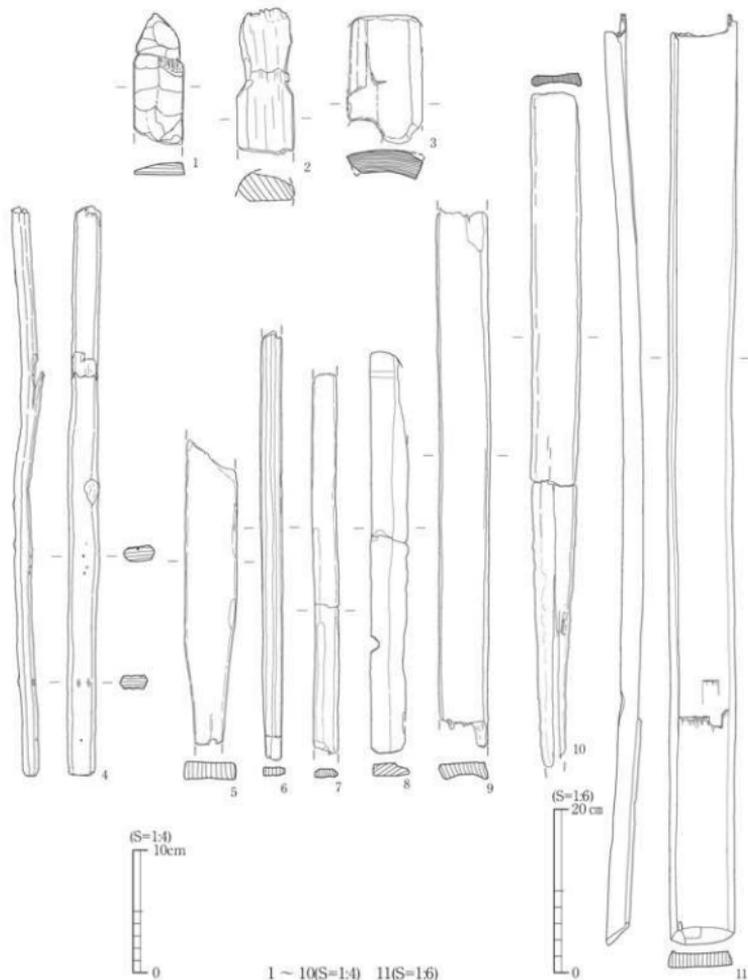
本製品：木鍾(第111図) 1は芯持材を加工したリョウブ製の木鍾であり、削り込みが施されている。



第111図 山持遺跡6区道路遺構盛土内出土木製品実測図(2)

木製品：板状(第111図) 2～20は板状に加工されたものである。2は両側面から削り込みが施され、ランダムに孔があいている。3～9は孔が開けられているものである。5・6は刻みが入るものであり、6は厚みや刻みから曲物の側板の可能性があり。10～14は薄い板状のもの、15～20はやや厚めの板状のものである。21・22はやや厚みがあり、22は端部が一段厚くなる。

木製品：板状(第112図) 1～11はやや厚みがある長めの板状の製品である。1～3は欠損しており詳細が分からないものであるが、何らかの加工が施されている。4は棒状のものであるが、2カ所に貫通しない孔が見られる。5は幅が途中で狭まるものである。6・7は特に加工は認められな



第112図 山持遺跡6区道路遺構盛土内出土木製品実測図(3)

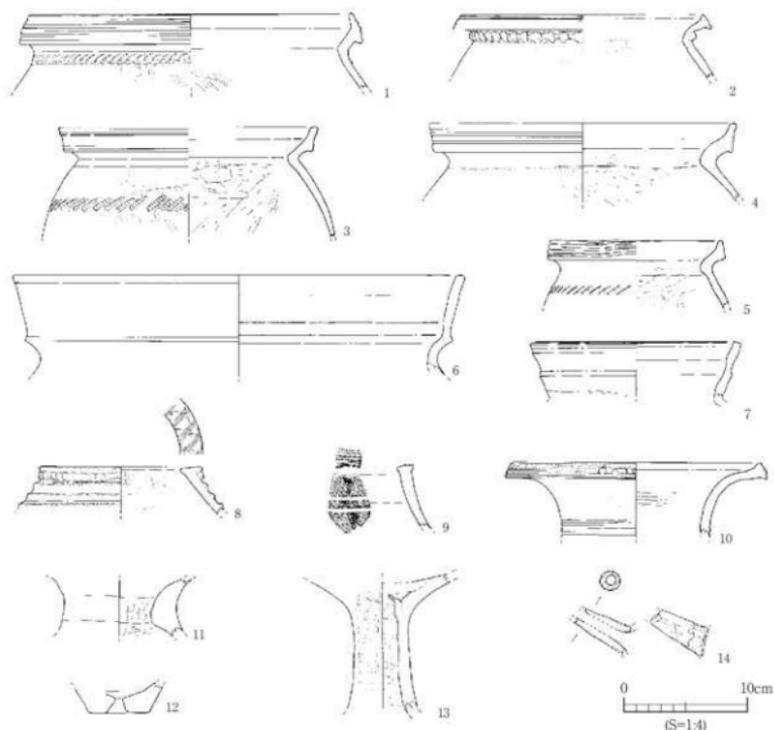
い棒状のものである。8は右側が一段薄くなるものである。9～11は側面側が厚くなるものである。9・11は類似したものであり、10はやや途中から尖り気味になるものである。

弥生土器等 (第113図) 1～14は道路遺構の盛土中から出土した弥生土器あるいは古式土師器であり、道路遺構以前のものが二次的に入ったものである。1～6は複合口縁の甕である。1・2は口縁部に凹線文を施し頸部に圧痕文帯を廻らすもので、IV様式に相当する弥生土器である。3～5は直立気味の複合口縁の甕である。口縁部には3条程度の凹線文が見られるもので草田編年1期に相当するものと考えられる。6は口縁部が長くヨコナデによって仕上げられるもので草田編年6期頃に相当するものと考えられる。7は退化した複合口縁と思われる甕であり口縁端部には面をもつ古墳時代の大東式に相当するものと考えられる。

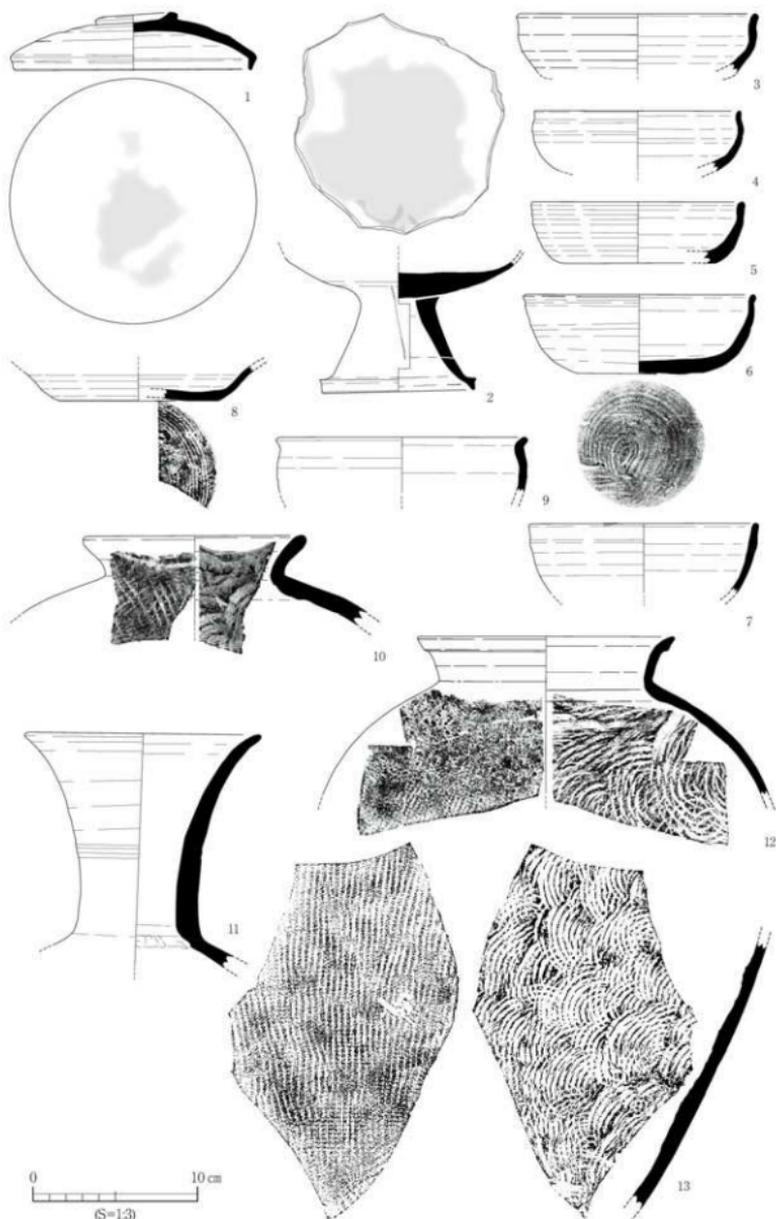
8～10は壺である。8・9は無頸壺であり口縁部上端に文様を施す。8はⅢ様式、9はⅣ様式に属す弥生土器と考えられる。10は広口壺であり、口縁部と頸部に凹線文が施される。Ⅳ様式に属すと考えられる。11は頸部片、12は穿孔された底部、13は高坏脚部、14は注口である。

(10) 旧河道 (SX01) 古堆積層出土遺物 (第114図～122図)

須恵器 (第114図) 1～13は道路築造以前の旧河道古堆積層出土のものであるが、1・2はこの堆



第113図 山持遺跡6区道路遺構盛土内出土土器実測図



第114图 山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土須恵器実測図

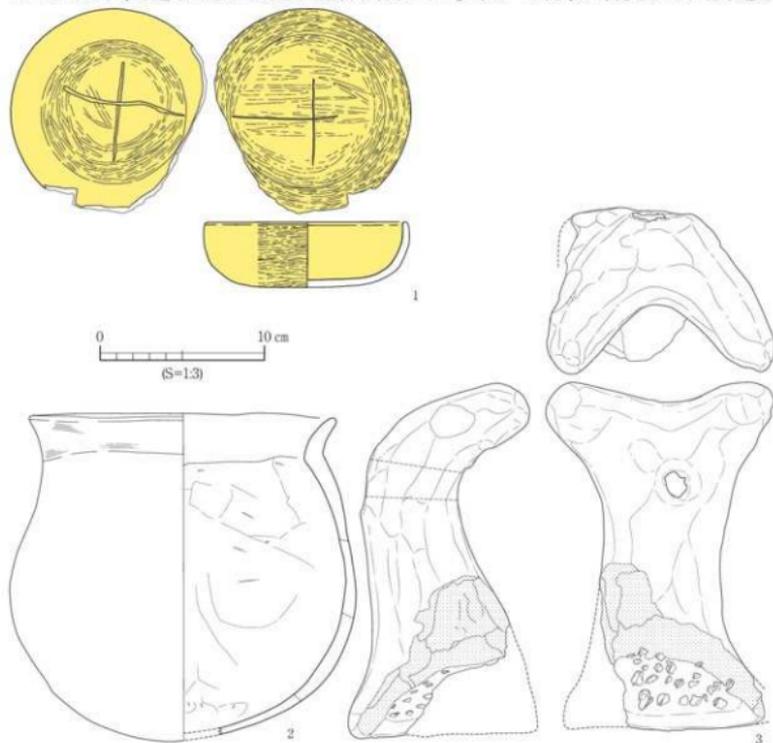
積層の中でもさらに古い堆積層から出土している。1・2は墨痕が残る転用硯である。1は輪状つまみ付きの蓋であり、2は透かしが切れ目の無蓋高坏である。1の蓋は青木編年Ⅰ期に相当すると考えられる。2は青木遺跡Ⅰ期以前のもと考えられるが、1・2は転用硯の使用状況が類似することや出土層位が同じであり共通点が多い。

3～7は坏である。3～6は内湾気味に立ち上がる口縁が端部付近で外に屈曲するものであり、青木編年Ⅱ期に相当するものと考えられる。7は内湾気味の口縁が端部で屈曲しないものであり、青木編年Ⅲ期に相当すると考えられる。8は外反する口縁部の皿である。9は鉢である可能性が考えられ、口縁端部は屈曲する。8・9は坏類と同じ青木編年Ⅱ期～Ⅲ期に相当すると考えられる。

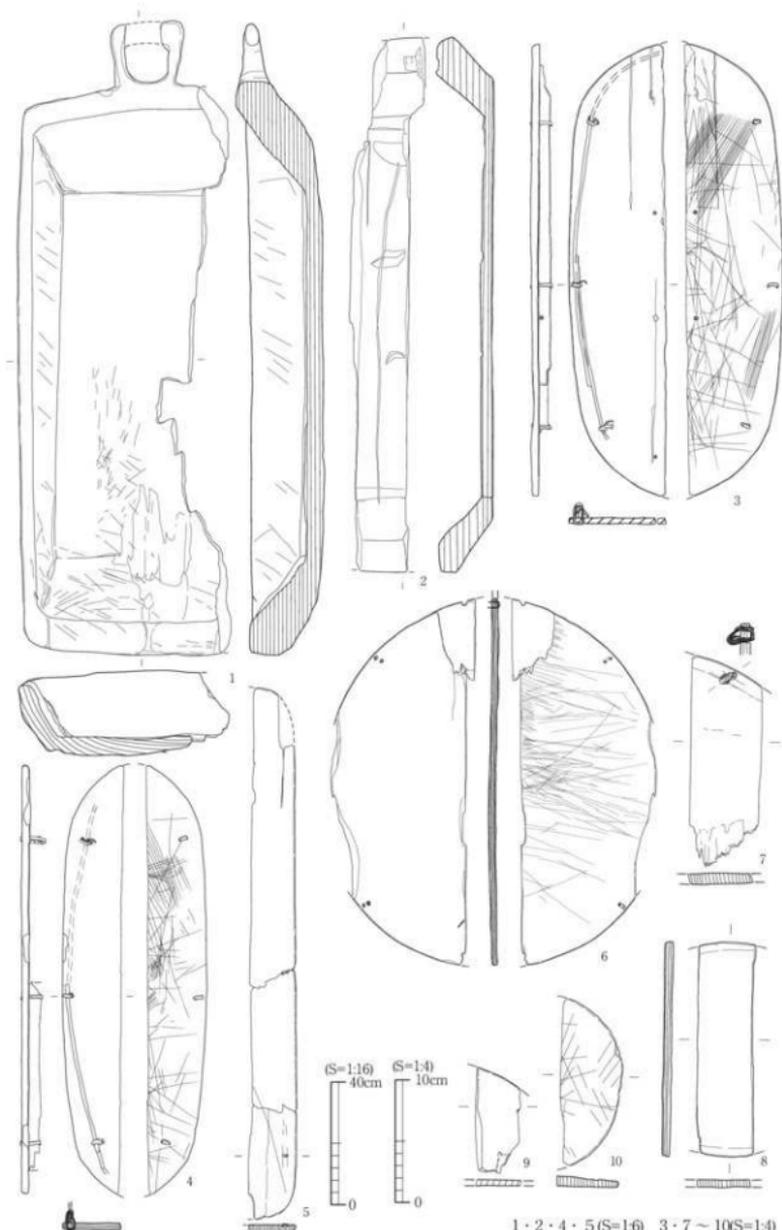
10～13は甕・瓶類である。10は単純な字口縁であり、横瓶の口縁部付近の破片と考えられる。11は長頸瓶の口縁部と考えられ、頸部半ばには沈線が施される。12・13は甕の口縁部と胴部である。

以上の須恵器の時期的な特徴は、道路築造後の旧河道（SX01）堆積層と比べ全体的に古い様相が見られ、層序と大きく矛盾するものではないということが指摘される。

土師器・土製支脚（第115図） 1・2は土師器である。1は内外面全面丹塗りの坏であり全面がミガキによる丁寧な造りのものである。底部内外面に「×」印のヘラ記号が確認される。青木遺跡

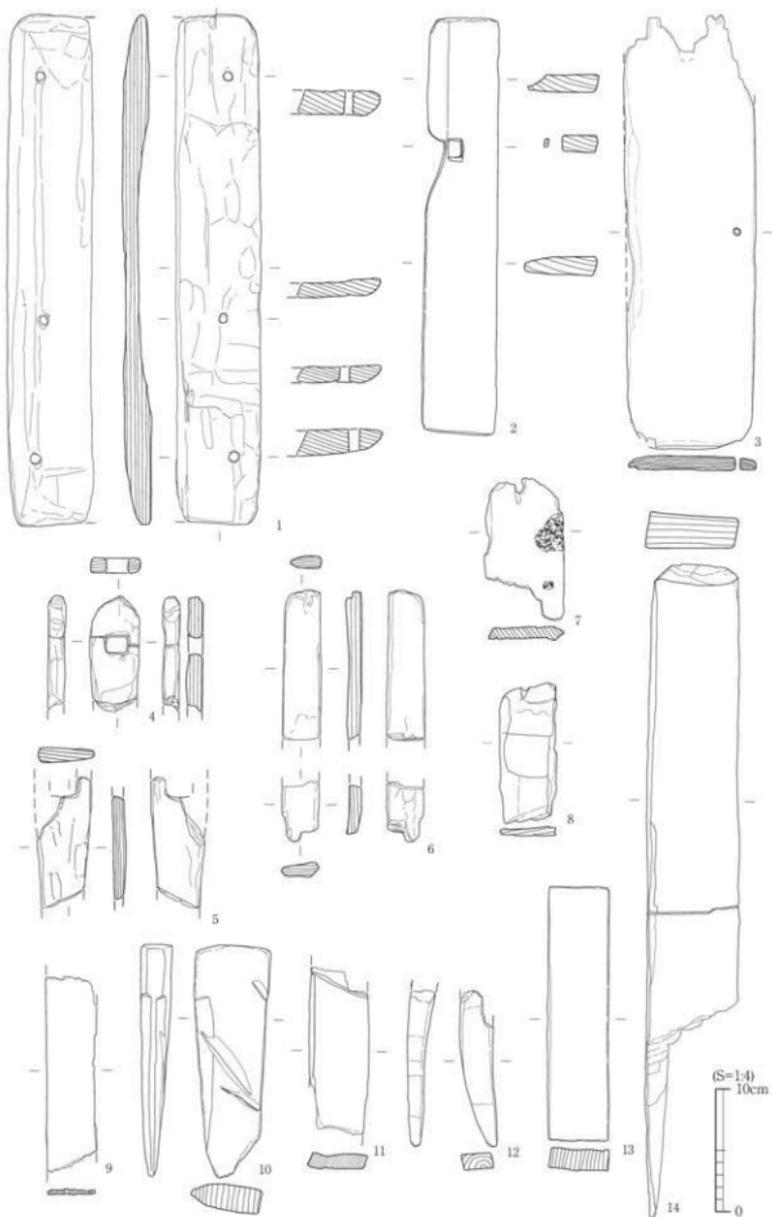


第115図 山持遺跡6区旧河道（SX01）古堆積層出土土師器実測図



第116图 山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土木製品実測図(1)

1・2・4・5(S=1:16) 3・7~10(S=1:4)



第 117 图 山持遺跡 6 区旧河道 (SX01) 古堆積層出土木製品実測図 (2)

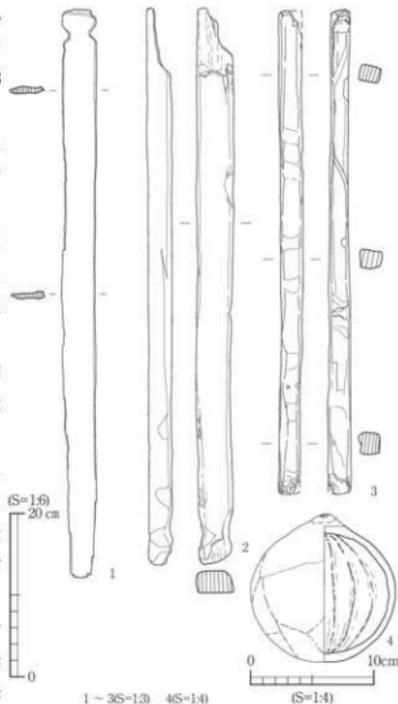
編年のI期以前のもと考えられる。2の甕はくの字口縁で、口縁部が短く胴部があまり張らないものである。盛土直下の砂礫層から出土している。3は土製支脚であり、山持遺跡ではあまり出土しないものである。前述した須恵器の蓋・高坏（第114図I・2）と同一の層位から出土している。二股の支脚で体部に孔が開けられるタイプのものであり、岩橋の土製支脚分類のI B類（岩橋2003）に相当すると考えられる。脚部内面には刺突痕が多数認められ、類例が少ないものである。

木製品：容器（第116図） 1～8は容器と考えられる木製品であり、樹種が判明しているもので1がケヤキ、2～8・10はヒノキ材である。9は未鑑定である。1・2は長方形状を呈す槽と呼称される刳物の容器である。1は底部から側面が斜めに立ち上がるもので、片方の短辺側には把手が造り出されている。把手は方形に削り貫かれているものである。2は破片であるが1と同じような容器でサイズがやや小形のもと考えられる。

3～5は楕円形又は長方形状を呈す曲物の底板（天板）と考えられるものである。3は樺皮で結合された側板の一部が残るもので、樺皮を通すための一対の円孔が3カ所確認される。また、破面側にも孔が4箇所確認され、何らかの補修用か結合用のものかもしれない。裏面には多数の擦痕が認められる。4も樺皮で結合された側板の一部が残るもので2対の円孔が3カ所確認される。裏面には多数の擦痕が認められる。5は一対の円孔が2カ所確認されそのうち1カ所には結合用の樺皮が残存している。おそらく3・4と同様3カ所に円孔が設けられていたと推測される。

6～8は円形の曲物と考えられる。6は大型の円形曲物の底板（天板）と考えられ、2カ所に側板結合用の一対の円孔が確認され、そのうち1カ所には樺皮が残存している。7は結合用の一対の孔と樺皮が残る底板（天板）である。8～10は底板（天板）であり結合の状況が推測されるものは残っていなかった。

木製品：板状（第117図） 1～14は板状に加工されているものであるが、殆どのが用途が不明なものである。1は中央部の厚みが薄くなるもので、端部付近に2カ所、中央寄りに1カ所の計3カ所に円孔が穿たれている。樹種はスギである。2は側面に削り込みを入れその近くに方形の孔を開けたものである。樹種はスギである。3は一方の側面に円孔を開けているもので、樹種はヒノキである。4～6はアカガシ亜属材を加工したもので同一個体の可能性がある。4は端部を三角形に尖らし方形の孔が開き、5は方形の孔又は削り込みが設けられ、6は小口部分に削り込みが作り出されている。



第118図 山持遺跡6区旧河道 (SX01)
古堆積層出土木製品実測図 (3)

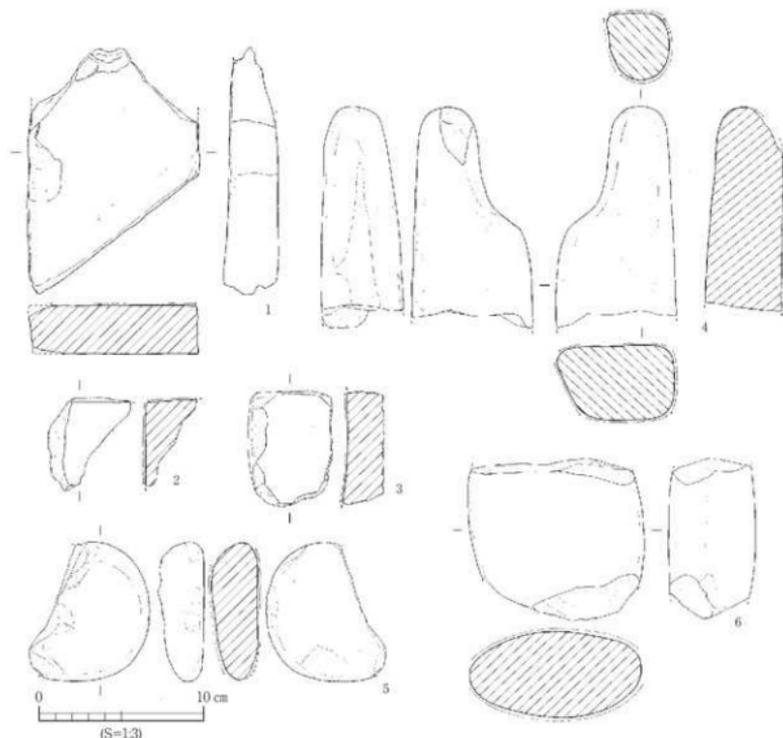
7～9は板状に加工されているものである。10は先端が薄く加工されたもので木製の楔と考えられるものである。樹種はアカガシ亜属である。11～14は板状に加工されたものでやや厚めのものである。12は一方の側面がやや弧状になり尖り気味に加工されているものである。

木製品：棒状（第118図） 1～3は棒状に加工されている木製品である。1は端部付近に両側から削り込みを入れているものであり、樹種はスギである。2も端部付近に両側から削り込みを入れているものである。3は断面方形に加工されたものである。

ヒョウタン（第118図） 4はヒョウタンで球形を呈すものである。

石器（第119図） 1は砥石である。扁平な形状を呈し一面に使用痕が確認される。2は砥石の破片であり、二面に使用痕跡が確認される。3は砥石の小片であり遺存している面で使用痕跡が確認できる。4～6は磨石である。4は断面が長方形のもので各面が使用されていることが明瞭に確認され、非常に滑らかな部分が見られる。5は扁平なもので敲打痕が側面に確認され、中央付近はやや凹んでいる。6は円盤状のもので両面が使用され、滑らかな面が見られる。

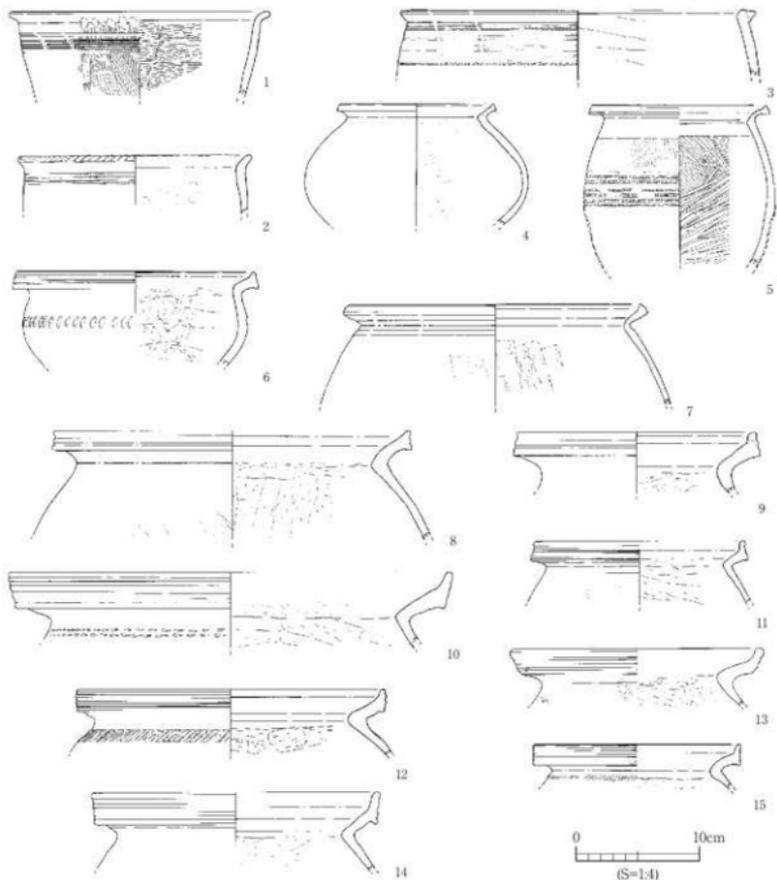
弥生土器（第120図） 1～15は弥生土器である。1・2は4条程度のヘラ描沈線文を施す胴部が張らない甕である。口縁部は若干外側に折れるもので、I様式に属すものと考えられる。3は口縁部



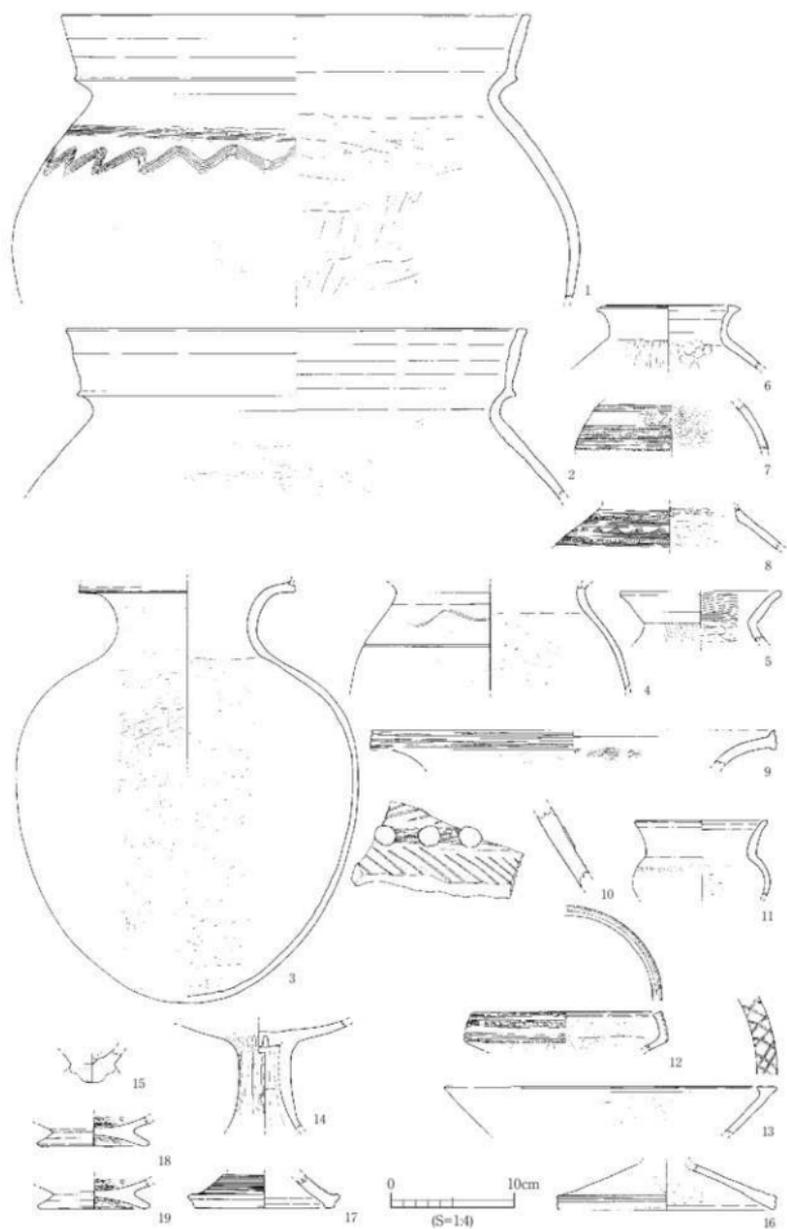
第119図 山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土石器実測図

を貼り付けた逆L字状口縁の甕である。頭部には10条程度のクシ描沈線文が施されその下には三角形の刺突文が廻る。II様式に属すものと考えられる。4は口縁端部が若干拡張される鉢でIV様式に属すと考えられる。5・7は口縁部が拡張され2条の凹線文が施されている甕であり、IV様式に属すと考えられる。6は口縁部が拡張され3条の凹線文が施された鉢である。頭部までヘラケズリが及ぶことからV-1様式に属すものと考えられる。8は口縁部が拡張され2条の凹線文が施される甕であり、V-1様式に属すと考えられる。9-15は口縁部が直立又は外反する複合口縁の甕であり、口縁部には2条-4条の凹線文等を施す。肩部には10・12・15のように刺突文を施すものがある。これらはV-1様式に相当するものと考えられる。

弥生土器・古式土師器 (第121図) 1-16は弥生土器又は古式土師器である。1-2は口縁部は直立気味の複合口縁の甕であり、口縁端部には面をもつ。1は肩部に平行沈線文と波状文が施されて



第120図 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器実測図 (1)



第121图 山持遺跡6区旧河道(SX01)古堆積層出土土器実測図(2)

いる。これらは大木式～小谷2式に相当するものと考えられる。3は複合口縁の壺と考えられるが、口縁部は欠損している。底部は丸底であり草田6期以降のものと考えられる。4は甕の胴部上半であり、肩部にはヘラ描の沈線文と波状文が施されている。小谷2式前後のものと考えられる。5はく字口縁の甕であり、小谷1式前後の資料であろうか。6は口縁端部が拡張され2条の凹線文が入る直口壺であり、IV様式に属すと考えられる。7は無頸壺の胴部と考えられ平行沈線文と刻みが施されている。Ⅲ様式に相当するものと考えられる。8は赤彩された裝飾壺の胴部であり沈線文と爪形刺突文、鋸歯文によって飾られている。V様式に属すと考えられる。

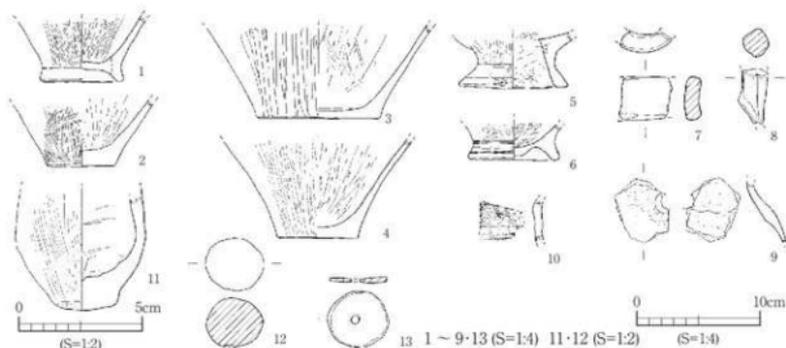
9・10は広口壺と考えられる。9は口縁部が拡張され3条の凹線文が施され、IV様式に属すと考えられる。10は羽状文と円形浮文で飾られたものでⅢ様式～IV様式に属すと考えられる。

11は小型の単純口縁の壺であり肩部に刺突文が見られる。時期的な位置付けが難しいが草田3期以降のものと考えられる。

12～16は高坏である。12は坏部の口縁部が屈曲するもので口縁端部と側面に凹線文が施される。IV様式に属すと考えられる。13は坏部が直線的に広がるもので端部は拡張され斜格子文が施される。Ⅲ様式に相当するものと考えられる。14・15は高坏の接合部付近である。14は坏底部に接合用の孔が確認される。15は他の器種の可能性もある不明確なものであるが、接合部分が割れたものと判断した。16は高坏脚部であり若干拡張された端部に3条の凹線文が施される。V様式に属すと考えられる。

17は器台の脚又は高坏の脚の可能性があり。脚裾部分には多条の平行沈線文が施される。IV様式に属すと考えられる。18・19は脚部である。18は低脚坏と考えられ、19は低脚坏の可能性もあるが他の器種の脚とも考えられる。

弥生土器 (第122図) 1～4は甕・壺の底部である。5・6は何らかの器種の脚部と考えられる。7・8は把手である。7は断面が長方形となり8は断面が方形状を呈す。9は注口土器の破片である。10はヘラ描の沈線文と円形の刺突文が施された破片でありI～Ⅱ様式に属すものと考えられる。11はミニチュア土器の下半部である。12は球状の土製品であり、一部欠損しており何らかの土器に付されていた可能性も考えられる。13は土器を転用した有孔土製品である。



第122図 山持遺跡6区旧河道 (SX01) 古堆積層出土土器実測図 (3)

第3節 道路遺構（南側）の詳細（平成19年度調査部分）

(1) 検出状況（第123図）

平成19年度の調査では、道路遺構の南側部分について実施した。調査にあたっては上部を覆う中世頃のオモカス層から人力で除去することで、道路遺構の廃絶直前段階とその周辺の地形情報を把握することを目的とした。しかし、調査区の南側については近世以降の河道によってオモカス層が完全に削られ、それは道路遺構の上部にも及んでいたことから、当時の状況を完全に把握することまでには至らなかった。

第123図はオモカス層を除去した段階での道路遺構の検出状況である。網掛け部分は確実に道路遺構の盛土と判断される範囲である。平成18年度調査の北側部分と同様に人頭大の礫が盛土に含まれる状況で検出しているが、中程から南側部分については確実に近世の河道によって削られたものと判断され、かろうじて一部の礫が残されているのみである。礫は最大のもので53kgを量る。

礫の検出状況で注目されるのは、西側で列状に並ぶ部分である（第123図A-A'）。この石列はN-43°-W方向に5m程並ぶものであり、これを境界に盛土が見られなくなる。このことから道路遺構の西側の裾に並べられた石列と判断される。ただし、明らかに平成18年度調査で確認された道路遺構の主軸とは異なるものであり、検討を要するものである。また、中央より北側でも2.5m程石列状に南北方向に並ぶ部分が確認される。

規模等 遺構は標高3m付近で検出し、確認できた範囲は南北方向で延長14.7mである。現状から考え得る道路幅は、盛土の範囲で東西5m程であることから、それ以下の幅員と考えられる。また路面は検出レベルよりさらに高い位置と考えられるが、既に失われていると判断される。

(2) 土層断面（第124図）

平成18年度調査の道路遺構の主軸に沿って設定した土層断面図である。東西軸と南北軸を十字に設定し土層観察を行っていたが、南北軸については、ほとんど道路遺構に掛かっていない状況であり問題が生じた。そのため、新たに設定し直した結果が第124図右側・第125図である。

第124図の南北軸でも分かるように、道路遺構直上を覆うオモカス層（D層）が南側では削られており存在していない。その部分はシルトや砂等（C層）が堆積しており数度に渡って河川の影響を受けた部分と考えられ、南側はシルト系堆積層（L層）の上部まで削られている。

東西軸を見ると、調査の途中まで確認していなかったが、東側に断面で深さ0.8m程の落ち込みがあり、その堆積層（K層）の上に道路遺構の盛土（F層）がなされている。この断面から、道路遺構が造られた場所は、比較的地盤の安定した場所から外れた地盤の緩い場所であることが指摘される。また、西側では水田と推測される層（E層）が見られ土層観察ではその上部に道路盛土（F層）が載っているが、実際には明瞭に上下関係が判断できるものではなかった。このE層は調査区西壁全域で見られるものであることから、道路遺構の西側は水田が広がっていたものと考えられる。

土層図の東側では道路遺構盛土の上にG層が載っており、これはやや凹み状になった部分への堆積土と判断したが、道路遺構側の堆積土は道路遺構の盛土と類似するような部分もあった。このことから道路遺構盛土の二次的な流土も含まれていると考えられる。

(3) 盛土の詳細（第125図）

新たに設定し直した土層図であり、主軸は前述した道路裾を示す石列に基づいている。これの道

路遺構の盛土の下面の状況は西側から東側に傾斜しているのが基本である。これは東側の地盤が緩い部分であったことから沈下した可能性も考えられるが、おおよそ築造前の地形を表しているものと考えられる。盛土は基本的に砂質土であり、その上下で見られる粘質系の土とは明らかに異なるものであった。盛土の中には小枝等が集中して出土する箇所があり平成18年度調査地点の様相と共通するが、粘土系の土の使用が認められない点が異なる。また、後に述べるが拳大の礫が盛土最下部で見られる点が異なっている。

(4) 盛土下部の礫群 (第126図)

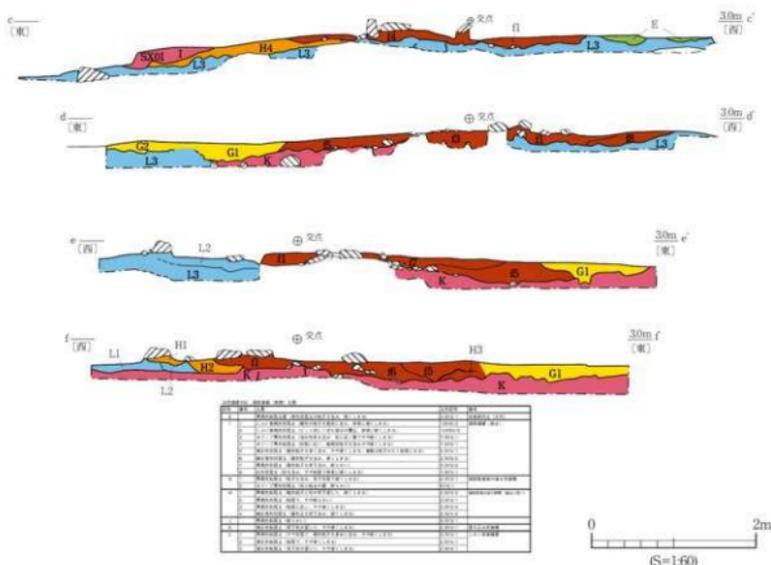
盛土及び盛土中に含まれる大型の礫等を除去した段階の盛土最下部の標高26～29m付近では、拳大の礫が多数検出された。その検出状況を記録したものが第126図である。

礫群の平面的な分布は規則性がないものであり、東側に片寄る形状で検出されている。おそらく地盤の緩い東側の路盤として敷かれたものとして考えられる。礫群の範囲は道路遺構の下部全域で見られるが、この礫群を除去した後に浅い溝や土坑を検出していることから、旧地形を凹ました後に礫を敷き詰めていた可能性が考えられる。礫群の分布範囲は東西3.2m程である。

(5) 礫群除去後の溝等の検出 (第127図)

道路遺構の最下部で検出した礫群を除去した段階の図が第127図であり、この状況が道路遺構を礫や盛土によって構築する直前の状況を表すと考えられる。

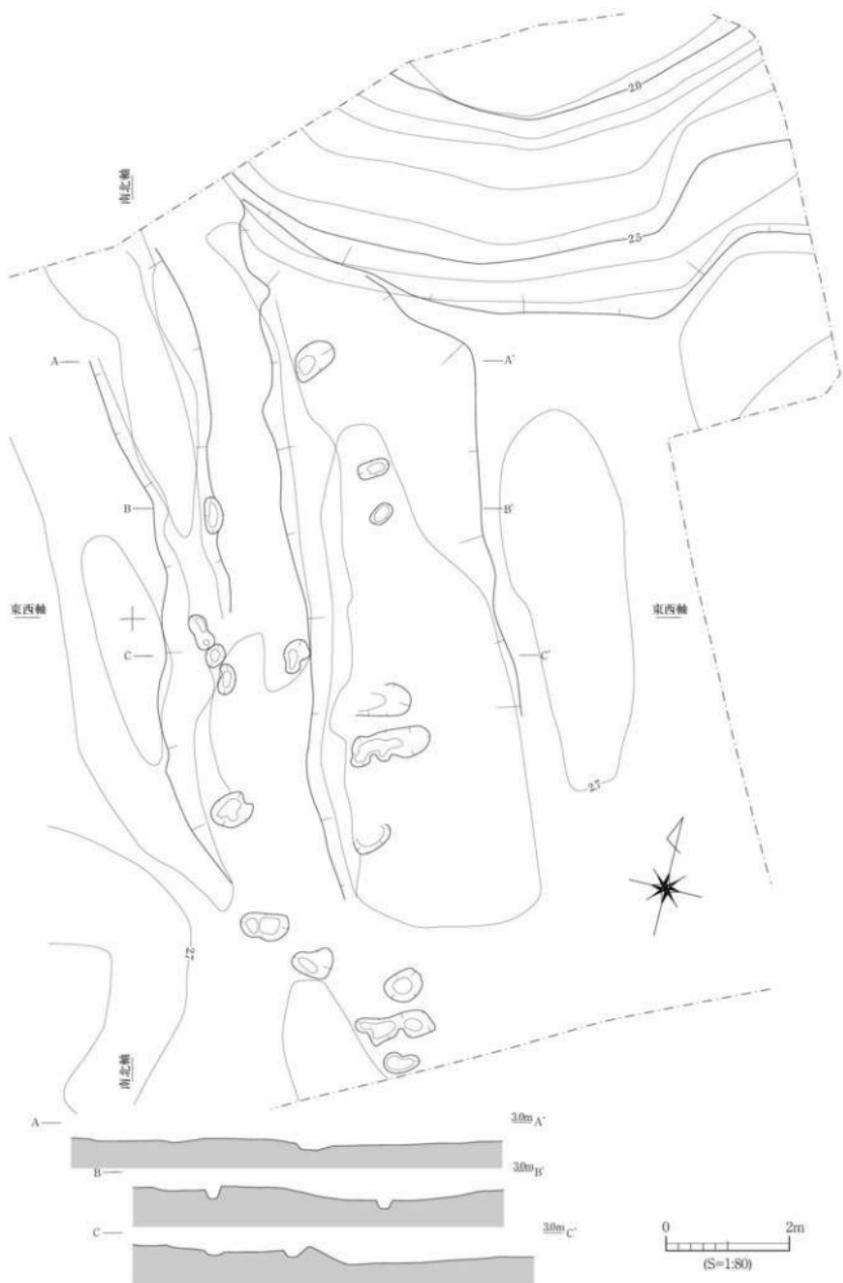
溝としたものはやや西側で南北方向のものを1条確認している。幅は1.2m～1.8m、深さは5cm程の非常に浅いものである。この溝の方向は当初設定した主軸や石列の主軸と一致するものではなくN-28°-W前後の方向のものである。東側では落ち込み状に凹み、これは下部に存在する落



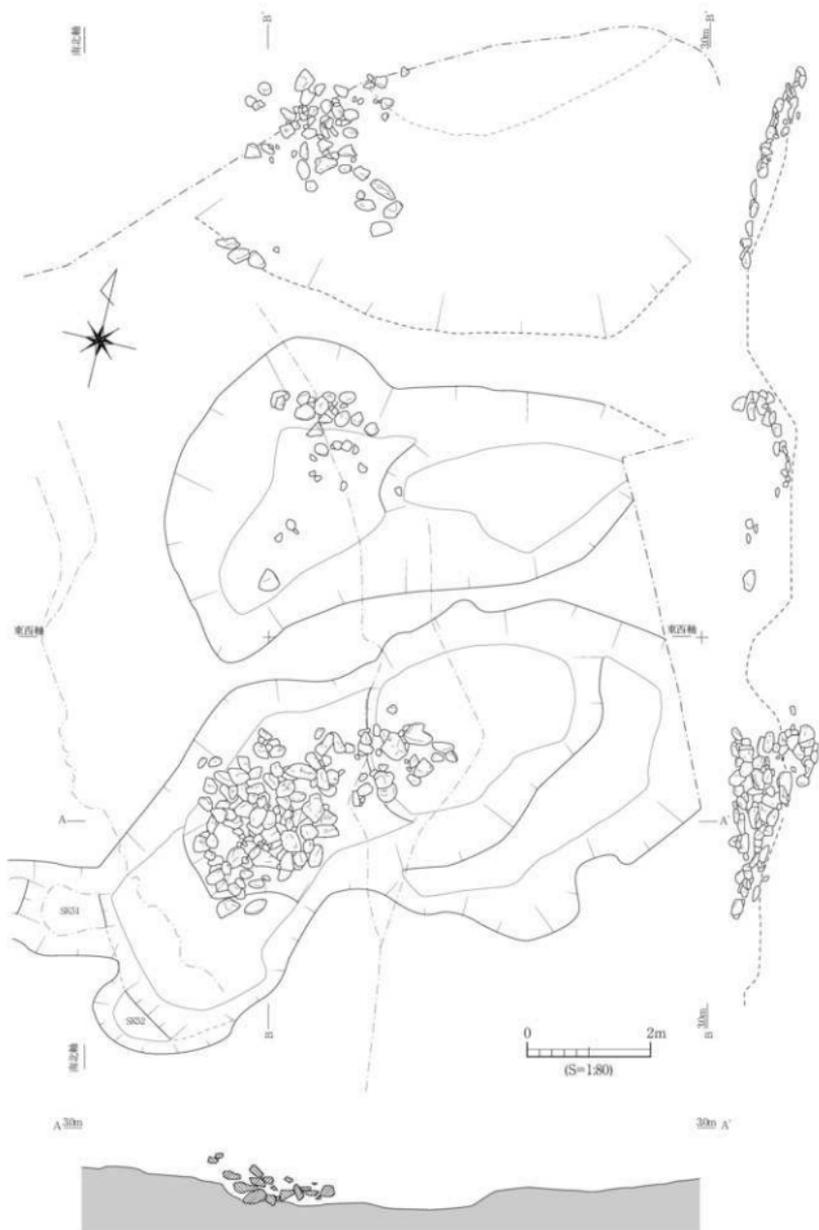
第125図 山持遺跡6区道路遺構(南側)土層実測図(2)



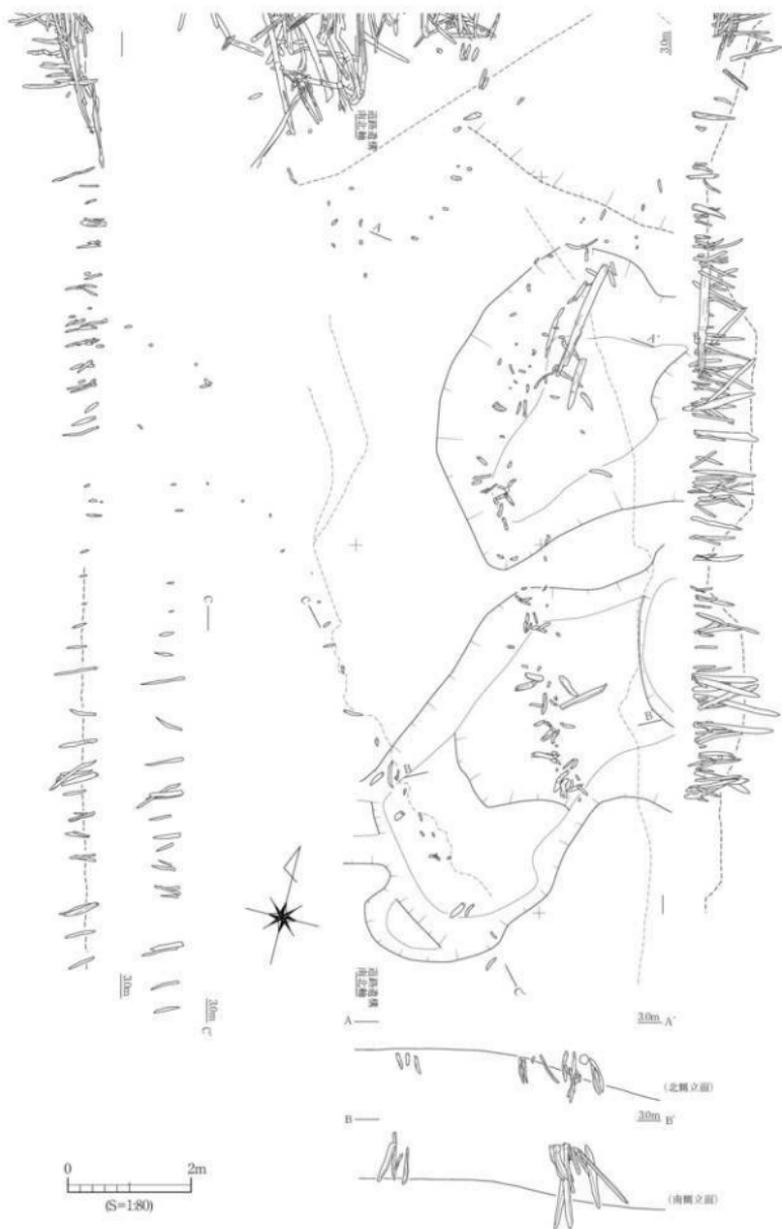
第126图 山持遺跡6区道路遺構(南侧)実測図「下部磔群」



第127图 山持遺跡6区道路遺構(南側)実測図「盛土除去段階」



第128図 山持遺跡6区道路遺構（南側）下部落ち込み検出状況



第 129 图 山持遗址 6 区道路遗构 (南侧) 杭列实测图

ち込みに起因するかもしれない。そのほか規則的ではないが径0.6～0.8m、深さ15cm程の浅い土坑状の凹みが確認された。

(6) 道路遺構下部の落ち込み (第128図)

道路遺構の礫群除去後の溝や土坑等の状況を記録後に、弥生時代の遺構等を精査する段階で予想以上の範囲で落ち込みが存在することが判明した。最終的には東西に長い不整な楕円形状のものが2箇所確認された。これらの落ち込み内からは、人頭大の礫や須恵器や木製品等の遺物が出土している。

北側の規模と形状等 不整な楕円形状を呈し南側が一段深くなる。東西8m以上、南北4.4m、深さ1m程を測る。遺構内からは北側方向から入り込んだ人頭大の礫が検出された。礫は上部の道路遺構盛土中に含まれる礫と何ら変わらないものである。

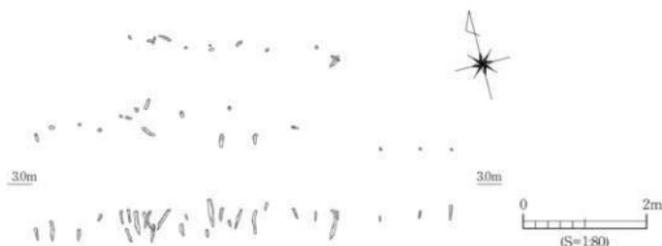
南側の規模と形状等 不整な楕円形状を呈し東側がやや深くなる。東西10m以上、南北5m、深さ0.8mを測る。遺構内には西側から入り込んだ人頭大の礫が多数検出され、最大のものは64.9kgを量る。この礫も北側の落ち込みと同様のもので道路遺構に使用された礫と変わらないものである。

これらは平成18年度に検出した旧河道(SX01)と関連する落ち込みである可能性が高いが、現段階の情報では確証は無い。また、出土している人頭大の礫は道路遺構で使用された礫と何ら変わらないものであることから、道路遺構築造時にこの落ち込みを礫と一緒に埋め戻して整地している可能性が考えられる。

(7) 杭列検出状況 (第129図)

道路遺構下部で検出した落ち込みの調査段階で、杭列を検出した。道路遺構盛土の調査段階ではほとんど確認出来なかったものであり、厳密に道路遺構に伴うかどうか難しいところもあるが、杭が確認される範囲は道路遺構の盛土のほぼ範囲内であり、調査区の他の部分では存在しないことから、平成18年度調査でも見られた道路遺構に伴う杭列と判断している。

杭列は平成18年度調査で見られたようなしがらみ状になるものではなく、杭が列状に打ち込まれただけのものである。これらの杭列は大きく3つ程のグループに分かれる。最も西側のグループはちょうど道路遺構の西側石列に沿っているものであり、標高2.7m程度が杭の上部のレベルである。また、近接する杭が2本で一セットになるように2列になっているような印象を受けるのである。ただし石列の北側の端あたりから大きく西側に弧を描くように杭列がカーブし、旧河道(SX01)の南岸に沿うような状況になり(第75図)、そのあたりから1.4m程離れて平行する杭列(第130図)も見られる。



第130図 山持遺跡6区道路遺構(南側)関連杭列実測図

最も東側の杭列は道路下部の落ち込みの西側壁付近を沿うように見られるものであり総延長11m程である。杭列の上部の標高は2.6m～2.7m程である。杭列の方向は、南側の落ち込み部分では、前述した西側の杭列に平行しているように見える直線的な状況であるが、北側落ち込み付近になると東側に角度を変え、このような状況であることからこの杭列は、道路遺構と言うよりも落ち込みに伴う何らかの杭列と考えることも可能である。杭列を詳細に見ると一列というよりは平行する二列で構成されるような印象を受けるものである。

もう一つのグループは北側で確認されたもので、ほぼ当初の道路軸に沿ったものとその東側に見られる杭列である。軸に沿ったものは延長1.4m程で0.4m離れて平行する二列になるものである。その東側で検出されたものは角度が異なるもので、どちらかと言えば北側の落ち込み付近の杭列と方向が似ているものであり、北端付近のものは旧河道内(SX01)にある。

(8) 杭列の材から見た分類 (第131図)

杭列に使用された杭について、形状から分類すると第131図となる。全体的に使用されているものは径が小形で簡単に先端を尖らした表皮が残る杭である。径が大きく表面も加工されている杭は落ち込みに沿う東側の杭列で主に確認される。特徴的な杭として断面が長方形の扁平な板状の杭がある。この杭は何らかの転用材の可能性があるので、東側の落ち込み沿いの杭列、特に南側で多く確認される。また西側の石列に沿った杭列や北側の杭列でもいくつか使用が確認される。このように特徴的な杭が各杭列で使用されていることから、同一の時期・目的で打ち込まれた杭列である可能性は高いと考えられる。

(9) 遺物の出土状況 (第132図)

第132図は道路遺構周辺の遺物出土状況図である。ただし、北側の旧河道(SX01)内出土遺物、道路遺構盛土内出土遺物、道路遺構を覆っているオモカス層出土遺物も一緒に表したものである。

道路遺構築造後～オモカス層に覆われるまでと考えられる遺物の出土は少ないが、オモカス層除去後の道路遺構の直上で、柄の残る短刀や長頸鎌等が出土している。また、この段階の遺物としては、北側の旧河道(SX01)出土の遺物があり、赤彩土師器や木製品が出土している。その他には、道路遺構から外れた調査区の西側ではオモカス層除去後に短刀等が出土している。なお、後述するシルト層上面出土とした遺物の中にも本来道路遺構築造後の遺物も含まれている可能性はある。

道路遺構の盛土中からは須恵器や鉄鎌や釘が出土している。また、詳細な出土位置は掲載していないが道路下部の落ち込み内からは須恵器や木製品が出土している。

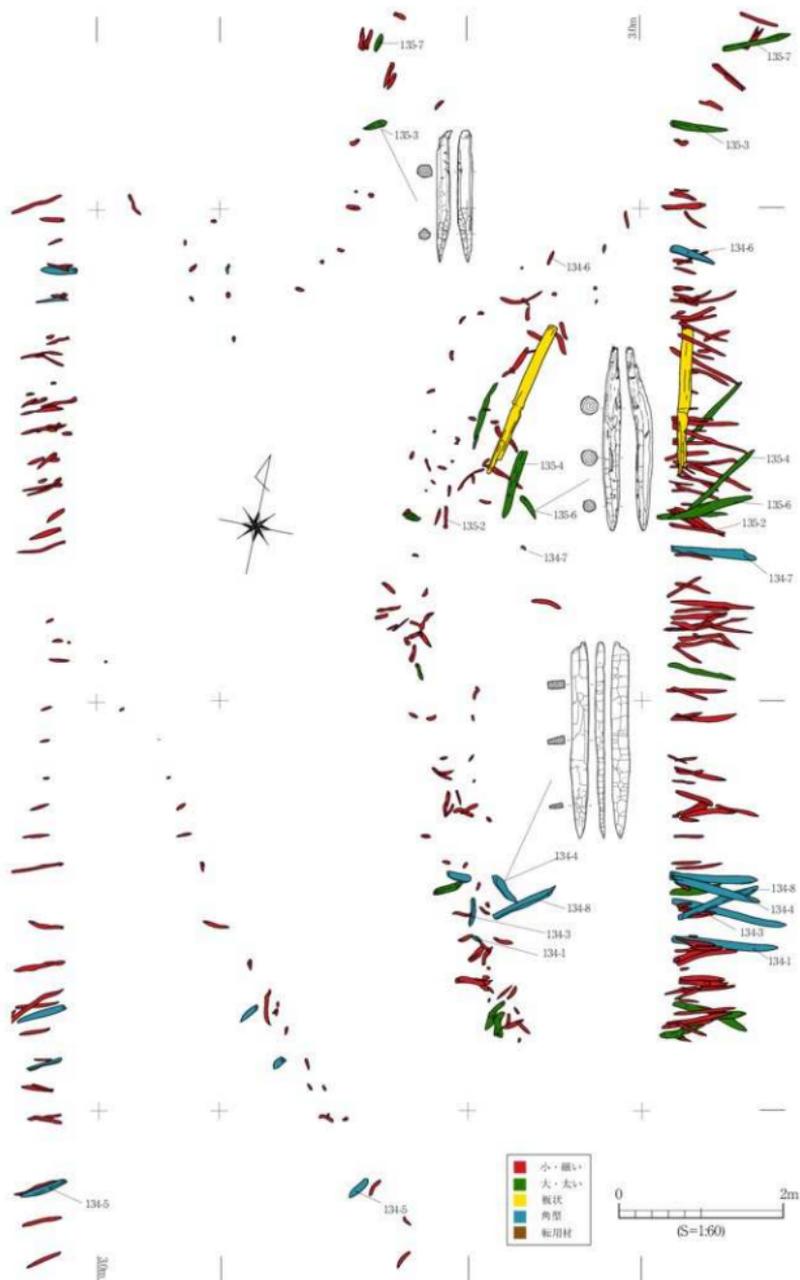
道路遺構を覆うオモカス層からは卒塔婆状木製品や完形の鉄鎌が出土している。

(10) 道路遺構出土遺物 (第133図)

1・5は道路遺構の直上で出土した短刀と木製品、2～4は盛土中から出土した鉄器と石器である。なお、その他に盛土中から出土している須恵器があるが、第107図に一括して掲載している。

1は柄が残存していた短刀である。柄は一本造りのものと考えられ、柄尻の付近は鉄刀の茎が一部覆われるようになっている。また目釘が残っている。鉄刀は全長32.7cmを測り切先は緩やかに弧状となる。両閃のもので茎の先端はやや幅が狭まり丸く収まるものである。

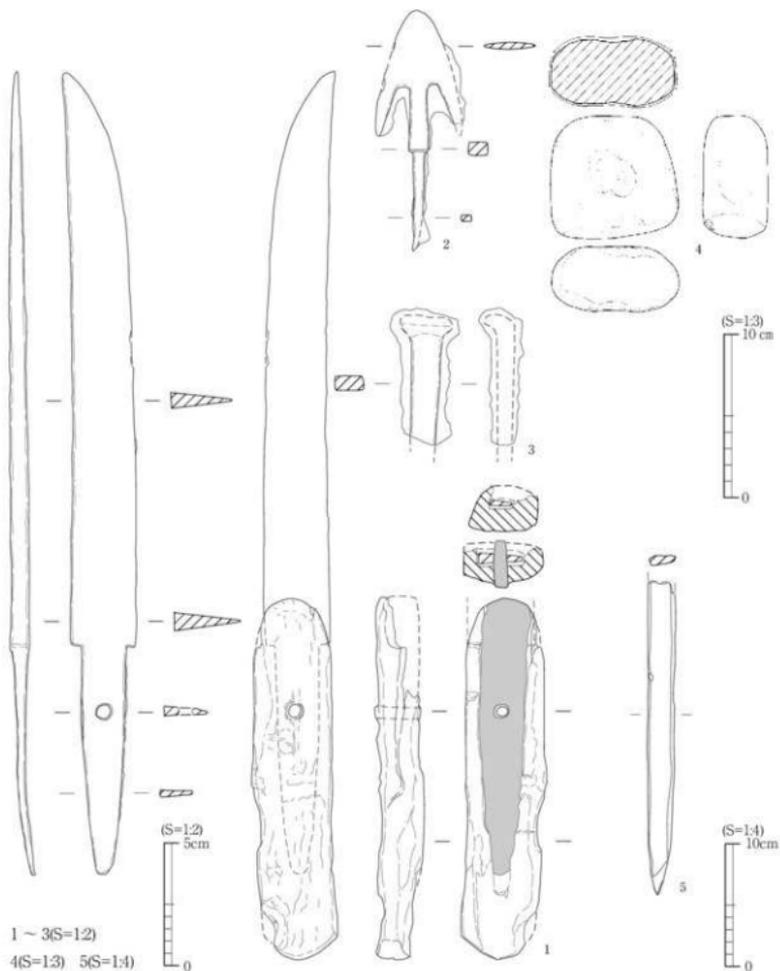
2は短頸の鉄鎌である。鎌身部は三角形式であり茎は両閃状になる。3は鉄釘と思われ、先端部は欠損している。4は不整な方形を呈す磨石であり、表裏面とも敲打によって凹み各側面は使用によって滑らかな面が確認される。



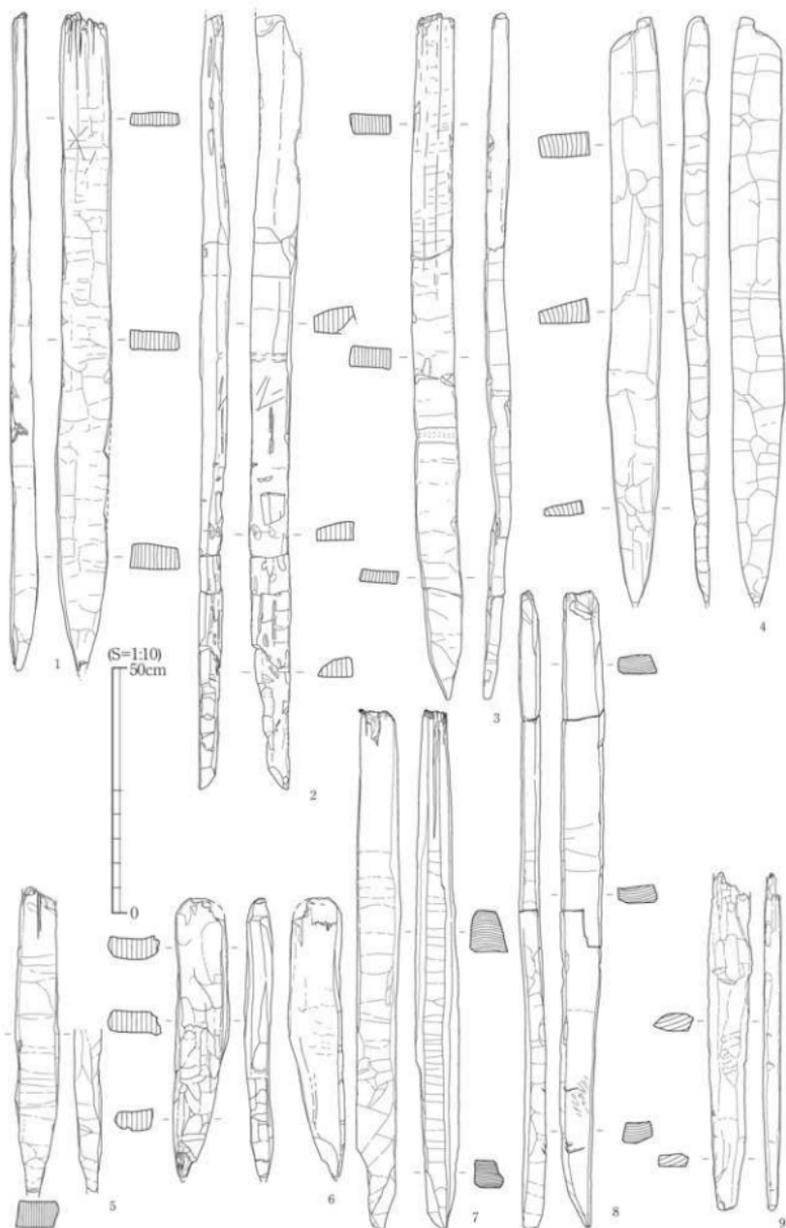
第131图 山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列分類図

(II) 杭列に使用された杭 (第134図)

1～9は杭列に使用された杭である。1～4は断面が扁平な長方形形状のもので長めの杭であり、表裏面には加工痕が良く観察される。平成18年度調査の道路遺構では使用されていない特徴的な杭である。5・6も断面が扁平な長方形形状のもので短いものであるが、本来は1～4のように長いものであった可能性が考えられる。7は断面が方形形状のものである。8は1～4と同じような断面形状であるが木取りが異なるものである。9は残存状況が悪いが本来は1～4に類するものと考えられる。



第133図 山持遺跡6区道路遺構出土金属器・石器・木製品実測図



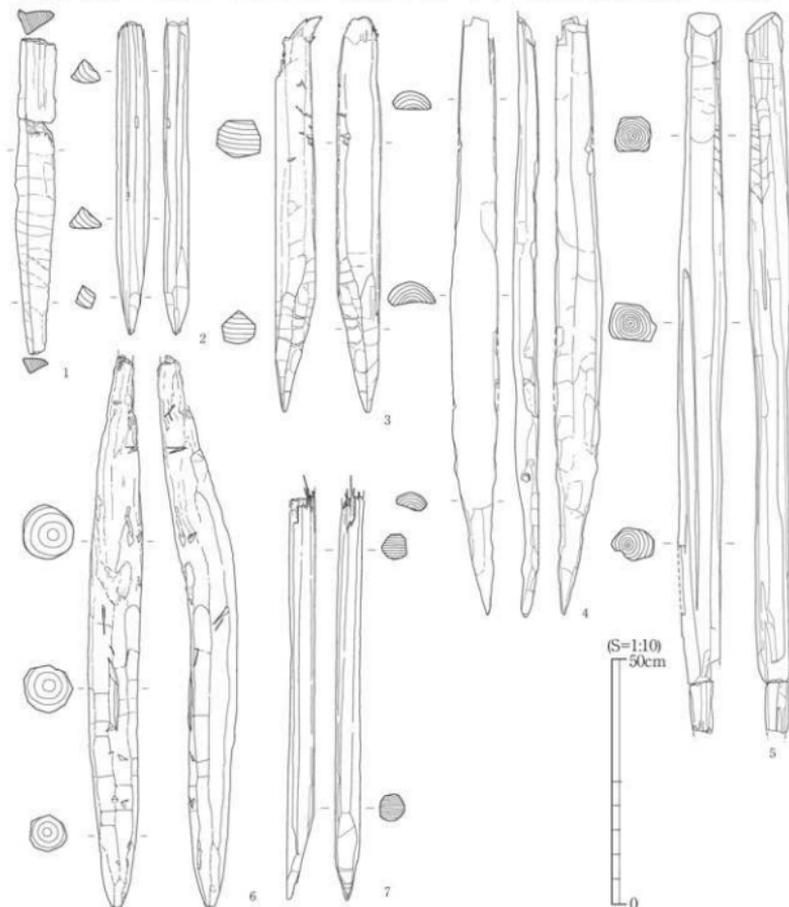
第 134 图 山持遗址 6 区道路遗構（南侧）杭列出土木製品実測図（1）

(12) 杭列に使用された杭 (第135図)

1～7は前述した134図と同様、表面が加工され表皮が残らないものである。1～4は断面形状が様々なものであるが、芯持材ではないものである。5・6は丸太材の周辺を加工して杭としたものである。5は断面が方形形状を呈すものであり、6は面取り状に加工され断面多角形状を呈している。7は断面が不整な方形形状のものである。

(13) 落ち込み内出土遺物 (第136図・137図)

須恵器 (第136図) 1～3は坏である。1は口縁部が内湾気味に立ち上がり端部が若干屈曲する。2は口縁部が内湾気味に立ち上がり端部が丸く収まる。3は底部で、その外面には墨書されている。おそらく文字ではなく「×」印状のものと推測される。これらの須恵器は青木遺跡編年のⅢ期頃に

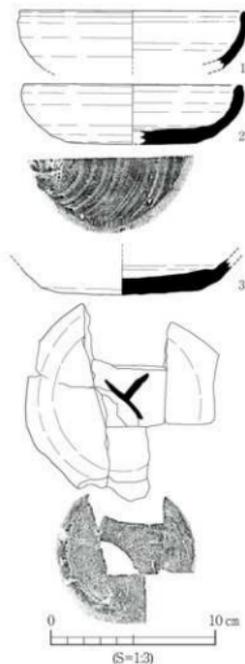


第135図 山持遺跡6区道路遺構(南側)杭列出土木製品実測図(2)

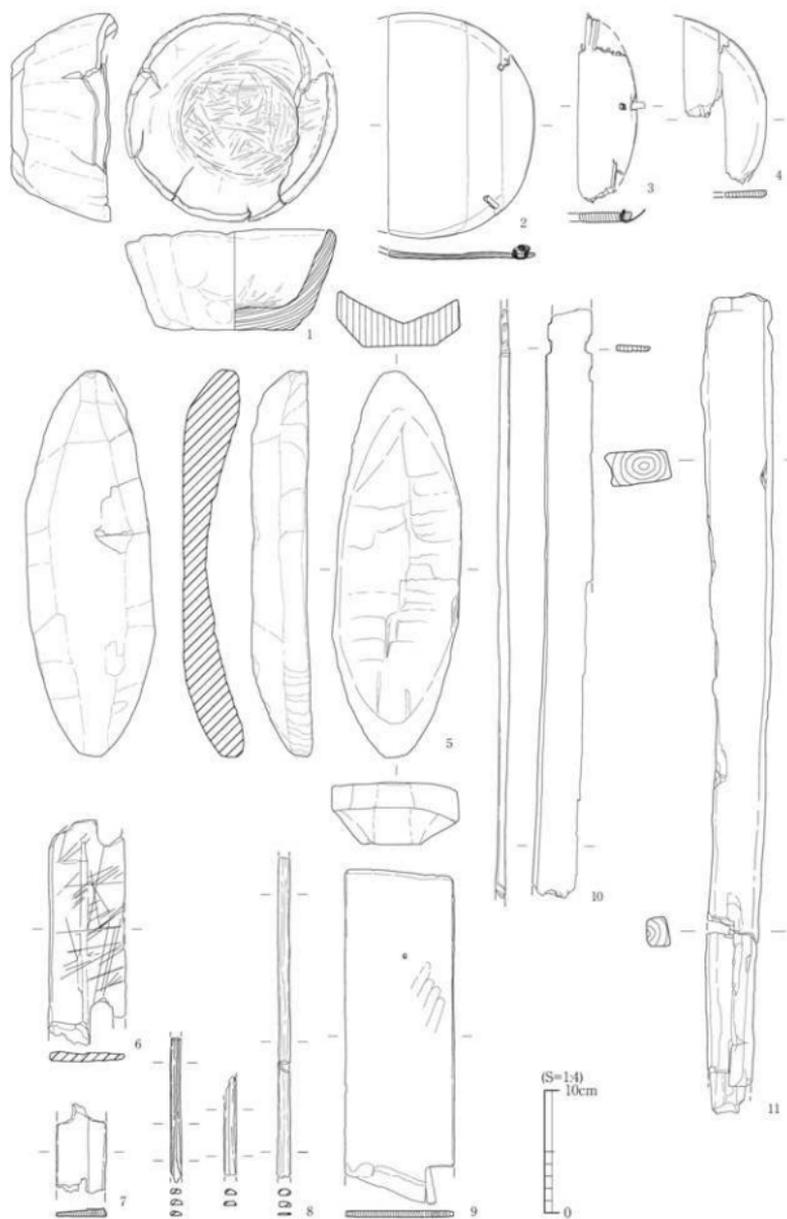
相当するものと考えられる。

木製品 (第 137 図) 1～4は容器である。1は刳物の椀で、口縁部が直線的に外反する形状のものであり、樹種はノグミの可能性がある。2～4は円形曲物の底板(天板)である。2はヒノキを加工したもので、結合用の樺皮が残存し、樺皮を通すための一対の孔が2カ所確認される。おそらく当遺跡で一般的な4カ所に結合用の孔を設けるタイプのもと考えられる。3は結合用の樺皮が1カ所残存する。4は側板を設置していた部分の痕跡が確認できるものである。

5はスギ材を加工した舟形木製品である。加工の痕が明瞭に残るものである。6は板状のもので楕円形の孔が2カ所確認され、1面には擦痕が多数確認される。7は板状のもので片側が厚くなり段状になっているものである。8は箸の可能性も考えられたが用途不明な棒状の木製品である。断面は蒲鉾状の半円形であるが、幅や厚みは均一でない特徴をもつものである。9は板状のものである。10は断面が長方形を呈し一方が尖る形状であることから杭である可能性が考えられる。



第 136 図 山持遺跡 6 区③落ち込み内
堆積層出土須恵器実測図



第137图 山持遺跡6区③落ち込み内堆積層出土木製品実測図

第7章 その他の遺構（古代）の調査

シルト層上部で検出した遺構のうちで前章で記述した道路遺構以外の古代と考えられる遺構について本章では述べることにする。そのうち東側で検出した連続ピット列は、形状は異なるがこれも道路遺構として解釈されているものである。このような遺構は、隣接する東側の調査区（6区⑤⁽⁷⁾）で多数検出されており、注目される。

第1節 遺構の概要

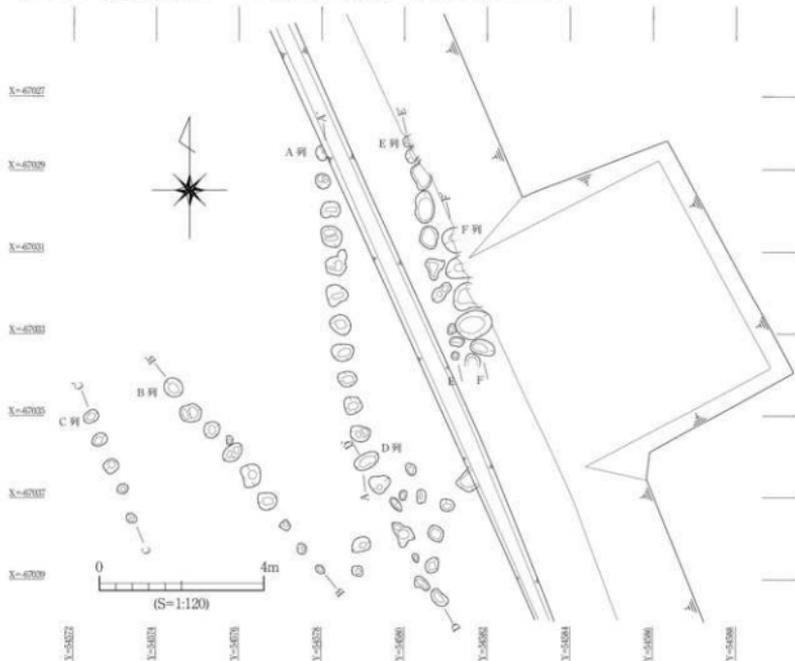
古代の遺構と考えられるものは、6区①で検出している。それらは連続ピット列、井戸状遺構、杭列、土坑である。これらは、確実に古代に属するものは少なく、不明確なものが多いが、周辺の遺構の時期や出雲地方での一般的な様相から古代のものと判断し記述することとする。

第2節 遺構の詳細

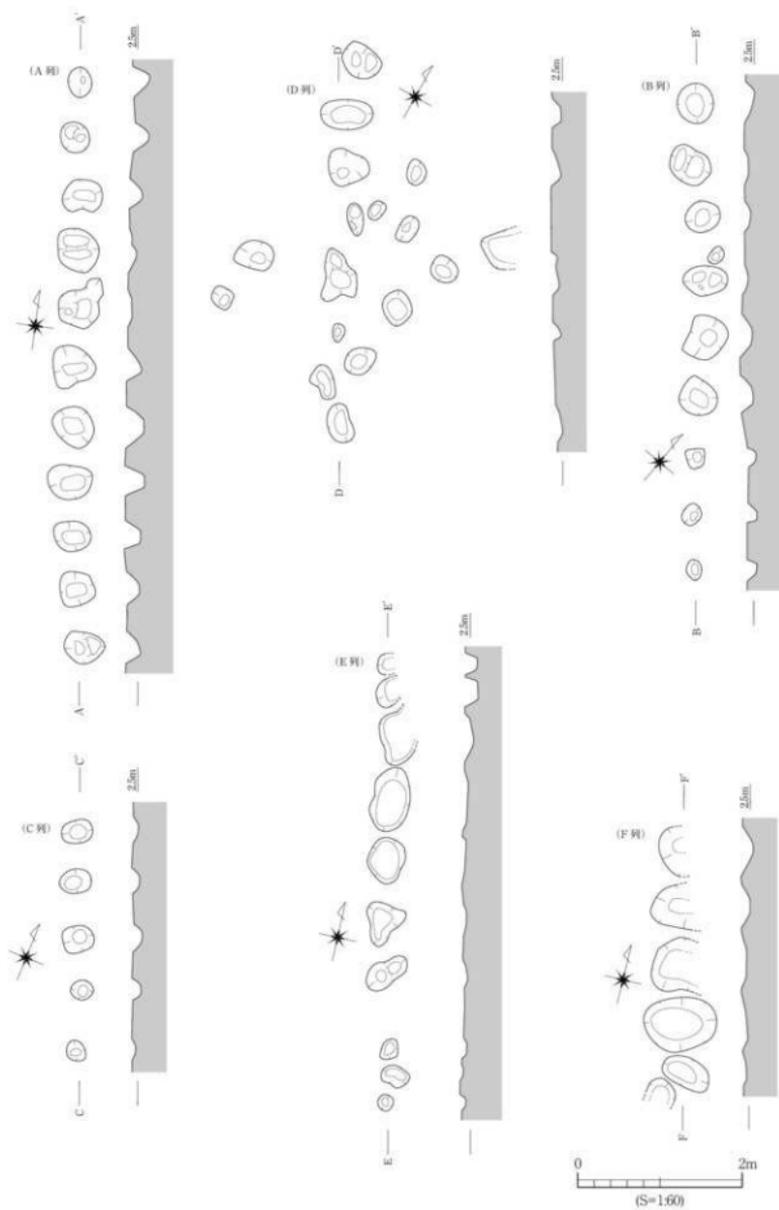
(1) 連続ピットの調査

遺構の配置（第138図） 遺構は、6区①の北東側で南北方向に並ぶものが検出されており、これ

(7) 6区⑤の詳細な調査成果については、2010年に刊行予定の報告書で報告予定である。



第138図 山持遺跡6区連続ピット列配置図

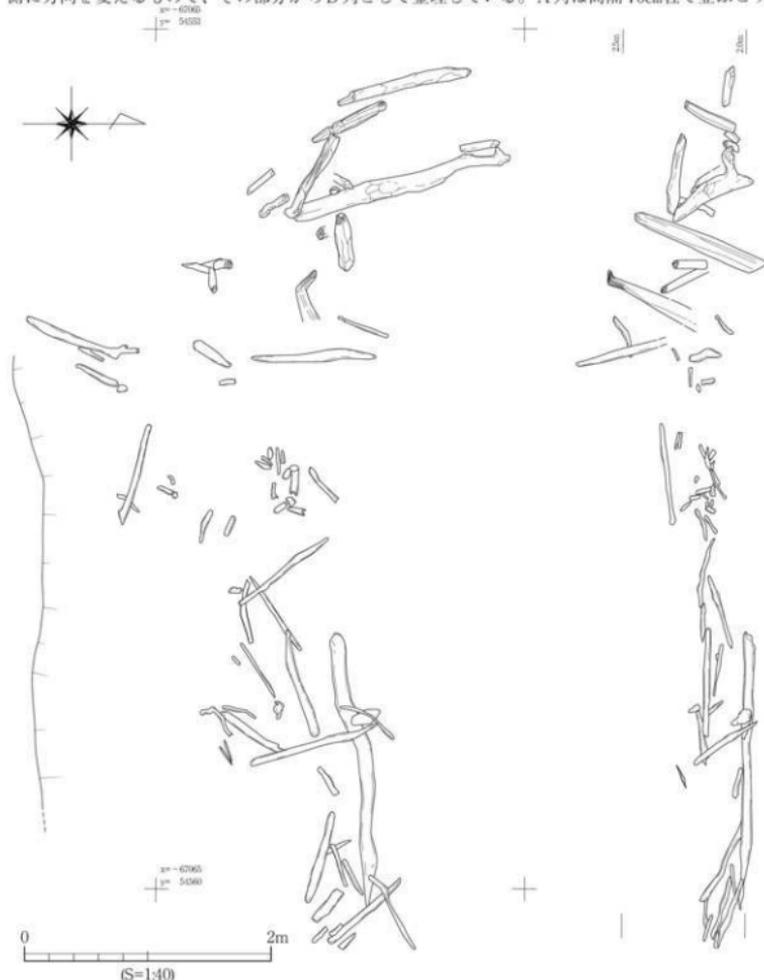


第139図 山持遺跡6区連続ピット列実測図

らは隣接する調査区である6区⑤へ連続しているものもある。連続ピット列はシルト層上部で検出され、大きくA～Fの6つの列に分類される。方向的にはA・D～F列とB・C列の大きく二分される。なお、6区⑤にも連続するものについては、全体配置図の第73図を参照していただきたい。遺構の時期は遺物の出土がないことから不明であるが、古代のものである可能性が高い。

(2) 連続ピット列の詳細 (第139図)

A列 A列としたものは、N-7°-Wの軸方向をとり、ほぼ南北方向のものであるが、南側で東側に方向を変えるもので、その部分からD列として整理している。A列は間隔70cm程で並ぶピット



第140図 山持遺跡6区旧河道(SX01)内杭列実測図

ト列でピットの形状は径0.5m前後の不整な円形又は楕円形状のものであり、深さは20cm程度の浅いものである。ピット内の覆土はオリブ黒色砂質土であり非常に硬くしまるものであった。

B列 B列はN-29°-Wの軸方向をとり、ピットは径25cm～50cm程で南側のピットは一回り小さい。ピットの間隔は70cm程であり、ピット内の覆土はA列と同様のものであった。

C列 C列は5つのピットで構成され、N-23°-Wの軸方向をとる。ピットは径30cm程で、65cm程の間隔で並ぶ。ピット内の覆土はA列等と同様のものである。

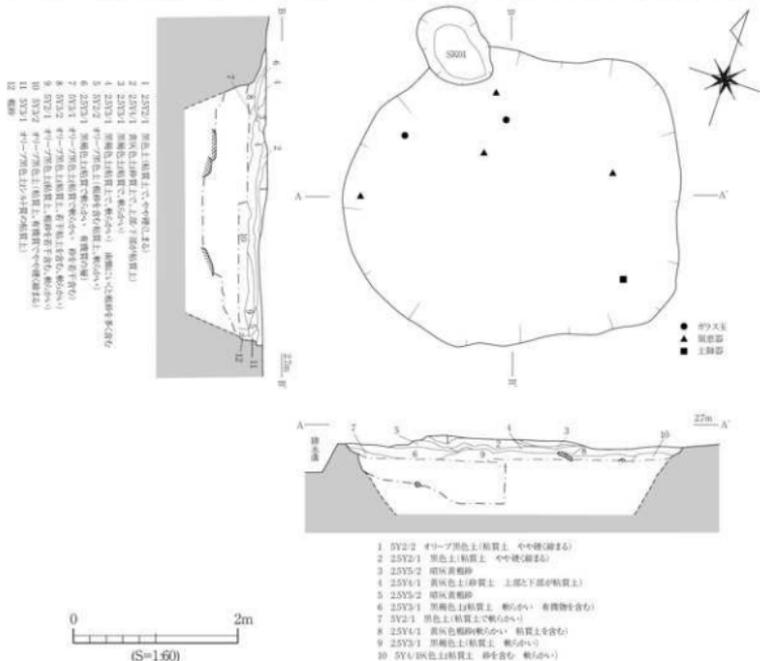
D列 D列としたものは、A列が方向を東側に変え連続するものと考えた方がよいものである。また、周辺で特に規則的に並ばないピットも一緒に整理している。

E列 E列は径50～80cm程のピットが接するように検出され、N-12°-Wの軸方向をとる。ピットの間隔は80cm程である。覆土はA列のものと同様のものである。

F列 F列はやや長径90cm程の楕円形状のものが接するように検出され、N-13°-Wの軸方向をとる。ピットの間隔は60～80cm程であり北側は6区⑤へ続くものである。

(2) 旧河道 (SX01) 内杭列 (第140図)

6区①の旧河道 (SX01) 南岸の調査時に杭列を検出している。杭は南岸に沿うように東西方向に設置されており、大型の杭が使用されている。杭の東側では、多くの木材が出土しており、これらは杭列の時期と平行するものかどうか分からないものであるが、同一図で示した。杭列はおそら



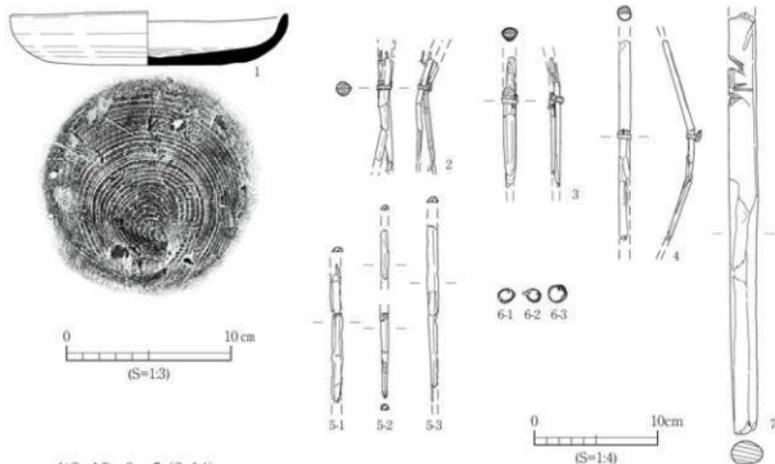
第141図 山持遺跡6区Ⅱ戸状遺構実測図

く旧河道の(SX01)の護岸施設であった可能性等が考えられるが、調査途中で土砂が崩落したことによって崩壊したことから詳細は明らかにできなかった。

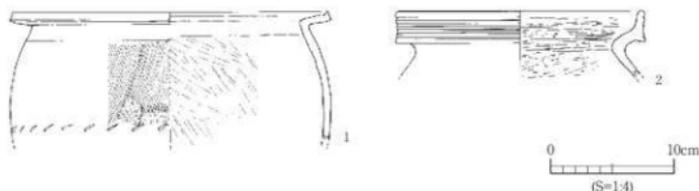
(3) 井戸状遺構 (第141図～143図)

遺構の規模と形態 遺構は6区①の中央付近で検出され、当初堅穴住居跡として調査していたものである。平面形は東西4.1m×南北3.6mの不整な隅丸形状を呈すもので、調査では深さ0.9m程度まで掘り下げた。調査は湧水によって困難な面も多く、明瞭な床面が確認できない状況の中、奈良時代以降と思われる須恵器片等が出土し、堅穴住居跡の可能性は低いと判断された。ある程度断ち割った結果、床面と思われる面は、遺構基盤層のシルト系堆積層が二次的に崩落した層と考えられ、井戸跡の可能性が考えられた。最終的には全体を深く掘り下げた結果、深い位置から須恵器皿(第142図1)が出土したことから、古代の遺構が崩落したものと判断し、井戸状遺構とした。

出土遺物 (第142図・143図) 第142図1は須恵器の無高台皿である。口縁部は内湾気味に立ち上がるもので底部は回転糸切である。青木遺跡編年の第1期頃のものと考えられる。2～6は同一個体の可能性が高い木製品である。断面半円形の棒状の木製品を棒皮で結束するものである。用途は不明なものである。7は側面に切り込みが2カ所見られる棒状の木製品である。



第142図 山持遺跡6区井戸状遺構出土須恵器・木製品実測図

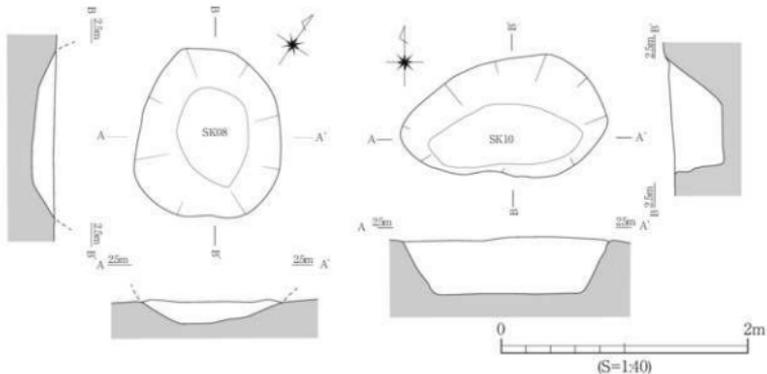
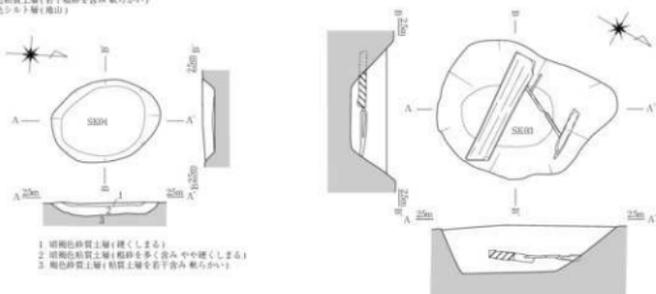
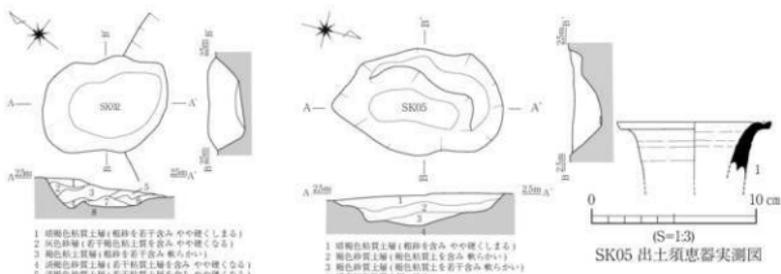


第143図 山持遺跡6区井戸状遺構出土弥生土器実測図

第143図1・2は弥生土器である。1は口縁端部をつまみ上げるように若干拡張した甕である。Ⅲ様式に相当すると考えられる。2は複合口縁の甕であり口縁帯には5条の凹線文が施される。草田編年の1期に相当すると考えられる。

(4) 土坑 (第144図)

第144図に掲載した土坑は6区①の旧河道(SX01)の北側に集中して検出され古代に属す可能性が高い土坑である。



第144図 山持遺跡6区土坑実測図(古代)

SK02 標高 2.5 m 付近で検出した井戸状遺構と切り合った土坑であり、井戸状遺構より新しいものである。平面は不整な楕円形状を呈し長さ 1 m、幅 0.75 m、深さ 0.25 m を測る。

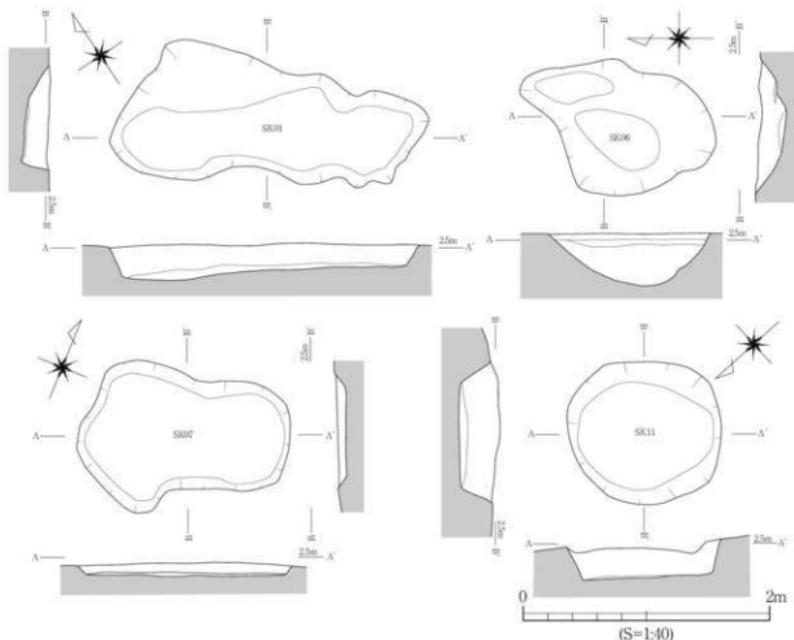
SK03 標高 2.5 m 付近で検出した不整な楕円形状を呈す土坑である。規模は長さ 1.45 m、幅 1.1 m、深さ 0.4 m を測る。この土坑は当初完掘したと判断していたが、下部の砂層調査時にちょうど一致する土坑 (SK09 と呼称していた。) が検出されたことから、同一のものと判断した。覆土は暗褐色粘質土に灰色砂が混在するものであり、板材等が出土している。

SK04 標高 2.5 m 付近で検出した楕円形状の土坑である。規模は長さ 0.9 m、幅 0.65 m、深さ 0.1 m を測る。覆土は褐色系の粘質土と砂質土である。

SK05 標高 2.5 m 付近で検出した不整な楕円形状の土坑であり、北と西側は段状になる。規模は長さ 1.4 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m を測る。覆土は褐色系の粘質土と砂質土であり、上部で須恵器片がいくつか出土している。出土した須恵器のうちで図化できたものは 1 点である。これは口縁端部付近が沈線状に凹み、壺類の口縁部と考えられる。時期は青木遺跡編年のⅢ期前後と思われる。

SK08 砂層調査段階の標高 2.2 m 付近で検出したが、本来は砂層上部のシルト層から掘り込まれていた可能性が高いものである。平面形は不整な楕円形状であり、長さ 1.35 m、幅 1.15 m、深さ 0.2 m を測る。覆土は暗褐色粘質土であった。

SK10 この土坑も SK03 と同様、完掘後の下部の砂層調査時に直下で土坑を最検出したものである。平面形は不整な円形状を呈し、規模は長さ 1.6 m、幅 0.9 m、深さ 0.45 m を測る。覆土は淡青灰色



第 145 図 山持遺跡 6 区土坑実測図 (時期不明)

粘質土である。

(5) 時期が不明な土坑 (第 145 図)

第 145 図に掲載した 4 基の土坑は 6 区①で検出した時期が特定できないものである。SK11 以外はシルト系堆積層上部で検出している。SK11 はシルト系堆積層を掘り下げている段階で検出しており、シルト系堆積層の途中から掘り込まれた可能性がある。ただし、他の遺構がシルト系堆積層上部で確認されていることから、遺構面はシルト系堆積層上部と考えた方が妥当なのかもしれない。

SK01 調査区の北西隅付近の標高 2.5 m 付近で検出した土坑である。平面形は不整な楕円形状の土坑で規模は長さ 2.55 m、幅 0.85 m、深さ 0.2 m を測る。覆土はやや硬くしまる暗褐色粘質土である。

SK06 調査区の東側標高 2.5 m 付近で検出した土坑である。平面形は不整形な形状のもので東側は段状になる。規模は長さ 1.25 m、幅 1 m、深さ 0.4 m である。覆土は基盤層のシルト系堆積層に良く似た暗色系のシルト質のものであった。

SK07 調査区の北西隅付近の標高 2.5 m 付近で検出した土坑であり、SK01 の南側 5 m 程に位置する。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長さ 1.7 m、幅 1.25 m、深さ 0.1 m を測る。覆土は SK01 と類似する暗褐色粘質土である。

SK11 調査区の北東隅付近の標高 2.5 m 付近で検出した土坑である。形状は不整な円形状を呈し、規模は長さ 1.25 m、幅 1.15 m、深さ 0.25 m を測る。覆土は他の検出している土坑と異なり白色系の粘土が堆積している。

第 3 節 遺構外の遺物 (シルト系堆積層)

本節では 6 区①及び 6 区③の遺構に伴わないシルト系堆積層上部から出土した遺物について述べることとする。

(1) シルト系堆積層上部の遺物出土状況 (第 146 図)

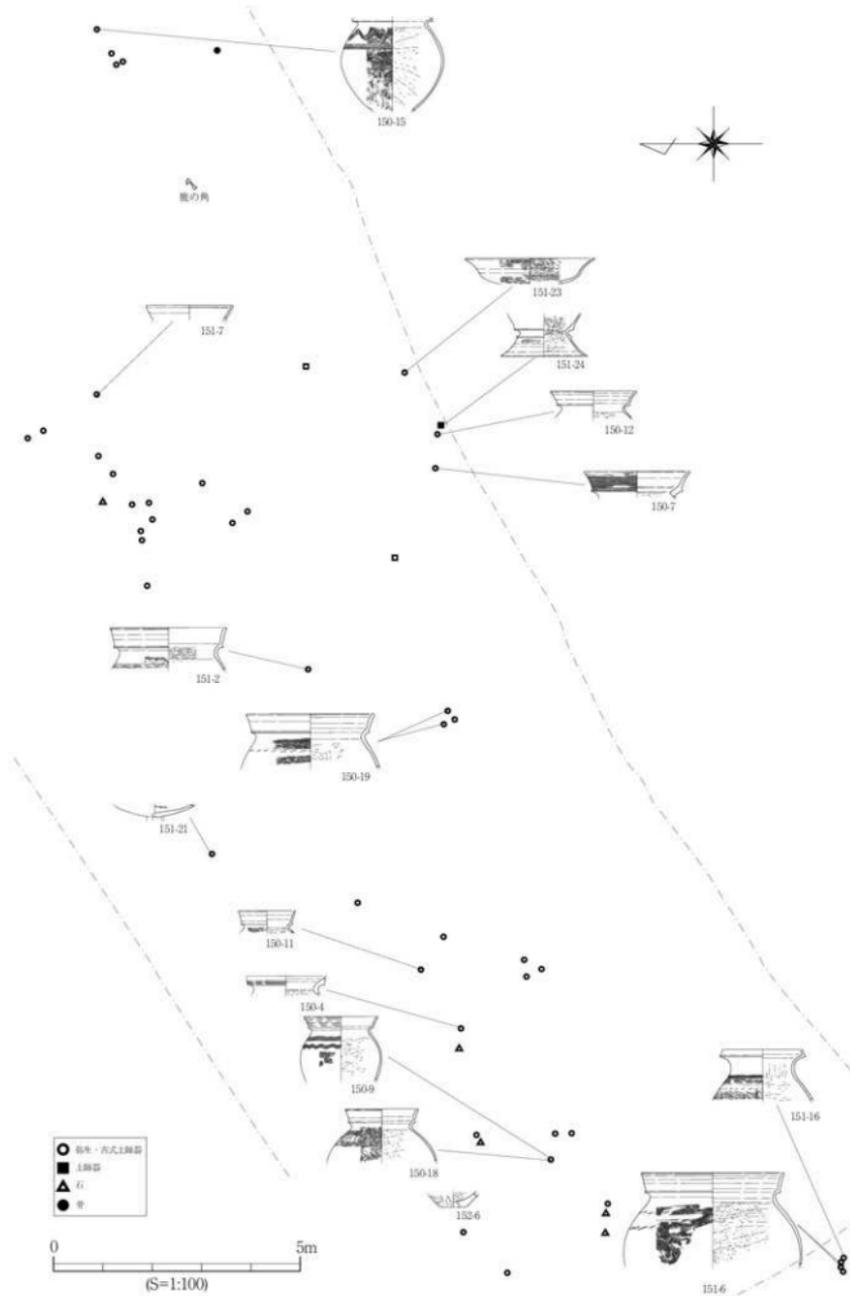
6 区①では調査時に明瞭に認識できなかったが、6 区③では、シルト系堆積層の上部に暗色系粘質土の遺物を包含する層が確認された。この層は上部が粘質で下層にいくほどシルト質になるものである。6 区③のこの層からの遺物は、弥生土器を中心に大部分が調査区の西側で出土している。これは、第 5 章で述べた土坑群が集中している地点であることから、この遺構と関連するものであった可能性が考えられる。

(2) シルト系堆積層の出土遺物 (第 147 図～第 153 図)

須恵器 (第 147 図) 1～3、9～11 は須恵器である。9～11 については調査時の不注意で排土中で確認したものだが、シルト系堆積層から出土した可能性が高いことから一緒に掲載している。1 は須恵器の坏身である。今回の調査区から出土した須恵器の中では最も古い様相をもつものである。大谷の須恵器編年の出雲 5 期 (大谷 1994) に相当すると考えられる。2 は長頸瓶又は壺類の頸部、3 は壺類の底部と考えられる。

9 は小形の坏身であり、出雲 6 期に相当すると考えられる。10 は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が若干屈曲する坏である。底部には「井」字状のヘラ記号が見られる。11 も 10 と器形が似るものであるが口縁部は丸く取める坏である。底部には墨痕が見られるが判読出来ない。

陶質土器 (第 147 図) 4 は須恵器として整理していたが、外面に縦方向の縄文タタキが確認されたことから、韓半島系の陶質土器と考えられる。内面は横方向ナデが確認される。当遺物は、出

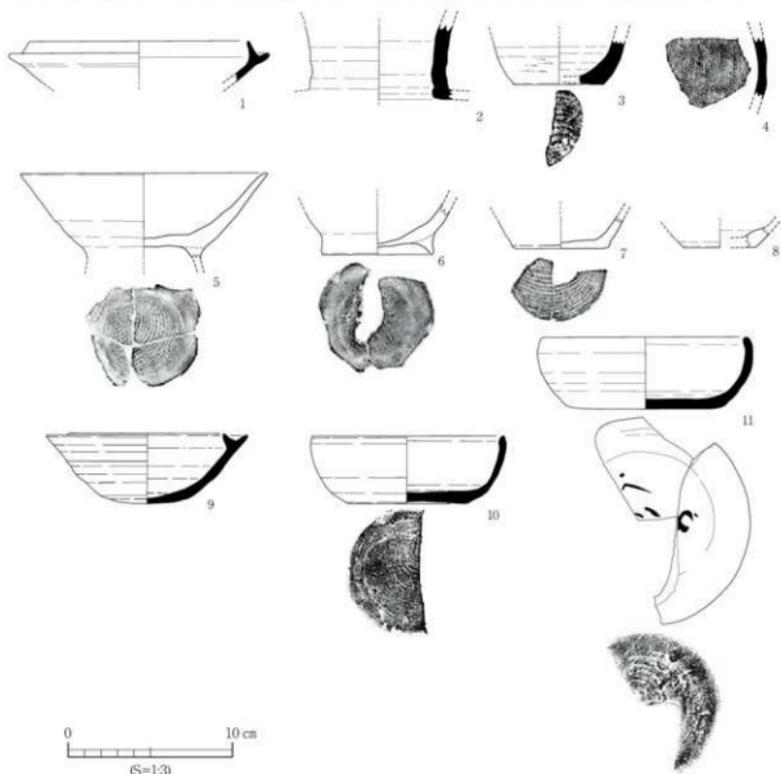


第146図 山持遺跡6区③遺物出土状況図「シルト系堆積層上部」

土層位に問題を残しており、調査段階では砂層出土としているものである。出土グリッドは14グリッドであり、この部分は平成18年度に砂層上面まで調査し、平成19年度当初に下部の砂層を調査した部分である。この部分は南側の6区③の調査区北側を崖状に残して先行して掘り下げていることから、6区③側の土砂が崩落する箇所場所であり、実際出土することが考えられない耳環も出土している。このような調査環境であることや砂層から出土する半島系の遺物は瓦質のものであることから、6区③のシルト系堆積層からの混入品と判断した。

土師器 (第147図) 5～8は土師器である。5は足高高台の付く坏である。底部の最外周部に高台が付き口縁部は直線的に外に開くものである。6は高台付坏の底部と考えられる。7・8は無高台の坏底部と考えられる。これらの時期で5は11世紀頃と考えられる。他は不明瞭であるが5と前後する時期のものと思われる。これらはシルト系堆積層出土のものでは最も新しい時期に属す可能性がある。ただし、出土層位はオモカス層との境界付近であり、実際5はオモカス層出土と判断した破片と接合しているものである。

耳環 (第148図) 10は径1.7cmを測る小型の耳環であり、金・銀等は見られず銅芯部分のみである。

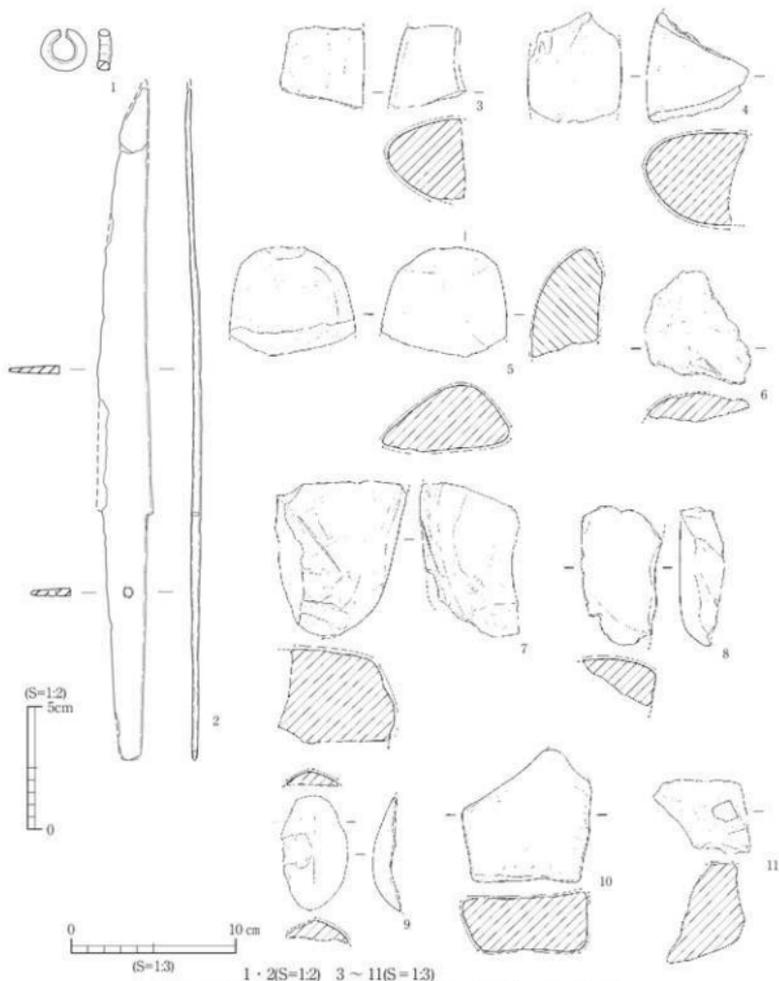


第147図 山持遺跡6区シルト層(排土)出土須恵器・土師器実測図

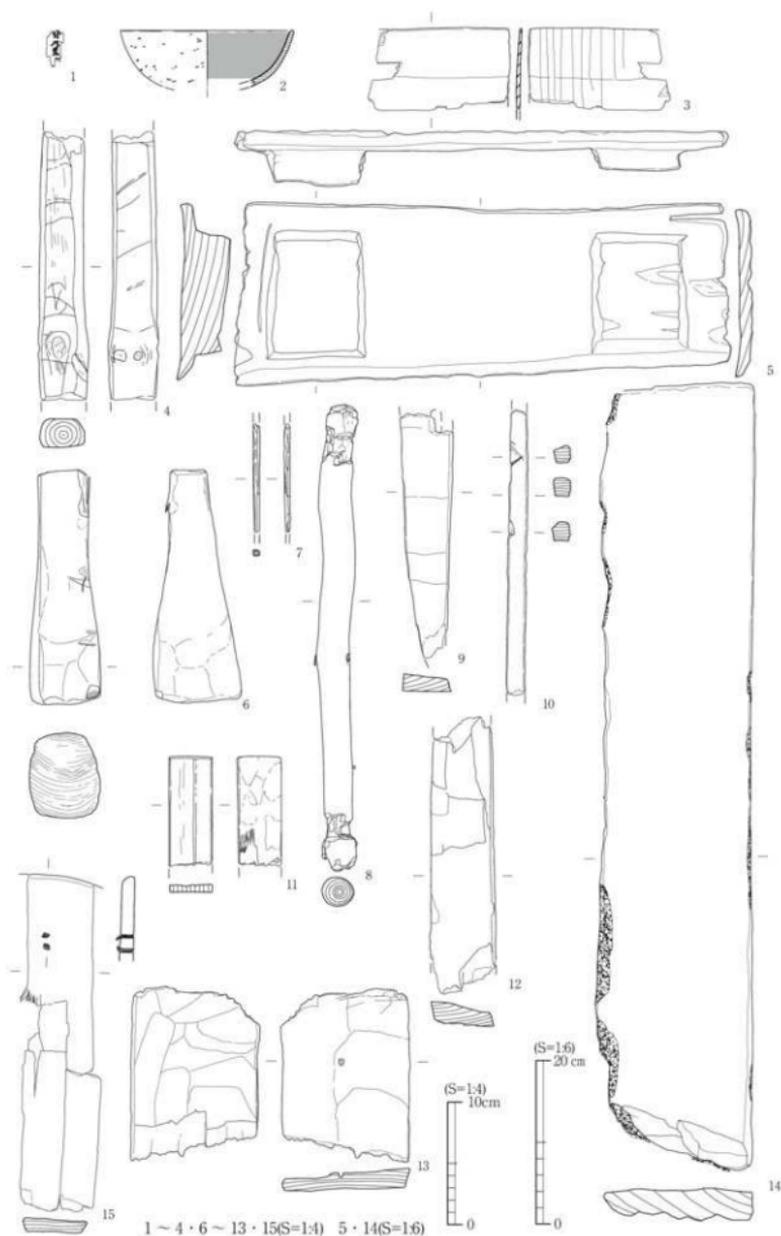
これも前述した陶質土器と同じように砂層調査時に出土しているが、シルト系堆積層からの混入品と判断している。

短刀 (第148図) 2 はオモカス層除去後のシルト系堆積層最上部から出土している。全長27.4cmを測り両関と考えられる。茎は目釘孔が1つ穿たれており、端部の幅が狭まるタイプである。

石器 (第148図) 3~9 は磨石である。3・4は円礫を素材にしたものと考えられ、滑らかな面となっている。4の側面は敲打痕が認められる。5は断面が三角形状のもので全面が使用されており、最も広い面は凹むものである。6・8・9は破片である。7は使用による擦痕が見られ、一部敲打痕



第148図 山持遺跡6区シルト層出土金属器・石器実測図



1~4・6~13・15(S=1.4) 5・14(S=1.6)

第149図 山持遺跡6区シルト層出土木製品実測図

と思われる痕跡も見られる。

10・11は砥石である。10は表裏面とも使用によって若干反った形状である。11は1cm角程度の面だけが残存している。

木製品 (第149図) 1は薄いスギ材の板に墨書が確認されたものである。非常に小片であった為、取上時点では確認できなかったものであり、別の遺物に付着した土砂に含まれていた可能性が考えられる。2はケヤキの漆器碗である。3は曲物類の側板の可能性のある薄い板で、縦方向の刻みが見られる。4は断面長方形形状を呈すもので、用途不明品であるが卒塔婆状木製品に形状が良く似る。5はシルト系堆積層の上部ではなく、堆積層中に含まれる状況で出土したスギ材の梯子である。長方形に削り出された部分が2カ所設けられている。6は樹種がマキ属の木栓と考えられるものである。7は断面方形の棒状の木製品である。8は両端付近に削り込みをいれた棒状の木製品であり、樹種はモミである。9は先端が尖るように加工され、長方形の孔が開けられた板状の木製品である。10は断面が方形形状を呈す棒状の木製品であり、側面に2カ所浅い削り込みが入る。11・12は板状の用途不明の木製品である。13はスギ材の加工痕が良く残る板状の木製品であり、中央付近に貫通しない孔が見られる。14は大型の板状木製品であり側面の一部が炭化している。

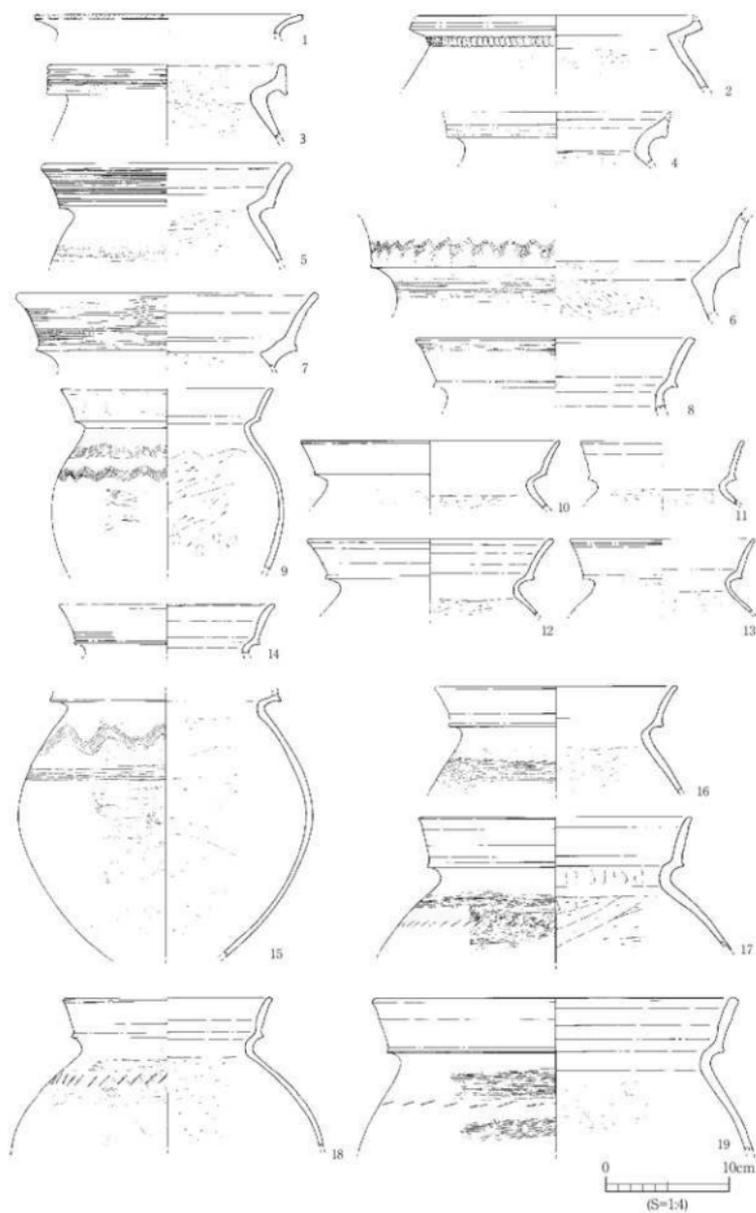
弥生土器・古式土師器 (第150図) 1は単純口縁の甕であり、口縁端部には刻みが施される。Ⅲ様式に相当すると考えられる。2は口縁部が拡張され凹線文状の浅い沈線が施された甕である。頸部には指頭瓦痕文帯が廻りⅣ様式に属すと考えられる。

3・4は複合口縁の甕であり、5条程度の擬凹線文が施される。草田1期に相当する資料と考えられる。5は貝殻腹線による多条の擬凹線文が施された複合口縁の甕である。草田3期に相当すると考えられる。6は波状文が施された複合口縁の甕である。頸部にも平行直線文が施され、草田3期に相当するものと考えられる。7も5と同様に多条の擬凹線文が施された複合口縁の甕である。草田3期に相当すると考えられる。

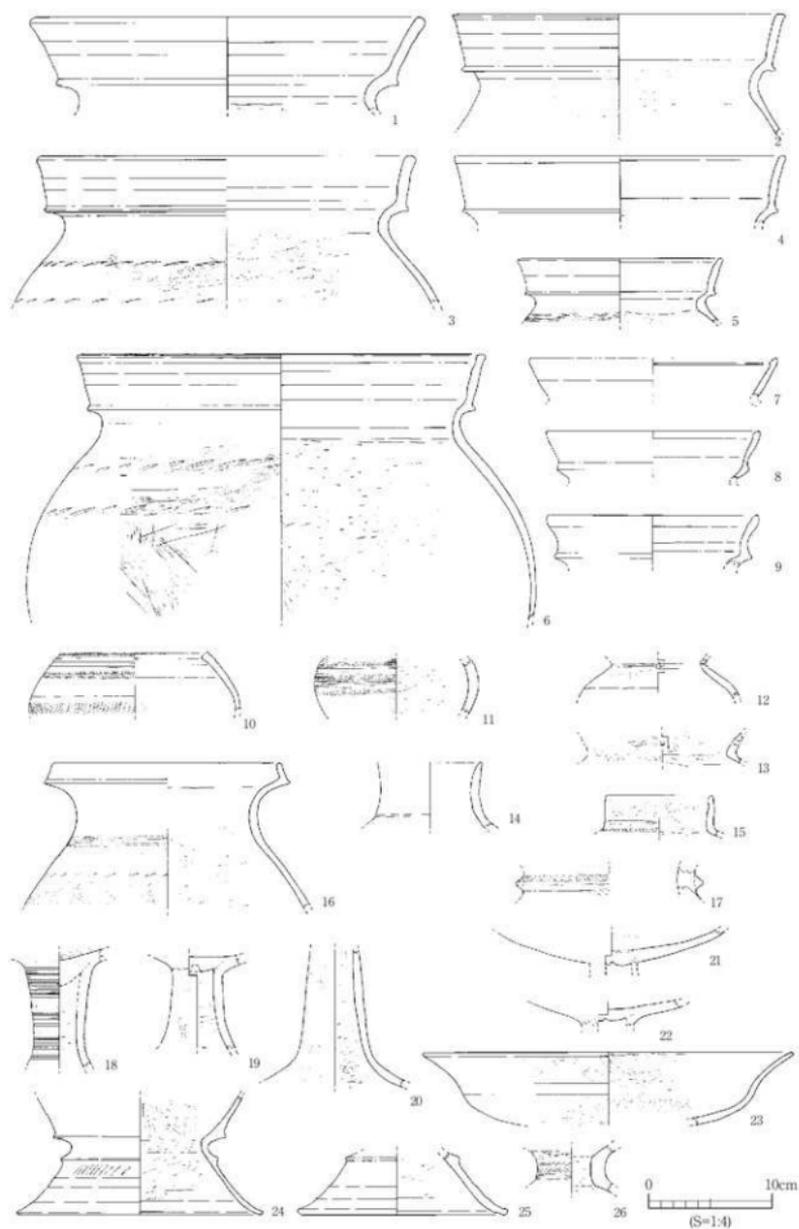
8～19はヨコナデによって仕上げられた複合口縁の甕であり、全体的に器壁の厚さが薄いものである。8は口縁端部を丸く収めるもので草田4期に相当すると考えられる。9～11・13は口縁端部が尖り気味のものであり草田5期に相当するものと考えられる。12・14は口縁端部に若干面をもつような形状のものであり、草田5期～6期頃のものと考えられる。15は口縁端部が欠損しているがヨコナデによって仕上げられた複合口縁の甕と考えられる。肩部には波状文と平行沈線文が施される。16～19は肩部に平行沈線文と刺突文が施される甕である。16・17は口縁端部が尖り気味のものであり、18は口縁端部に不明瞭な面をもつもので、19は丸く収まるものである。15～19は草田5期～6期に相当するものと考えられる。

弥生土器・古式土師器 (第151図) 1～6はヨコナデによって仕上げられた複合口縁をもつ甕である。1・2は口縁端部に明瞭な面を作り出している。3は口縁端部に明瞭な面を作り出しており、肩部に二段の刺突文を施す。4は口縁端部に明瞭な面を作り出し端部の面は若干凹む。5は口縁端部に明瞭な面を作り出し、端部付近の内面はナデによって若干凹む。6は口縁端部に明瞭な面を作り出し、端部は若干凹む。肩部には3と同様の二段の刺突文が施される。これら1～6は草田5～6期に相当するものと考えられる。

7は単純口縁の甕の口縁部と考えられる。口縁端部は内面が肥厚し面をもつ。8・9は退化した複合口縁をもつ甕である。8は口縁端部付近の内面が肥厚し端部は面をもつ。9は口縁端部付近の内



第150図 山持遺跡6区シルト層出土土器実測図(1)



第151図 山持遺跡6区シルト層出土土器実測図(2)

面がナデによって若干凹む。7～9は大東式に相当すると考えられる。

10～16は壺である。10は無頸壺である。口縁部には6条の凹線文と刻みが施され下半部には刺突文が見られる。Ⅳ様式に属すると考えられる。11は赤彩された裝飾壺の胴部である。平行沈線文と刺突文で飾られるものである。Ⅴ様式に属すると考えられる。12・13は頸部に円孔が穿たれた壺の頸部である。14は直口壺であり、胴部は肩があまり張らない形状のものと推測される。15は口縁部が短い直口壺であり、口縁部は内外面とも丁寧に磨かれている。頸部には「C」字状の刺突文が施される。12～15の時期は不明確な部分があるが、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半のものと考えられる。16は複合口縁の壺で、口縁部は内傾し肩部は平行沈線文、刺突文、波状文が施される。このような形態の壺は本調査区では他に見られないが、Ⅳ区ではいくつか見られ大溝Ⅱ区出土のものが類似している。小谷式に属する古墳時代前期前半の壺と考えられる。

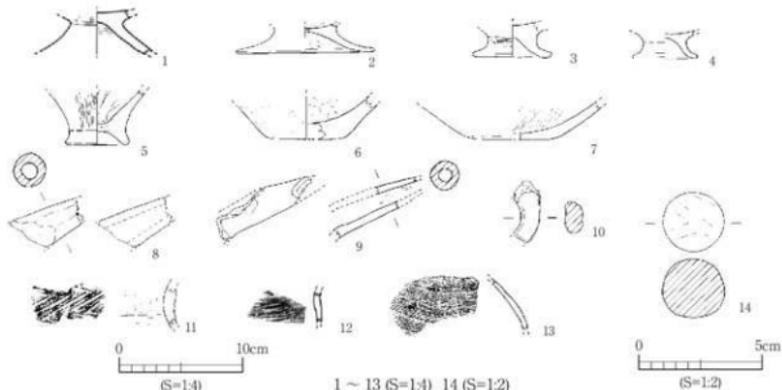
17は壺等の頸部に刺突文が施された突帯が付いた破片と考えたが、よく分からないものである。

18～23は高坏である。18～20は脚部であり、18はヘラ描の平行沈線文が施される。19は接合部分の坏底部に円孔が穿たれているものである。20は裾が広がる形態の脚である。18はⅣ様式に属し、19・20は小谷式に属するものと思われる。21・22は高坏の接合部分であり坏底部には円孔が穿たれている。草田5期以降に属するものと考えられる。23は高坏の坏部である。坏底部から大きく外反する口縁部であり、草田5期前後のものと考えられる。

24～26は鼓形器台である。24は筒部が短くなったタイプのもので脚部には刺突文が施される。草田5期前後のものと考えられる。25は脚部であり24と同じ形状のものと推測される。26は筒部に沈線文と羽状文が施されており、草田2期～3期頃に相当するものと考えられる。

弥生土器・古式土師器等(第152図) 1～5は低脚坏の脚部と考えられるものであり、裾が広がる形態である。1・2は脚径が大きいもので、3・4は脚径が小さいものである。草田5期以降のものと考えられる。8・9は注口土器の注口部分であり、先端が先細りになる形態のものである。草田4期以降のものと考えられる。10は把手である。断面が長方形のものである。草田4期以降のものと考えられる。

11・13は壺・甕等の胴部片である。11は壺類の頸部と考えられ羽状文が施されていると考えら



第152図 山持遺跡6区シルト層出土土器実測図(3)

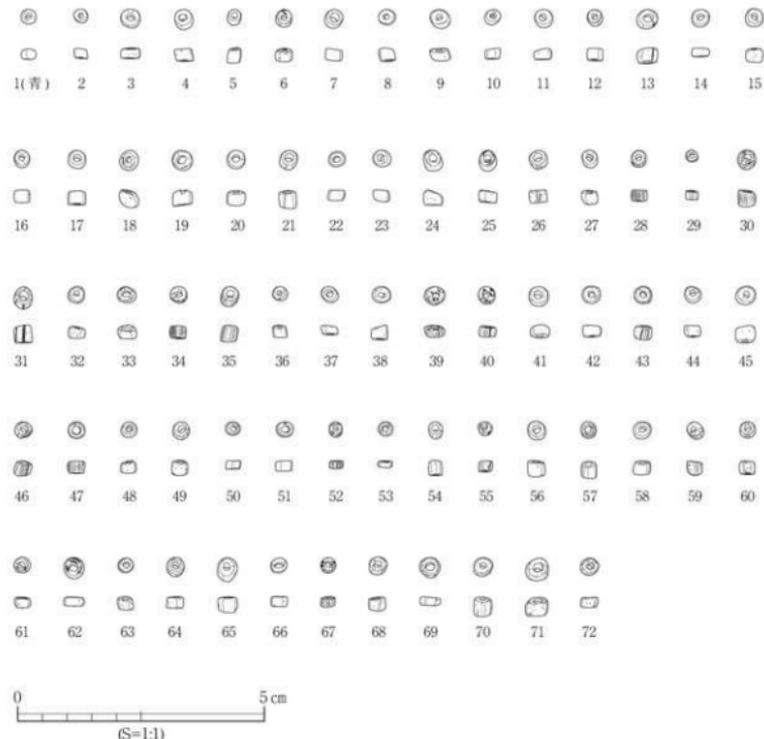
れるが、方向が異なる二段になる可能性がある。13は装飾壺の胴部片と考えられ、平行沈線文と刺突文が交互に施されている。11は草田6期以降、13は草田2期以降のものと考えられる。12は当初弥生土器と考えていたものだが、外面に縄文(RL)が施されていると考えられる。縄文時代後期に属すると思われる。

14は球状の土製品である。外面はナデによって仕上げられている。用途不明なものである。

ガラス小玉(第153図) ガラス小玉は6区①から全て出土している。出土の中心地点は調査区の北西のJ2グリッド標高2.5m付近であり、シルト系堆積層の上部のやや暗色系の粘質な層から出土している。その他には井戸状遺構や道路状遺構等で出土している。

ガラス小玉は総数で75点出土し、1点を除いて赤褐色を呈す「ムティサラ」と呼称される小玉である。図化できたものは72点で、1は唯一の紺色透明の小玉であり、2～72はすべて赤褐色の小玉である。これらは、出土層位から弥生時代後期後半以降のものと考えられる。その両端部の特徴から古墳時代中期頃の可能性も指摘されている⁶⁸⁾が、その時期の土器はほとんど出土していないことから、時期的には特定できないものである。

68) ガラス小玉の時期等の検討については大貫克彦氏に指導を受けた。



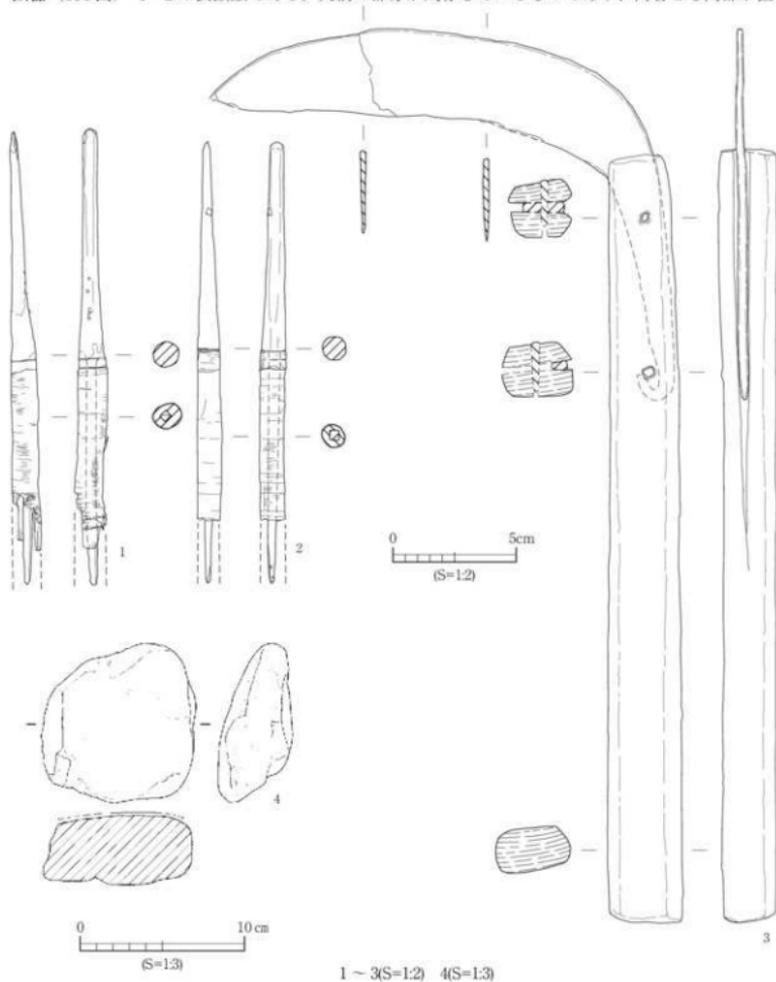
第153図 山持遺跡6区シルト層出土ガラス小玉実測図

第8章 中世～近世の層の調査

第1節 オモカス層の調査

6区③ではオモカス層から人力で調査を実施し、遺構は検出されていないが、いくつかの遺物が出土している。

鉄器 (154図) 1・2は長頭鎌である。矢柄の部分が残存しているものであり、両者とも関部が直



第154図 山持遺跡6区オモカス層出土金属器・石器実測図

角に作り出され、鎌首部は鑿根式のものである。3は木柄が残存する完形の鎌である。木柄は上半部に切れ込みを入れて、鉄鎌を挟み込むようにし、鉄製の目釘によって二カ所を固定している。鉄鎌の基部は端部が鉤状になり、目釘孔が刃部側に一つ設けられている。刃部は緩やかに弧状をえがくものである。1～3は古代末～中世とされているオモカス層出土のものとして大きな館跡は生じない時期のものとして考えられる

石器 (第154図) 3は不整な方形形状を呈し、磨石の類と考えられるものである。1面のみが非常に平滑なものであり石器として取り扱った。

木製品 (第155図) 1はケヤキの刳物の椀であり、全体的に分厚いことや底部の仕上げの状態から、未成品と考えられる。

2～5は板状のもので用途は不明なものである。2はスギ材で中央部との側面側に円孔が穿たれている。3は刀形状のもので、片闊状に削り込まれている。4は円弧状に削り込まれているものである。5はスギ材のもので断面は蒲鉾状に片面が凸状になり、端部付近に削り込みが見られる。

6は樹種がマツ属の天秤棒と考えられるものである。丸太材を半裁したもので端部は削り込まれている。

7・8はマツ属の卒塔婆状木製品と考えられ、木製板碑と呼ばれるものに類似する。7はオモカス層下部から出土し、第132図に示したように周辺からは前述の完形の鎌(第154図3)が出土している。全長324cmの長大なもので、丸太材の片面に平坦面を造り出したタイプのものである。頂部は尖るように山形に加工され、2条の浅い沈線を表面以外に彫り込んで羽刻み状にしている。その下方には浅い段を設けて額部を作り出しているが、額部は方形に区切られるものではなく頭部と一体化したようなものである。基部は丸太材のまま本体と段が付くように区別され先端は加工され若干尖り気味になる。

8は本体部の頂部付近の71cm程が残存しているのみであるが、基本的な作りは7と同様のものである。頂部先端は欠損しているが先端が尖り気味の山形に加工され2条の浅い沈線を表面以外に彫り込んでいる。その下方にも浅い一条の沈線を彫り込み額部を作り出している。8は7に比して額部を方形に表現している点や沈線の状況からより丁寧な造りである。

9は杭状の木製品であり先端の加工痕が良く残っている。

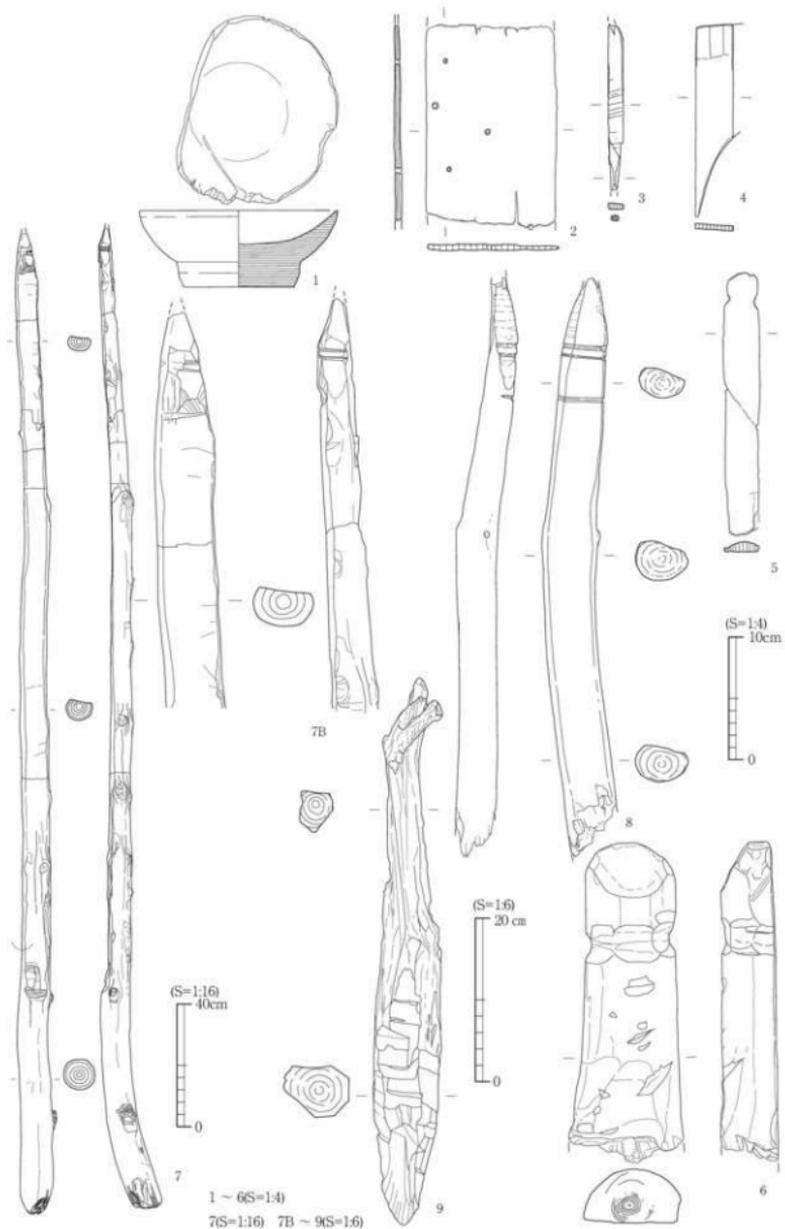
第2節 中近世の層の調査

(1) 概要

6区③の調査区南側についてはオモカス層が見られず、近世以降の河道によって失われている。調査ではオモカス層上面のレベルから人力掘削を実施したことから、一部河道内堆積層についても調査を実施した。その結果、杭列等を検出し、またその堆積層中からも遺物が出土したことからここに掲載している。

(2) 杭列 (第156図)

杭列は6区③の南東の3～3.5m付近で東西方向のものを2列検出し、南側のものを杭列1、北側のものを杭列2としている。杭列1はオモカス層より新しい層中で収まるものであることから、近世に属する可能性が高い。杭列2についてはオモカス層以下の層まで達しており、時期を特定す



第155図 山持遺跡6区オモカス層出土木製品実測図

ることが難しいものである。

杭列1 杭列は6本の列で検出しており、0.7～0.8 m程の間隔で並んでいる。杭は10cm以下の小形のものである。杭が打ち込まれている面は確認できなかったが、オモカス層の上部の層中にあることから、近世に属すと判断した。

杭列2 杭列は9本の杭で検出しており、東側と西側の2つのグループに分けて考えた方が良いのかもしれないが、一連のものとして取り扱った。杭の間隔は30cm～1mと規則的でなく、東側から5本目と6本目では2m程間隔が空く。杭は東側から1番目と3番目のものが最も径が大きく10cm以上であるが、他のものは10cmを超えない小型のものである。東側では下部のオモカス層が残存しており、その層の上部に

横たわった状態で木製品（第157図4・7）が出土している。この二つの木製品は杭列とセットとなる可能性があるものと判断している。

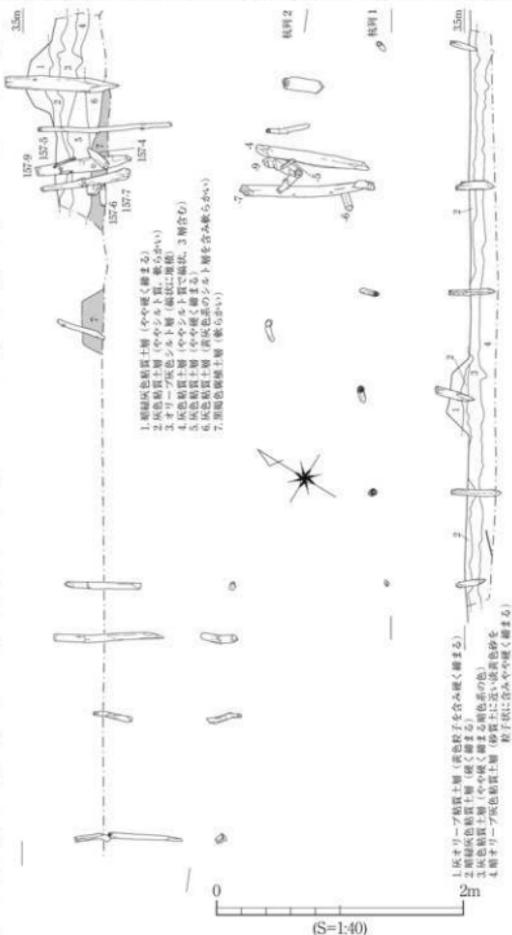
最も東側の杭はオモカス層上部の層から確実に打ち込まれているが、その他のものは土層断面から判断することは困難であった。このことからこれらが全て近世のものとは断定できない。

杭列2関連木製品（第157図）

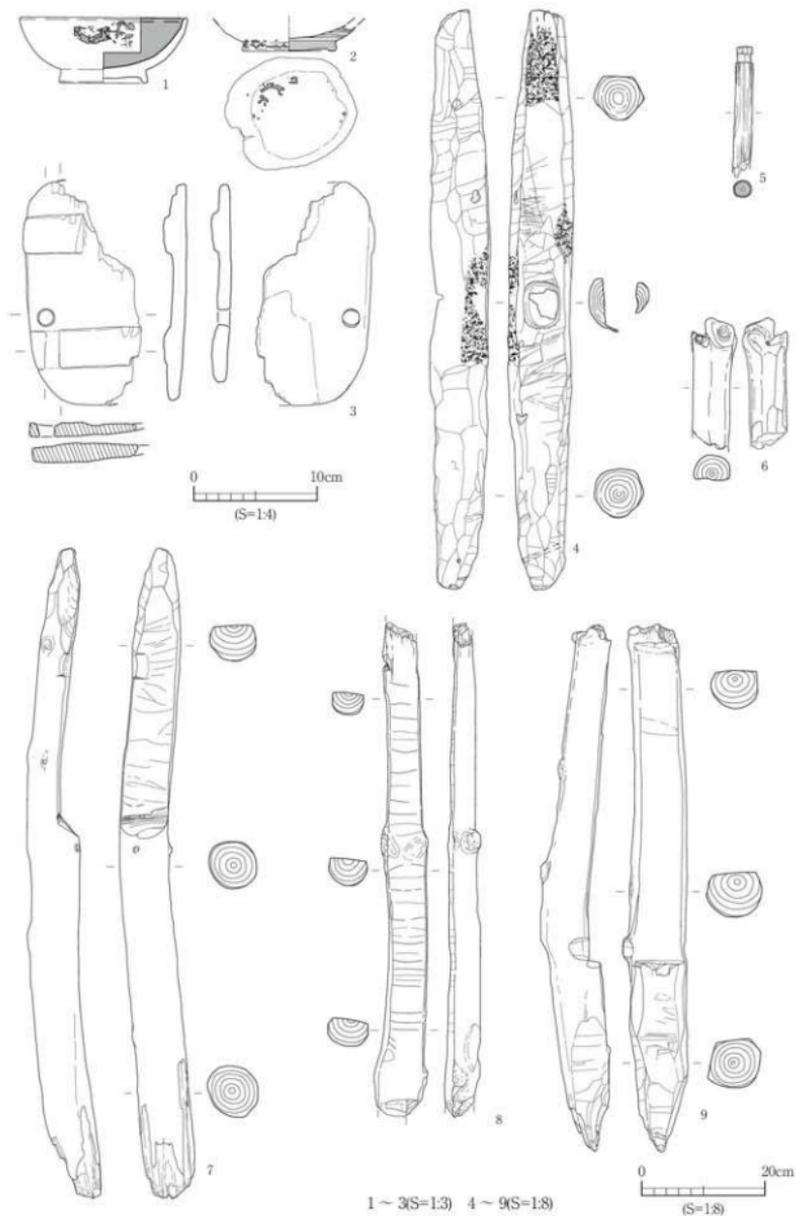
杭列2に使用された杭及び関連する木製品は4～7であり、4・7はオモカス層上面に横たわった状態で出土し、6は7の下から、9は立った状態で出土し、5はそれに近接して出土している。

4は樹種はマツ属で中央に方形の孔が穿たれたもので部分的に炭化している。5は棒状の端部が削り込まれくびれている。

7は樹種がマツ属で卒塔婆状木製品としたものと類似平坦な面を造り出しており、頂部を山形に尖らしている。樹種がマツ属であることや頂部の形状等



第156図 山持遺跡6区杭列実測図「近世」



第157图 山峙遗址6区中近世层·杭列出土木製品実測图

から簡略化された卒塔婆状木製品と考えることが可能である。9は天地が明確ではないが、出土状況に基づき天地を確定した。下方は尖るように加工されているが、裏面は丸太材の形状を残す。上方は平坦面を造り出してあり、卒塔婆状木製品に類似する。なお、天地逆の場合は下方の尖る部分を卒塔婆状木製品の頂部として山形の加工として捉えることも可能である。

(3) その他の出土遺物 (第157図)

1・2は漆器である。1はトチノキを加工したもので外面は黒漆の上に赤漆で文様が表され、内面は黒漆の上に赤漆が塗られている。2はクリ材を加工しており、赤漆が点々と残存する。

3は下駄である。連南下駄のタイプで歯は使用によってかなり磨り減っている。

8は6区③の中央よりの北端で検出した杭であり、6区①との調査区境あたりで立った状況で出土しているものである。調査区境で検出しており密な層位は不明確なものである。丸太材の片面を平坦に加工したものであり、用途は不明確であるが、これも卒塔婆状木製品に似ているものである。

(4) SD03 (第158図)

規模と形態 SD03としたものは、6区③の調査区南側で検出したものである。遺構はシルト系堆積層上部のレベル(標高2.9 m付近)でプランを確認し、弥生土器がいくつか出土したことから、弥生時代後期後半頃の遺構である可能性を考え精査したものである。最終的にオモカス層を削り込んだ旧河道の下部にあたる可能性が高いものと判断した。覆土は第124図Ca層に相当し、検出面での幅は4～5 m程である。

遺物出土状況 (第158図) 遺物はほぼ全域から出土しており、弥生土器・古式土師器が多いが、須恵器・金属器・木製品・石器が出土し、図化はしていないが獣骨も出土している。

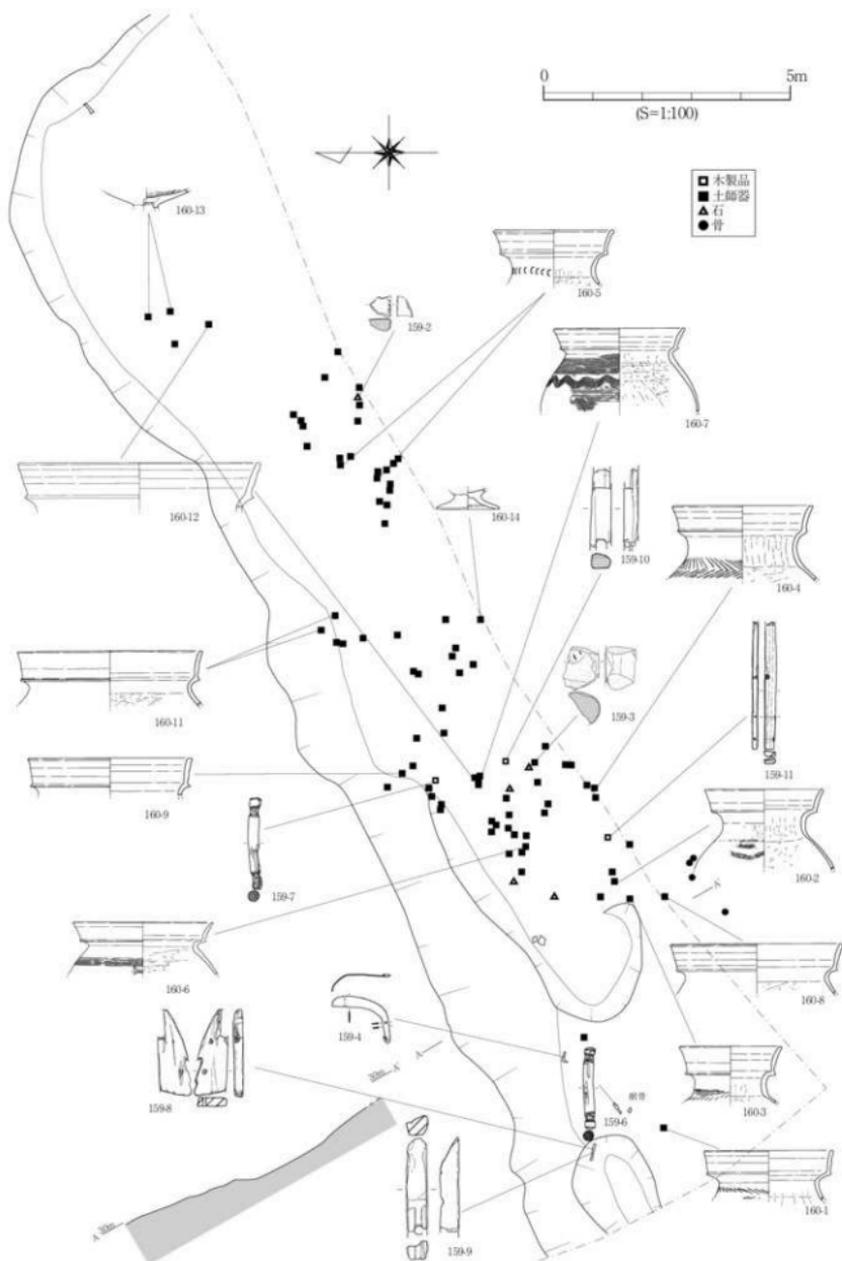
出土遺物 (第159図・第160図)

須恵器 (第159図) 1は輪状つまみと考えられるが、一般的なものよりつまみが高いことから、蓋のつまみかどうか明確なものではない。

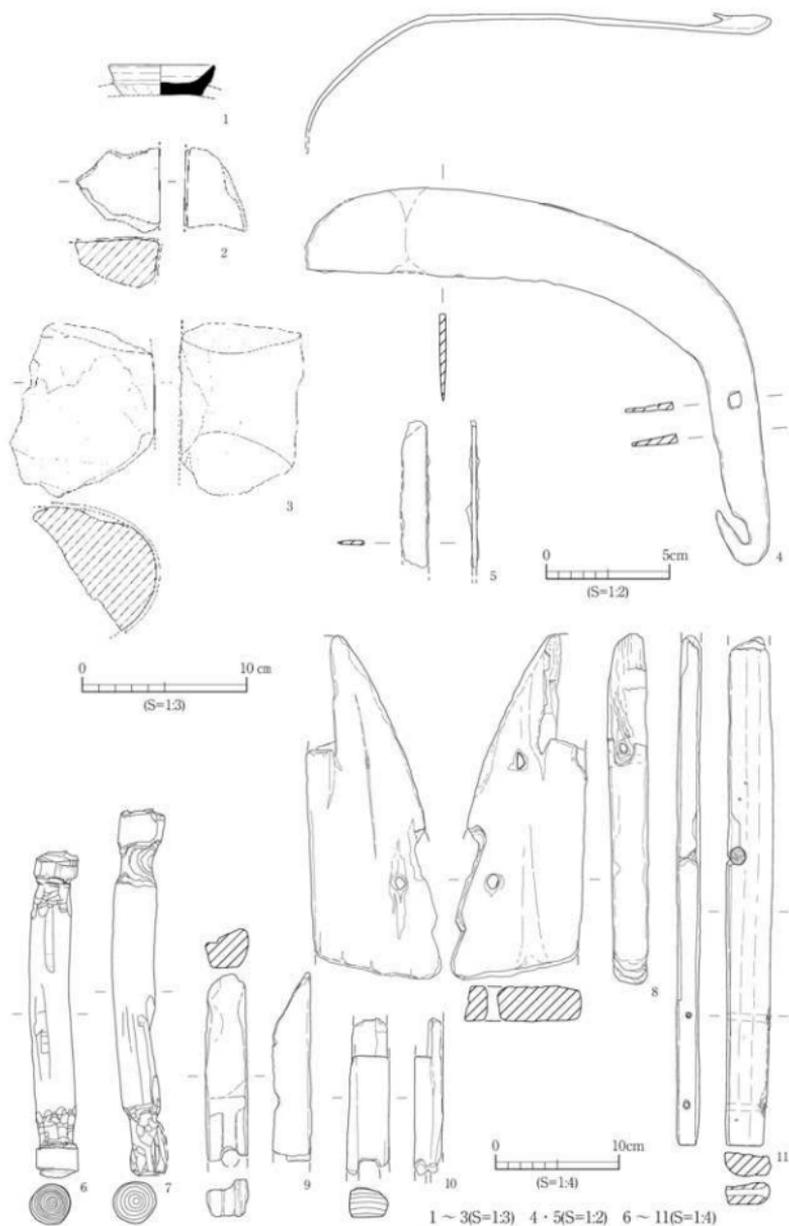
石器 (第159図) 2はやや目の粗い砥石の破片と考えられる。2面が使用されているものと考えられ、上面は使用によって表面が滑らかであるが、側面は粗く使用面が疑わしいが、やや凹んでおり使用面と判断している。3は円礫を素材にした磨石と考えられ、残存面は使用によって滑らかになっている。

金属器 (第159図) 5は刀子の破片と考えられる。錆化が進んでおりX線撮影でも不明確であるが、刀身部の切先付近の破片と考えられる。4は基部が鉤状になる鉄鎌であり、刃部が折れ曲がっているものである。基部には方形の目釘孔が1つ設けられており、刃部はやや先端付近が幅広になる形状である。

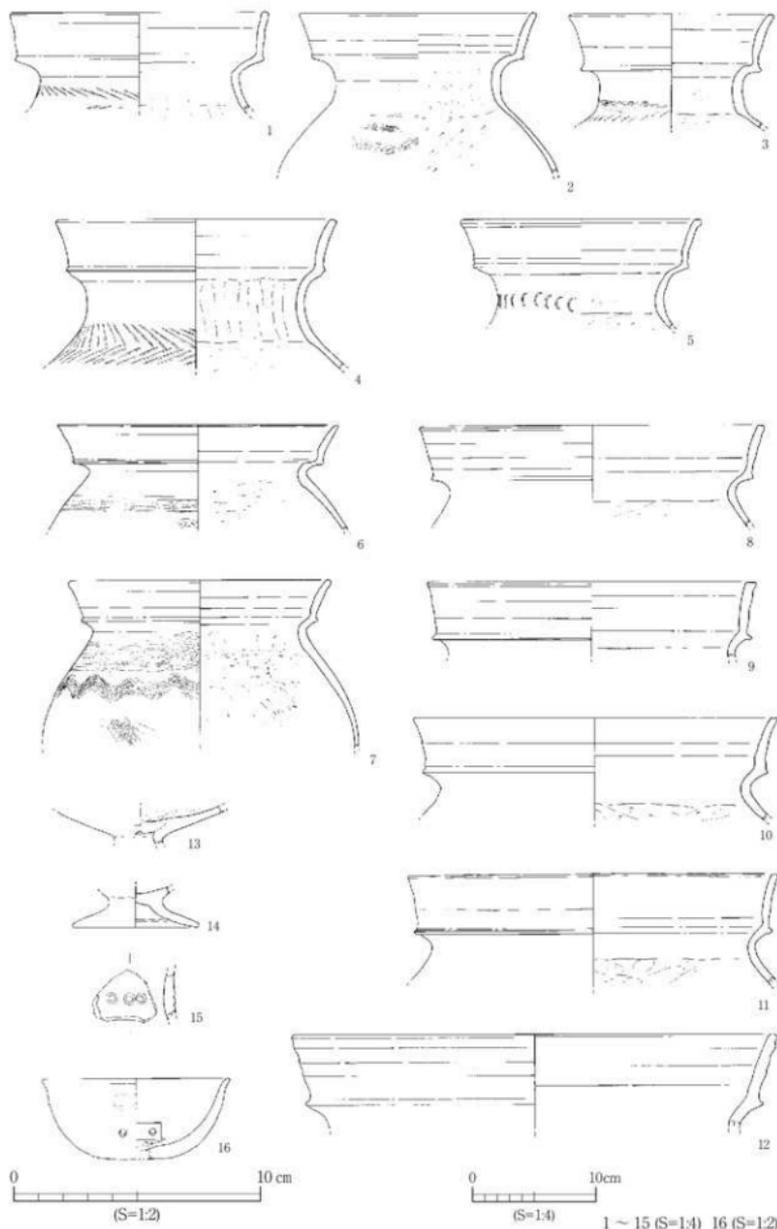
木製品 (第159図) 7～11は木製品である。6・7は棒状の木製品で両端が削り込まれているものであり、樹種はマツ属である。8はクスノキ材の板状の木製品である。片面が弧状を呈し孔が2つ設けられており、その一方には楔状の鉄器が残存している。何らかの構造材と考えられる。9は円孔が穿たれているクスノキ製の木製品で端部は片面を断面三角形形状に加工している。10は樹種がアカガシ亜属の材の木製品で、ほぞ孔状の方形の孔が穿たれていると考えられる。11はスギ材を断面長方形に加工した棒状の木製品であり、端部付近の二カ所に釘状の鉄器が打ち込まれているのが確認される。この木製品は、最終的に火切臼と使用されたと考えられる痕跡が側面に見られる。



第 158 图 山持遺跡 6 区 SD03 遺物出土状況图



第159图 山持遺跡6区SD03出土須恵器・石器・金属器・木製品実測図



第 160 图 山持遺跡 6 区 SD03 出土土器実測図

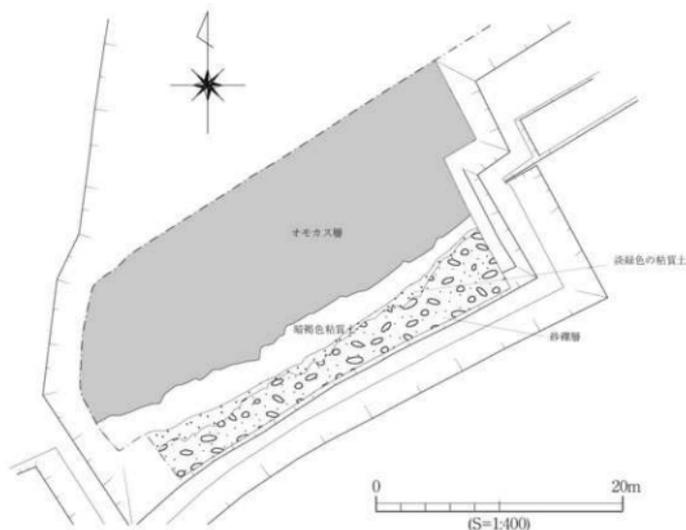
弥生土器・古式土師器（第160図） 1～5は複合口縁の甕である。1は頭部に羽状文を施し口縁端部は丸く取める。2は口縁端部に不明瞭ながら面を造り出し、肩部には波状文を施している。3は肩部に刺突文が施され、口縁端部は風化により不明確である。4は口縁端部に明瞭な面をもち、頭部から肩部にかけて羽状文を施す。5は口縁端部が若干外に折れ面をもち、頭部には半截竹管文が施される。1～4は草田5～6期頃、5は小谷2式前後のものと考えられる。

6～12は複合口縁の甕である。6は口縁端部が尖り気味のものであり肩部には多条な平行沈線文と波状文を施す。7は口縁端部に面をもち肩部には平行沈線文と波状文を施す。8～11は口縁端部に明瞭な面をもつもので、8・10・11は口縁端部が沈線状に凹むものである。12は口縁部のヨコナデの凹凸が目立つ大型のもので口縁端部は丸く取める。6・7は草田5期～6期頃、8～12は草田6期～7期頃のものと考えられる。

13は高坏の接合部付近の破片であり、底部には円孔が確認される。14は低脚坏の脚であり、裾が広がる形態のものである。15は竹管文が施される破片であり、甕の頭部の可能性がある。16は小型の鉢形土器であり孔が二つ設けられている。蓋などの可能性も考えられる。

(5) 近世の河道（第161図）

第161図は重機による掘削後、調査初期段階の精査で確認した近世の河道の検出状況であり、標高3.5m～3.7m付近の段階図である。土層図の第5図・第6図のB・C層（河道堆積層）、D層（オモカス層）が確認されている状況であり、東西方向に流路があったことが確認される。南側の堆積物である拳大の礫は北山起源の石材であることから、近世の伊努谷川の流路がこの地点であると考えられる。現在の扇状地から延びる高まりの下部に近世の流路が埋没している可能性が指摘される。



第161図 山持遺跡6区近世河道検出状況図